和歌山市都市整備公社発掘調査報告書　第１集

川辺遺跡　第4・5・6次発掘調査報告書

２００８

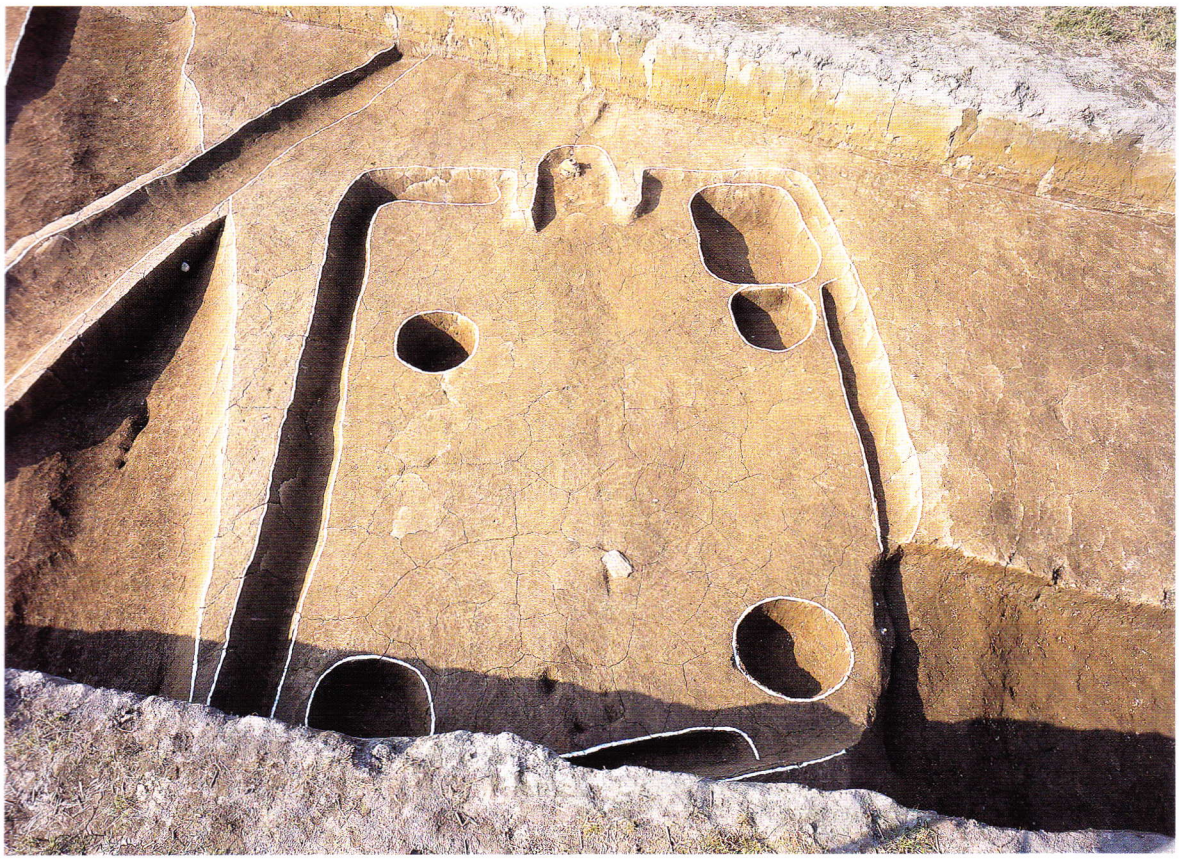
財団法人和歌山市都市整備公社

川辺遺跡　第4・5・6次発掘調査報告書

２００８

財団法人和歌山市都市整備公社

川辺遺跡　近景（南から）



竪穴住居（SB－11）（南から）

縄文時代晩期の土器棺墓（SK－152）（東から）

縄文時代晩期の土器棺墓（SK－168）（南から）

序　文

和歌山市は、紀伊山地を源とし、西流して紀伊水道に達する紀ノ川によって形成された和歌山平野の河口部に位置しており、海や川、また山地に囲まれた山河清祥の地であります。

この肥沃な和歌山平野には、古代より多くの人々が生活を営み歴史を刻んだ約400ヶ所にものぼる遺跡が静かに眠っています。

近年では、弥生時代のムラを囲む大溝が見つかった太田・黒田遺跡、海浜で塩を生産した炉跡が多数見つかった西ノ庄遺跡、また飛翔する鳥を模倣した埴輪が出土し、古墳時代後期（約1500年前）の造形美が全国に紹介された大日山35号墳など、私達の先祖の足跡を知る貴重な文化遺産が発掘調査によって明らかとなっています。

本書に収めた川辺遺跡は、大規模店舗建設に伴い第４～６次にわたる発掘調査を行いました。その結果、縄文時代晩期（約3500年前）に土器を棺として小児を埋葬したと思われる墓のほか、古墳時代から飛鳥時代にかけての竪穴住居や溝など、多くの生活の痕跡と土器や石器などの生活用具が見つかりました。ここにその成果を報告します。

これらの調査成果が地域の歴史認識を豊かにし、埋蔵文化財の保存と活用に向けた礎となることを願っております。

最後になりましたが、発掘調査にあたり、ご指導、ご協力をいただきました関係者各位ならびに関係機関の皆様に深く感謝いたします。

平成20年３月31日

財団法人 和歌山市都市整備公社

理事長　武　内　　功

例　　言

1．本書は、株式会社イズミヤが和歌山市川辺208番地他に計画した店舗建設に伴う埋蔵文化財発掘調査の本報告書である。

2．調査は、株式会社イズミヤの委託事業として財団法人和歌山市都市整備公社が受託し、和歌山市教育委員会文化振興課の指導のもと、対象面積約2,300㎡を2006年12月５日から2007年５月24日までの期間で３次に分けて実施したものである。

3．埋蔵文化財発掘調査及び報告書刊行に係わる担当者は以下の通りである。

財団法人和歌山市都市整備公社

事務局　埋蔵文化財班

班　長　　北野隆亮

学芸員　　井馬好英（第４～６次調査担当）

学芸員　　藤藪勝則（第６次調査担当）

学芸員　　奥村　薫（調査庶務担当）

4．本報告書掲載の遺跡・遺構及び遺物の写真撮影は調査担当者がそれぞれ行った。

5．本書の執筆は、第４・５次調査については井馬が、第６次調査については藤藪が主として行い、編集は井馬が行った。なお、共通部分についての文責は目次に示した。

6．本書の作成にあたり、各関係機関の方々に有益なご教示・ご指導を賜ったことに感謝の意を表します。

7．本調査において出土した遺物はすべて和歌山市教育委員会の所管であり、財団法人和歌山市都市整備公社が収蔵・管理している。

〈凡　　例〉

1．遺構平面図の基準線及び土層断面図の作成位置に付した座標値は、平面直角座標系（第Ⅵ系）に基づき日本測地系である。また方位は座標北を示す。

2．土層断面図に付した水準値は、国家水準点（T.P.値）を基準とした。

3．土層の色調及び土質の観察は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』を用いた。

4．本書で使用した遺構番号は、各調査区を通して連番とし、遺構の略号は以下の通りである。

ＳＢ…竪穴住居　ＳＨ…掘立柱建物　SA…柵　Ｐ…柱穴　ＳＫ…土坑　ＳＸ…落ち込み　ＳＤ…溝

5．写真図版の遺物に付した数字番号は実測図番号に対応する。

6．遺物の型式及び名称についての参考文献は、遺物観察表の凡例に記した。

7．本書の作成にあたり下記の文献を参考とした。

『川辺遺跡発掘調査報告書』財団法人和歌山県文化財センター　1995年

「川辺遺跡発掘調査」『和歌山市内遺跡発掘調査概報－平成13年度－』和歌山市教育委員会　2003年

『山口遺跡・川辺遺跡発掘調査報告書－県道和歌山貝塚線・県道粉河加太線道路改良事業に伴う発掘調査－』　財団法人和歌山県文化財センター　2005年

本文目次

第１章　調査に至る経緯と経過 ……（井馬好英）… 1
第２章　遺跡の位置と環境…… 3
　第１節　地理的環境 ……（藤藪勝則）… 3
　第２節　歴史的環境 ……（藤藪勝則）… 3
　第３節　既往の調査 ……（井馬好英）… 5
第３章　調査の方法と概要 ……（井馬好英）… 6
　第１節　調査の方法…… 6
　第２節　調査の概要…… 7
第４章　調査の成果…… 8
　第１節　第４・５次調査成果 ……（井馬好英）… 8
　　１．第１～３区の調査…… 8
　　２．第４～６区の調査…… 11
　　３．第７区の調査…… 15
　　４．第８・９区の調査…… 19
　　５．第10～13区の調査…… 21
　　６．第14・15区の調査…… 28
　　７．第16・17区の調査…… 30
　　８．第18～21区の調査…… 32
　　９．第22～24区の調査…… 34
　　10．第25～27区の調査…… 35
　第２節　第６次調査成果 ……（藤藪勝則）… 38
　　１．第28区の調査…… 38
　　２．第29区の調査…… 39
　　３．第30・31区の調査…… 41
第５章　まとめ ……（井馬・藤藪）… 72
　第１節　川辺遺跡内の遺構分布について…… 72
　　１．対象地北部の様相…… 73
　　２．対象地東部の様相…… 73
　　３．対象地南西部の様相…… 74
　　４．遺跡内における時期別の様相…… 76
出土遺物観察表…… 77
報告書抄録…… 90

挿　図　目　次

第１図　調査対象地位置図
第２図　確認調査地区割図（第２・３次調査）
第３図　川辺遺跡周辺の遺跡分布図
第４図　本発掘調査地区割図（第４～６次調査）
第５図　調査地土層柱状模式図
第６図　第１～３区土層柱状模式図
第７図　第１～３区遺構平面図
第８図　SD－１・２・４～６土層断面図
第９図　P－58遺構平面図及び土層断面図
第10図　遺物実測図１
第11図　第４～６区土層柱状模式図
第12図　第４～６区遺構平面図
第13図　SB－１・７・SK－11・SA－２土層断面図
第14図　遺物実測図２
第15図　第７区遺構平面図
第16図　第７区土層柱状模式図
第17図　遺物実測図３
第18図　SB－５遺構平面図及び土層断面図
第19図　SB－２・３遺構平面図及び土層断面図
第20図　SB－６遺構平面図及び土層断面図
第21図　遺物実測図４
第22図　第８・９区土層柱状模式図
第23図　第８・９区遺構平面図
第24図　SB－８遺構平面図及び土層断面図
第25図　遺物実測図５
第26図　第10～13区土層柱状模式図
第27図　第10～13区遺構平面図
第28図　SE－１・SB－10・SD－23遺構平面図及び土層断面図
第29図　遺物実測図６
第30図　遺物実測図７
第31図　SD－18・20・21土層断面図
第32図　遺物実測図８
第33図　SK－20遺構平面図及び土層断面図
第34図　SK－19遺構平面図及び立面図
第35図　遺物実測図９
第36図　第14・15区土層柱状模式図
第37図　SD－53土層断面図
第38図　遺物実測図10
第39図　遺物実測図11
第40図　第14・15区遺構平面図
第41図　第16・17区遺構平面図
第42図　第16・17区土層柱状模式図
第43図　遺物実測図12
第44図　SD－29・31・32土層断面図
第45図　第18～21区遺構平面図
第46図　第18～21区土層柱状模式図
第47図　遺物実測図13
第48図　SD－34～36土層断面図
第49図　第22～24区遺構平面図
第50図　第22～24区土層柱状模式図
第51図　第25～27区第１・２遺構面遺構平面図
第52図　第25～27区第３・４遺構面遺構平面図
第53図　第25～27区土層柱状模式図
第54図　遺物実測図14
第55図　第28区土層柱状模式図
第56図　第28区第１・２遺構面遺構平面図
第57図　第29区土層柱状模式図
第58図　第29区第１・２遺構面遺構平面図
第59図　遺物実測図15
第60図　第30・31区土層柱状模式図
第61図　第30・31区第１遺構面遺構平面図
第62図　遺物実測図16
第63図　遺物実測図17
第64図　遺物実測図18
第65図　遺物実測図19
第66図　SK－78遺構平面図及び土層断面図
第67図　第30・31区第１遺構面主要遺構平面図
第68図　SB－11遺構平面図及び土層断面図・立

面図
第69図　遺物実測図20
第70図　SH－１遺構平面図及び土層断面図
第71図　遺物実測図21
第72図　SH－２遺構平面図及び土層断面図
第73図　SD－61～67・73土層断面図
第74図　遺物実測図22
第75図　遺物実測図23
第76図　遺物実測図24
第77図　遺物実測図25
第78図　SA－３遺構平面図及び断面図
第79図　第31区北第１遺構面遺構平面図
第80図　P－391遺構平面図及び土層断面図・遺物実測図
第81図　SK－182遺構平面図及び土層断面図
第82図　SD－81・SK－89土層断面図
第83図　遺物実測図26
第84図　第30・31区第２遺構面遺構平面図
第85図　第30・31区第２遺構面主要遺構平面図
第86図　SK－152・SK－168遺構平面図及び断面図
第87図　遺物実測図27
第88図　SK－165遺構平面図及び土層断面図
第89図　遺物実測図28
第90図　遺物実測図29
第91図　遺物実測図30
第92図　遺物実測図31
第93図　川辺遺跡の調査位置図
第94図　確認調査位置図
第95図　今回の調査位置図
第96図　川辺遺跡内における時期別遺構分布図

挿　入　写　真

写真１　第１区南壁土層堆積状況
写真２　第２区南壁土層堆積状況
写真３　第５区南壁土層堆積状況
写真４　第６区南壁土層堆積状況
写真５　第７区SB－４及び南壁土層堆積状況
写真６　第10区西壁土層堆積状況
写真７　第13区西壁土層堆積状況
写真８　第14区西壁土層堆積状況
写真９　第17区西壁土層堆積状況
写真10　第18区西壁土層堆積状況
写真11　第25区南壁土層堆積状況
写真12　第27区西壁土層堆積状況
写真13　第28区北壁土層堆積状況
写真14　第29区南壁土層堆積状況

図　版　目　次

図版１　調査地近景
図版２　第１区全景、第２区全景
図版３　第３区全景、第２区検出の遺構
図版４　第１区検出の遺構、第２区検出の遺構、第４区全景
図版５　第５区全景、第６区全景
図版６　第５区検出の遺構、第６区検出の遺構
図版７　第７区第１・２遺構面全景
図版８　第７区検出の遺構
図版９　第８区全景、第９区全景
図版10　第８区検出の遺構、第10区全景
図版11　第11・12区全景、第12・13区全景

図版12　第12区検出の遺構、第13区検出の遺構
図版13　第14・15区第１・２遺構面全景、第16区全景、第17区全景
図版14　第17区検出の遺構、第18区検出の遺構、第18区全景、第19区全景
図版15　第20区全景、第21区全景、第22区全景、第23区全景
図版16　第24区全景、第25区第１・２・３遺構面全景、第25区検出の遺構
図版17　第26区第１・２・３遺構面全景、第26区検出の遺構
図版18　第27区第１・３遺構面全景
図版19　第６次調査地近景
図版20　第28区第１・２遺構面全景
図版21　第29区第１・２遺構面全景
図版22　第30・31区第１遺構面全景
図版23　第31区第１遺構面全景
図版24　第30区検出の遺構、第31区検出の遺構
図版25　第31区検出の遺構
図版26　第31区検出の遺構
図版27　第30区検出の遺構
図版28　第30・31区検出の遺構
図版29　第30・31区検出の遺構
図版30　第30・31区検出の遺構
図版31　第30区・31区第２遺構面全景
図版32　第31区第２遺構面全景
図版33　第30区検出の遺構
図版34　第30区検出の遺構
図版35　第30区南壁及び西壁土層堆積状況
図版36　第31区南壁土層堆積状況
図版37　SB－７・SD－６・SK－１・P－３・58・第２区第４層出土遺物
図版38　SB－１・SD－25・SK－11・P－86出土遺物
図版39　第７区第５層出土遺物
図版40　SB－２・５出土遺物
図版41　SB－８・10・第８区第５層出土遺物
図版42　SB－10・SE－１出土遺物
図版43　SE－１出土遺物
図版44　SD－21・SK－19・第12区第２層・第12区第５層出土遺物
図版45　SD－32・53・SK－19・P－270・第14区・第17区第６c層・第19区第５層・第27区第６a層出土遺物
図版46　SD－55・SK－46・第31区第４層出土遺物
図版47　第31区第５層出土遺物
図版48　第31区第５層・第30区第６層・第31区第６層出土遺物
図版49　SB－11・SH－１・SD－66出土遺物
図版50　SD－61出土遺物
図版51　SD－61出土遺物
図版52　SD－61・SK－61出土遺物
図版53　SD－64・67・71・80・81・SK－63・75・P－391・289・SX－１出土遺物
図版54　SD－62・67・78・SK－59・81・87・89・90・第31区第５層出土遺物
図版55　SK－152・165・168出土遺物
図版56　SK－165出土遺物
図版57　SK－165出土遺物
図版58　SK－123・149・153・165・175・178・P－507・606・636出土遺物

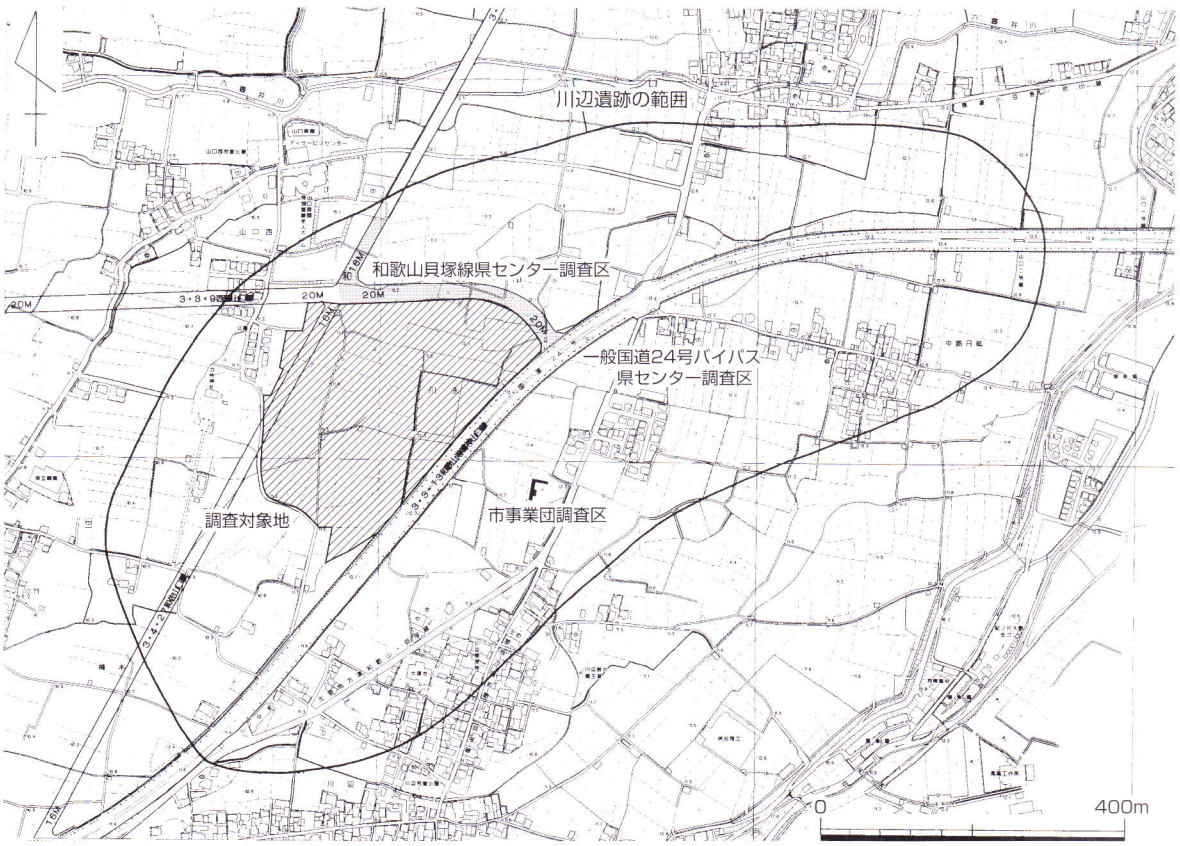
第１章　調査に至る経緯と経過

和歌山市域の東端部にあたる和歌山市川辺及び里周辺に所在する川辺遺跡は、紀ノ川北岸の標高11.50m前後の沖積平野に立地する遺跡である。この遺跡は東西約１km、南北約650mの範囲をもち、縄文時代から中世にかけての大規模な集落遺跡として知られている。

今回の調査は、川辺遺跡（遺跡番号145）のほぼ中央部に位置する和歌山市里、川辺、藤田地内における一般国道24号バイパス西側の水田及び畑地において開発計画範囲約70,000㎡の大規模な店舗建設が計画されたことを起因とする（第１図）。まずこの計画に伴い和歌山市教育委員会が国庫補助金を得て、遺跡確認の目的で遺跡確認調査を実施することになり、平成18年８月15日から平成18年９月21日までの期間で第２次確認調査を、平成18年11月14日から平成18年12月27日までの期間で第３次確認調査を和歌山市教育委員会の指導のもと財団法人和歌山市都市整備公社が和歌山市から委託を受けて行った。

その調査成果を基に和歌山市教育委員会が原因者であるイズミヤ株式会社と協議を重ね、開発予定地内の深掘部分である用水路改修部分及び防火水槽、調整池、合併処理槽の設置個所について本発掘調査をイズミヤ株式会社の委託事業として財団法人和歌山市都市整備公社が行うこととなった。

本発掘調査は、昭和62・63年度及び平成３・４年度に財団法人和歌山県文化財センター（以下、「県センター」という。）が行った一般国道24号バイパス建設に伴う事前調査（調査面積30,641㎡）及び、平成９・12・13年度に同じく県センターが行った県道和歌山貝塚線道路改良工事に伴う発掘調査（調査面積約7,400㎡）の成果が存在したことから、これらの調査区に隣接する用水路改修部分



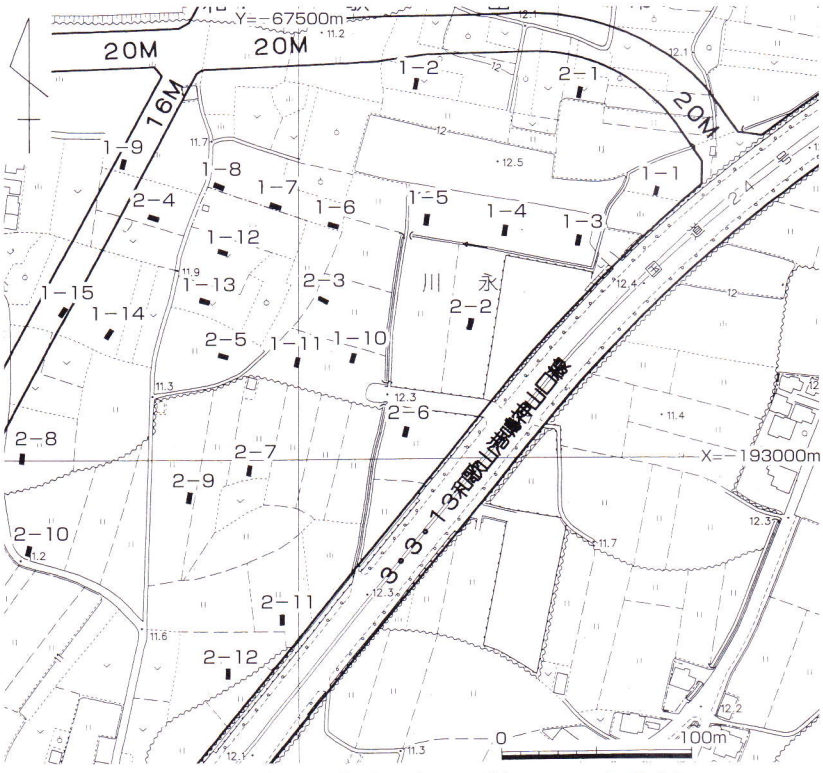
第１図　調査対象地位置図

の調査について事前の調査協議が進められ、第４次発掘調査として平成18年12月５日から平成19年３月２日までの期間で、その追加調査として第５次発掘調査を平成19年２月26日から平成19年３月23日までの期間で実施した。この後、第２・３次確認調査成果を基に協議が行われていた防火水槽及び調整池、合併処理槽設置部分について調査の方向性がまとまり、第６次発掘調査として平成19年３月22日から平成19年５月24日までの期間で実施した。

この開発計画に際し実施した第２・３次確認調査は、開発計画範囲約70,000㎡を対象に２×５m四方のグリッド調査区を、第２次確認調査では１－１～15区までの15ヶ所、第３次確認調査では２－１～12区までの12ヶ所、合計27ヶ所設定して実施した（第２図）。調査面積は、第２次調査が175.5㎡、第３次調査が132.8㎡である。この具体的な調査内容は、平成20年３月31日発行の『和歌山市内遺跡発掘調査概報』（和歌山市教育委員会）によって述べられているので、ここでは簡単な概略のみふれておく。

まず１－１・５・10・11区・２－７・９・10区を結んだラインより北及び西側には、最も古い時期に位置づけられる砂礫層が堆積し微高地が形成さていたものと考えられる。この砂礫層は、和泉山脈から派生した扇状地形の末端部とみられるものである。そして、この砂礫層の上部に紀ノ川又はその支流の沖積作用によって、調査地東部よりシルト質土が順次堆積していったものと考えられる。よって、自然現象として砂礫層で形成された微高地とシルト質土との境界部分（１－３～５・10・11区、２－３・６・７・９・10・11・12区）は微低地化するものと考えられる。したがって、今回の調査地周辺における微地形については、調査地北西部・北部及び東部に微高地が存在し、その微高地に囲まれた調査地中央部及び南西部は微低地であったと考えられる。また微低地部の様相として、調査地中央部については窪地状を呈することから湿潤な土壌であったことが推察されるものの、調査地南西部については、東から西に緩やかに傾斜する傾斜地であることから、比較的安定した土壌であった可能性がある。

また検出した遺構は、微高地部やその縁辺部に設定した１－１・２区及び２－１・８区では、掘立柱建物や土坑など居住に関係する遺構を確認することができたものの、微低地部とした調査地中央部及び南西部の調査区では溝やピットなどが主体として検出される傾向であった。



第２図　確認調査地区割図（第２・３次調査）

（数字番号は調査地区番号を示す。）

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

和歌山市は、和歌山県の北西端部に位置し、北は和泉山脈を境に大阪府泉南郡岬町及び阪南市に、東は和歌山県岩出市及び紀の川市に、南は海南市に接し、西は紀伊水道に面している。奈良県の大台ヶ原に源を発する紀ノ川は、本市のほぼ中央を流れて紀伊水道に注いでおり、その沖積作用によって運ばれた土砂によって和歌山平野が形成されている。今回調査を行った川辺遺跡（１）は、紀ノ川の河口から約12㎞上流の北岸に位置し、和泉山脈の南麓、紀ノ川との間に形成された標高11～12mを測る平野部の微高地に立地する（第３図）。川辺遺跡は、過去の調査によって、遺跡の北西部は和泉山脈から南に張り出した扇状地上に形成されており、また東部や南部及び南西部は紀ノ川及びその支流によって形成され沖積地に形成されている。そして遺跡中央部は、この扇状地を形成する砂礫層と沖積作用によって堆積したシルト質土の境界部分となり周囲よりやや低い微低地となる。

第２節　歴史的環境

周辺の遺跡を概観すると、川辺遺跡が立地する紀ノ川北岸には、縄文時代から江戸時代までの遺跡が多数立地しており、その中で縄文時代の遺跡としては川辺遺跡や高井遺跡（７）、六十谷遺跡（９）などがある。和泉山脈南麓の標高約12mを測る段丘上に立地する高井遺跡では、縄文時代のものと考えられるサヌカイト製の凹基式打製石鏃が出土しており、また、和泉山脈から南に派生する扇状地端部に立地する六十谷遺跡では縄文時代の土器が出土している。

次に弥生時代の遺跡については、前期段階の集落遺跡はきわめて少なく、六十谷遺跡で前期の土器や石器が採集されている他、川辺遺跡で前期の土坑が確認されているのみである。しかしながら中期以降、平野部の微高地上に本遺跡を初め、吉田遺跡（23）、山口遺跡（21）、宇田森遺跡（２）、北田井遺跡（３）、西田井遺跡（４）、田屋遺跡（５）などの集落遺跡が増加する傾向にある。そのうち、当遺跡の東約８㎞にある吉田遺跡では、中期から後期の竪穴住居や壺棺、中期の方形周溝墓などが検出されている。後期の遺跡としては、北田井遺跡や西田井遺跡及び田屋遺跡においてベッド状遺構や貯蔵穴を伴う竪穴住居の他、掘立柱建物、溝、土坑墓や壺棺などが検出されている。また平野部の集落遺跡に対し、標高約90mの山腹に立地する橘谷Ⅰ～Ⅲ遺跡（15）は、高地性集落であり、４条の空濠と竪穴住居が確認されている他、近接地から銅鐸が出土している。さらに、紀ノ川の中州（24）において突線紐式袈裟襷文銅鐸が出土している。

古墳時代の遺跡については、平野部の集落遺跡として吉田遺跡、北田井遺跡、西田井遺跡、田屋遺跡など弥生時代の集落域と重なるものが多く、集落が継続して営まれたことが分かる。その中で、吉田遺跡では古墳時代前期の一辺約７mを測る大型竪穴住居が検出されている。これらの他、府中Ⅳ遺跡（６）や高井遺跡のように、標高約20m前後の段丘上に集落を形成するものもある。府中Ⅳ遺跡では、古墳時代前期の竪穴住居が７棟検出されており、その中で一辺8.6mを測る大型竪穴住居は吉田遺跡検出例も含め注目すべき遺構である。また高井遺跡では、古墳時代前期後半と中期後半の２棟の竪穴住居が検出されている。古墳の築造については、和泉山脈南麓の丘陵上に山口古墳群（19）、上野古墳群（18）、八王子山古墳群（14）、直川八幡山古墳群（13）、六十谷古墳群（12）

などがある。六十谷古墳群は、古墳時代前期後半から中期前半にかけて営まれた古墳群である。また、八王子山古墳群は前方後円墳３基、円墳17基からなる古墳群である。このうち８号墳は直径35mの円墳で、鋸歯文鏡・鉄剣・鉄槍・鎌・琴柱型石製品・玉類などが出土しており５世紀前半の古墳である。また、平野部では、北田井遺跡において人物埴輪などが樹立された埋没古墳が確認されている。

歴史時代以降の遺跡については、紀ノ川北岸を東西に推定されている南海道に沿って山口廃寺（20）、上野廃寺（17）、直川廃寺（８）などが建立されている。奈良時代に造営された上野廃寺は、東西両塔を備えた薬師寺式の伽藍配置である。また府中遺跡（16）は、「府中」という地名が残るなど紀伊国府跡と推定されており、明確な遺構は確認されていないものの奈良・平安時代の菱形叩き目文を有する平瓦などが出土している。集落遺跡としては、吉田遺跡において奈良時代の堀立柱建

番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代
1	**川辺遺跡**	**縄文～中世**	9	六十谷遺跡	縄文～弥生	17	上野廃寺跡	白鳳～平安	25	有本銅鐸出土地	弥生	33	花山古墳群	古墳
2	宇田森遺跡	弥生	10	有功遺跡	古墳～中世	18	上野古墳群	古墳	26	太田・黒田遺跡	弥生～江戸	34	岩橋Ⅱ遺跡	古墳～室町
3	北田井遺跡	弥生～古墳	11	大同寺墳墓	奈良～平安	19	山口古墳群	古墳	27	太田城跡	安土・桃山	35	岩橋千塚古墳群	古墳
4	西田井遺跡	弥生～中世	12	六十谷古墳群	古墳	20	山口廃寺跡	白鳳	28	太田城水攻め堤跡	戦国～江戸	36	和佐古墳群	古墳
5	田屋遺跡	弥生～古墳	13	直川八幡山古墳群	古墳	21	山口遺跡	弥生～中世	29	秋月遺跡	弥生～江戸	37	禰宜貝塚	縄文
6	府中Ⅳ遺跡	弥生～中世	14	八王子山古墳群	古墳	22	山口御殿跡	江戸	30	鳴神Ⅴ遺跡	弥生～鎌倉	38	禰宜１号墳	古墳
7	高井遺跡	縄文～鎌倉	15	橘谷Ⅰ～Ⅲ遺跡	弥生	23	吉田遺跡	弥生～奈良	31	音浦遺跡	古墳	39	禰宜２号墳	古墳
8	直川廃寺跡	奈良～平安	16	府中遺跡	奈良～平安	24	紀ノ川銅鐸出土地	弥生	32	鳴神貝塚	縄文～弥生	40	明楽古墳群	古墳

第３図　川辺遺跡周辺の遺跡分布図

物や竪穴住居、火葬墓が検出されており、高井遺跡では平安時代の堀立柱建物が検出された他、緑釉陶器や灰釉陶器、圏脚円面硯などが出土している。

鎌倉・室町時代では、高井遺跡において掘立柱建物や北宋銭15枚が副葬された土葬墓がみられ、平野部では西田井遺跡において、掘立柱建物群・井戸・池泉などが「コ」の字状の溝によって区画された室町時代の屋敷地が検出されている。

最後に江戸時代の遺跡としては、紀州徳川家の別邸である山口御殿跡（22）が知られている。

第３節　既往の調査

川辺遺跡の発掘調査は、昭和62・63年度及び平成３・４年度に県文化財センターが行った一般国道24号バイパス線建設に伴う事前調査（調査面積30,641㎡）に始まる（第１図）。この調査では、全体的にみて３面の遺構面が検出されている。まず遺跡南西部の地点で２面の遺構面が検出され、上面で中世の掘立柱建物や木棺墓が、下面では飛鳥時代の竪穴住居や大型の総柱掘立柱建物などが検出された。その北側では奈良～平安時代の遺物とともに溝で区画された道路状遺構が検出され注目された。また下面では縄文時代晩期の竪穴住居の可能性のある遺構も確認されている。遺跡中央部の地点では、縄文時代晩期の溝、弥生時代後期の溝、弥生時代後期後半～古墳時代初頭の溝、古墳時代後期～飛鳥時代の掘立柱建物や溝の他、中世の石組井戸などが検出され、遺物包含層から出土した遮光器土偶は注目される。遺跡北東部の地点では、縄文時代晩期の深鉢を使用した土器棺墓６基が検出された他、多数の縄文土器の出土があった。また弥生時代中期の竪穴住居１棟、方形周溝墓１基や古墳時代ないしは飛鳥時代の竪穴住居１棟の他、先述の遺跡南東部から続くとみられる道路状遺構が見つかっている。

同じく県センターが平成９・12・13年度に行った県道和歌山貝塚線道路改良工事に伴う発掘調査（調査面積約7,400㎡）は、一般国道24号バイパス線に取り付く遺跡北西部の調査である。この調査では、それまで見つかっていなかった庄内式併行期の竪穴住居と方形周溝墓が検出され、本遺跡における新しい集落の様相が明らかとなった。また、飛鳥時代の竪穴住居も多数検出され、なかには周囲に溝を巡らす大型の掘立柱建物も含まれている。このことは、『日本書紀』に記述されている「川辺屯倉」との関連性を窺わせる資料として注目される。そして、鎌倉時代を中心とする中世の掘立柱建物や土葬墓なども検出され、中世の段階の集落域としても位置づけられる。遺物では、紀ノ川下流の北岸では出土例の少ない弥生時代前期の土器が一括性の高い状況で出土しているのが注目される。

さらに、平成13年度には財団法人和歌山市文化体育振興事業団（以下、「市事業団」という。）が遺跡の実態解明を目的として、遺跡範囲の中央部、県文化財センターが行った一般国道24号バイパス線の南東約120ｍの地点において発掘調査（調査面積192㎡）を実施している。この調査では、弥生時代中期の円形竪穴住居２棟が検出され、ともに楕円形の中央土坑の両側に柱穴をもつ松菊里式の系譜にある住居として位置づけられ、弥生時代中期集落の範囲の一端を明らかにしたものと言える。また遺物では、住居検出面となるベース層から縄文時代後期に遡る土器群が出土し、本遺跡における新しい知見を得ている。

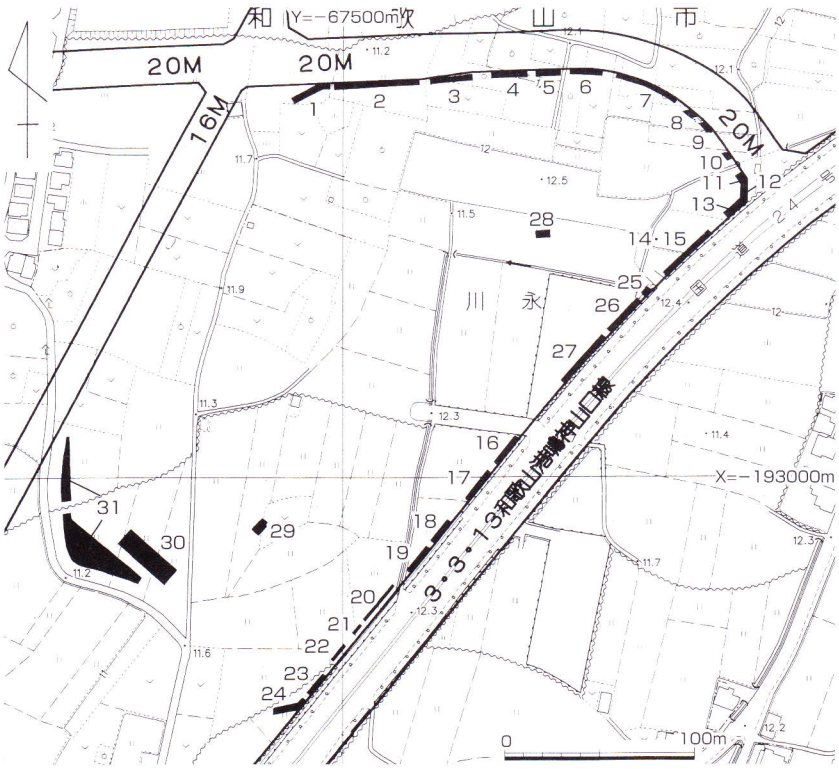
以上の調査成果から川辺遺跡は大規模な複合遺跡と位置づけられ、縄文時代後期以降の様々な集落の様相があり、遺跡範囲の中でも地域差がかなり明確となりつつある。

第３章　調査の方法と概要

第１節　調査の方法

今回の調査の内、用水路改修部分を対象に実施した第４・５次調査区については、幅約２m程度の調査区を延べ約450mにわたり設定して行った。また調査区が昇降進入路や水路によって分断されていたことから第４次調査では第１～24区までの24ヶ所、第５次調査では第25～27区までの３ヶ所、合計27ヶ所の調査区として調査地区番号を付して調査を実施した。第６次調査区は第４・５次調査区との調査地区名称及び確認された遺構との名称の混乱を避けるため、調査区名及び遺構番号を継続して付すこととした。よって、調査区は北から第28～31区とし、第31区については用水路によって分断された北側を第31区北とした（第４図）。重機による掘削は、各調査区での異なりはみられるものの、基本的に第１遺構面の直上（遺物包含層が存在する場合はその土層の直上）まで慎重に行い、検出した遺物包含層及び遺構掘削並びにサブトレンチによる下層調査を人力掘削によって行った。また溝や土坑などの遺構掘削については、土層堆積観察用のセクションベルトを直交するライン上に設け、２層以上の堆積が認められるものは写真撮影及び土層断面実測による記録保存を行った。なお、本書内に掲載した溝等の土層堆積状況図に関しては直交するライン上のほぼ中点の座標数値において断面記録位置を示した。

図面による記録は、１／2500国土基本図及びこれまでの調査成果との照合を計るため国土座標軸（日本測地系）を基準ラインとして測量を実施し、位置図並びに遺構平面図の作成を行った。遺構平面図及び壁面土層断面図は、基本的に手実測（縮尺１／20）で作成を行ったが、調査期間短縮のため



第４図　本発掘調査地区割図（第４～６次調査）
（数字番号は調査地区番号を示す。）

調査面積一覧表

調査次数	調査区	面積（㎡）
第４次調査	第１区	75.5
	第２区	123.8
	第３区	56.3
	第４区	46.3
	第５区	41.5
	第６区	45.5
	第７区	87.9
	第８区	14.8
	第９区	19.9
	第１０区	10.0
	第11～13区	84.9
	第14・15区	64.6
	第１６区	41.0
	第１７区	44.5
	第１８区	37.4
	第１９区	41.5
	第２０区	25.3
	第２１区	6.5
	第２２区	12.7
	第２３区	32.1
	第２４区	65.8
小　計		977.8
第５次調査	第２５区	18.0
	第２６区	50.0
	第２７区	67.6
小　計		135.6
第６次調査	第２８区	27.4
	第２９区	26.9
	第３０区	366.3
	第３１区	592.6
	第31区北	128.5
小　計		1141.7
合　計		2255.1

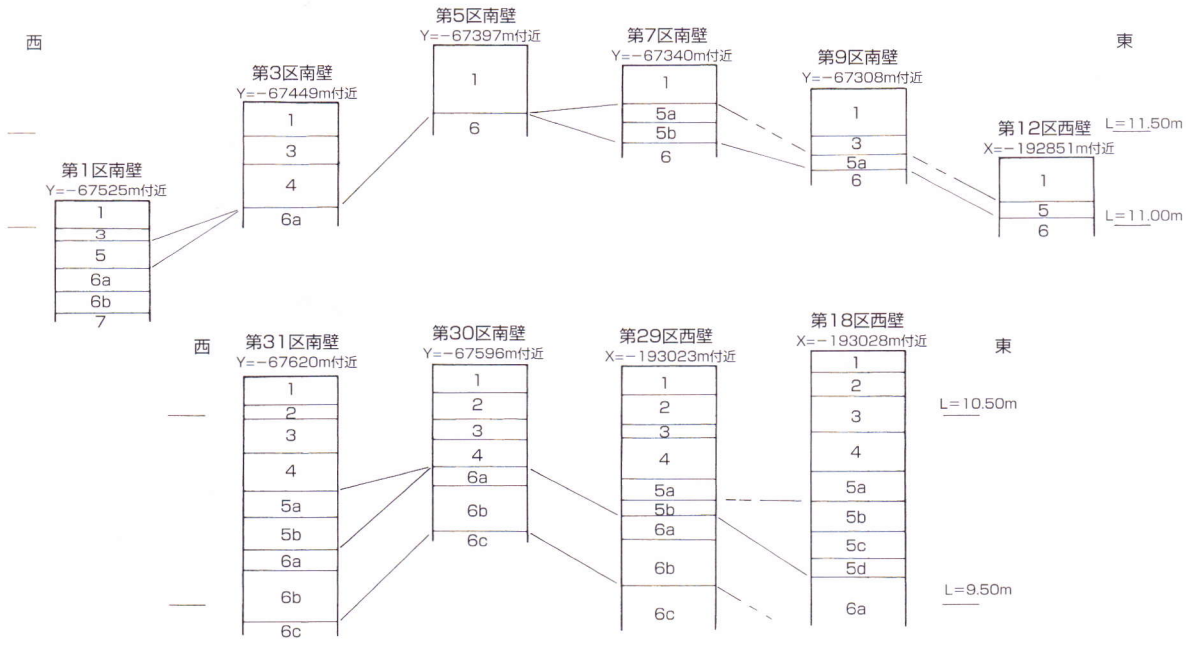
第30・31区及び第31区北の遺構全体平面図についてのみラジコン・ヘリコプターによる航空写真測量を行い、縮尺１／40で作成した。さらに竪穴住居や土器棺墓などの主要遺構及び遺物出土状況などの図面による記録は、１／10または１／20の縮尺を用い手実測で行った。

土層の色調及び土質の観察は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』を用い、水準値は国家水準点（T.P.値）を基準とした。

調査面積は、第４・５次調査の合計が1113.4㎡で、第６次調査の合計が1141.7㎡である。

第２節　調査の概要

調査地の基本層序については、第２・３次確認調査で得られた層序を参考として褐色粒を多く含む鎌倉時代の堆積層（第４層）と飛鳥時代から奈良時代を中心とする遺構面のベース層（第６層）及び北辺部にのみ堆積する扇状地末端部の自然堆積層と考えられる１～３㎝大の円礫を多量に含む褐色系の砂礫層（第７層）を基準層ととらえてこれらの層位関係から堆積した時代を考慮し、各調査区の対応関係を考えて層位番号を付した。なお、各層位の堆積時期は、上位から現代の水田耕作土（第１層）、江戸時代の耕作土（第２層）、室町時代から江戸時代にかけての耕作土（第３層）、鎌倉時代の堆積と考えられる褐色の鉄分粒を多量に含むことを特徴とするにぶい黄褐色系の粗砂混シルト（第４層）、平安時代から鎌倉時代にかけての堆積土（第５層）、古墳時代以前に紀ノ川の沖積作用などによって堆積したと考えられるにぶい黄褐色または灰黄褐色系のシルト質土（第６層）、これまでの調査では遺物が検出されていない砂礫層（第７層）に大別できる。これらの土層の堆積状況は、各調査区によって土色・土質・土層細分など様々に異なり、一様ではない。このことから、比較的明確な南北方向の大まかな土層及び遺構面の対応関係と微地形の状況を第５図に示し、各調査区の成果において再度その詳細について述べるものとする。



第５図　調査地土層柱状模式図

第４章　調査の成果

第１節　第４・５次調査成果

第４・５次調査は、一般国道24号バイパス及び県道和歌山貝塚線沿いに設定した用水路改修工事に先立つ本発掘調査であり、調査の過程から便宜的に第１区から第27区までの調査区番号を付して調査を進めた。

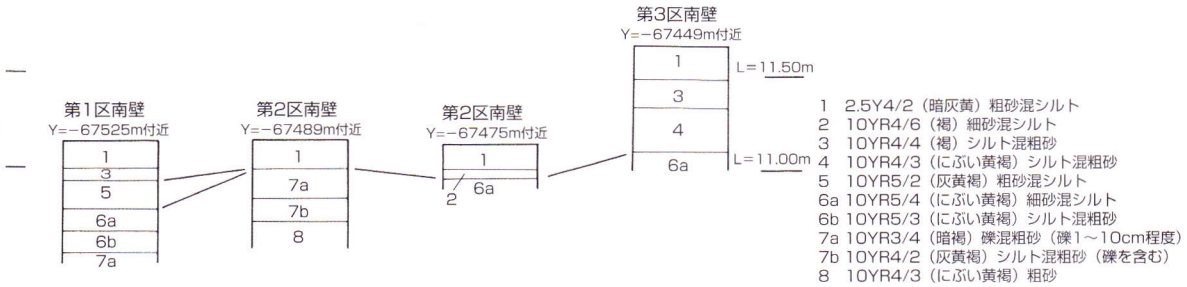
以下、調査区の状況及び検出した遺構等の状況をもとに数単位の調査区に分けて検出遺構等の説明を行う。

１．第１～３区の調査（第７図、図版２・３上）

本調査区の現況は第１・２区が水田で、第３区が畑地であり、耕作面の標高は前者が11.15m、後者が11.65mである（第６図）。遺構面は第１～３区を通して１面として検出したものの、第１区に関して部分的に落ち込む堆積があり、当初不定形の遺構（SK－１・２）として調査を行ったが最終的に遺物包含層（第５層）と判断した。大半の遺構を検出した遺構面は第６層上面のもので、平面図に破線で示した第２区Y＝－67501m付近からY＝－67480m付近までの範囲と第３区Y＝－67448mより以東は礫を含む第７層が露出し、この上面が遺構面となる。遺構面の標高は、標高11.00m前後で西から東に向けて緩やかに上昇する（写真１・２）。

遺物包含層から出土した遺物では、第１区のSK－１として扱った第５層対応層から瓦器小椀（第10図３）が出土したほか、第２区の第４層から中国製の白磁皿１点（７）が出土している。

遺構は、明確なものとして古墳時代、鎌倉時代、江戸時代の３時期のものがある。古墳時代の遺構は、第２区東端部で検出した溝（SD－６）と第３区東端部で検出した溝（SD－８）である。鎌



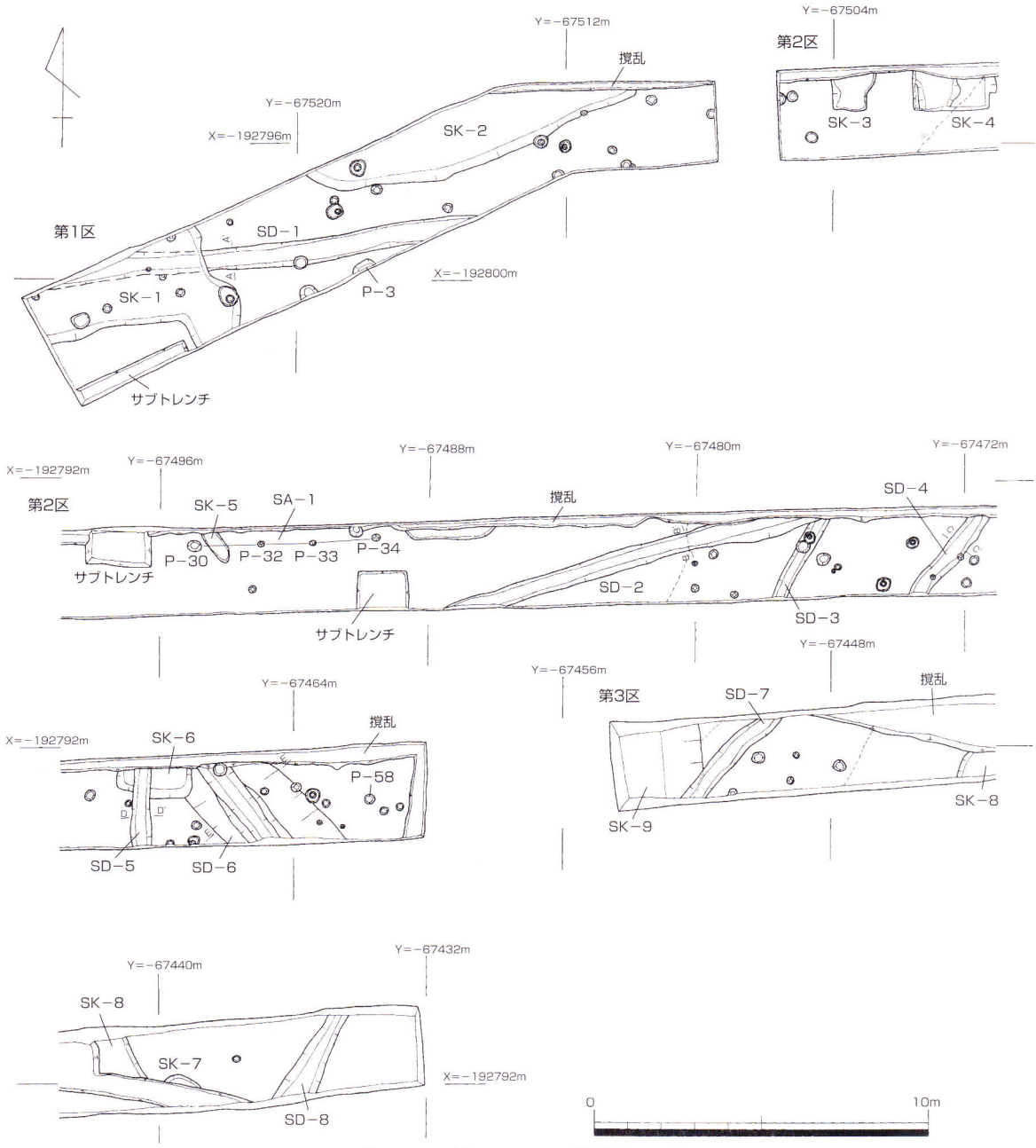
第６図　第１～３区土層柱状模式図

写真１　第１区南壁土層堆積状況
（Y＝－67525m付近　北西から）

写真２　第２区南壁土層堆積状況
（Y＝－67489m付近　北から）

倉時代の遺構は、第１区から第３区西半部を中心として検出した約70基のピットの内、約半数のピット覆土から瓦器及び中世土師器の出土が認められ、明確な建物等の復元は困難であるものの掘立柱建物を構成するピット群と考えられる。また第１区から第３区西端部にかけて検出した溝６条（SD－１・２～５・７）も遺物からピット群と同様の時期と考えられ、中でもSD－２がやや先行する時期と考えられる。この他、第２区東半部において検出した土坑１基（SK－６）及び第３区において検出した土坑２基（SK－８・９）も鎌倉時代の遺構である。江戸時代の遺構で明確なものは、第２区西半部で検出した土坑１基（SK－５）がある。また、SK－５と近接し、覆土などが類似するSK－３・４も江戸時代の遺構と考えられる。この他、時期が不明であるものの中では、第２区西半部で検出したピット列（SA－１）がある。

以下、主要な遺構を説明する。



第７図　第１～３区遺構平面図

〔SD－６〕（第８図、図版３下）

SD－６は第２区東端部で検出した溝である。この溝はN－37°－Wの方向性をもつもので、県センターの調査では溝357と報告されている溝の延長部と考えられる。出土遺物は細片が主体であったものの、層位的な遺物の取り上げと断面観察からみて、２時期の掘削単位が考えられる。第８図の土層断面図に示した上位の１～３層は再掘削された部分の堆積で、SD－６aとした。SD－６aは、上端幅2.5m、深さ1.0mの規模である。時期的に古墳時代後期以降の掘削と考えられる。また下位にあたる４～６層は当初の溝と考えられる堆積で、SD－６bとした。SD－６bは、幅2.6m、深さ1.3mで断面形が「V」字状の形状のものであり、古墳時代初頭頃の掘削と考えられる。遺物では完形に復元できるものは出土していないものの、第10図１が古段階のSD－６bから出土した庄内式併行期の壺底部で、２が新段階のSD－６aから出土した須恵器の甕である。

〔SD－１・２〕（第８図、図版４）

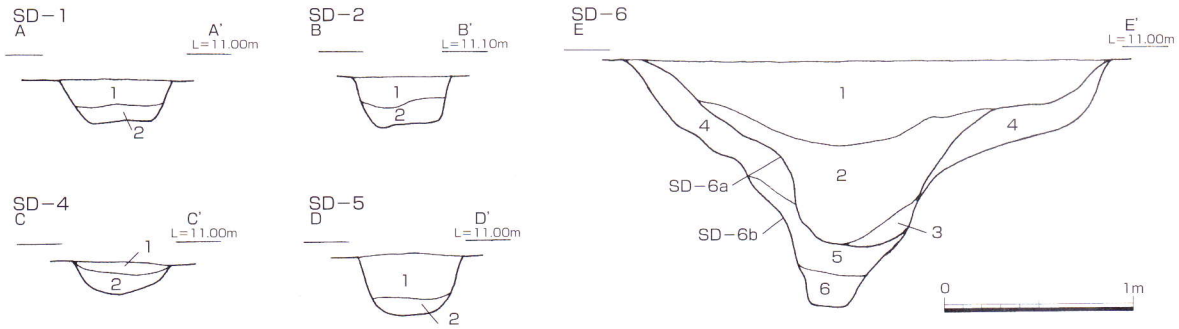
SD－１は第１区西半部において検出した幅60㎝、深さ25㎝程度の東西方向の溝である。SD－２は第２区中央部で検出した幅55㎝、深さ25㎝程度の東西方向の溝である。この２条の溝は、その方向性や第４図の土層断面図に示した横断面形及び覆土の堆積状況などから連続する一連の溝の可能性が高い。このことから、N－72～83°－Eの方向性でやや北側に弧を描く形状であり、その流路方向は底面の比高差からみて東から西である。覆土は２単位に分けられ、上位がシルト質層で、下位層に円礫を多く含む特徴がある。

〔SD－４〕（第８図）

SD－４は、SD－２の東側で検出した幅50㎝、深さ15㎝程度の南北方向の溝である。溝の横断面形は「U」字状の形状で、覆土は黄褐色シルトを主体とした２単位の土層に分けられる。この溝の主軸は、N－40°－Eで、類似する方向性の溝として第２区のSD－３や第３区のSD－７がある。

〔SD－５〕（第８図、図版４）

SD－５は、第２区の東端部で検出した幅50㎝、深さ35㎝程度でほぼ真北に主軸もつ溝である。溝の横断面形は「U」字状の形状で、覆土は褐色シルトを主体とした２単位の土層に分けられる。



SD－１　１　10YR4/2（灰黄褐）粗砂混シルト
　　２　10YR4/3（にぶい黄褐）礫混シルト

SD－２　１　10YR4/3（にぶい黄褐）粗砂混シルト
　　（円礫を含む）
　　２　10YR3/4（暗褐）礫混粗砂

SD－４　１　10YR4/2（灰黄褐）粗砂混シルト
　　２　10YR4/3（にぶい黄褐）粗砂混シルト
　　（黄色土ブロックを含む）

SD－５　１　10YR4/2（灰黄褐）粗砂混シルト
　　２　10YR4/4（褐）粗砂混シルト

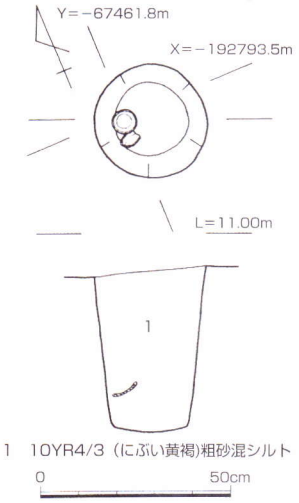
SD－６a　１　10YR4/2（灰黄褐）粗砂混シルト
　　２　10YR4/3（にぶい黄褐）粗砂混シルト
　　３　10YR3/3（暗褐）粗砂混粘土

SD－６b　４　10YR4/4（褐）粗砂混シルト
　　５　10YR4/3（にぶい黄褐）シルト混粗砂
　　６　2.5Y4/4（オリーブ褐）シルト混粘土

第８図　ＳＤ－１・２・４～６土層断面図

〔P－58〕（第９図、図版４）

P－58は第２区の東端部、SD－６の東側で検出した直径30㎝、深さ43㎝のピットである。このピットには柱痕等はみられず完掘したところ底面のやや上部で土師器皿２枚を確認し、記録した。この土師器皿は第10図５・６である。５は口径7.4㎝の完形品で、白っぽい褐色に発色するもので、口縁を上部に向けた正位の状態で出土した。６は口径11.4㎝に復元できる淡赤褐色のもので、５に接するような状態で出土した。検出した状況からみて地鎮の可能性が考えられるものである。ピットでは、第１区の中央部で検出したP－３からも土師器皿１点（第10図４）が出土した。



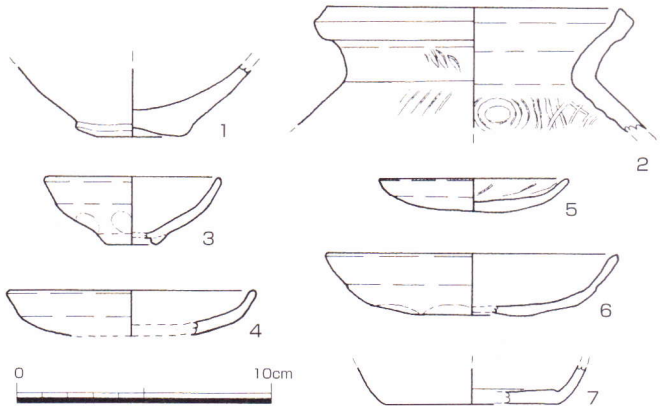
第９図　P－58遺構平面図及び土層断面図

〔SK－９〕（第７図）

SK－９は、第３区西端で検出した土坑である。全体の形状は不明であるものの東西長2.5m以上、深さ55㎝以上のものである。位置的にみて、県センターの調査で検出されている溝の延長部である可能性が高い。覆土はにぶい黄褐色系の粗砂混シルト単一土層である。

〔SK－８〕（第７図）

第３区中央部で検出した不定形の土坑である。中央部分が大きく撹乱されているため覆土は部分的に残存している状況である。規模は東西幅3.6m、深さ15㎝程度である。



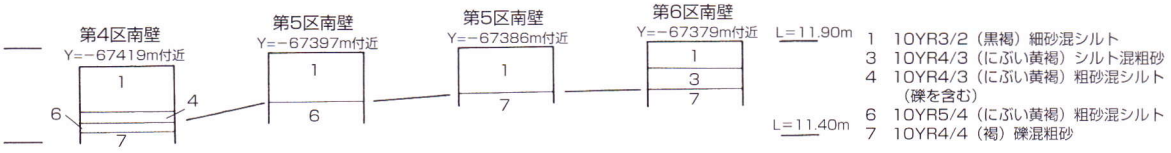
第10図　遺物実測図１

2．第４～６区の調査（第12図、図版４下・５）

第４～６区の現況は畑地であり、耕作面の標高は11.80～11.90mで東側に向かって緩やかに上昇する（第11図、写真３・４）。遺構面は第４～６区を通し第６層及び第７層を上面とする１面として検出したもので、第12図に破線で示した第４区Y＝－67416m付近から以西と第５区Y＝－67382m付近から以東が礫を含む第７層が露出している。遺構面の標高は、標高11.45～11.65mで地表面と同じ傾斜をもつ。

遺物包含層から出土した遺物では、第４区の第４層から７～８世紀にかけての須恵器・土師器（第14図22～27）が一定量出土したほか、管状土錘１点（28）も出土している。

遺構は、明確なものとして古墳時代、飛鳥時代、鎌倉時代、江戸時代のものがある。古墳時代の

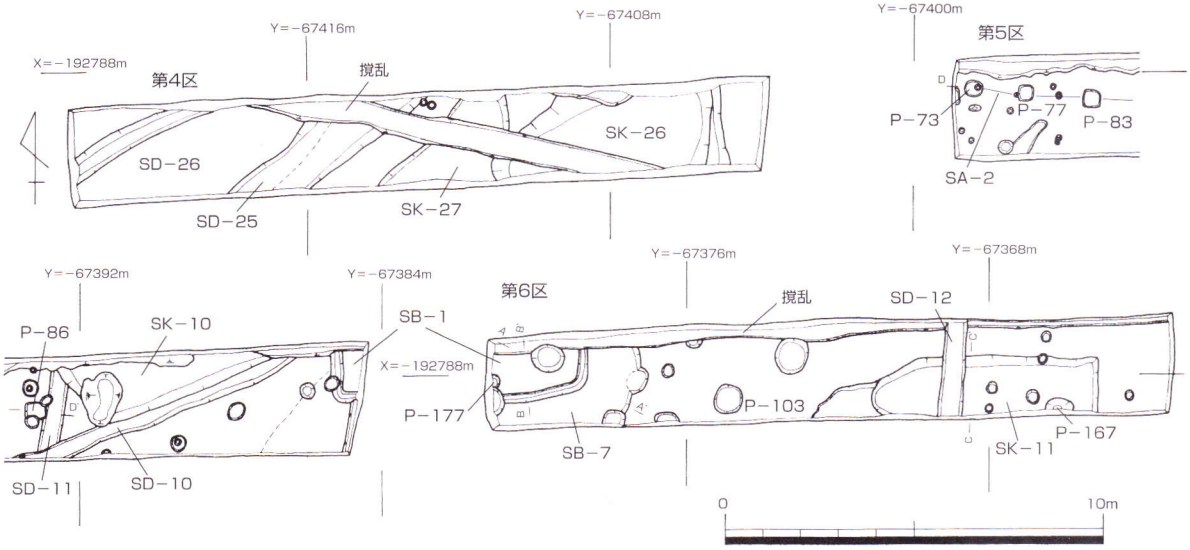


第11図　第４～６区土層柱状模式図

遺構は第４区で検出した溝（SD－26)、不定形の土坑（SK－26・27)、第５区で検出した溝（SD－10)、土坑（SK－10)、第５区から第６区にかけて検出した竪穴住居２棟（SB－１・７）や第６区東半部で検出した溝（SD－12)、土坑（SK－11）などがある。飛鳥時代の遺構は、第４区で検出した溝１条（SD－25）のみである。また鎌倉時代の遺構は、第５区西半部で検出したP－73・77・83・86で構成するピット列（SA－２）がある。江戸時代の遺構は、第６区の中央部で検出したP－103があり、このピット周辺の比較的規模の大きなピット群も覆土等の状況が類似することから同時期のものと考えられる。このピットの用途として江戸時代以降の畑作に関係するものと考えられる。この他、第５区及び第６区東端部で検出したピット群は、遺物から古墳時代と鎌倉時代のものが混在するものとみられる。以下、主要な遺構を説明する。

〔SB－１・７〕（第13図、図版６）

SB－１は、第５区東隅から第６区西端にかけて検出した方形の竪穴住居である。規模は、東西6.8m、南北1.5m以上を測り、県センターの調査区では未調査区にあたるため検出されていないものである。覆土は10㎝程度の単層で灰褐色系の粗砂である。壁溝は幅約20㎝、深さ10㎝程度で周囲に巡るものと考えられる。SB－１の遺物には土師器鉢及び壺体部（第14図14・15）が含まれていることから古墳時代前期の布留式古段階に位置づけられる。またSB－１の周囲において検出したSB－



第12図　第４～６区遺構平面図

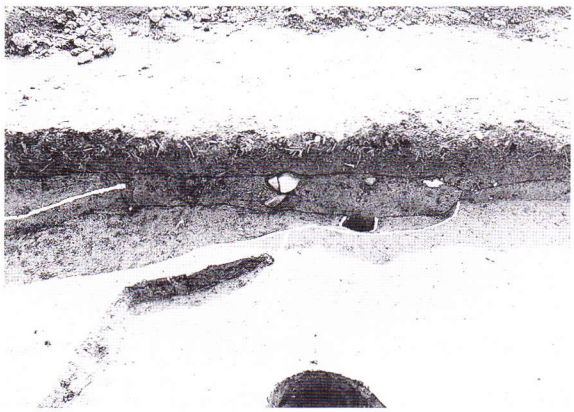


写真３　第５区南壁土層堆積状況
（Y＝－67393m付近　北から）

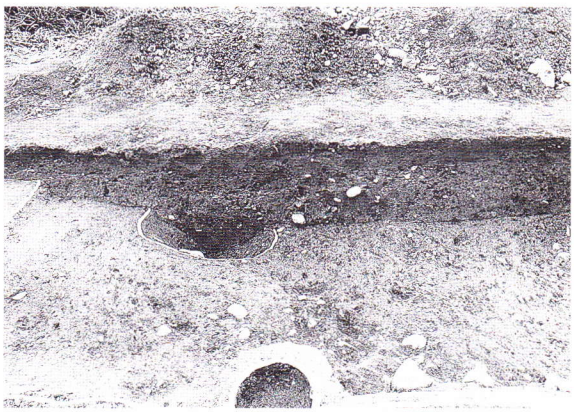


写真４　第６区南壁土層堆積状況
（Y＝－67367m付近　北から）

7は、直径7m程度の円形竪穴住居と考えられるものである。覆土は40cm前後と深く、壁際の幅90cmがやや高くなる特徴をもつ。床面において検出したP－177がこの住居の主柱穴と考えられる唯一の遺構である。遺物には、土師器の複合口縁壺・鉢・高杯（第14図8～12）の他、有孔土錘1点（13）が出土している。時期的には、古墳時代初頭の庄内式併行期中葉段階に位置づけられよう。

〔SK－11〕（第13図、図版6）

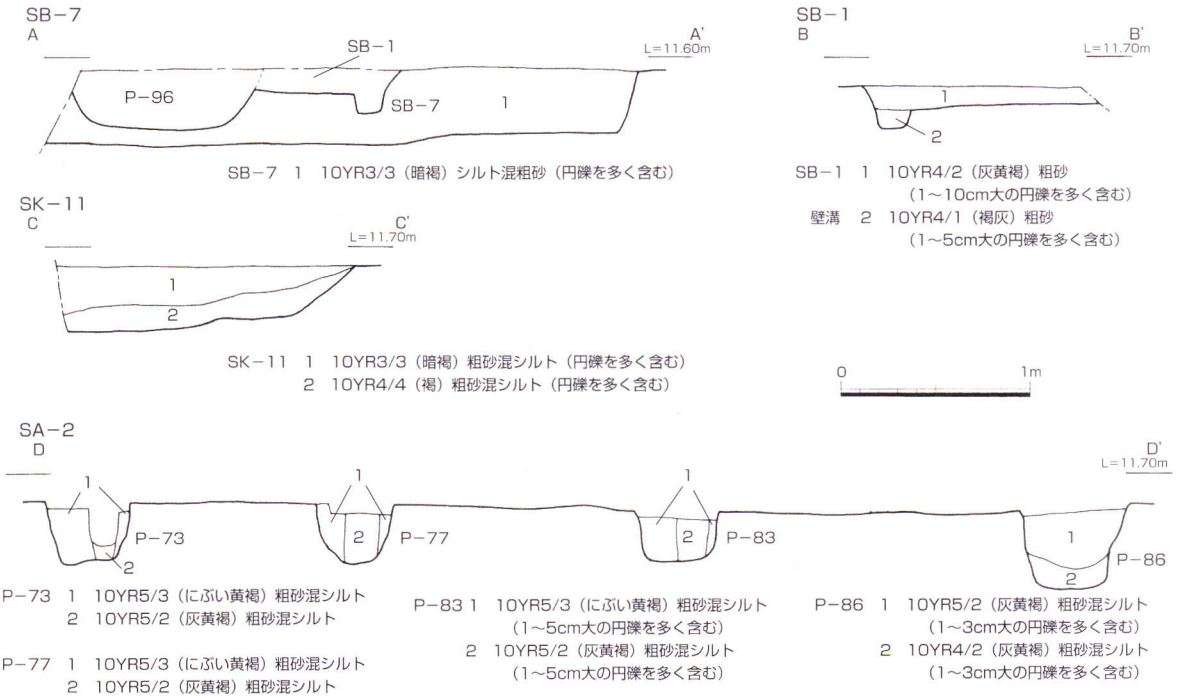
SK－11は第6区東半部において検出した東西7.5m、南北1.5m以上の土坑である。北壁及び東壁は直線的にプランを検出したが西側は不定形に落ち込むもので、竪穴住居の可能性があるものの明確ではない。しかし、床面において検出したP－167は同時期のもので、竪穴住居の場合主柱穴の可能性が高い。覆土は30cm前後で2単位に分けられ、ともに褐色系の色調をもつ粗砂混シルトで、円礫を多く含む。遺物には土師器の壺や鉢　（第14図16～20）があり、時期的に庄内式併行期後葉段階頃と考えられる。

〔SA－2〕（第13図、図版6）

SA－2は、第5区西半部で検出した柱間2間以上（1間1.8m程度）の掘立柱建物の可能性があるピット列である。ホリカタは一辺約40cmの隅丸方形で深さ25～40cmである。柱痕は直径18cm程度である。このピット列を構成する最東端のP－86内部からは、重量113.5gを量る鉄塊（第14図29）が出土した。他のピット内部から出土した土器から鎌倉時代の遺構と考えられる。

〔SD－25・26〕

SD－25・26はともに第4区西半部において検出した北東から南西に延びる溝である。この溝は、県センターの調査で溝6及び溝501に相当するもので、同報告から直線的で平行に50m以上続いていることが確認されている。時期的には溝501が庄内式併行期、溝6が飛鳥時代とされている。今回の調査でもこの時期に相当する遺物が出土した（第14図21）。



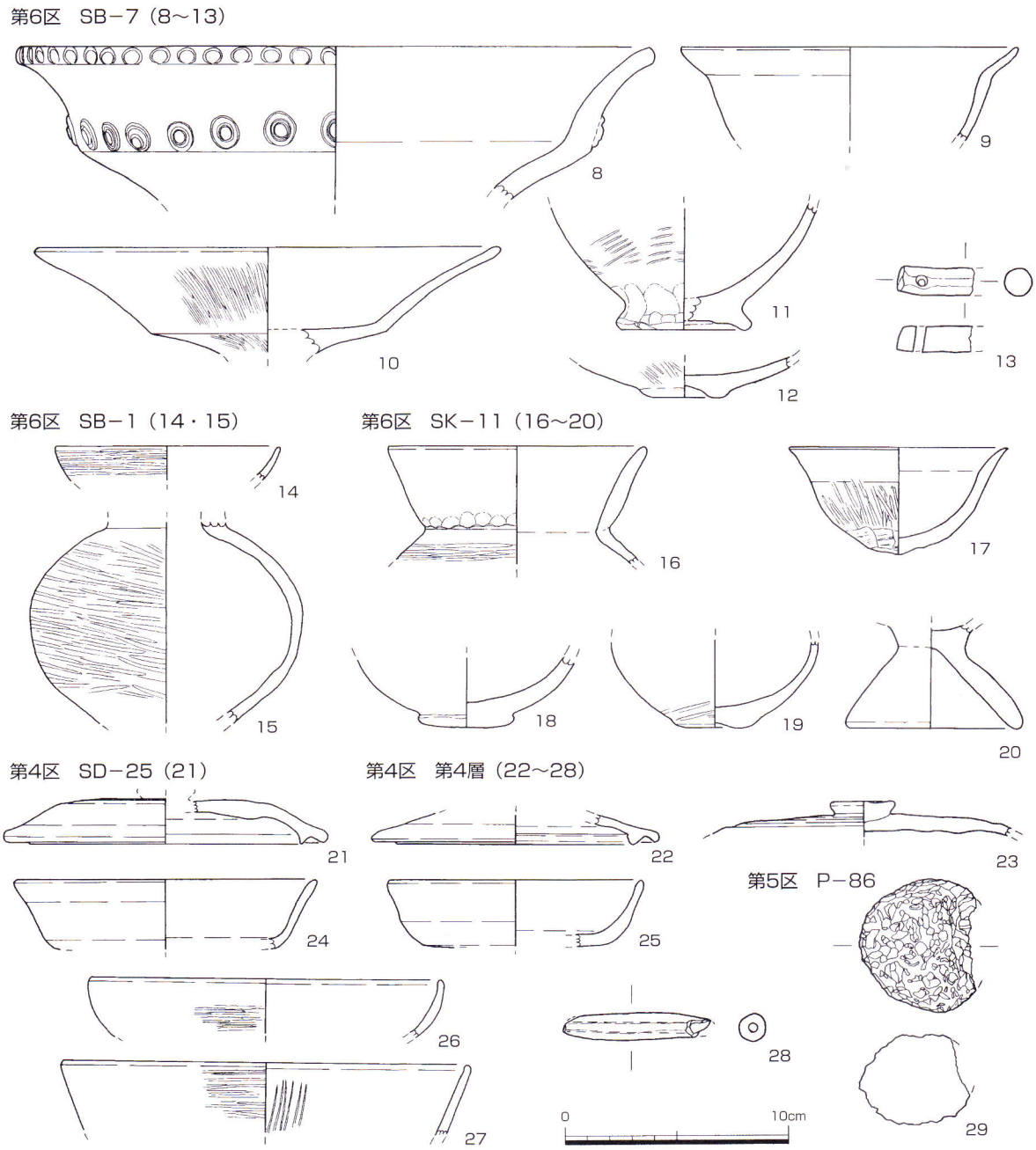
第13図　ＳＢ－１・７・ＳＫ－11・ＳＡ－２土層断面図

〔SK－26・27〕

SK－26・27は第４区東半部において検出した不定形の土坑である。SK－26は約40㎝の深さをもつ暗褐色系のシルトを覆土とするものである。またSK－27は約20㎝の深さのもので、にぶい黄褐色のシルトを覆土とするものである。ともに覆土には須恵器が含まれ、古墳時代後期頃の遺構と考えられる。

〔SK－10・SD－10〕

SK－10は第５区東半部で検出した東西5.0m以上の方形土坑で、竪穴住居の可能性がある。遺物から古墳時代前期の布留式にあたる土器が出土している。またこの土坑の南肩部付近を東西に延びる溝（SD－10）はSK－10より古く古墳時代初頭の遺構である。

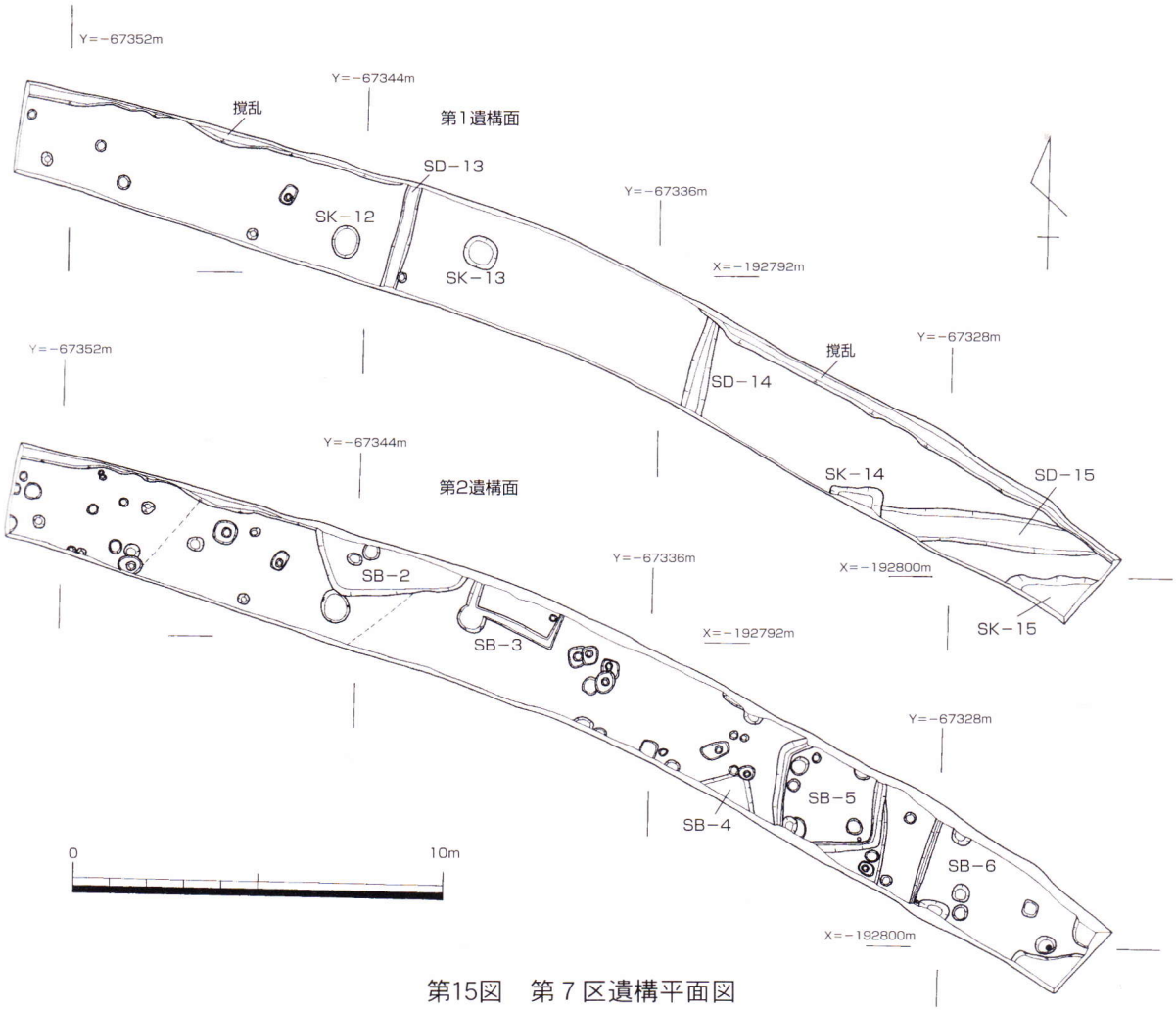


第14図　遺物実測図２

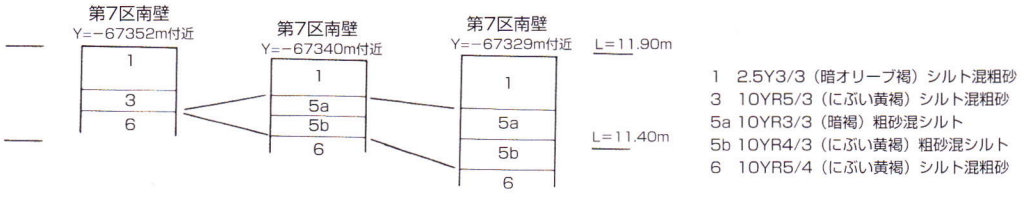
3. 第７区の調査（第15図、図版７）

第７区の現況は畑地であり、耕作面の標高は11.90m前後である（第16図）。Y＝－67344m付近から東側は第５層の堆積があり、この第５層の上面と下面において２面の遺構面を検出した。また第７図に破線で示したY＝－67349m付近からY＝－67343m付近のみ礫を含む第７層が露出している。遺構面の標高は、上面の第１遺構面で11.60m前後であるのに対し、下面の第２遺構面は西端部で11.60m、東端部で11.30mとなり、東に向けて下降する傾斜をもつ。

遺物包含層である第５層から出土した遺物には、縄文時代から奈良時代までのものがある。縄文土器には、突帯文系の深鉢口縁部の細片（第17図30）がある。また弥生土器には中期以前と考えられる壺の底部（31）がある。土師器は一定量の出土が認められ、壺・甕・高杯・杯や把手などがある（32～40）。須恵器は７世紀を中心とする蓋杯（41～44）の他、大形の鉢（45）が出土している。



第15図　第７区遺構平面図



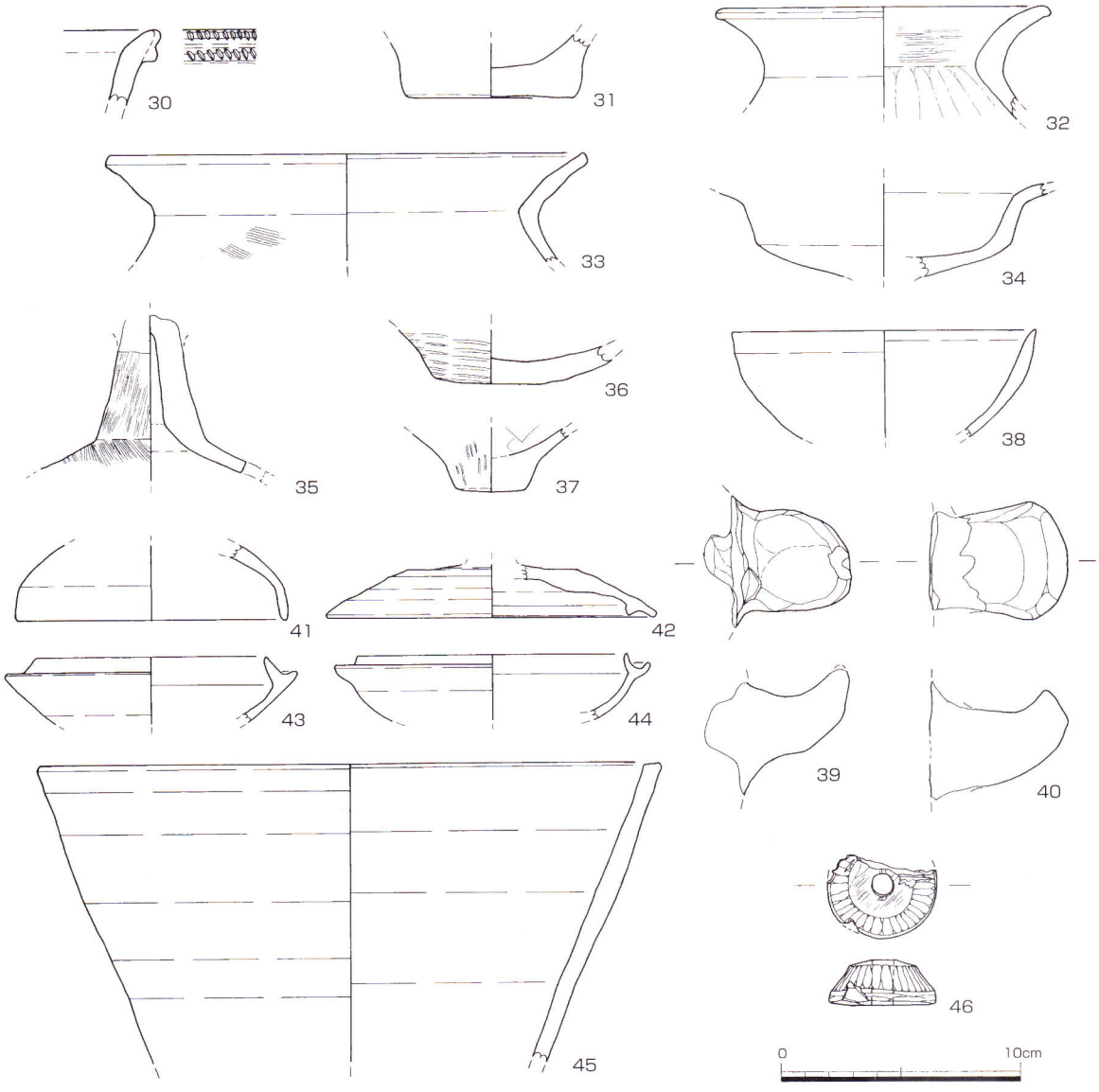
第16図　第７区土層柱状模式図

土器以外では、滑石製の紡錘車１点（46）がある。

遺構は、第１遺構面において江戸時代を中心とした時期のものがある。最も時期の古い遺構は、東端部で検出した東西方向の溝（SD－15）で微細な遺物が多く確実な時期は得られていないものの、状況からみて中世の範疇に収まるものと考えられる。江戸時代の遺構は、東端部で検出した土坑２基（SK－14・15）、中央部で検出した耕作に関わるとみられる南北方向の小溝２条（SD－13・14）の他、第６区の中央部で検出したP－103に類似する畑作に関係すると考えられる土坑２基（SK－12・13）がある。

第２遺構面では、調査区中央部から東端部にかけて竪穴住居５棟を始めとする多数の遺構を検出した。竪穴住居はすべて方形プランのもので古墳時代から飛鳥時代にかけてのものである。竪穴住居以外では、ピット多数を検出した。時期がわかるものでは、古墳時代のものと鎌倉時代のものが混在し、やや古墳時代の占める割合が高い。

以下、主要な遺構を説明する。



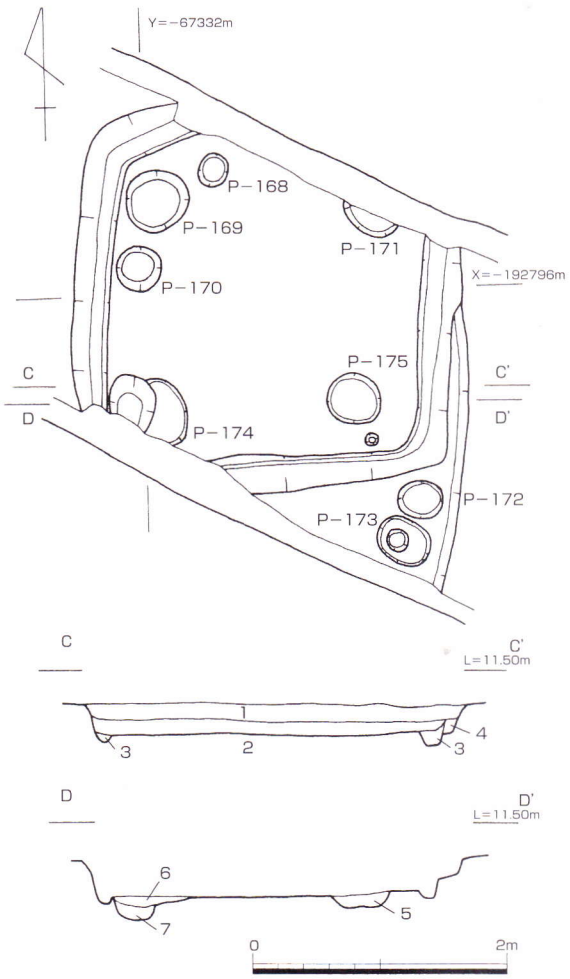
第17図　遺物実測図３

〔SB－２・３〕（第19図、図版８）

SB－２・３は、第７区中央部で検出した方形の竪穴住居である。SB－２は壁溝をもたないやや隅円方形状のもので、規模は、東西3.7m以上、南北1.5m以上である。覆土は20㎝程度の単層で、灰黄褐色系の粗砂混シルトに円礫が混ざる。SB－３は、SB－２東側で検出した方形プランのもので、規模は東西2.6m、南北0.9m以上の小規模な住居である。壁溝は幅15～25㎝、深さ10㎝程度で周囲に巡る。覆土は10㎝程度の単層で、暗褐色系の粗砂混シルトに円礫が混ざる。SB－２の遺物には須恵器杯身（第21図47）や土師器の甕及び高杯（48・49）が含まれていることから飛鳥時代と考えられる。またSB－３は微細な遺物のみで、確実な時期は得られていないが古墳時代の範疇と考えられる。

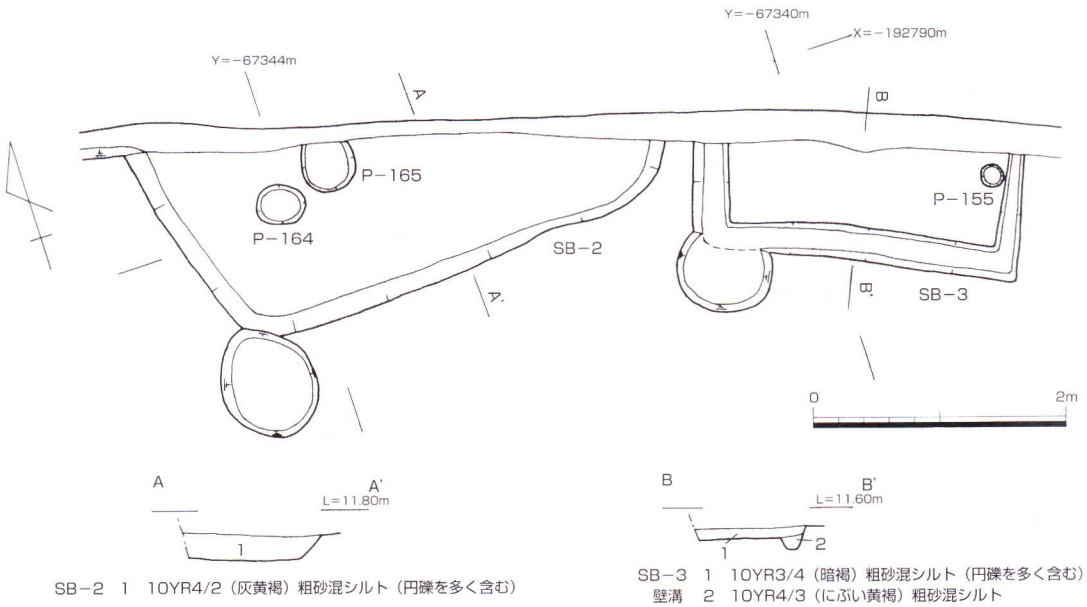
〔SB－５〕（第18図、図版８）

SB－５は、第７区東半部で検出した方形の竪穴住居である。この住居は一辺3.1mのほぼ正方形状で、深さ10～20㎝のピット（P－169・171・174・175）４基で４本柱を構成する。覆土は25㎝程度で２単位に分けられ、上位は暗褐色系、下位はにぶい黄褐色系の粗砂混シル



SB－5　1　10YR3/4（暗褐）粗砂混シルト
　　2　10YR4/3（にぶい黄褐）粗砂混シルト
壁溝　3　10YR4/4（褐）粗砂混シルト
　　4　10YR4/6（褐）粗砂混シルト
P－175　5　10YR3/3（暗褐）粗砂混シルト
P－174　6　10YR3/3（暗褐）粗砂混シルト
　　7　10YR4/3（にぶい黄褐）粗砂混シルト

第18図　SB－５遺構平面図及び土層断面図



SB－2　1　10YR4/2（灰黄褐）粗砂混シルト（円礫を多く含む）

SB－3　1　10YR3/4（暗褐）粗砂混シルト（円礫を多く含む）
壁溝　2　10YR4/3（にぶい黄褐）粗砂混シルト

第19図　SB－２・３遺構平面図及び土層断面図

トである。壁溝は幅10～20cm、深さ10cm程度で周囲に巡る。また東壁に沿って南側に延びる深さ10cm程度の落ち込みがあり、今回の調査では明確にできていないものの住居の拡張が行われたものと考えられる。遺物には、須恵器の蓋杯（第21図50～53）、鉢（54）、甕（55）や土師器甕（56・57）があり、7世紀初頭頃の住居と考えられる。

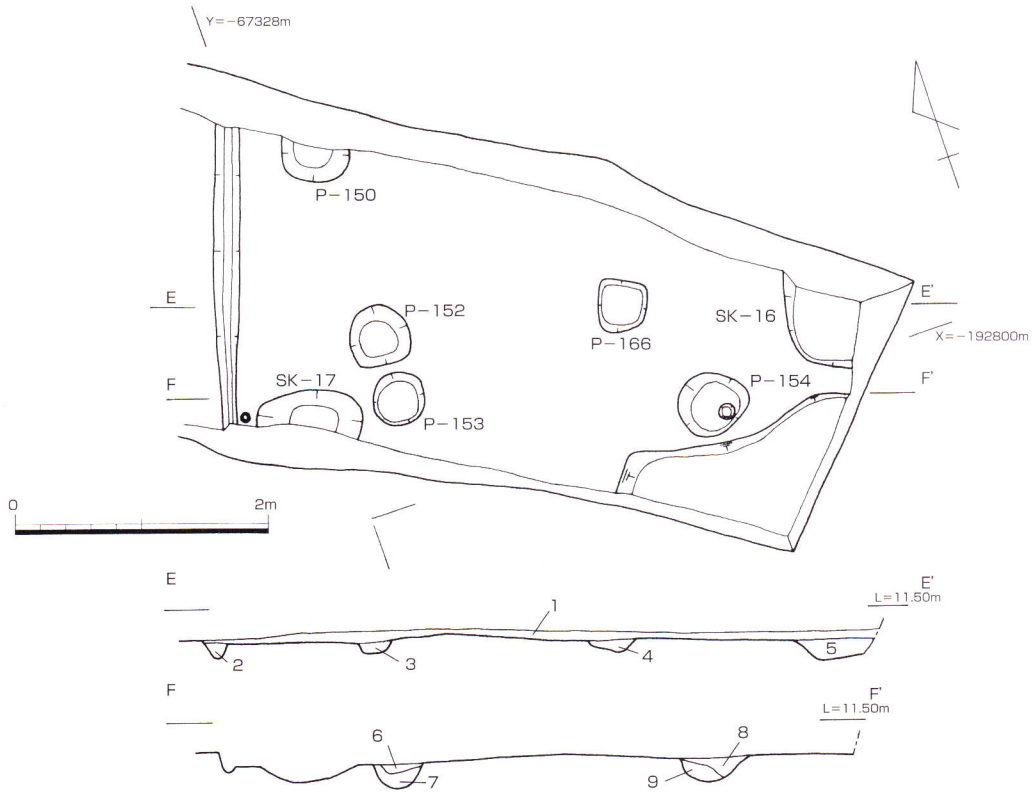
〔SB－6〕（第20図、図版8）

SB－6は、第7区東端で検出した方形の竪穴住居で西辺のみ直線的に検出し、5cm程度の浅い覆土を掘削した後、壁溝を確認したことから竪穴住居であることが判明した。覆土には焼土及び炭が多く含まれていたことから、焼失家屋の可能性が考えられる。また床面から主柱穴と考えられる2基のピット（P－153・154）や貯蔵穴の可能性のある土坑（SK－16）などを確認した。このことから、この住居は東西5.1m以上の比較的大型の住居と考えられる。時期的には、古墳時代中期以降と考えられる。

〔SB－4〕（写真5）

SB－4は、SB－5の西側で検出した方形状の遺構である。壁溝等は、検出できていないものの底面の状況などから竪穴住居と考えられる。

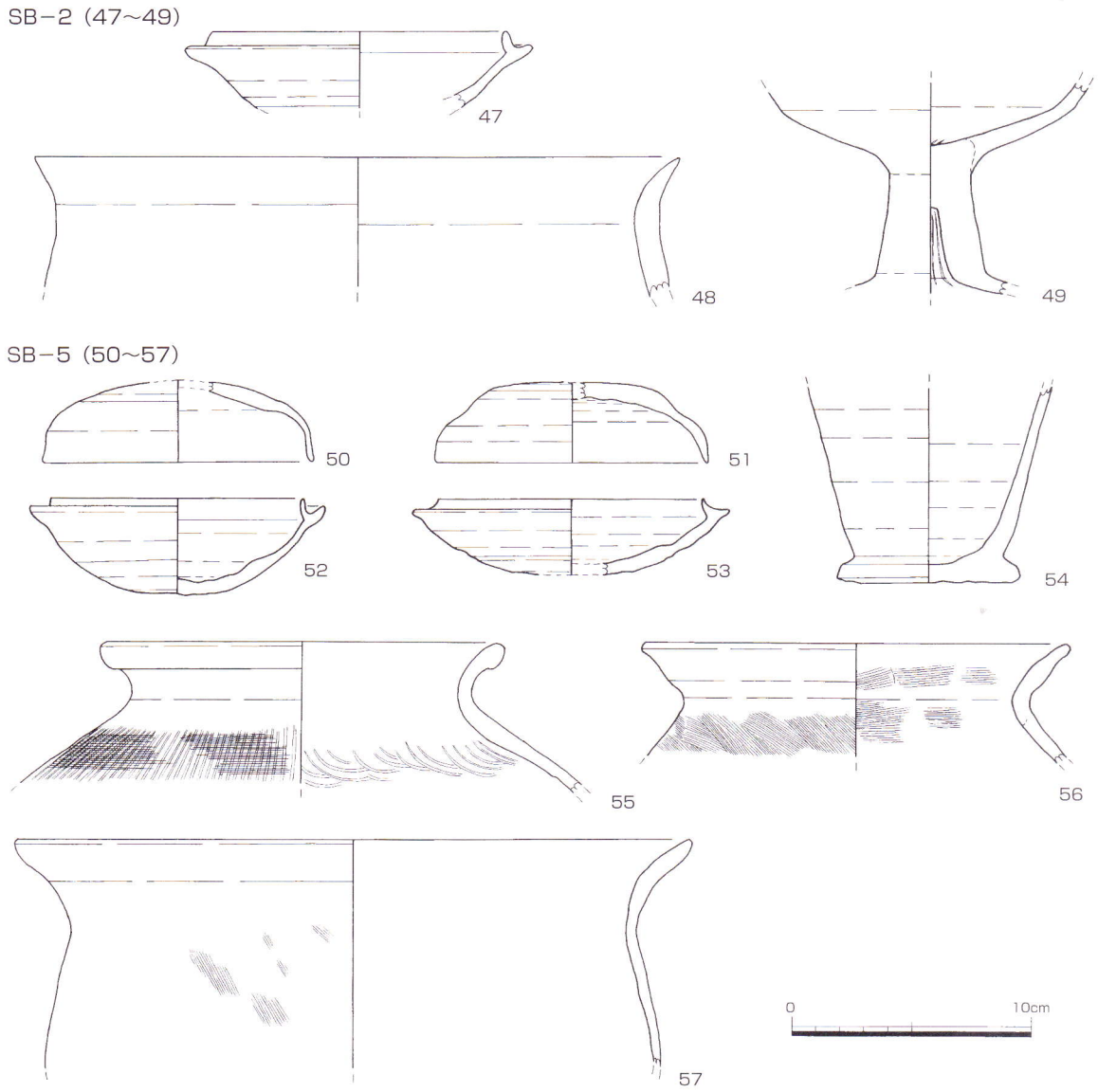
写真5　第7区SB－4及び南壁土層堆積状況（北から）



SB－6　壁溝　P－152　P－166　SK－16
1　10YR3/3（暗褐）粗砂混シルト（焼土・炭を多く含む）
2　10YR4/3（にぶい黄褐）粗砂混シルト
3　10YR3/3（暗褐）粗砂混シルト
4　10YR3/3（暗褐）粗砂混シルト
5　10YR3/4（暗褐）シルト混粗砂（礫を含む）

P－153　P－154
6　10YR4/2（灰黄褐）粗砂混シルト
7　10YR4/3（にぶい黄褐）粗砂混シルト（焼土・炭を多く含む）
8　10YR3/3（暗褐）粗砂混シルト
9　10YR4/3（にぶい黄褐）粗砂混シルト

第20図　SB－6遺構平面図及び土層断面図



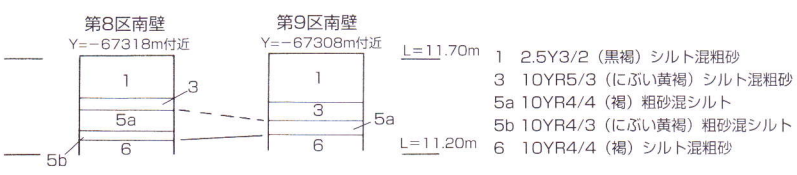
第21図　遺物実測図４

4．第８・９区の調査（第23図、図版９）

第８・９区の現況は畑地であり、耕作面の標高は11.70m程度である（第22図）。遺構面は第７区の状況から第５層上面及び第６層上面とする２面として検出されるものと想定したが、両地区とも第５層上面では遺構は検出されず、第６層上面の１面について調査を行った。遺構面の標高は、11.30m前後で東側に向かってやや上昇する傾斜をもつ。

遺物包含層から出土した遺物では、第８区の第５層から６世紀末頃の須恵器杯蓋（第25図60）や甕（61）が出土している。

遺構は、第８区においてカマドをもつ竪穴住居１棟（SB－８）とその北側に竪穴住居の可能性がある方形の遺構（SB－９）の他、ピット８基



第22図　第８・９区土層柱状模式図

を検出した。判別できるピットの時期はすべて古墳時代のもので、6世紀末頃と考えられる。また第9区では東西方向の溝1条（SD－24）とピット多数を検出し、時期的に古墳時代後期頃のものと判断した。

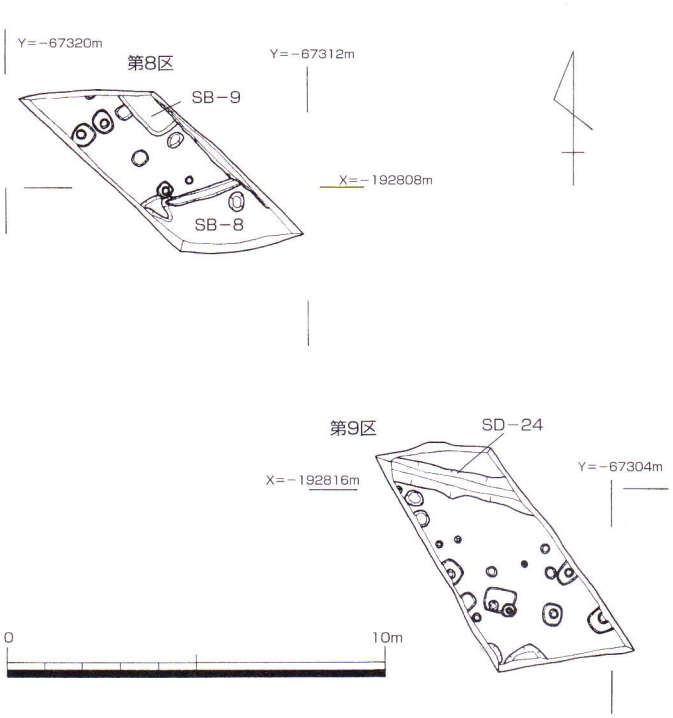
以下、主要な遺構を説明する。

〔SB－8〕（第24図、図版10）

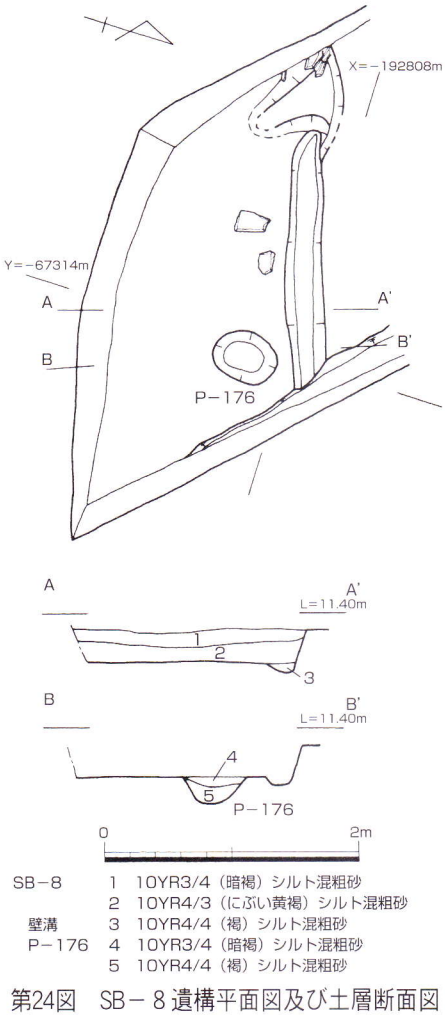
SB－8は、第8区で確認した方形の竪穴住居で北側の壁面ラインを直線的に検出した。住居の規模は、北側壁面のみの確認であるため全形は不明であるものの、東西2.8m以上、南北1.8m以上の規模を有し、壁面直下には幅20㎝、深さ10㎝程度の壁溝が巡る。また北側壁面において造り付けのカマドを検出した。カマド部分はやや外側に張り出す形状で、袖部は約60㎝の長さで内側に延びる。カマド内部は赤褐色に変色し、その部材に使用されていたとみられる結晶片岩が多数出土した。住居の覆土は25㎝程度で、上下2単位に分けられた。主柱穴は、直径40～50㎝、深さ約20㎝のピット1基（P－176）を確認した。遺物には土師器の甑口縁部（第25図58）がある。時期的には、7世紀初頭と考えられる。

〔SD－24〕

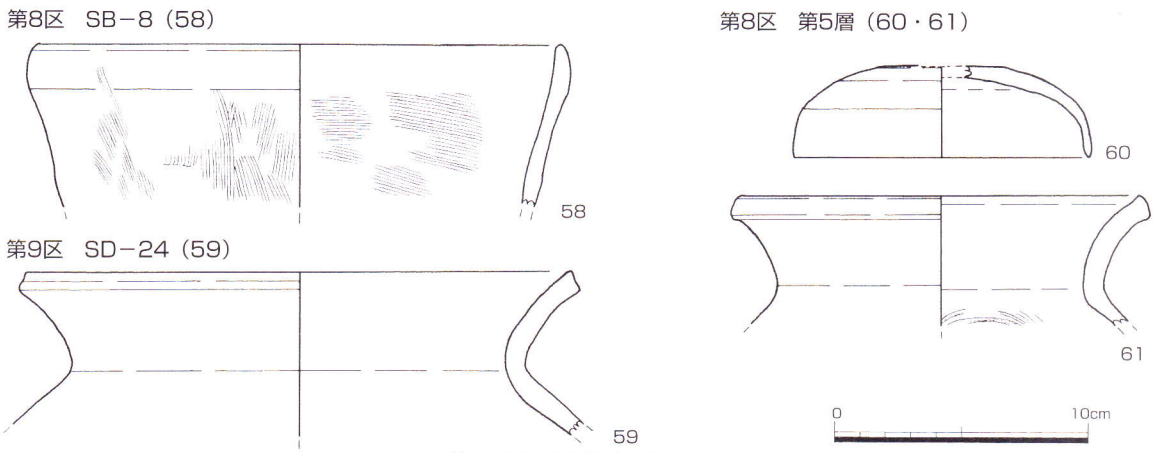
SD－24は、第9区で検出した幅65㎝、深さ15㎝程度の溝で、覆土は灰黄褐色粗砂混シルトの単層である。この溝の主軸は、N－77°－Wで、流路方向は東から西とみられる。遺物には軟質焼成の須恵器甕（第25図59）がある。



第23図　第8・9区遺構平面図



第24図　SB－8遺構平面図及び土層断面図



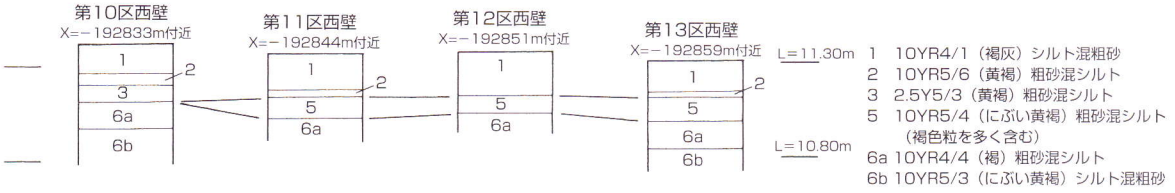
第25図　遺物実測図５

5．第10～13区の調査（第27図、図版10下・11）

第10～13区の現況は、第10区が水田、第11～13区が休耕田の荒蕪地である。耕作面の標高は、第10区が11.40m、第13区が11.30mで北から南に向かって緩やかに下降する（第26図、写真６・７）。遺構面は第11区から第13区にかけて第５層の堆積があり、この第５層の上面と下面において２面の遺構面を検出した。また第27図に破線で示したＹ＝－67287m付近からＹ＝－67289m付近の範囲は、南北方向の帯状に礫を含む第７層が露出している。遺構面の標高は、上面の第１遺構面で11.10m、第11～13区で検出した第５層下面の第２遺構面は11.00m前後である。

上位堆積層から出土した遺物には、第12区第２層から出土した提瓶（第30図98）や第５層から出土した提瓶の口縁部とみられる破片（99）、壺口縁部（100・101）などがあり、位置的にみてSE－１との関わりが強いものとして考えられる。

遺構は、第10区においては全く検出していない。第11～13区の第１遺構面では、第12区の東壁周辺を南北に延びる溝１条（SD－19）を検出した他、第５層が部分的に存在しない地点で検出した土



第26図　第10～13区土層柱状模式図

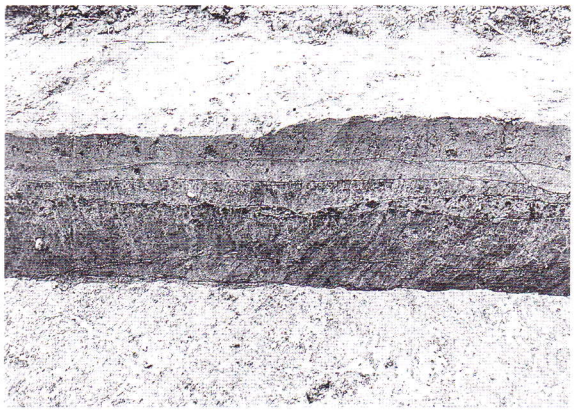


写真６　第10区西壁土層堆積状況
（X＝－192833m付近　北東から）

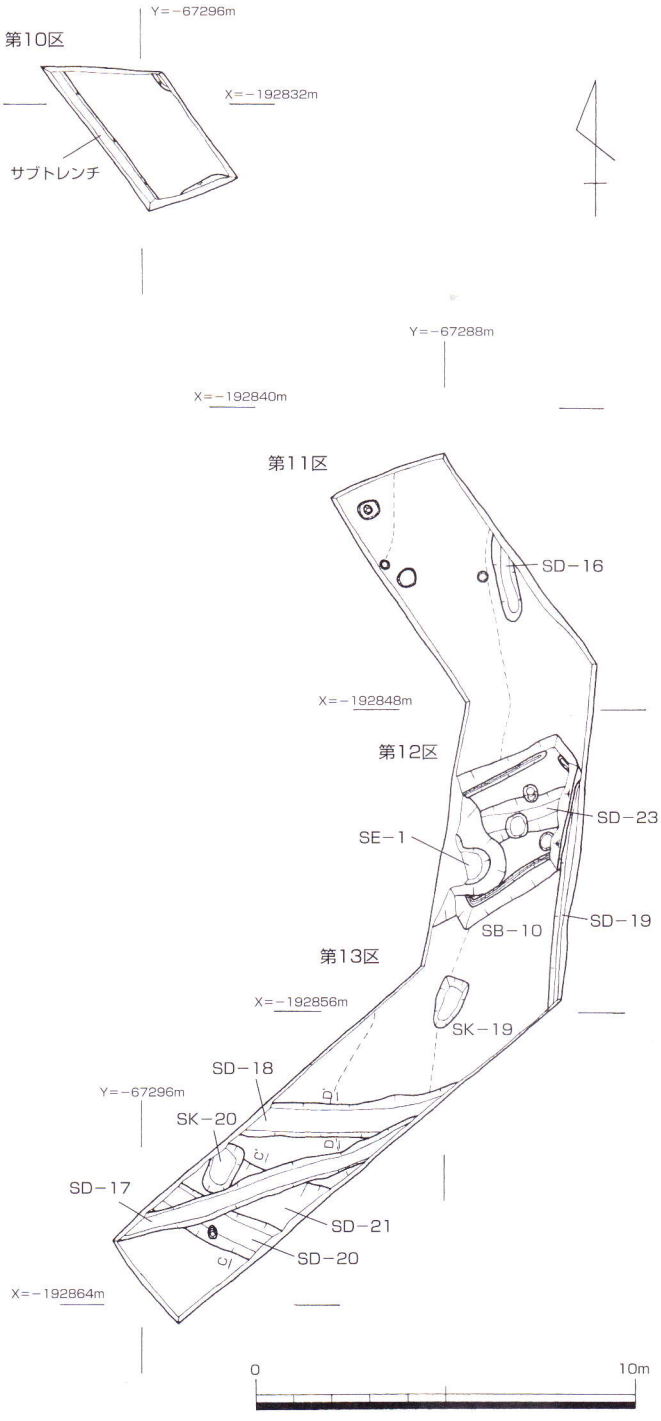
写真７　第13区西壁土層堆積状況
（X＝－192860m付近　南東から）

葬墓（SK－19）もこの遺構面に対応する遺構と考えられる。第２遺構面では、第11区において古墳時代の溝状遺構１条（SD－16）、第12区において弥生時代後期頃の溝（SD－23）、古墳時代前期の竪穴住居（SB－10）、後期の井戸（SE－１）が重なり合って確認できた。また第13区では、古墳時代初頭から飛鳥時代にかけての溝４条（SD－17・18・20・21）と古墳時代前期の土坑１基（SK－20）も重なり合って検出した。

以下、主要な遺構を説明する。

〔SB－10〕（第28図、図版12）

SB－10は、第12区中央部で検出した方形の竪穴住居である。規模は長辺4.8m、短辺3.5mの長方形の平面形で、床面までの深さが70㎝と極めて深い。この住居の西側約１／３は古墳時代末期の井戸（SE－１）によって壊されている。床面において検出した直径50㎝、深さ20㎝程度の２基のピット（P－217・218）から４本柱の住居であったものと考えられ、ほぼ中央部に直径60㎝、深さ12㎝の炉が確認できた。壁溝は、幅約20㎝、深さ10㎝程度でほぼ全周する。覆土は３単位に分けられるが、最上層にはSE－１の時期にあたる土器が多量に出土し、このことはSE－１が掘削された時点で住居内部が凹んでいたことを示すものであろう。また下位にあたる２単位の覆土には壺（第29図62～66）を中心とした本来の居住時期を示す土器群が出土した。またSE－１の覆土内部からもSB－10からの混入とみられる土器群が含まれていた（75～82）。土器の出土位置では、炉内部から出土したものに壺口縁部（64）が、主柱穴であるP－218内部から複合口縁壺口縁部（65）と壺底部（70）がある。これらの土器からこの住居は、庄内式併行期古段階頃に位置づけられる。



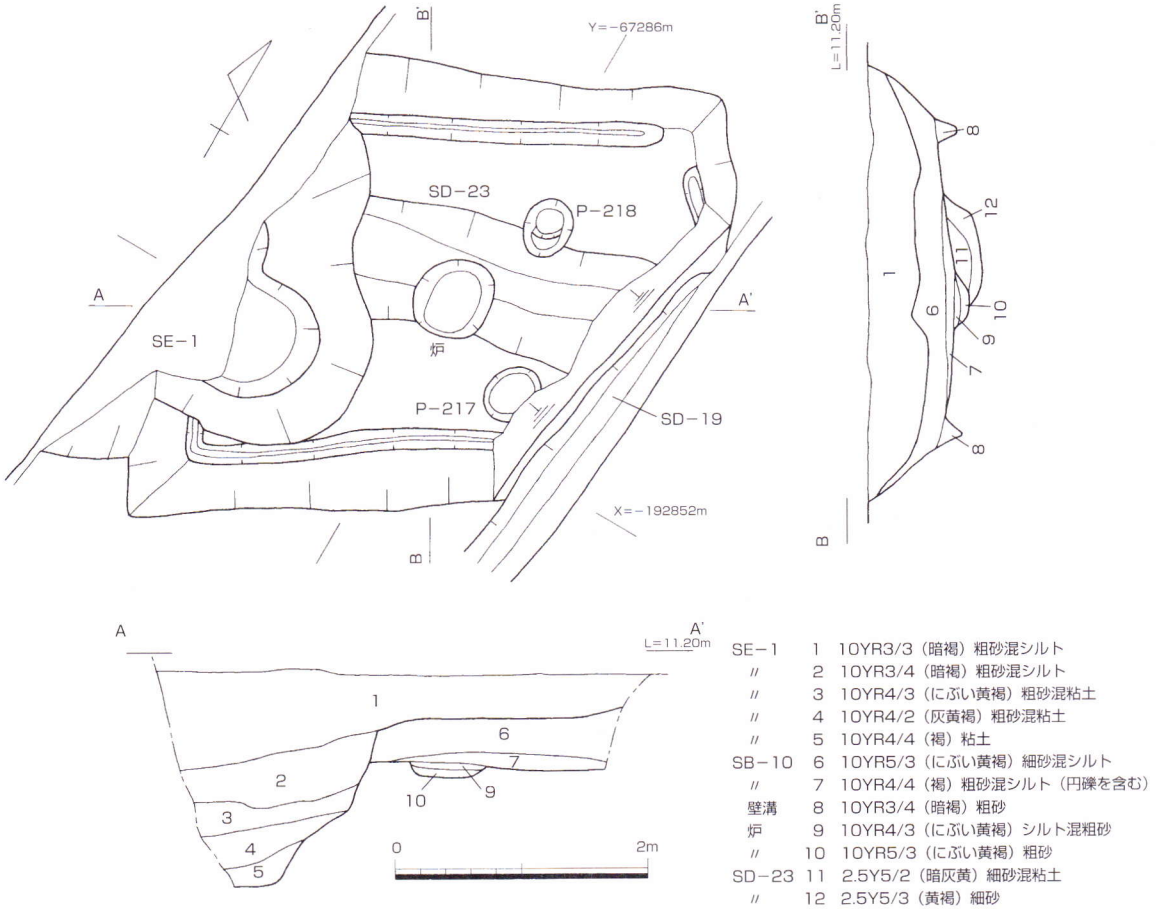
第27図　第10～13区遺構平面図

〔SD－23〕（第28図）

SD－23は、SB－10の床面で検出した幅約1.0m、床面からの深さ20㎝程度の東西方向に延びる溝である。上部はSB－10によって削平を受けているため全形は不明であるものの、上端幅1.5m、深さ90㎝程度の規模であったと思われる。覆土は底面付近の２単位が残存しており、上位は暗灰黄色系の細砂混粘土、最下層が黄褐色の細砂となる。遺物は微細なものが主体であるが、時期的に弥生時代後期以前の遺構と考えられる。

〔SE－１〕（第28図、図版12）

SE－１はSB－10と重なりをもって検出した井戸である。この井戸は掘削段階でSB－10の凹みを利用し掘り進められたものと考えられる。規模は、東西幅の広がりは不明瞭であるものの南北幅3.5m以上を測る大規模なもので、深さは1.7m（標高9.4m）まで掘削されている。覆土は５単位に分けられ、上位層がシルト質で下位層ほど粘質が強くなる傾向であり、上位の２単位に多量の土器が含まれていた。遺物には、SB－10から混入したとみられる一群（第29図75～82）の他、SE－１の時期を示す須恵器・土師器があり、須恵器の割合が特に多い。須恵器の機種では蓋杯が少なく、図示できる杯蓋（第30図83）が１点ある。また壺・甕（84～87）が一定量有り、極めて多いものが提瓶（88～92）である。図示したものは５点であるが、細片を含めると20点以上の提瓶が存在したものと考えられる。提瓶には、肩部把手の形状にボタン状のものを貼付けたもの（88）や、指オサエで丸めた比較的低い突起を貼付けたもの（89・92）の他、SE－１の上部に堆積した第２層から出土



第28図　SE－１・SB－10・SD－23遺構平面図及び土層断面図

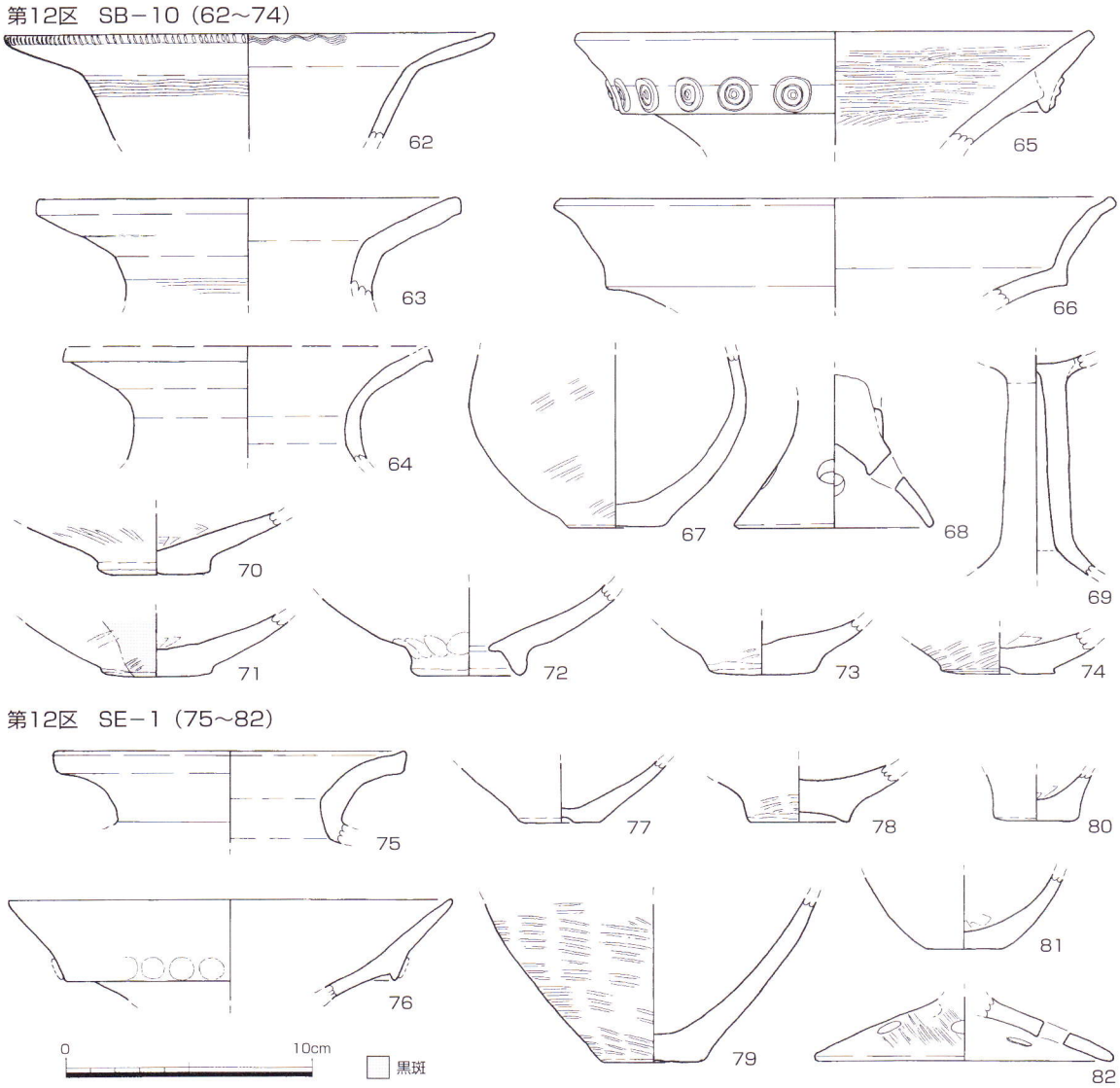
している円環状になるもの（98）も含まれる。また提瓶に類似する横瓶（93･94）も出土しており、この２点は同一個体の可能性が高いものである。土師器では、壺口縁部（95）や甕（97）などがある。出土した遺物からSE－１の時期は、６世紀末から７世紀の初頭頃に位置づけられる。この遺物の出土傾向は、水辺の祭祀に関わる特殊な一例を示すものと考えられよう。

〔SD－17・18・20・21〕（第31図、図版12）

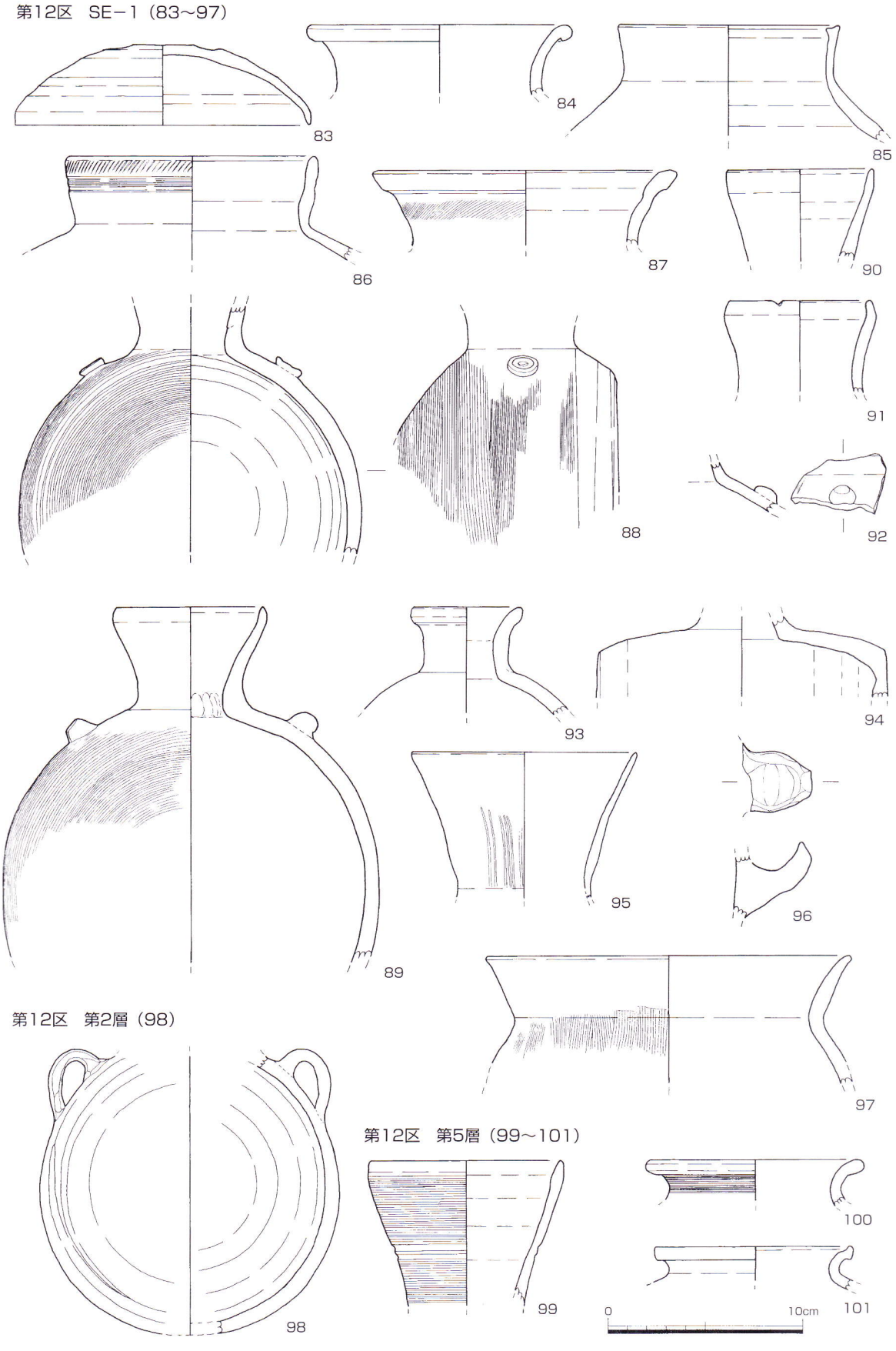
SD－20･21は第13区南半部で重なり合って検出した溝であり、北側微高地部と南側微低地部の境目に掘削されているものである。またSD－17・18もSD－20・21が埋没後、この地点に掘削された溝である。

SD－21はSD－20によって南側肩部を削平されているものの幅2.0m前後に復元でき、深さ1.0mを測る。また第31図に示した土層堆積単位の５～７層と８・９層から再掘削が行われていることがわかり、その方向性はN－73°－Wである。出土土器には、壺口縁部（第32図102）や底部（103・104）があり、時期的にみて庄内式併行期古段階頃と考えられる。

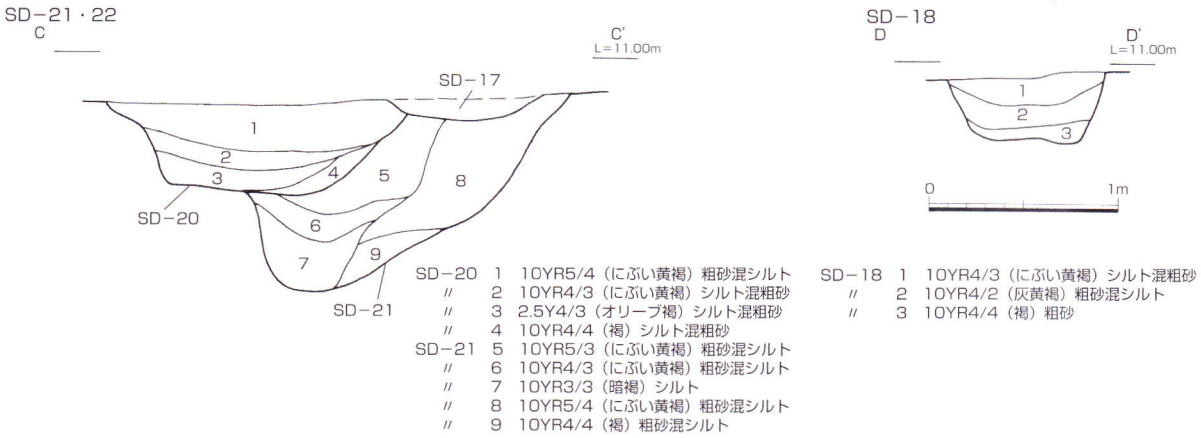
SD－20はSD－21が埋没した後、掘削された溝で、上端幅1.6m、深さ45㎝前後のもので、その方



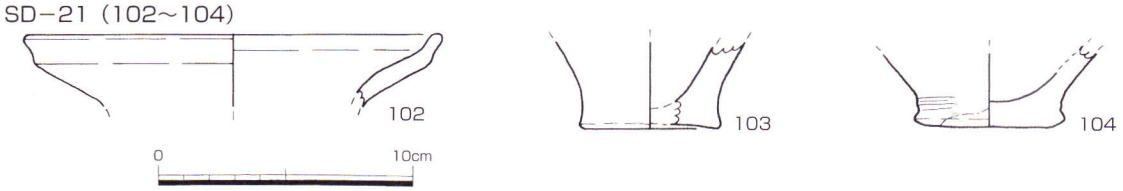
第29図　遺物実測図６


第12区　SE－1（83～97）
83
84
85
86
87
90
91
88
92
89
93
94
95
96
97
第12区　第2層（98）
98
第12区　第5層（99～101）
99
100
101
0
10cm

第30図　遺物実測図 7



第31図　SD−18・20・21土層断面図



第32図　遺物実測図８

向性はN−65°−Wである。覆土はレンズ状の堆積をする４単位に分けられ、全体的に褐色系の土層で上位層はシルト質が、下位層は粗砂質が強い。遺物は、細片が多く図示していないが、古墳時代前期の布留式期の範疇と考えられる。

SD−18は、SD−21の北側で検出した幅85㎝、深さ70㎝前後の溝である。その主軸はほぼ東西方向に重なる。出土遺物からみて古墳時代後期頃に位置づけられる。

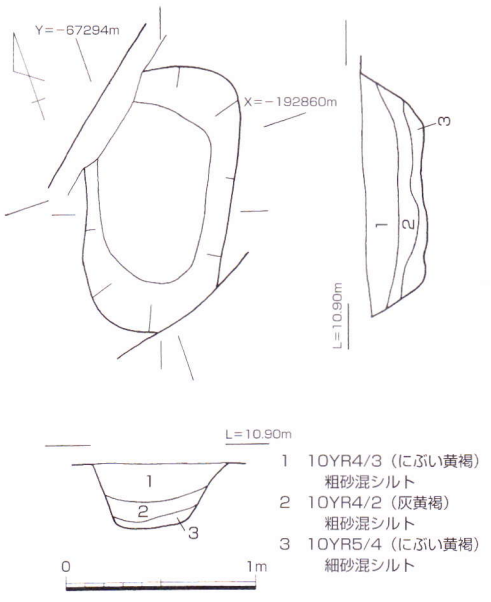
SD−17は、この中でその重なりから判断しても最も新しい時期の溝である。この溝は、幅50〜70㎝、深さ10㎝前後で、N−73°−Eの方向性をもつものである。底面の比高差は他の溝に比べ明確で、流路方向は、東から西である。出土遺物からみて７世紀前半の飛鳥時代に位置づけられる。

〔SK−20〕（第33図、図版12）

SK−20はSD−17とSD−18の間で検出した東西0.8m、南北1.4m、深さ65㎝程度の土坑である。覆土は全体的に黄褐色系のシルト質で３単位に分けられる。遺物は微細なものが多いものの、古墳時代前期の範疇と考えられる。規模的にみて土坑墓の可能性が考えられる。

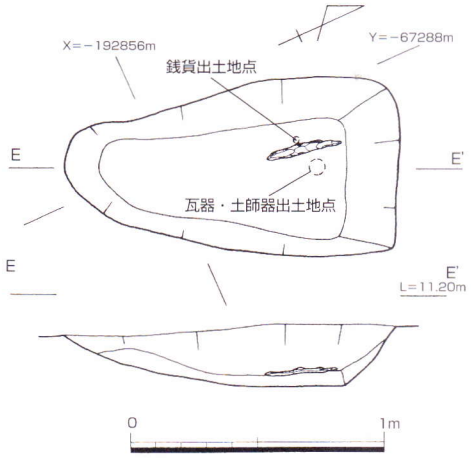
〔SK−19〕（第34図、図版12）

SK−19は第12区と第13区の境目で検出した土坑である。この土坑は東西0.7m、南北1.3m、深さ25㎝で、覆土は２単位に分けられ、出土遺物等の状況から土葬墓と考えられる。上位の覆土は約10㎝の深さ

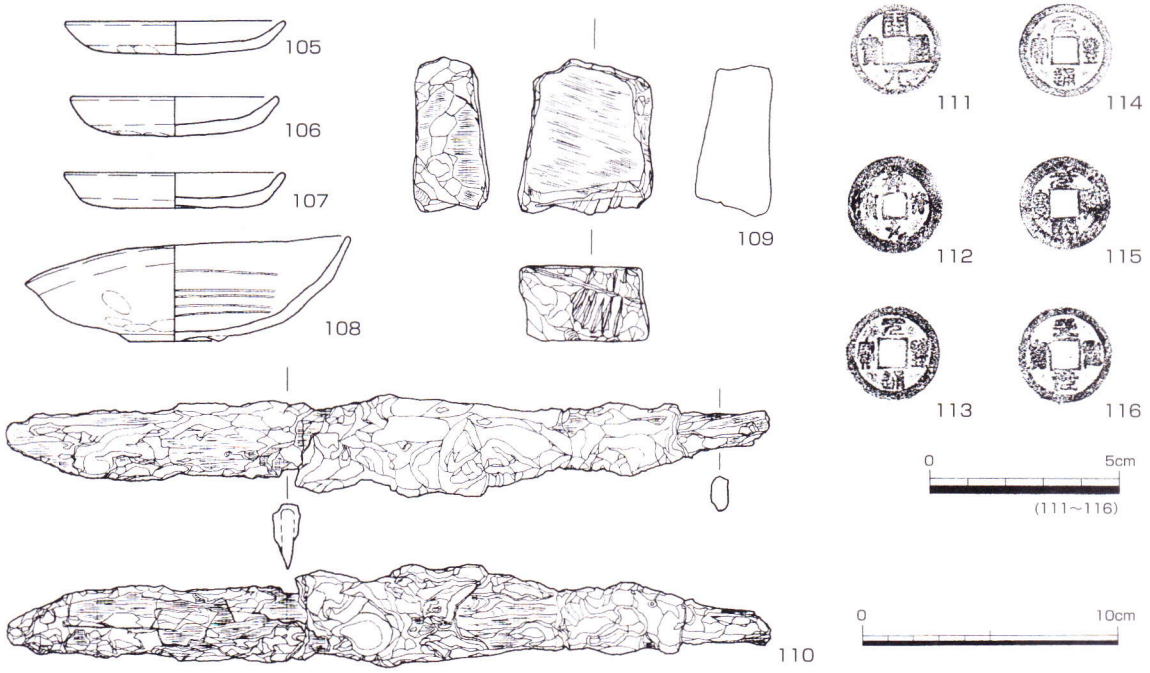


第33図　SK−20遺構平面図及び土層断面図

で灰黄褐色系の粗砂混シルト、下位の覆土は約15㎝の深さでにぶい黄褐色の粗砂混シルトであり、遺物は下位層からまとまって出土した。遺物の出土位置は、中央より北側の床面に集中し、すべて埋葬に関係する副葬品と考えられるものである。遺物には、土器類として土師器皿３点（第35図105～107）、瓦器椀１点（108）がある。土師器皿はすべて口径8.5㎝程度で、106・107は完形品である。色調は、105が赤褐色、106・107が乳褐色に発色している。108は口縁部に歪みのある完形の瓦器椀で、高台は粘土紐を貼付けただけの簡素なものである。石製品では石灰岩系の石材を用いた砥石（109）がある。ほぼ全面に使用痕が観察され、特に下端部には刀傷のような筋状の研磨痕が特徴的である。また金属製品には鉄製の小刀（110）がある。この小刀は全長30.0㎝のもので、全面が錆に覆われている。刃部には部分的に木目が確認できることから、埋納時には鞘に収めた状態であったものと考えられる。この他、銭貨６枚（111～116）も小刀の際でまとまって出土している。出土状態は図示できていないものの、111～113と114～116がそれぞれ上中下の順に錆びついて固まった状態２単位として出土したものである。銭種は、開元通寶（111）、祥符元寶（112）、元豊通寶（113・114・115）、天聖元寶（116）の４種類である。出土遺物からみて、埋葬時期は鎌倉時代と考えられよう。



第34図　SK－19遺構平面図及び立面図



第35図　遺物実測図９

6. 第14・15区の調査（第40図、図版13上）

第14・15区の現況は、盛土を施した荒蕪地である。盛土は20～40cmの厚みがあり、その下に旧水田耕土が堆積する。水田耕作面の標高は、約11.20mである（第36図、写真８）。遺構面は第13区の状況を考慮し、第５層上面で検出を試みたものの遺構は確認できず、第６a層上面まで掘削を行って遺構を確認した。またサブトレンチ等の状況から第６b層上面において遺構の存在が確認できたため、掘削深の関係から第14区のみ全面に掘削して調査を行った。遺構面の標高は、第14区北端で第６a層上面の第１遺構面が10.70m、第６b層上面の第２遺構面が10.55mで、ともに第15区に向かって下降していく状況である。また上位の第２～４層も谷部に堆積した沖積作用の影響で数単位に細分が可能となり、第13区と比較しても明らかに微低地へ移行したことがわかる。上位堆積層から出土した遺物には、第14区から出土した中国製青磁碗（第39図118）がある。

遺構は、第14・15区の第１遺構面において古墳時代の溝１条（SD－22）、古墳時代の土坑１基（SK－22）の他、時期の判別が困難な土坑やピットを検出した。また第２遺構面では、弥生時代の溝３条（SD－50・51・53）、弥生時代の方形土坑１基（SK－40）の他、時期の判別が困難な溝や土坑を検出した。

遺構及び遺物包含層の遺物出土量は、第13区までの居住域である微高地部に比べ減少傾向にあり、第14区から南側の微低地部は生産域となる状況を示すものと考えられる。

以下、主要な遺構を説明する。

〔SD－22・SK－22〕

SD－22及びSK－22は第14区北半部の第１遺構面で検出した遺構である。

SD－22は幅1.9m、深さ20cm程度の溝とみられ、その方向性は、N－43°－Wである。覆土はにぶい黄褐色系の粗砂混シルトの単層である。遺物からみて古墳時代前期の遺構と考えられる。

SK－22はSD－22の南側で検出した不定形の土坑である。長辺が2.5m以上の大規模な遺構で、東側に大きく広がるものとみられる。この遺構も古墳時代の範疇と考えられる。

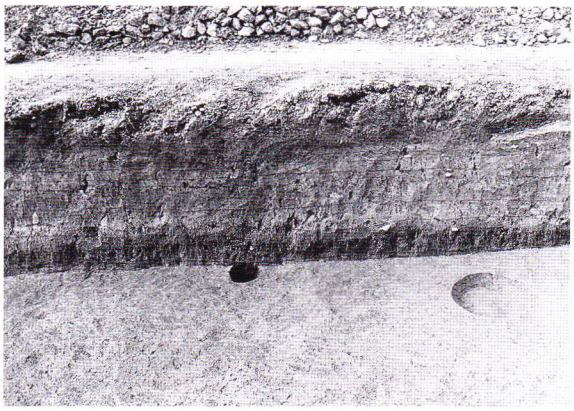
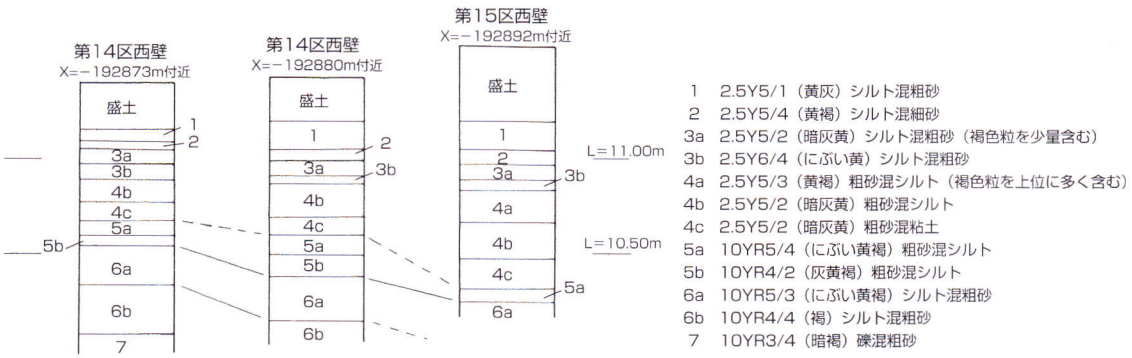


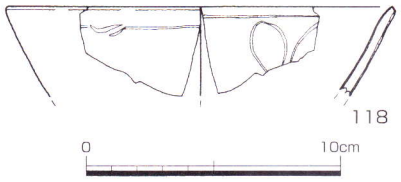
写真８　第14区西壁土層堆積状況
（X＝－192880m付近　南東から）



第36図　第14・15区土層柱状模式図

〔SD－53〕（第37図）

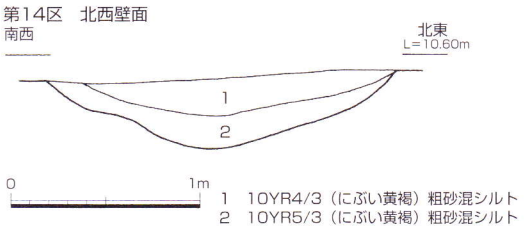
SD－53は第14区北半部の第２遺構面で検出した溝である。この溝は幅1.7m、深さ35㎝程度の溝で、その方向性は、N－56°－Wである。覆土は上下２単位に分けられるにぶい黄褐色系の粗砂混シルト層である。遺物からみて弥生時代中期の範疇と考えられるが、詳細な時期は得られない。遺物には凸基有茎式の石鏃（第38図117）がある。



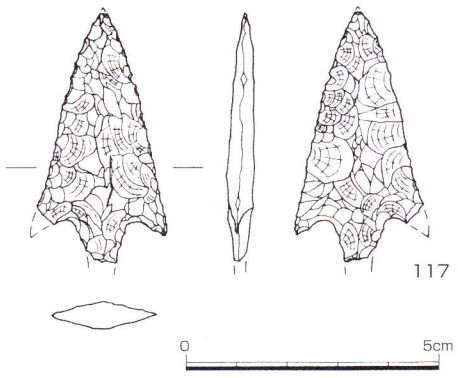
第39図　遺物実測図11

〔SD－50・51・SK－40〕

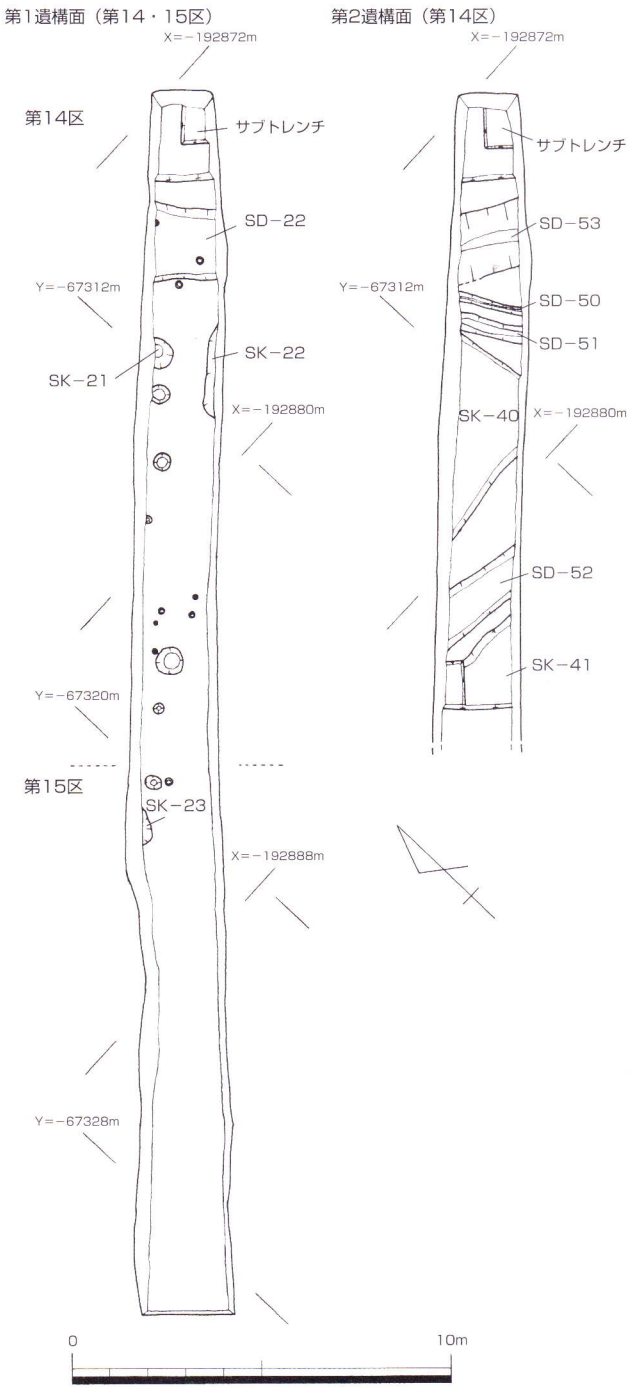
SD－50・51はSD－53の南側で検出したN－29°－Wの方向性で平行に掘削された２条の溝である。ともに10㎝程度の浅いものである。またこれらの西側にはSK－40がある。SK－40は東西3.0m以上、南北3.3m以上の大型方形土坑である。これらは、弥生時代の遺構と考えられるが、微細な土器が含まれているのみで、その性格などは不明である。



第37図　SD－53土層断面図



第38図　遺物実測図10



第40図　第14・15区遺構平面図

7. 第16・17区の調査（第41図、図版13下）

第16・17区の現況は水田であり、耕作面の標高は、約11.10mである（第42図、写真９）。遺構面は第13･14区の様相とは若干異なり、第５b層上面が第１遺構面である。下層の状況は第６a層上面と第６b層上面において遺構を確認し、それぞれほぼ全体に調査を進め、さらに下層の状況確認をサブトレンチによって行った。遺構面の標高は、第１遺構面が10.50m、第２遺構面が10.40～10.45m、第３遺構面が10.15mで第16区南端部分が各遺構面とも５～10㎝程度低くなる。

遺物包含層から出土した遺物には、第17区の第６b層から出土した弥生土器脚部（第43図120）があり、第３遺構面のベース層にも遺物が含まれていることを確認した。

第１遺構面において検出した遺構は、第17区の平安時代とみられる溝１条（SD－30）とこの溝の南側に平行して延びる幅3.4mの高まり（大畦畔）がある。また第２遺構面において検出した遺構は、古墳時代の溝（SD－27・29・31・33）、奈良時代の溝（SD－32）や時期の判別が困難な土坑やピットを検出した。また第３遺構面では、第16区において屈曲して延びる溝（SD－40）を第17区において東西方向の溝（SD－41・42）をそれぞれ検出した。層位的にみて弥生時代中期頃と想定できるものの、ほとんど遺物が出土せず、時期判別等は不可能である。

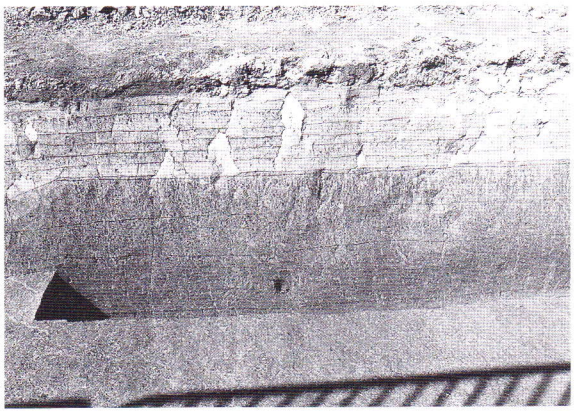
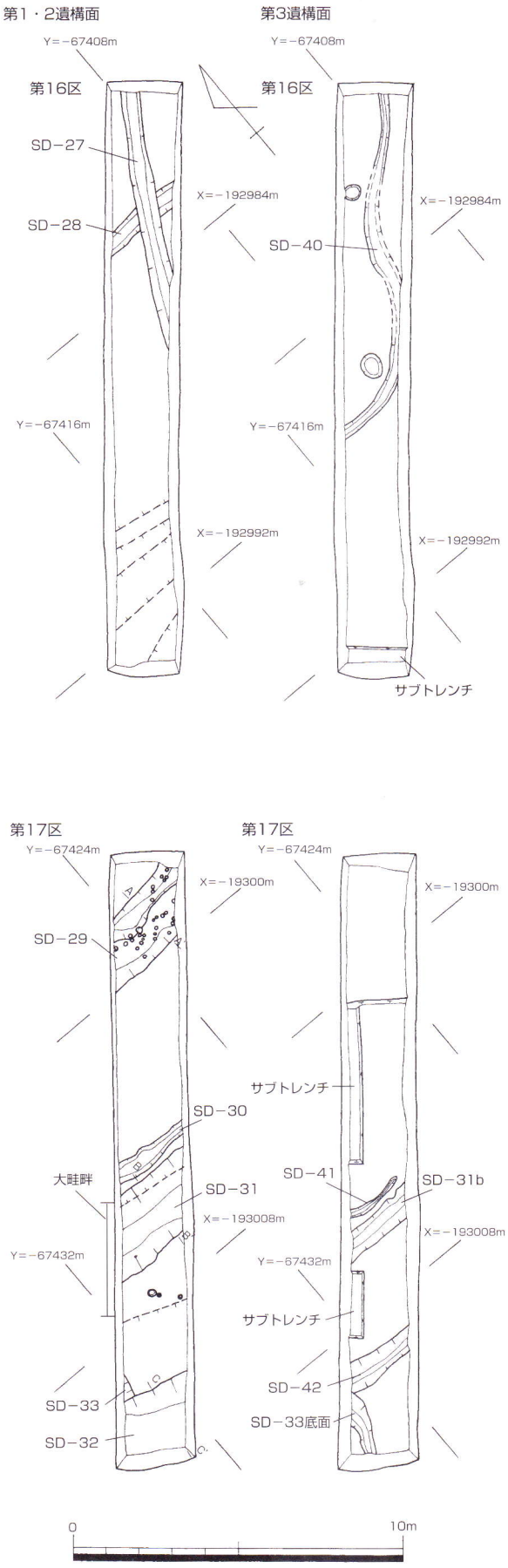
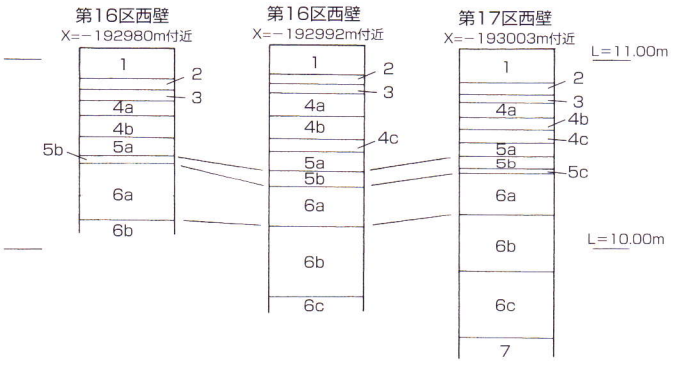


写真９　第17区西壁土層堆積状況
（X＝－193007m付近　南東から）



第41図　第16・17区遺構平面図



1　5Y4/1（褐灰）シルト混粗砂
2　2.5Y5/4（黄褐）シルト混細砂
3　2.5Y5/3（黄褐）粗砂混シルト
4a　2.5Y5/2（暗灰黄）粗砂混シルト（褐色粒を多く含む）
4b　2.5Y5/4（黄褐）粗砂混シルト（褐色粒を含む）
4c　2.5Y5/3（黄褐）粗砂混シルト（褐色粒を含む）
5a　2.5Y6/2（灰黄）粗砂混粘土
5b　2.5Y5/4（黄褐）粗砂混粘土
5c　10YR5/6（黄褐）粗砂混シルト
6a　10YR5/4（にぶい黄褐）細砂混シルト（褐色粒を含む）
6b　10YR4/3（にぶい黄褐）シルト
（北半部は上位に褐色粒を多く含む）
6c　10YR4/3（にぶい黄褐）細砂混シルト
7　2.5Y5/4（黄褐）細砂

第42図　第16・17区土層柱状模式図

このことから、第13区から南側の微低地は当調査区まで及んでいることが確認でき、時期が異なるものの大畦畔や平行して掘削された東西方向の溝など灌漑用水路と考えられることから当調査区一帯が水田地帯であった可能性が指摘できよう。

以下、主要な遺構を説明する。

〔SD－29〕（第44図、図版14）

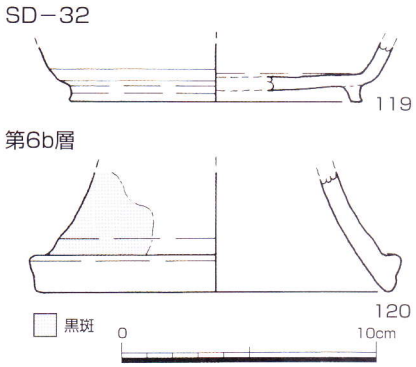
SD－29は、第17区北端部で検出したほぼ東西軸に主軸をとる溝である。2単位の掘削単位が確認でき、時期の新しいSD－29aが古墳時代前期の布留式期、時期の古いSD－29bが庄内式併行期頃に位置づけられる。

〔SD－31〕（第44図）

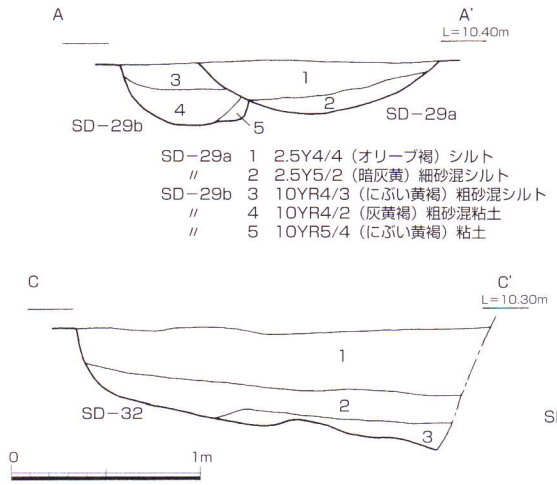
SD－31は、第17区の中央部、大畦畔の下部で検出したほぼ東西軸に主軸をとる溝である。上下2単位の掘削単位が確認でき、時期の新しいSD－31aが古墳時代後期頃に位置づけられるものの、下位にあたるSD－31bは遺物の出土が認められず第3遺構面に対応する遺構の可能性も考えられる。

〔SD－32・33〕（第44図、図版14）

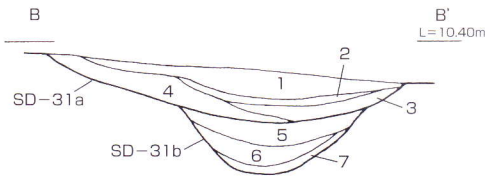
SD－32は、第17区の南端部で検出した幅2.2m以上の遺構で、他の溝と同じ東西軸に主軸をとることから溝と考えられ



第43図　遺物実測図12



SD−29a　1　2.5Y4/4（オリーブ褐）シルト
〃　2　2.5Y5/2（暗灰黄）細砂混シルト
SD−29b　3　10YR4/3（にぶい黄褐）粗砂混シルト
〃　4　10YR4/2（灰黄褐）粗砂混粘土
〃　5　10YR5/4（にぶい黄褐）粘土



SD−31a　1　10YR5/3（にぶい黄褐）粗砂混シルト（褐色粒を含む）
〃　2　2.5Y5/3（黄褐）粗砂混シルト
〃　3　2.5Y5/3（黄褐）細砂混粘土
〃　4　10YR5/4（にぶい黄褐）細砂混シルト
SD−31b　5　2.5Y5/3（黄褐）粗砂混シルト（褐色粒を含む）
〃　6　2.5Y4/2（暗灰黄）シルト混粗砂
〃　7　2.5Y5/4（黄褐）シルト混細砂

SD−32　1　2.5Y5/2（暗灰黄）粗砂混シルト
2　2.5Y4/3（オリーブ褐）シルト混粗砂
3　2.5Y5/2（暗灰黄）細砂混シルト（褐色粒を含む）

第44図　SD－29・31・32土層断面図

る。覆土は3単位に分けられ、最深部で60㎝の深さがある。遺物には、須恵器杯身（第43図119）があることから奈良時代の遺構と考えられ、土器以外に馬歯が出土している。また南半部をSD－32に切られるSD－33は、南北方向の溝とみられ、遺物から古墳時代後期に位置づけられる。

8. 第18～21区の調査（第45図、図版14下・15上）

第18～21区の現況は水田であり、耕作面の標高は、約10.80～10.85mである（第46図、写真10）。この地区の調査は、第20区及び第21区について、調査区幅が約1.2mと狭くなり、さらに東側にあたる既存水路からの湧水のため、第20区では中央部、第21区では南半部の壁面が大きく崩落し、文化振興課との協議の結果、残存部分の最低限度の調査に止めることとなった。遺構面は第17区の様相から第5b層上面及び第6a層上面とさらに下層の第6b層上面に遺構面が存在するものと考えられた。しかし、第18・19区において第5b層上面（標高10.00m前後）では遺構が検出されず、第20・21区についても第5b層に相当する土層が下層に落ち込む状況であったため遺構確認には至っていない。また第6a層上面の検出では、比較的遺構面が高い第18区北半部で古墳時代を中心とする東西方向の溝4条（SD－34～37）を検出した他は、第19区で時期不明のピット4基（P－222～225）を検出したに過ぎない。第19区での第6a層上面の標高は、第18区と比べ70㎝以上も低くなり、約9.25mとなる。また沖積作用によって堆積した第5層も5単位に細分が可能で、その厚さは90㎝程度となり、

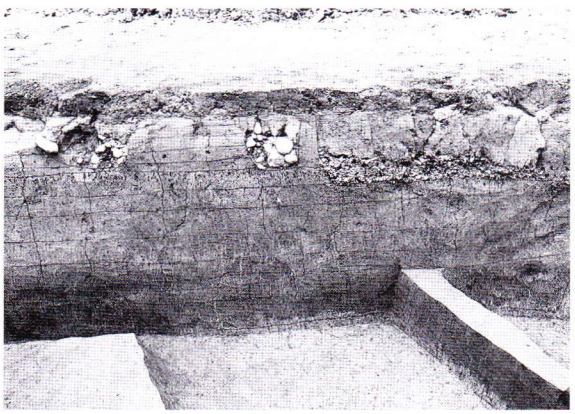
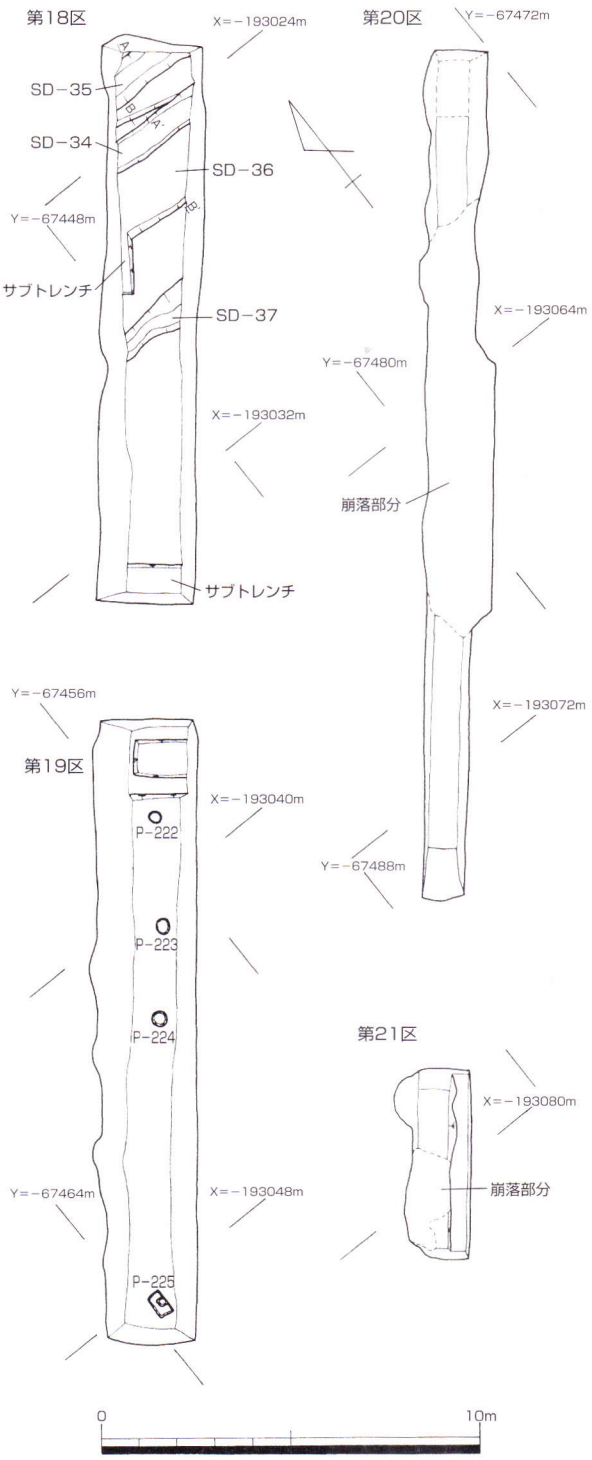
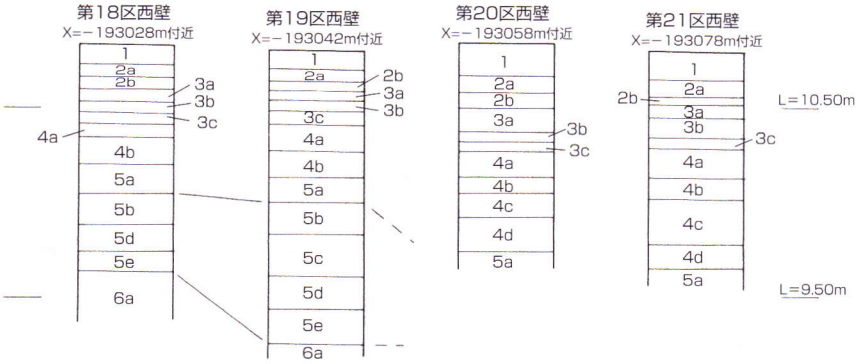


写真10　第18区西壁土層堆積状況
（X＝－193024m付近　南東から）



第45図　第18～21区遺構平面図



1　2.5Y4/1（黄灰）シルト混粗砂
2a　2.5Y5/3（黄褐）シルト混粗砂
2b　2.5Y6/3（にぶい黄）シルト混細砂
3a　2.5Y5/2（暗灰黄）シルト混粗砂
3b　2.5Y5/3（黄褐）シルト混粗砂
3c　2.5Y5/6（黄褐）粗砂混シルト
4a　2.5Y5/3（黄褐）粗砂混シルト（褐色粒を多く含む）
4b　2.5Y5/3（黄褐）粗砂混粘土
4c　2.5Y5/2（暗灰黄）粗砂混粘土
4d　2.5Y6/2（灰黄）粗砂混粘土
5a　2.5Y5/2（暗灰黄）粗砂混シルト
5b　2.5Y5/4（黄褐）粗砂混粘土
5c　2.5Y5/2（暗灰黄）粗砂混粘土
5d　2.5Y5/3（黄褐）粘土
5e　2.5Y4/2（暗灰黄）粘土
6a　10YR5/4（にぶい黄褐）シルト

第46図　第18～21区土層柱状模式図

下位層ほど粘質が強くなる。

遺物包含層から出土した遺物には、第19区の第５e層から出土した須恵器杯身（第47図121）があり、この層位の堆積が８世紀頃であると考えられる。

以下、主要な遺構を説明する。

〔SD－34～37〕（第48図、図版14）

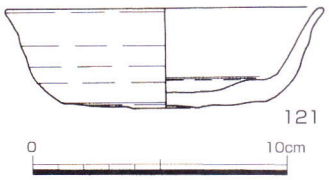
SD－34～37は、第18区北端部で検出したほぼ東西軸に主軸をとる溝である。この中で時期の判別が可能であるものは、SD－35で古墳時代後期頃と考えられる。

SD－35は当初１条の溝として掘削を開始したものが、２単位の掘削単位が確認できた。このことから、時期の新しいものをSD－35a、時期の古いものをSD－35bとして調査を行った。SD－35aは、幅約50cm、深さ10cm程度で灰黄褐色の粗砂混シルトの単層である。またSD－35bは幅約1.1m、深さ25cmで覆土は３単位に分けられる。

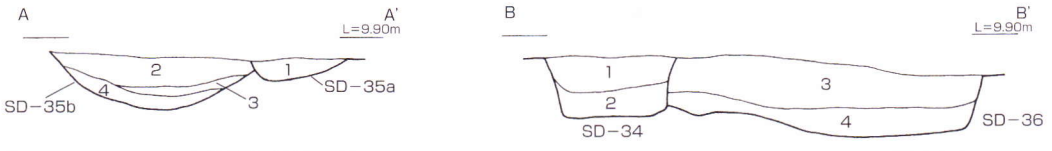
SD－34は、SD－35と重なりをもつもので、重なり合う溝の中では最も新しい時期のものである。この溝は、幅70cm、深さ30cm程度で、断面形が逆台形状を呈するものである。覆土は上下２単位に分けられる。

またSD－36は、北側肩部をSD－34によって削平されているため全体の規模は不明であるものの、幅1.6m以上、深さ40cm程度と比較的規模の大きなもので、覆土は２単位に分けられる。SD－34・36とも上位層がシルト質であるのに対し、下位層が粘土質となる。

SD－37はSD－36の南側で検出した溝で、幅50～90cm、深さ10～20cmで、底面が東側に向けて低くなる特徴をもつ。覆土は、灰オリーブ色粘土の単層である。



第47図　遺物実測図13



SD－35a　1　10YR4/2（灰黄褐）粗砂混シルト
SD－35b　2　10YR4/3（にぶい黄褐）粗砂混シルト
〃　3　2.5Y4/2（暗灰黄）粗砂
〃　4　2.5Y4/3（オリーブ褐）細砂混シルト

SD－34　1　10YR4/2（灰黄褐）粗砂混シルト
〃　2　10YR4/1（褐灰）粗砂混粘土
SD－36　3　2.5Y4/3（オリーブ褐）粗砂混シルト
〃　4　2.5Y4/2（暗灰黄）粗砂混粘土

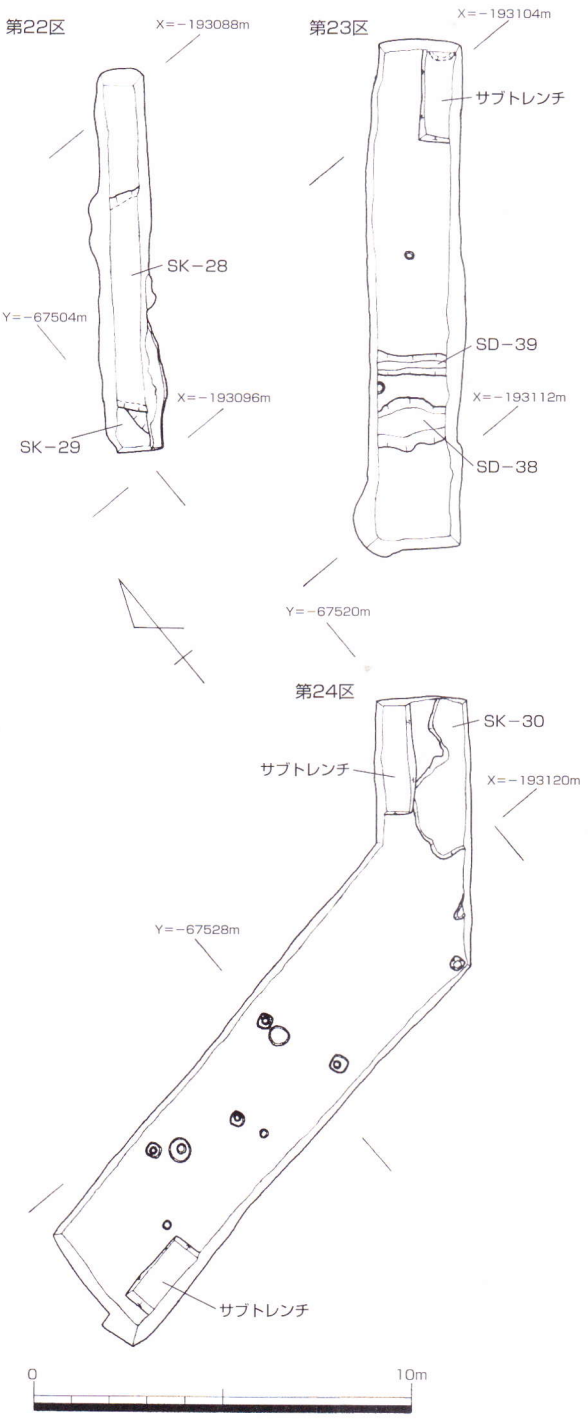
第48図　SD－34～36土層断面図

9. 第22～24区の調査（第49図、図版15下・16上）

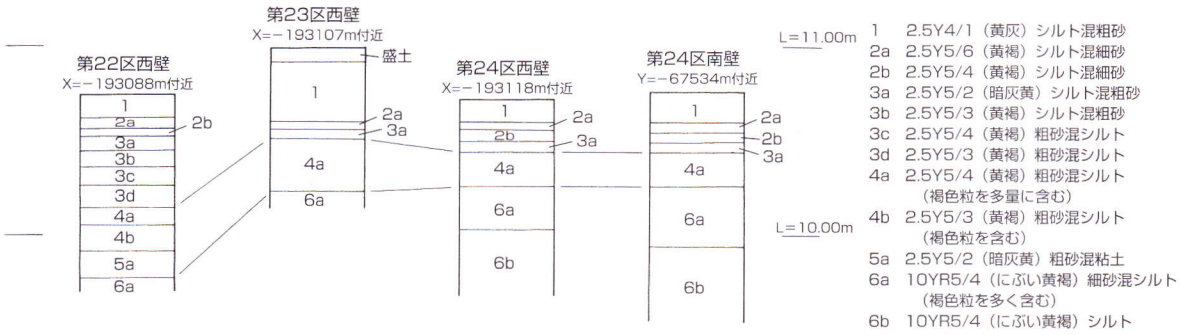
第22～24区の現況は第22・24区が水田で、耕作面の標高は、10.75m前後である（第50図）。また第23区が荒蕪地で、表土に5㎝程度の盛土が施されていて現地表面の標高は、約11.00mである。遺構面の様相は、これまでとは異なり第4a層上面と第6a層上面において遺構を確認した。第4a層上面の標高は、第22区で約10.15m、第23区で約10.50mとなり、急激に高くなる状況である。また、第6a層上面の高さもこの状況に比例し、北側微低地と南側微高地部の境界部にあたることが確認できた。第23区から第24区にかけては、第6a層上面の標高も10.25m前後でほぼ水平となり、黄褐色系の安定したシルト質土壌となる。

遺構は、第4a層上面の第1遺構面において第22区の大規模な土坑（SK－28）及び第24区の粘土採掘坑と考えられる江戸時代の土坑（SK－30）を検出した。また第6a層上面の第2遺構面では、第22区の時期不明の土坑（SK－29）、第23区の中世の範疇と考えられる溝2条（SD－38・39）の他、遺物の出土がほとんどなく時期判定が困難であるものの建物に伴うとみられる第24区のピット群がある。

遺構及び遺物包含層の遺物出土量は、これまでの微低地部と比較しても極めて少ない。しかし、さらに南側にあたる県センターの調査で確認されている居住域に向かって増加傾向になっていくものと考えられる。



第49図　第22～24区遺構平面図



第50図　第22～24区土層柱状模式図

以下、主要な遺構を説明する。

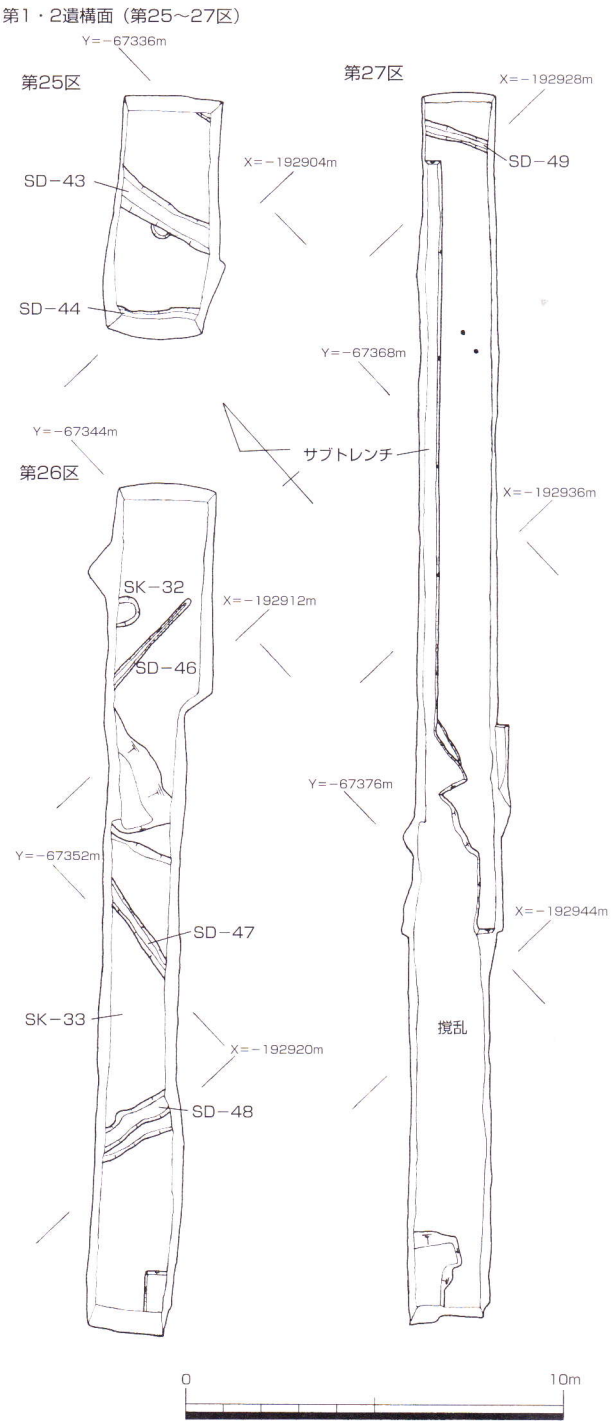
〔SK－28〕

SK－28は第22区で検出した幅6.0m以上、調査区幅が狭小であったため全掘ができなかったものの深さ1.0m以上で擂鉢状に落ち込む大規模な土坑である。遺物の出土が少なく時期判定は困難であるものの室町時代の可能性が高いと考えられる。

10. 第25～27区の調査（第51・52図、図版16～18）

第25～27区の現況は大規模に盛土が行われた荒蕪地であり、その対処等の協議のため第24区までの次数と異なる第５次調査として実施したものである。位置的には第15区と第16区間にあたる。調査は上部盛土の大半を重機によって取り除き、旧耕作土直上から調査区を設定して掘削を行った。旧耕作面の標高は、11.10～11.20m程度である（第53図、写真11・12）。遺構面の様相は、以北の第14・15区の状況とは若干異なり、第５b層上面が第１遺構面として確認できた。この状況は第16区以南と同様である。第２遺構面以下の状況は、第６a層上面及び第６b層上面においてそれぞれ遺構を検出し、第２・３遺構面として調査を行った。そして、西壁面に沿って設定した下層確認のためのサブトレンチの状況から第６c層上面に遺構を確認し、できる範囲の拡幅を行い第６c層上面における第４遺構面の調査を行った。各遺構面とも検出の標高は、第25区から第27区に向かって緩やかに上昇する傾向にある。第６c層以下の状況もサブトレンチによって確認したが遺物の出土は認められなかった。なお、第27区のY＝－67376mより南西側は大規模な撹乱が存在し、南端部で深さ確認を行ったものの遺構面よりも深く掘削されている状況であった。

遺構及び遺物包含層の遺物出土量は、第14・15区の状況と類似し、極めて減少傾向にある。この中で遺物包含層から出土した遺物に、第27区の第６a層から出土した弥生土器

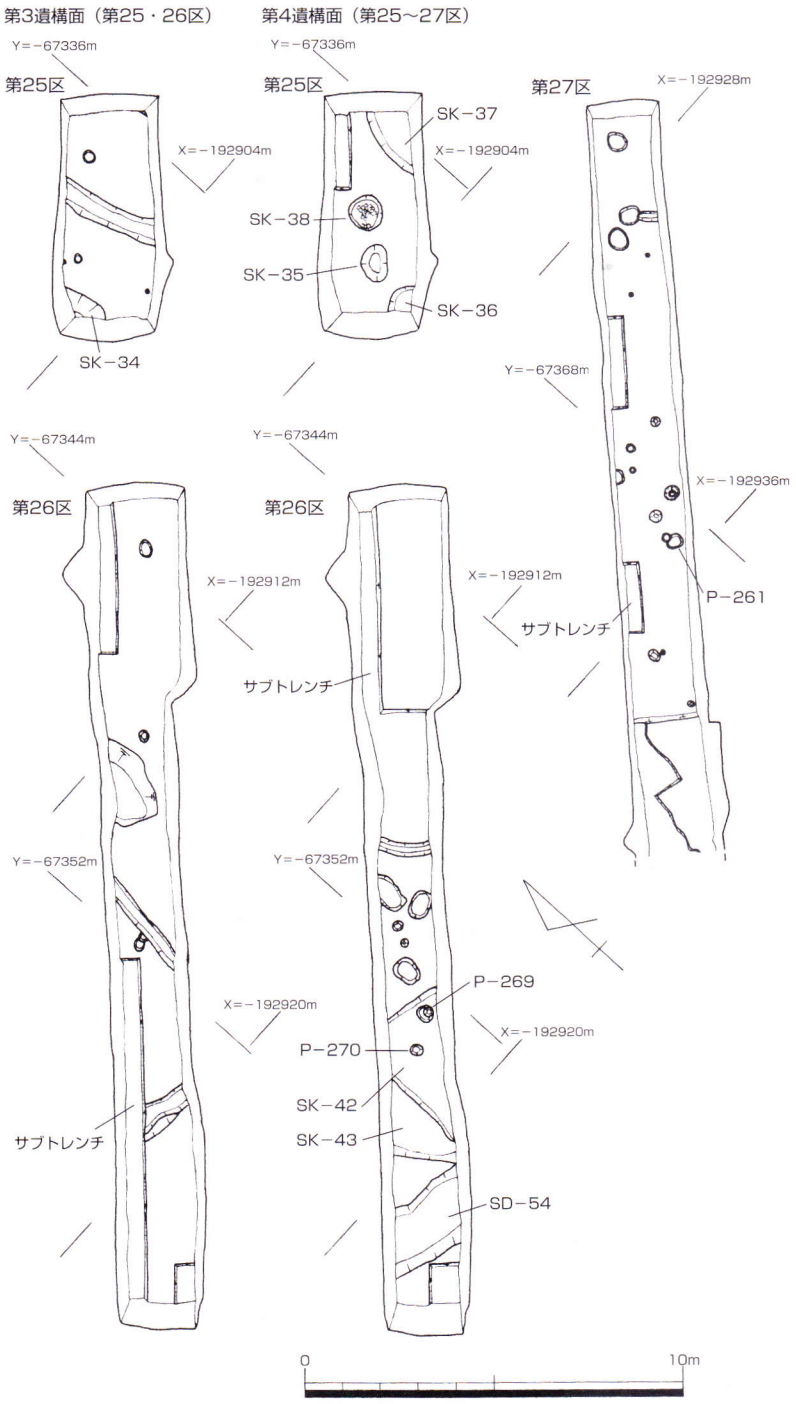


第51図　第25～27区第１・２遺構面遺構平面図

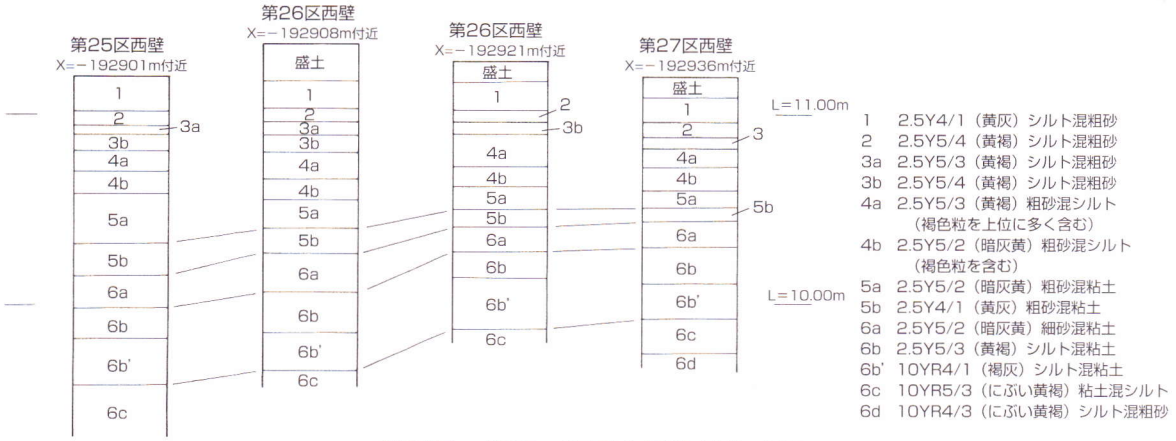
高杯（第54図124）があり、第６a層の堆積時期が弥生時代後期であることを示すものとして注目できる。

遺構は、第５b層上面の第１遺構面において第25区の溝２条（SD－43・44）を検出した。これらは微細な遺物のみの出土であるため時期確認には至っていない。また第６a層上面の第２遺構面では、第26区の溝（SD－46）や大規模な土坑（SK－33）、第27区の溝（SD－49）などがある。この中で時期が明確なものはSD－49で古墳時代の範疇と考えられる。第６b層上面の第３遺構面では、第25区及び第26区のみにおいて遺構が検出された。第25区では土坑１基（SK－34）とピット４基、第26区ではピット４基をそれぞれ検出したが、いずれも時期判定を行える遺物等の出土は認められなかった。さらに、下層の第６c層上面における第４遺構面では、比較的多くの遺構を確認した。第25区では焼土を多量に含む土坑（SK－38）の他、土坑３基（SK－35～37）を検出し、第26区では大規模な土坑２基（SK－42・43）、溝状遺構（SD－54）の他土坑やピットを、また第27区ではピット多数を確認した。このように、第４遺構面では多数の遺構を検出したものの遺物の出土量は極めて少なく、土器を確認した遺構は、第26区のSK－42、SD－54、P－270と 第27区 のP－261だけである。出土土器はすべて縄文土器で、図示できたものはP－270から出土した深鉢の口縁部２点（第54図122・123）のみである。この深鉢はともに外面に条痕が施されたもので、縄文時代晩期の滋賀里式に併行するものと考えられる。

以下、主要な遺構を説明する。



第52図　第25～27区第３・４遺構面遺構平面図



第53図　第25～27区土層柱状模式図

写真11　第25区南壁土層堆積状況
（Y＝－67340m付近　北東から）

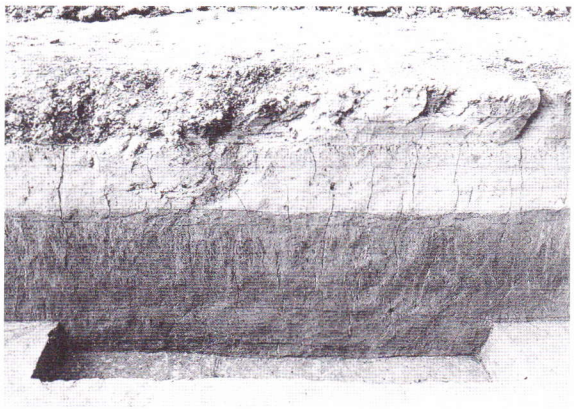


写真12　第27区西壁土層堆積状況
（X＝－192931m付近　南東から）

〔SK－33〕

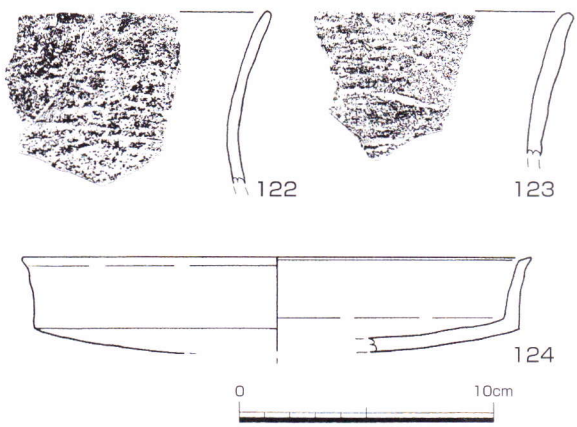
SK－33は第26区の第２遺構面で検出した土坑である。南北長8.0m以上で深さ20㎝前後である。遺構底面において東西方向の溝（SD－48）及び南北方向の溝（SD－47）を検出し、遺構の方向性などからSK－33に伴う溝の可能性も考えられる。

〔SK－38〕（図版16）

SK－38は第25区の第４遺構面で検出した直径85㎝前後、深さ25㎝程度の円形土坑で、底面は焼土が塊状になる状況であった。このことは、長期間被熱を帯びた状態であると考えられる。覆土は、焼土を多く含む灰黄褐色の粗砂混粘土で、土器は含まれていなかった。遺構面の時期からみて縄文時代晩期頃と考えられる。

〔SK－42〕（図版17）

SK－42は第26区の第４遺構面で検出した方形の土坑である。東西2.5m以上、南北3.5m以上の規模をもち、深さ約15㎝程度で、灰黄褐色の粗砂混粘土の単層である。遺構底面においてピット２基（P－269・270）を検出した。



第54図　遺物実測図14

第２節　第６次調査成果

第６次調査は、大規模店舗建設に先立つ本発掘調査であり、開発範囲のうち浄化槽及び調整池設置部分を対象として、第28～31区の合計４カ所の調査区を設けて行った（第４図、図版19）。

以下、第28・29区は調査区ごとに基本層序及び検出した遺構と遺物について説明し、第30・31区については調査区が隣接しており基本層序が共通すること、また遺構の連続性を考慮し便宜上まとめて説明する。

１．第28区の調査（第56図、図版20）

本調査区の現況は、荒蕪地であり現代の耕作土（第１層）上部には造成土が厚く堆積している。現地表面の標高は11.80～12.00mを測り、また第１層上面では11.35m前後を測る（第55図、写真13）。

第１層以下の基本層序については、江戸時代の耕作土と考えられる第２層、また室町時代の耕作土と考えられる第３層が堆積している。基本層序の基準層となる第４層は、褐色の鉄分粒を含む鎌倉時代の耕作土であり２単位に細分できる。その下位層には、平安時代の耕作土と考えられる第５層が堆積している。これらの各堆積層は水平に堆積していることから、調査地周辺が長期にわたり耕作地として利用されてきた可能性がある。次に第６層は３単位に細分ができるもので、それぞれ南西に向かって厚く堆積する。遺構面は第６a層上面（第１遺構面）及び第６c層上面（第２遺構面）の合計２面を確認し、その標高は前者が10.65m前後、後者が10.25～10.40mを測り南西に向かって低く傾斜する。

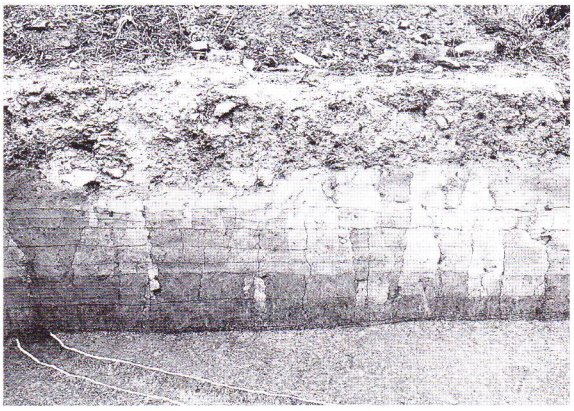


写真13　第28区北壁土層堆積状況
（Y＝－67397m付近　南から）

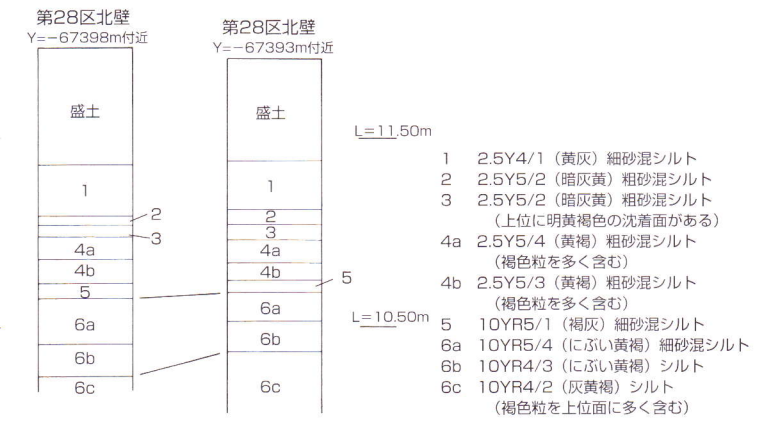
以下、遺構面ごとに主な遺構について説明する。

（１）第１遺構面の調査

第１遺構面では、土坑２基、ピット５基を検出した。これらのうちSK－51及びP－276は平安時代の遺構であり、その他の遺構については、出土遺物が細片のため時期判別は困難であった。

〔SK－51〕

SK－51は、調査区の北東隅部において検出したもので、遺構覆土は厚さ最大20㎝を測るにぶい黄褐色の粗砂混シルトであり、平安時代の土師器細片などが含まれている。遺構底面の状況は、緩やかに落ち込んだ後、ほぼ水平である。この土坑と方向性や遺構覆土、また底面の状況が類似するものとして、調査区の南西隅で検出したSK－52がある。これらの遺構は、検出状況から水田となる可能性が高い。



第55図　第28区土層柱状模式図

（2）第2遺構面の調査

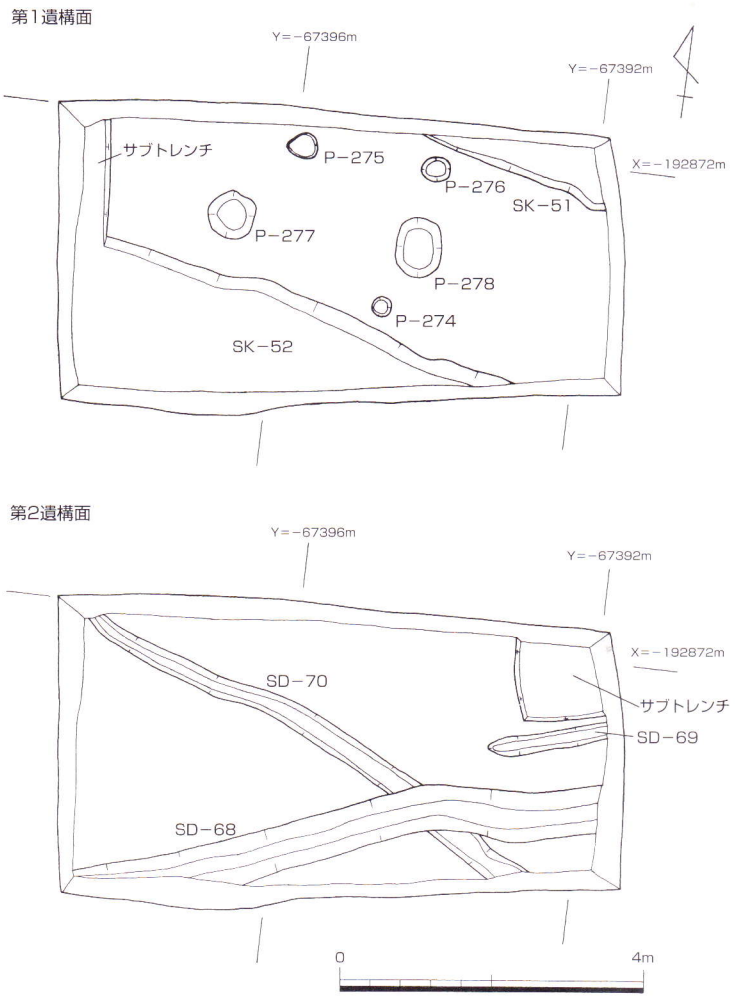
第2遺構面では、溝3条を検出した。これらの溝は、第6c層上面において検出したことから、層位的に判断して縄文時代のものと考えられる。ただし、遺物が出土しなかったため詳細は不明である。

〔SD－70〕

SD－70は、調査区を北西から南東方向に横切る溝で幅20～40cm、深さは7.5cm前後を測り、その主軸はN－65°－Wである。覆土は灰黄褐色粗砂混シルトの単一層である。この溝の底面は、約3cmの高低差をもって南から北に向かって低く傾斜する。

〔SD－68〕

SD－68は、調査区の南半部を蛇行しながら東西方向に横切る溝で幅56～68cm、深さ20～24cmを測り、その主軸はN－75°－Eである。覆土は、にぶい黄褐色細砂混シルトの単一層である。この溝の底面は、約8cmの高低差をもって東から西に低く傾斜する。またこの溝は、遺構の重複関係から、SD－70に後出するものである。



第56図　第28区第1・2遺構面遺構平面図

2．第29区の調査（第58図、図版21）

本調査区の現況は水田であり、現地表面の標高は10.70～10.80mを測る（第57図、写真14）。現耕作土（第1層）以下の基本層序については、部分的に土質及び土色などが異なるものの、褐色の鉄分粒を多く含むことを特徴とする第4層及び、黄褐色のシルト層である第6層を基準として、堆積の前後関係は第28区の様相と共通する。遺構面は、第6a層上面（第1遺構面）及び第6c層上面（第2遺構面）の合計2面を確認し、その標高は前者が9.90～9.98m、後者が9.57～9.67mを測り、ともに北東から南西に向かって低く傾斜する。

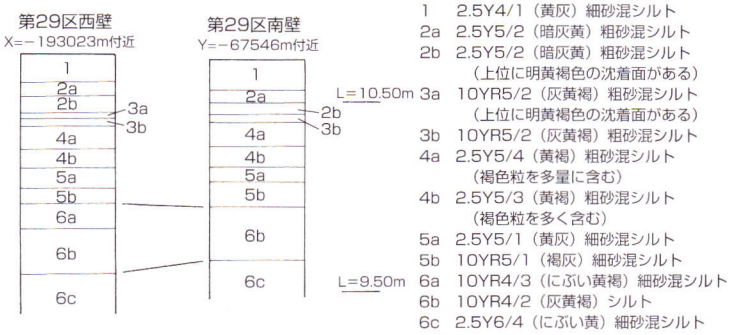
写真14　第29区南壁土層堆積状況
（Y＝－67547m付近　北から）

以下、遺構面ごとに主な遺構及び遺物について

説明する。

（1）第1遺構面の調査

第1遺構面では、溝1条、土坑5基、ピット3基を検出した。これらのうちSK－46・47及びSD－55は、出土遺物から平安時代のものである。その他の遺構については、出土遺物が細片のため時期判別は困難であった。



第57図　第29区土層柱状模式図

〔SK－46〕

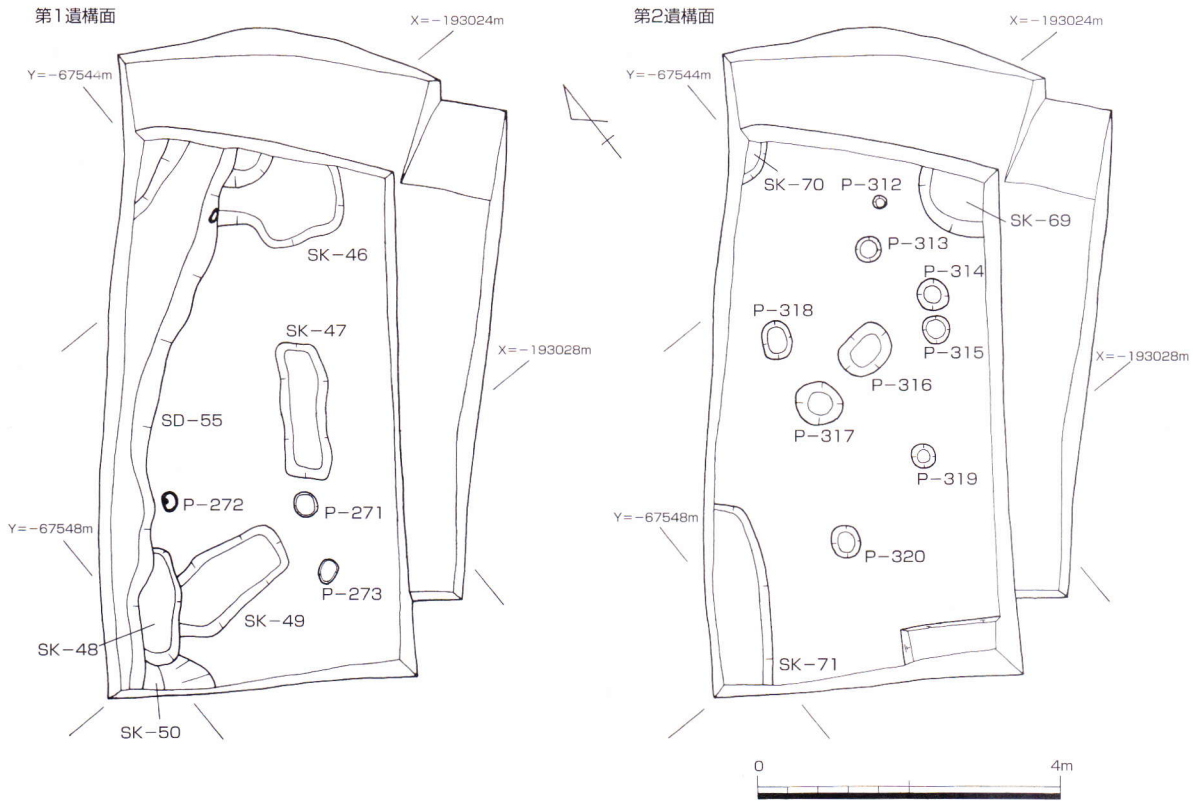
SK－46は、調査区の北壁際において検出した不定形な土坑で、南北1.2m以上、東西1.7m以上、深さは最深部で5.8㎝を測る。また遺構底面の状況は、北西に向かって緩やかに下降した後、さらに落ち込むものである。覆土は、暗灰黄色粗砂混シルトの単一層であり、最深部から口縁部に1条の稚拙な波状文を施した須恵器甕（第59図125）が出土している。

遺構の埋没時期は、出土遺物から平安時代中期とみられる。

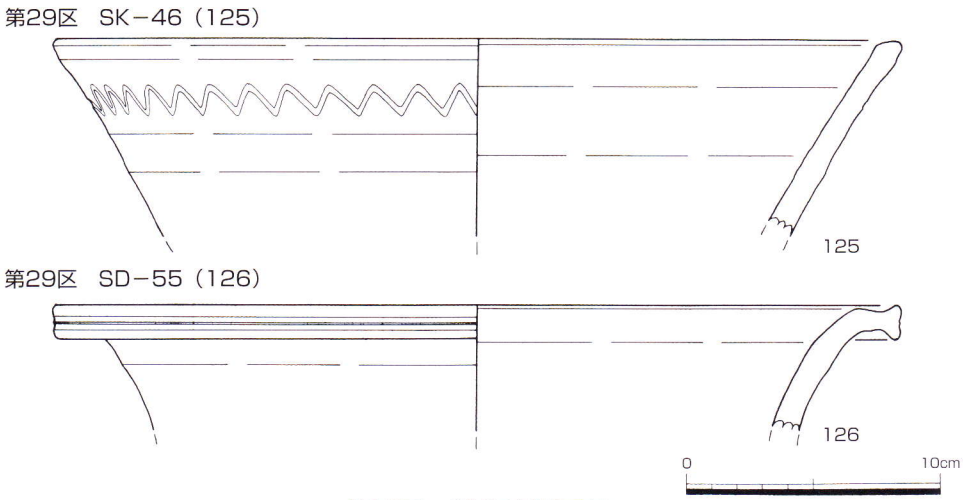
〔SD－55〕

SD－55は、調査区の西壁際に沿って緩やかに弧を描きながら北東方向へと延びるもので、幅0.92～1.20m、深さは最深部で約40㎝を測る。また覆土は3単位に細分が可能であり、第1層は灰黄褐色粗砂混シルト、第2層は暗灰黄色粗砂混シルト、第3層は黄灰色細砂混シルトである。

遺構の埋没時期は、覆土内から黒色土器A類椀や中世土師器の他、口縁部が水平方向に外反する



第58図　第29区第1・2遺構面遺構平面図



第59図　遺物実測図15

奈良時代から平安時代の須恵器甕（第59図126）が出土しており、またSK－46が埋没した後に掘削されていることから平安時代中期以降から後期までのものと考えられる。

（2）第2遺構面の調査

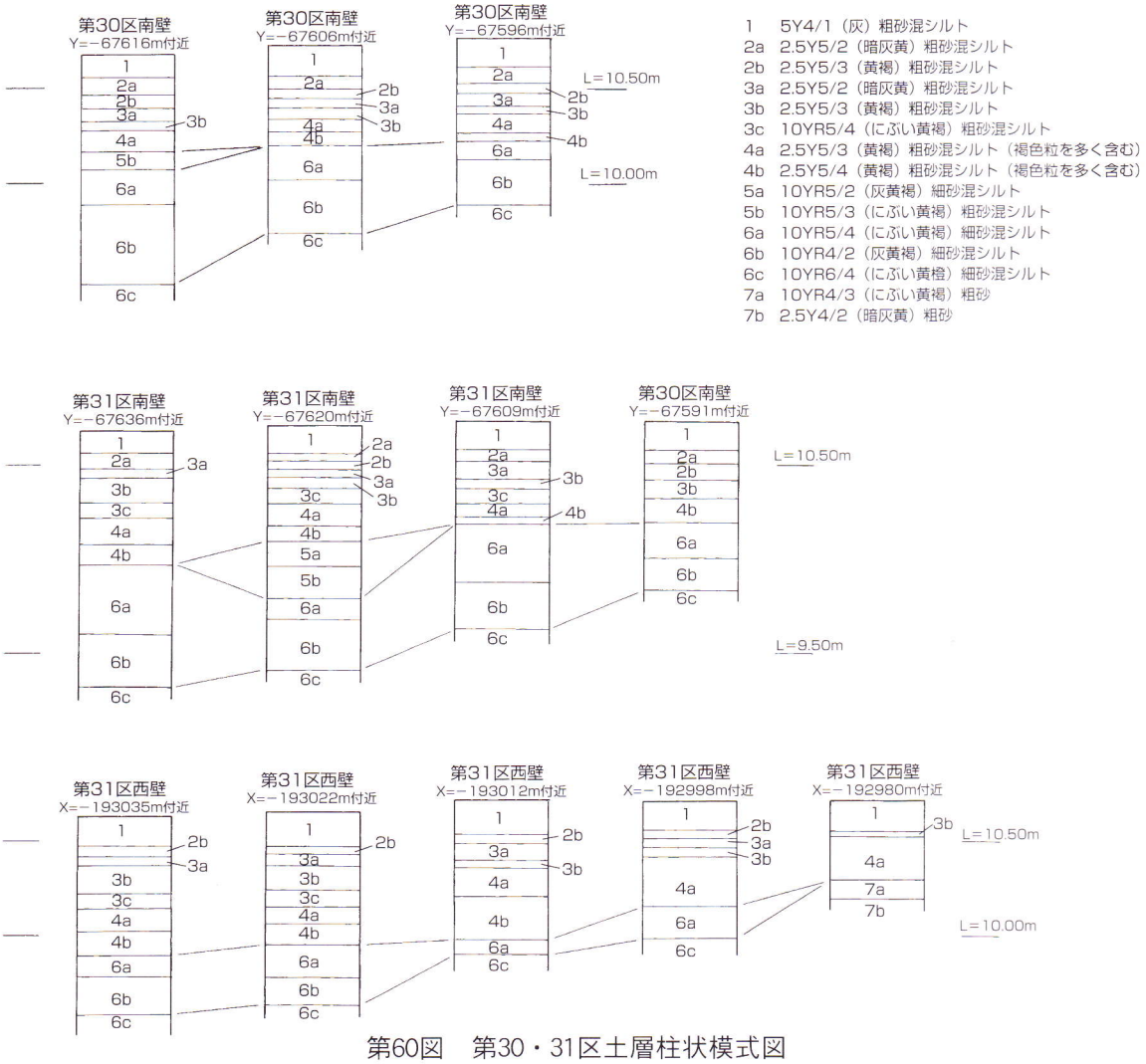
第2遺構面では、土坑3基、ピット9基を検出した。これらの遺構覆土は、第28区と同様にすべて第6c層上面において検出したものである。よって、遺構の時期は層位的に判断して縄文時代のものとなる。特に、SK－71からは縄文土器の細片が1点出土した。

3．第30・31区の調査（第61図、図版22）

調査区の現況は水田である。現地表面の標高は第30区で10.70m前後、第31区で10.65m前後、また第31区北では10.75m前後を測る（第60図、図版35・36）。このことから調査区周辺の現地表面は、北から南に向かって緩やかに低く傾斜するものである。また基本層序については、部分的に土質・土色などが異なるものの、褐色の鉄分粒を多く含むことを特徴とする第4層及び、黄褐色のシルト層である第6層を基準として、堆積の前後関係は第28・29区の様相と共通する。ただし、平安時代の堆積層と考えられる第5層は、第30・31区のY＝－67616mから　Y＝－67632m付近の範囲でのみ堆積し、第30区のY＝－67616m付近以東や第31区の東部及び西部、また第31区北の全域では第4層下が第6層上面となる。このことは、調査地周辺における平安時代以前の微地形として、第5層の堆積する範囲が微低地であり、それ以外の地域が微高地であったことを示すものである。よって第31区における第5層の性格としては、微低地部に堆積した遺物包含層と判断した。

これら第4層以下の堆積層から出土した遺物には、まず第4層出土遺物として、須恵器（第62図127～135）、土師器（136・137）、石器（138～140）などがある。そのうち127は飛鳥時代の杯G蓋であり、128～130が飛鳥時代から奈良時代の杯B、131が飛鳥時代の杯Gであり、132が高杯脚部、133が鉢Fの底部、134が奈良墳時代の甕、135が壺Lである。また136は杯A、137がⅢAであり、これらはともに奈良時代のものである。石器では、138が砂岩製砥石であり、139・140がサヌカイト製の打製石鏃である。

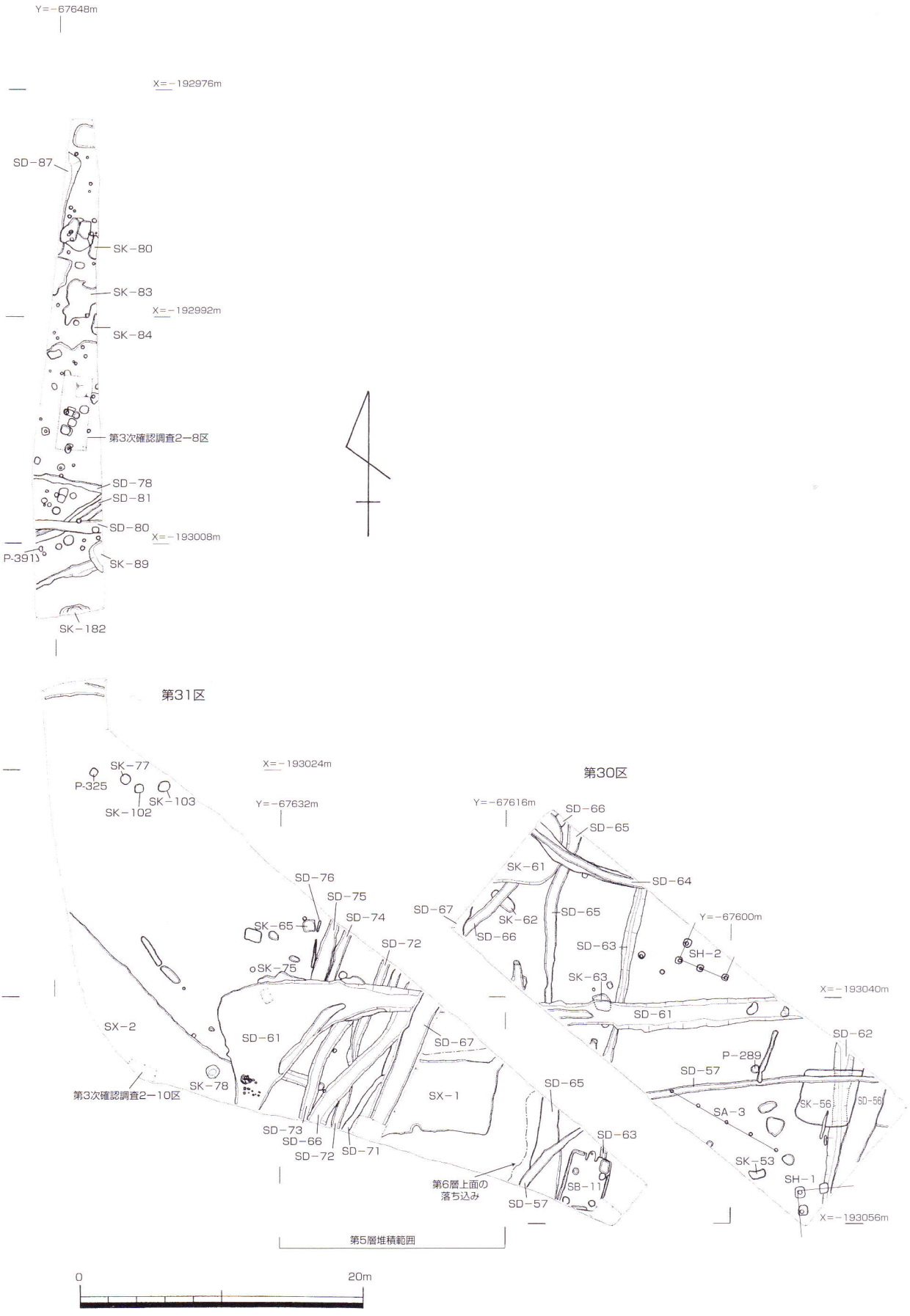
次に第5層から出土した遺物には、須恵器（第63図141～165）や土師器（166～168）の他、瓦（第64図169・170）などがある。そのうち141・142が飛鳥Ⅲ～Ⅳ期の蓋で、142が杯G蓋である。ま



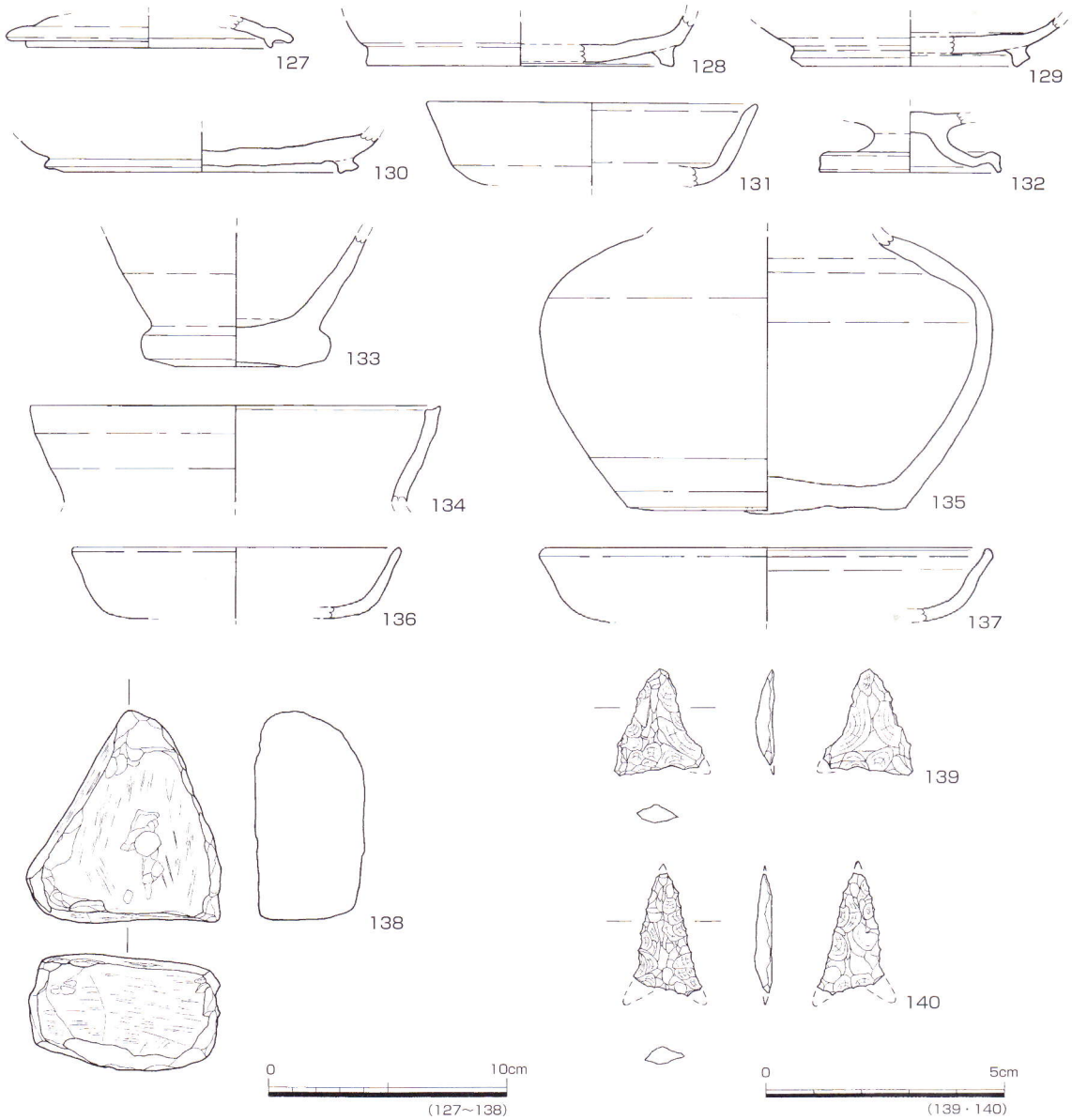
第60図　第30・31区土層柱状模式図

た143～145は杯B蓋で、143・145が飛鳥Ⅳ期、144が飛鳥Ⅴ期のものであり、146は杯B蓋もしくはⅢB蓋と考えられる。147～149は杯Hであり、147がTK－209型式、148が飛鳥Ⅰ期、149が飛鳥Ⅱ期のものである。さらに150は飛鳥Ⅲ期の杯Gであり、151が飛鳥時代の杯Gもしくは杯Aである。その他、152～157は飛鳥時代の杯Bであり、そのうち154は壺底部の可能性があり、157がやや新相を示すものである。その他、158は高杯脚部、159は細頸壺の頸部、160は壺の底部、161・162が甕の口縁部であり、163は飛鳥Ⅴ期の甕または甑、164は円孔を穿つ壺K脚部である。さらに165は長方形透かしをもつ壺または鉢の脚部と考えられる。土師器では、166が杯B蓋、167が平城Ⅱ期の杯A、168が奈良時代のものと考えられる甕Bである。第5層出土遺物のうち注目するべきものには、奈良時代の瓦（169・170）があり、調査地周辺に瓦葺き建物が存在した可能性がある。第5層の堆積時期については、これらの遺物の他、平安時代の土師器、灰釉陶器（図版54 321）、黒色土器、瓦器なども一定量含むことから平安時代とみられる。また先述した飛鳥時代から奈良時代の遺物は、周辺の遺構覆土から第5層が堆積する微低地内部に流れ込んだものと考えられる。

最後に第6層から出土した遺物としては、縄文土器（第65図171～173）や石器（174～180）がある。そのうち、171・172は縄文時代晩期の深鉢である。171は口頸部に半截竹管状工具によるC字爪形文を施す晩期中葉のもので、172はいわゆる晩期後葉の突帯文土器である。その他、石器では174



第61図　第30・31区第１遺構面遺構平面図

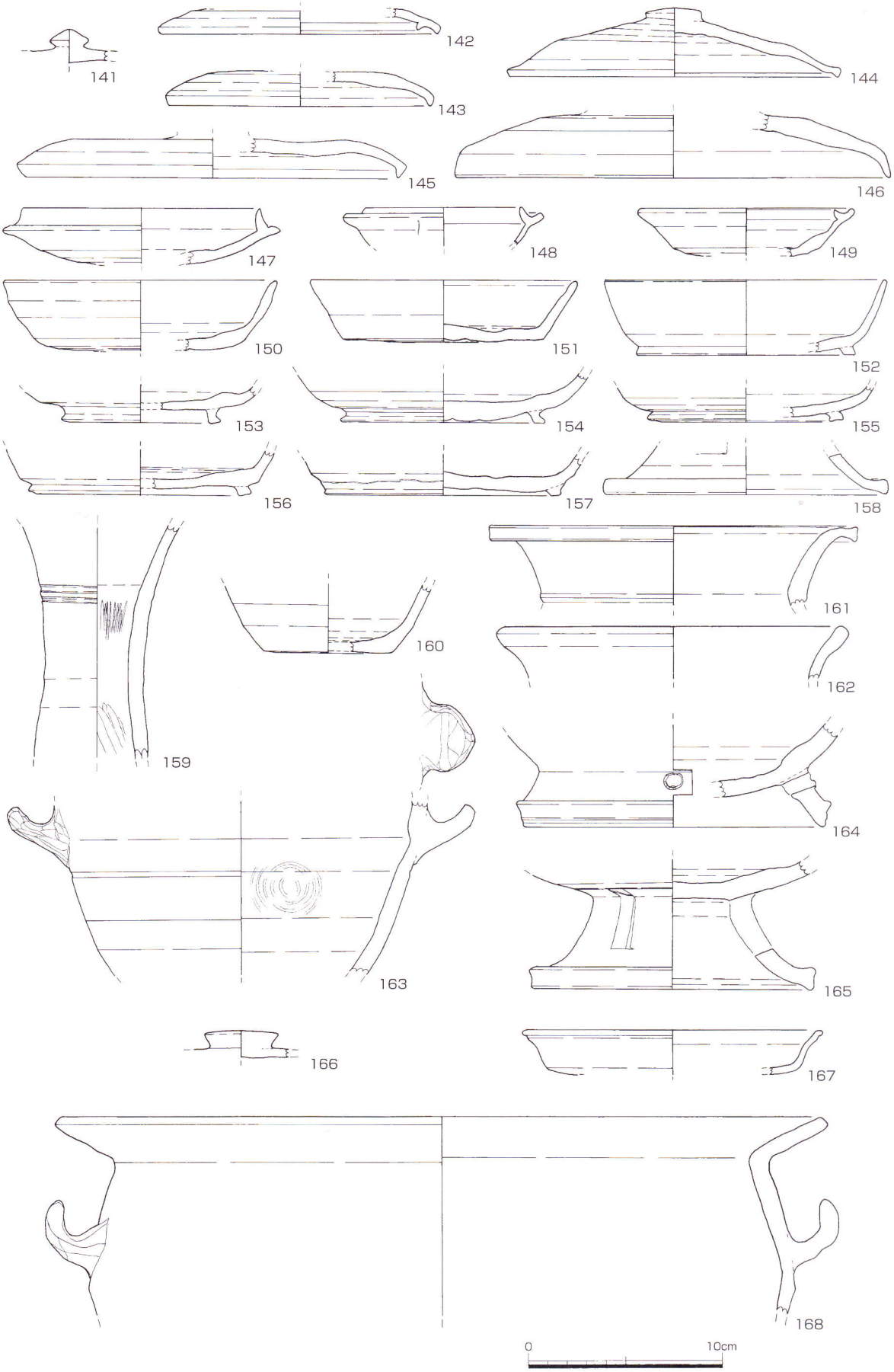


第62図　遺物実測図16

～178がサヌカイト製の打製石器で、174がスクレイパー、175・176が石鏃、177・178が石錐である。また179・180が砂岩製の磨製石斧であり、179が石斧として使用した後、叩石に転用されたもので、180は石斧の未製品と考えられる。以上の遺物から、第６層の堆積時期は、縄文時代晩期以降と考えられる。

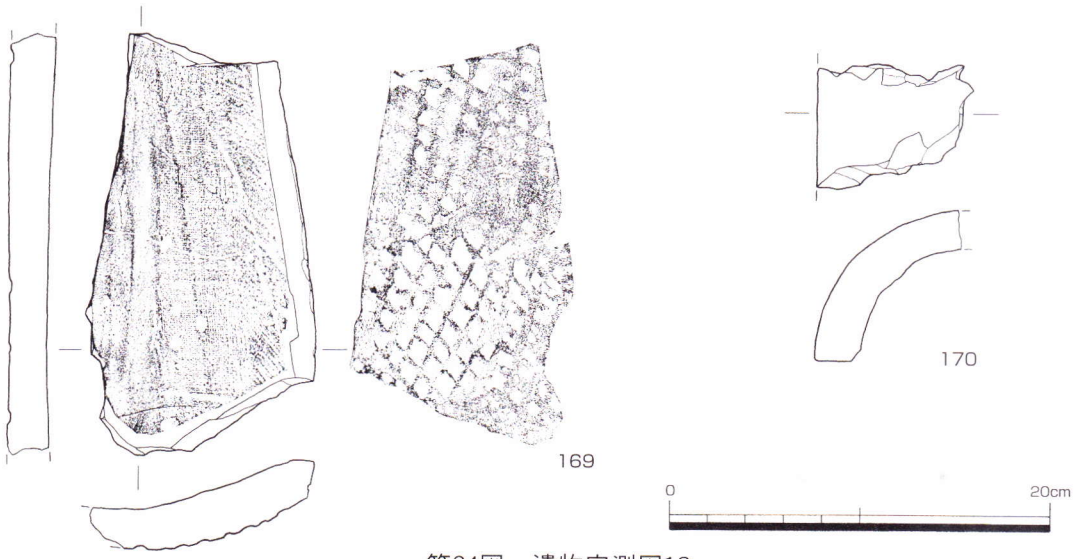
遺構面は、第28・29区と同様に合計２面あり、第１遺構面が古墳時代前期から鎌倉時代にかけての遺構を検出した第６a層上面である。ただし、第５層の堆積する範囲では、鎌倉時代の遺構がその上面から掘削されている。これは第５層の堆積が鎌倉時代以前であることを示している。第２遺構面は、縄文時代晩期中葉の遺構を検出した第６c層上面である。また第31区北では第４層上面から掘削された江戸時代の粘土採掘坑を多数検出した。

遺構検出面の標高は、第６a層上面で9.75～10.40m、第６c層上面で9.20～10.20mを測る。この遺構検出面の高低差は、第５層の堆積の有無からみた微地形の高低差に対応し、総じて各遺構面は第31区中央部の微低地に向かって0.6～1.0m程度の高低差で低く落ち込む状況となる。

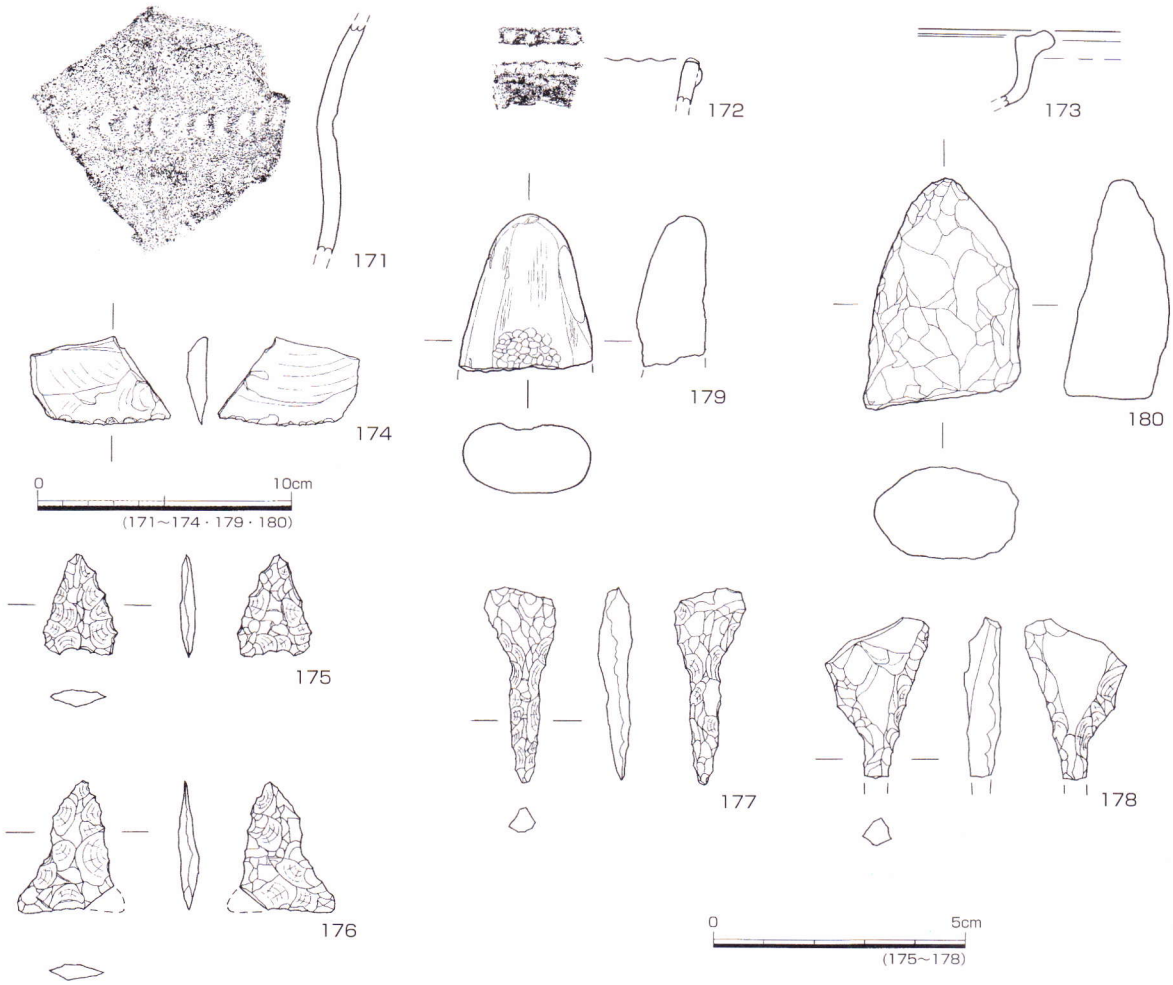


第63図　遺物実測図17

以下、主な遺構と遺物について説明する。ただし、第31区は用水路によって南北に分断されている。よって、遺構の連続性等を考慮し第30区と第31区の南側をまとめて記述する。また第31区の北側については別項を設け記述する。



第64図　遺物実測図18



第65図　遺物実測図19

（1）第30・31区第1遺構面の調査（第67図、図版22・23上）

第1遺構面では、古墳時代前期の溝や土坑、中期以降の溝や土坑、飛鳥時代の竪穴住居や掘立柱建物及び溝、奈良時代の溝や土坑及びピット、平安時代の溝、鎌倉時代の柵や溝及び土坑など多数の遺構を検出した。そのうち古墳時代では、前期の溝（SD－62・63）及び土坑（SK－56）、中期以降では溝（SD－65、第73図・図版24）及びサヌカイト製の打製石鏃（図版54 323）が出土した土坑（SK－59、図版24）、後期のものとして土坑（SK－78）がある。また飛鳥時代では、前期から中期にかけての竪穴住居（SB－11）や掘立柱建物（SH－1・2）の他、溝（SD－66・71～76）や土坑（SK－62・63・75）がある。奈良時代では、中期の溝（SD－61）の他、土坑（SK－61・77・102・103、第61図）やピット（P－289・325）、落ち込み（SX－1・2）がある。さらに平安時代では溝（SD－57・56・64）、鎌倉時代では柵（SA－3）の他、溝（SD－67）や土坑（SK－53・65）がある。

検出遺構の時期別傾向としては、古墳時代、平安時代、鎌倉時代の遺構が比較的少なく、主体となるのは飛鳥時代から奈良時代にかけての遺構である。また分布傾向は、古墳時代の遺構が主に微低地部の東西に分布するのに対し、飛鳥時代から奈良時代及び鎌倉時代の遺構群はSD－61を除き、微低地部に溝群が集中して掘削され、その東西に広がる微高地部に竪穴住居や掘立柱建物及び土坑、柵などが分布する。これは言い換えれば、飛鳥時代から奈良時代及び鎌倉時代にかけて掘削された溝群は、微低地という地形を選択して掘削されたことを示しており、このような溝の性格としては排水を目的とした水路となる可能性がある。また古墳時代の溝は、これらの溝群と同じ方向性を示すものの、微高地部に掘削されたもの（SD－62・63）や微高地の縁辺部に掘削されたもの（SD－65）であることから、集落や居住域の区画を目的としたものと考えられる。以下、古い時期のものから主な遺構について説明する。

〔SD－62・63〕（第73図、図版24）

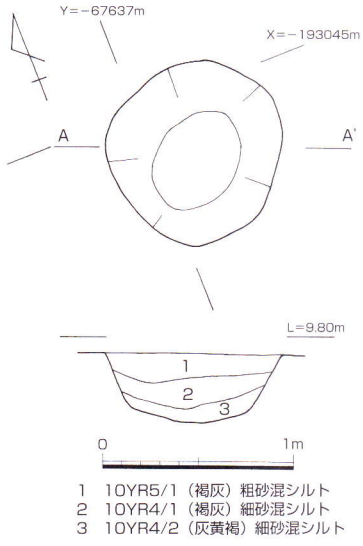
第30区の東端部で検出したSD－62及び第30区の中央部西側において検出したSD－63は、ともに古墳時代初頭の断面が「V」字状を呈する溝で、前者が幅1.34m、深さ70cm前後、後者が幅45～95cm、深さ54cm前後を測る。その方向性は、ともに南北に直線的でN－8°－Eである。これらの時期は、出土遺物から庄内式併行期とみられ、SD－62からサヌカイト製の打製石鏃（図版54 322）が出土している。

〔SK－56〕（第67図）

第30区の東端部で検出したSK－56は、東西6.6m以上、南北約4mを測る隅丸長方形の土坑である。遺構覆土は灰黄褐色粗砂混シルトの単一層であり、厚さ10cm前後と比較的浅いものである。遺構の時期は、覆土内に布留式併行期に位置付けられる遺物が含まれることから古墳時代前期のものである。

〔SK－78〕（第66図、図版24）

第31区の中央部西側において検出したSK－78は、直径90～95cm、深さ36cmを測る不正円形の土坑である。遺構の時期は、覆土内に含まれる遺物から古墳時代後期のものと考えられる。またこ

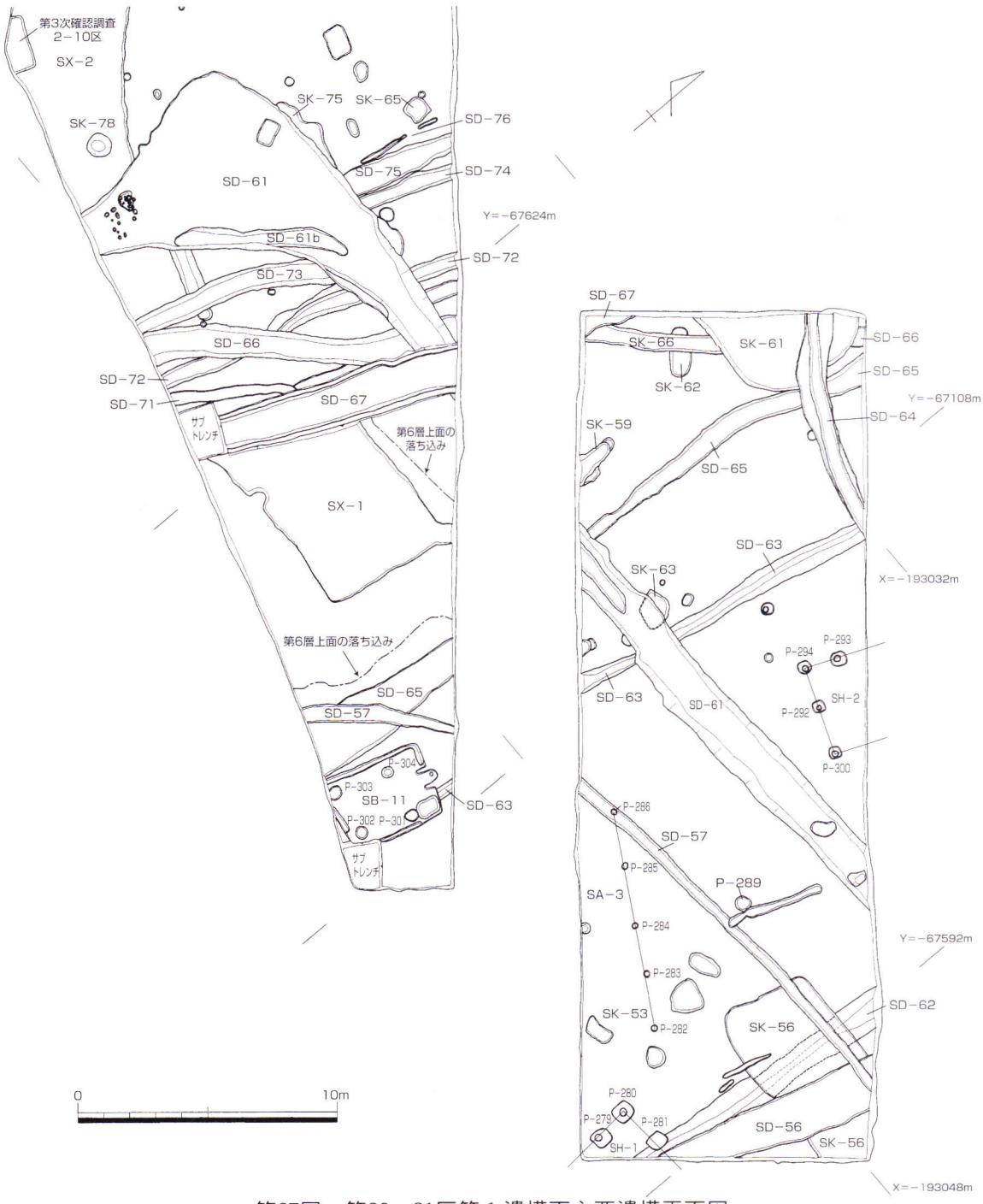


第66図　SK－78遺構平面図び土層断面図

の土坑は、検出地点が第31区の微低地部であることから素掘りの井戸となる可能性がある。

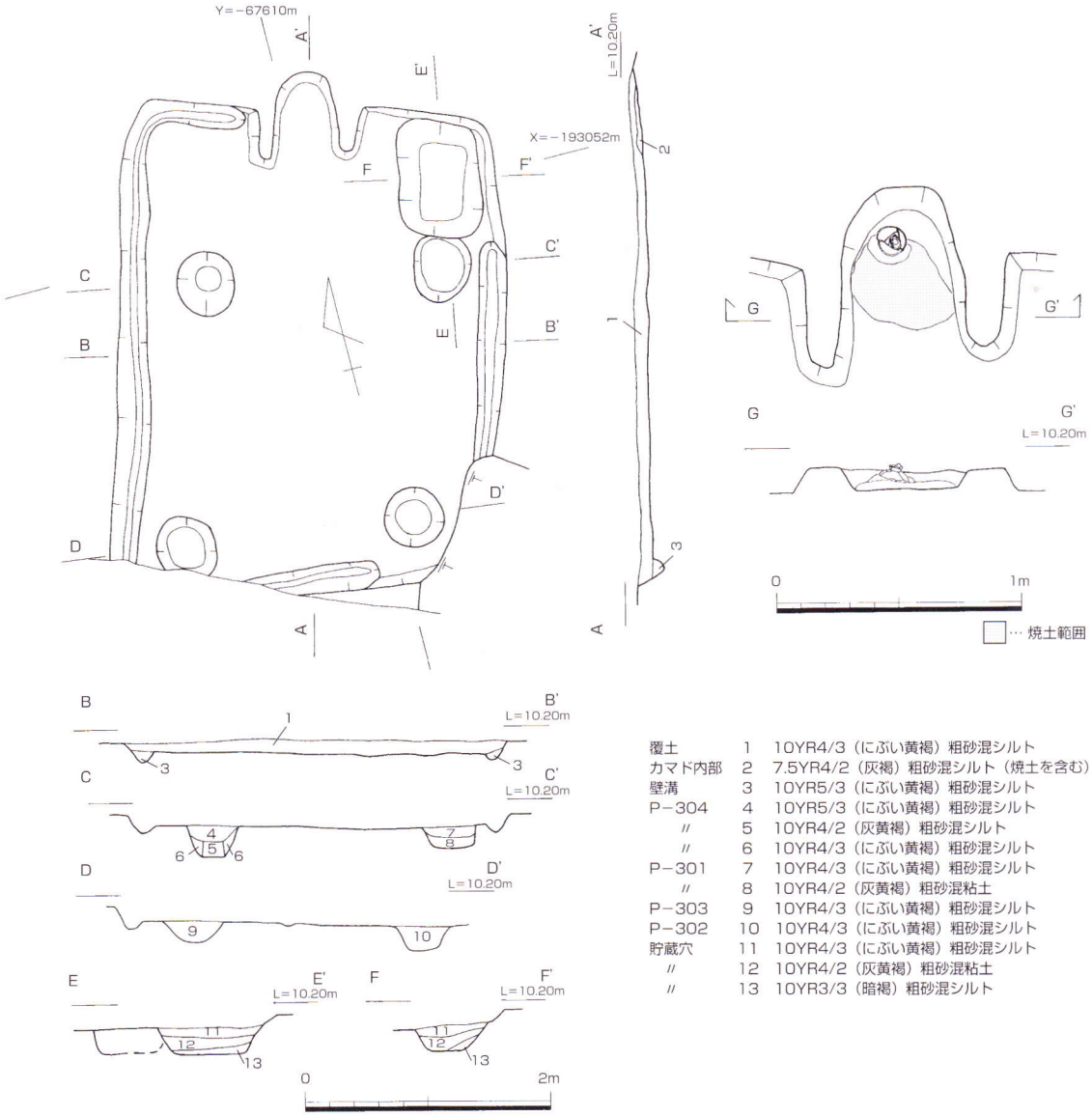
〔SB－11〕（第68図、図版25・26）

第31区の東端において検出したSB－11は、長辺3.5～4.0m、短辺3.8mを測るやや歪な長方形の竪穴住居であり、その主軸はN－15°－Eである。この住居の構造は、四壁に壁溝をめぐらし、四隅に主柱穴をもつ４本柱建物であり、北辺中央部には造り付けのカマドが構築されている。また住居の北東隅部、カマドの右側に貯蔵穴とみられる土坑がある。主柱穴の規模は直径45cm～50cmを測るもので、深さは16～26cmを測る。また貯蔵穴は、長辺90cm、短辺65cm、深さ20cmを測る隅丸長方形のものである。



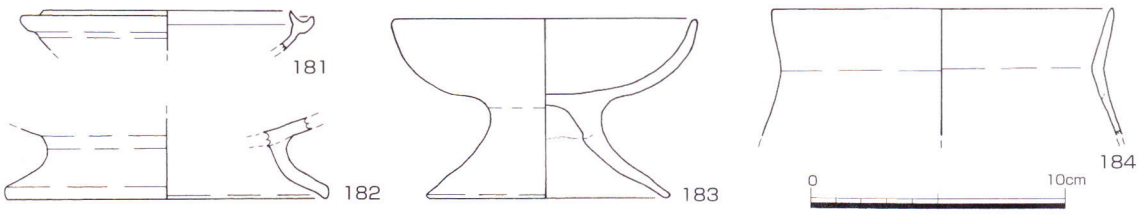
第67図　第30・31区第１遺構面主要遺構平面図

カマドは、左袖長49cm、残存高９cm、右袖長44cm、残存高10cmを測るもので、燃焼部は左袖端から約80cmを測る奥行きをもつ。燃焼部の床面中央部は楕円形状に赤く焼けており、北端最奥部には粘土を盛って土台とした上部に土師器高杯（第69図183）を逆位に据え支脚としていた。この高杯や同じくカマド内部から出土した土師器甕（184）が飛鳥Ⅱ期のものと考えられるため、SB－11が住居として機能していた時期は飛鳥時代前半と考えられる。その他の遺物としては、遺構覆土内から須恵器杯G（181）や土師器低脚高杯（182）などがあり、これらの遺物についても同じく飛鳥Ⅱ期の範疇に位置づけられることからSB－11に帰属する遺物と考えられる。



覆土	1	10YR4/3（にぶい黄褐）粗砂混シルト
カマド内部	2	7.5YR4/2（灰褐）粗砂混シルト（焼土を含む）
壁溝	3	10YR5/3（にぶい黄褐）粗砂混シルト
P－304	4	10YR5/3（にぶい黄褐）粗砂混シルト
〃	5	10YR4/2（灰黄褐）粗砂混シルト
〃	6	10YR4/3（にぶい黄褐）粗砂混シルト
P－301	7	10YR4/3（にぶい黄褐）粗砂混シルト
〃	8	10YR4/2（灰黄褐）粗砂混粘土
P－303	9	10YR4/3（にぶい黄褐）粗砂混シルト
P－302	10	10YR4/3（にぶい黄褐）粗砂混シルト
貯蔵穴	11	10YR4/3（にぶい黄褐）粗砂混シルト
〃	12	10YR4/2（灰黄褐）粗砂混粘土
〃	13	10YR3/3（暗褐）粗砂混シルト

第68図　SB－11遺構平面図及び土層断面図・立面図



第69図　遺物実測図20

〔SH－１〕（第70図、図版27上・28上）

第30区の南東隅部において検出したSH－１は、P－279・280・281で構成される掘立柱建物であり、建物の北西隅部にあたる東西１間、南北１間分を確認した。建物の主軸はN－５°－Wであり、柱間の間隔は柱痕の中心間の距離（P－279～280）で1.38mを測る。柱穴ホリカタは一辺65㎝前後を測る隅丸方形のもので、深さは柱痕が遺存するP－279が34㎝、P－280が44㎝を測り、その他P－281が32㎝を測る。

この建物の時期については、P－280及びP－279のホリカタ内から出土した須恵器杯H蓋（第71図185）が飛鳥Ⅱ期、須恵器低脚高杯（186）が飛鳥Ⅲ期に位置づけられることから、飛鳥時代中期のものと考えられる。

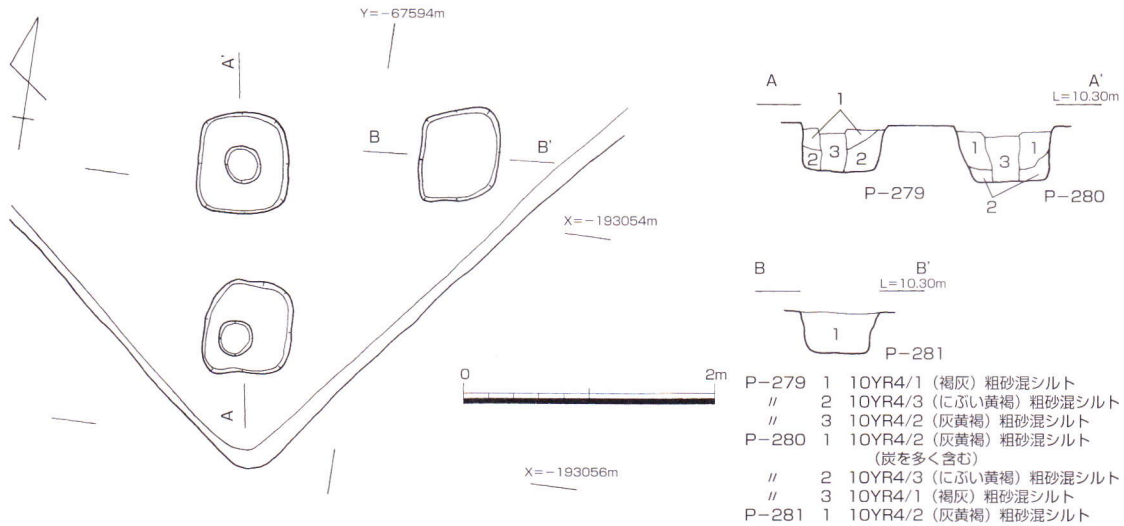
〔SH－２〕（第72図、図版27下・28上）

第30区の中央部において検出したSH－２は、P－292・293・294・300で構成される掘立柱建物であり、南西隅部にあたる梁行２間、桁行１間分を確認した。建物の主軸はN－20°－Wであり、柱間の間隔は柱痕の中心間の距離で、P－292からP－294が1.6m、P－292からP－300が1.9mを測り、P－293からP－294が1.3mを測る。柱穴ホリカタは、一辺40～64㎝を測る不定形な隅丸方形のものである。

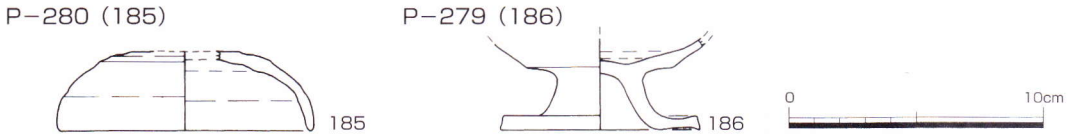
この建物の時期については、出土遺物から飛鳥時代のものと考えられる。

〔SD－66・73〕（第73図、図版28下・29上）

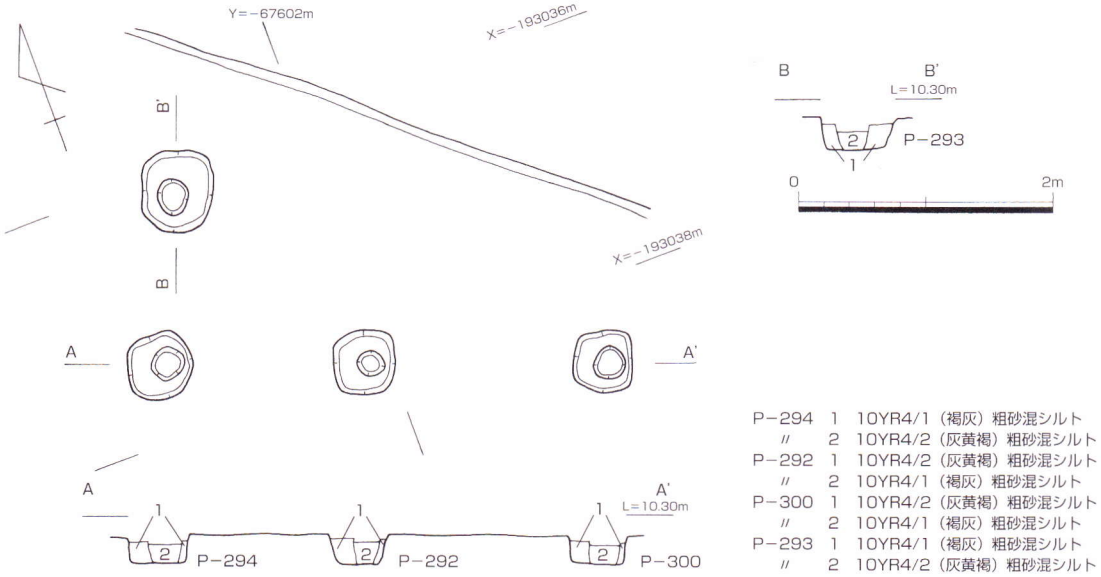
第31区の中央部で検出したSD－66・73は、北から南方向に蛇行して延びるもので、SD－66は幅0.65～1.35m、深さは38㎝を測り、SD－73は幅0.78～0.93m、深さは77㎝を測る。これらの遺構覆土はともに第３層が砂層であり、土層観察においてSD－66では水平に堆積し、ともに砂層堆積後に再掘削された形跡を確認することができなかった。この砂層の堆積状況から、SD－66・73は洪水などによ



第70図　SH－１遺構平面図及び土層断面図



第71図　遺物実測図21



第72図　SH－２遺構平面図及び土層断面図

る自然現象によって埋没し、その後は再掘削されることなく自然埋没したものと考えられる。

遺物の出土傾向としては、ともにその大半が第１・２層から出土しており、第３・４層には土師器の小片が含まれているのみであった。特にSD－66では、第１・２層から出土した遺物として須恵器（第74図187～194）及び土師器（195・196）などがある。そのうち187・188は平城Ⅰ期の杯B蓋、189は飛鳥Ⅱ期の杯H、190・191は飛鳥ⅡまたはⅢ期の杯G、192は平城Ⅰ期の杯Bである。また193は提瓶の口縁部と考えられるもので、194が甕の口縁部である。その他、195は杯Cであり、196が飛鳥Ⅳ期のⅢAである。これらの遺物や土層堆積状況から、SD－66は飛鳥時代に掘削され、洪水などによって埋没した後、奈良時代初頭（平城Ⅰ期）にかけて自然埋没したものと考えられる。またSD－73は、SD－66との土層堆積状況の類似性や重複関係から判断してほぼ同時期かやや先行する時期のものと考えられる。

〔SD－61〕（第73・74・75図、図版28下・29）

SD－61は、第30・31区の中央部を東西方向に貫き、第31区中央部においてほぼ直角に屈折し南流する大溝である。この大溝の規模は、東西長約35m、南北長約16m、幅1.35～2.0m、屈折部の最大幅5.9mを測る。深さは東西溝で46㎝、屈折部では36㎝、南北溝で42㎝を測る。また屈折部東側では、先行する溝（SD－61b）を検出した。さらにこの大溝の屈折部は、飛鳥時代の溝群が集中する微低地部に位置する。これは、この大溝が微高地である調査区の東側から微低地に向かって排水することを目的としたものであり、微低地部において飛鳥時代からの排水方向である南方向に屈折させたことを示している。遺構覆土は、大きく３単位に細分が可能である。

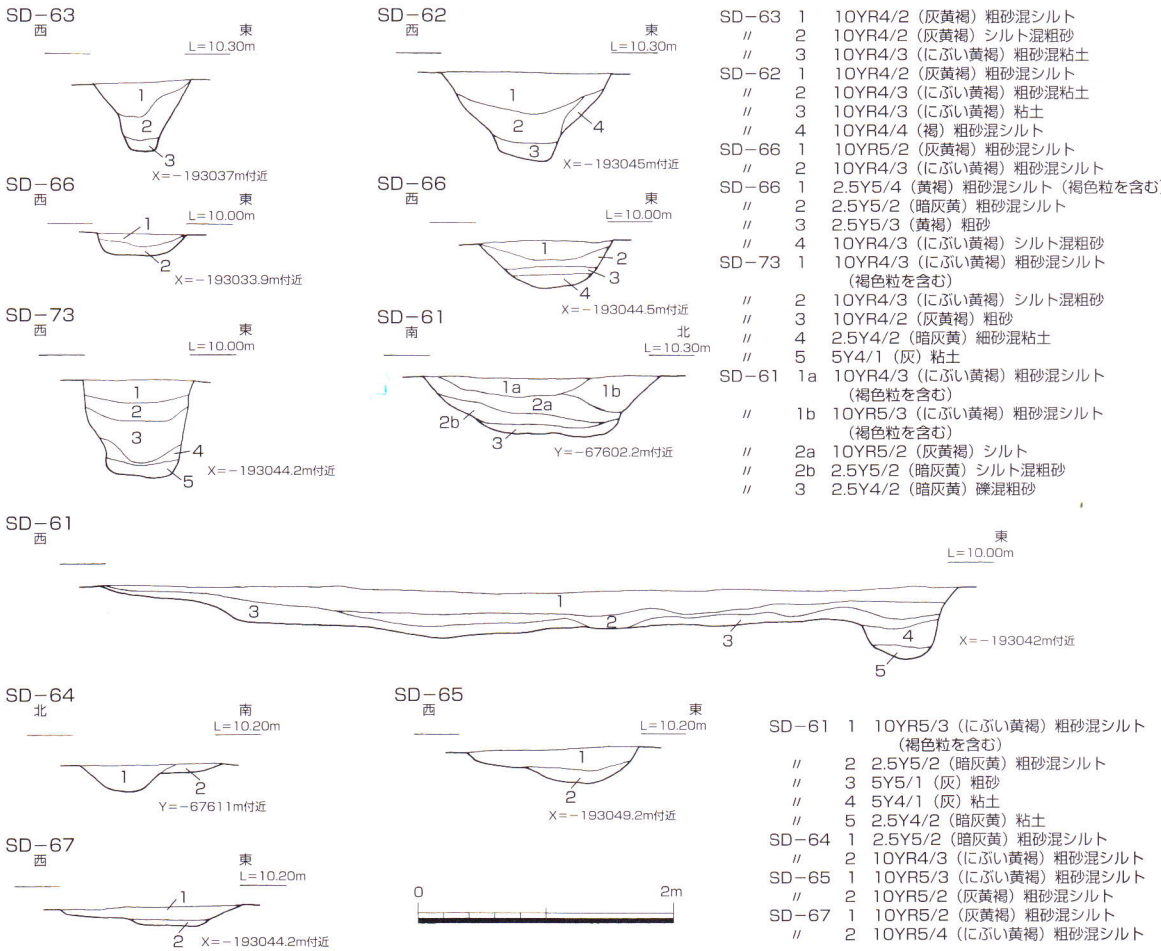
遺物は各堆積層から一定量出土しており、飛鳥時代から奈良時代にかけての須恵器（第74・75図197～228）及び土師器（229）の他、奈良時代のものと考えられる土馬（237）や平瓦（238・239）などがある。また少量であり混入した可能性が考えられるものとして、平安時代前期の土師器杯（230）やⅢ（231）及び椀（232）の他、黒色土器A類椀（233・234）、縄文時代晩期後葉のいわゆる突帯文土器である深鉢（235）、弥生時代のものとみられる壺の底部（236）がある。

そのうちこの大溝と関連し、その所属時期及び型式が判別可能なものとして、197～200は飛鳥Ⅰ

～Ⅱ期の杯H蓋、201が飛鳥Ⅳ期の杯G蓋、202が飛鳥Ⅴ期の杯B蓋、203が平城Ⅱ期の杯B蓋である。また同じく杯身では、204～206が飛鳥Ⅱ期の杯H、207～209が飛鳥Ⅰ期、210が飛鳥Ⅱ期の杯G、211～214が飛鳥Ⅳ期から平城Ⅰ期の杯Bである。その他、須恵器では奈良時代のものとみられる小型の鉢D（215）や、飛鳥時代のものと考えられる長脚高杯（216）及び低脚高杯（217・218）、同じく飛鳥時代のものとみられる甕（219）及び提瓶の口縁部（220）などがある。また221～225は壺であり、221～224は飛鳥時代のもの、225は奈良時代と考えられるものである。さらに、226は甕の口縁部、227・228は飛鳥時代の横瓶である。土師器では、奈良時代のものとみられる壺底部（229）がある。

これらの遺物のうち、この大溝の掘削時期を示すものとしては、第3層から出土した飛鳥Ⅳ期から平城Ⅰ期のものとみられる須恵器杯B（211・213）及び平瓦（238）があり、埋没時期を示すものしては第1層から出土した平城Ⅱ期のものと考えられる須恵器杯B蓋（203）、奈良時代のものとみられる須恵器壺（225）がある。よってこの大溝の存続時期としては、SD－66が埋没した奈良時代初頭に掘削され、同じく奈良時代に埋没したものと考えられる。

特徴ある遺物としては、第2層から出土した須恵器小壺（221）及び土馬（237）がある。221は内容物と考えられる黒褐色の有機物が、内面全体と口縁部から肩部にかけて溢れ出すように付着するものである。この黒褐色の有機物は漆の可能性があり、この須恵器壺は漆壺と考えられる。また、底面にはヘラ記号が認められる。237は土馬の頸部から腹部にかけてのものである。頭部及び前脚は欠失しており、腹部に前脚の剥離痕が認められる。また鬣は、粘土を捻り出すことで断面三角形



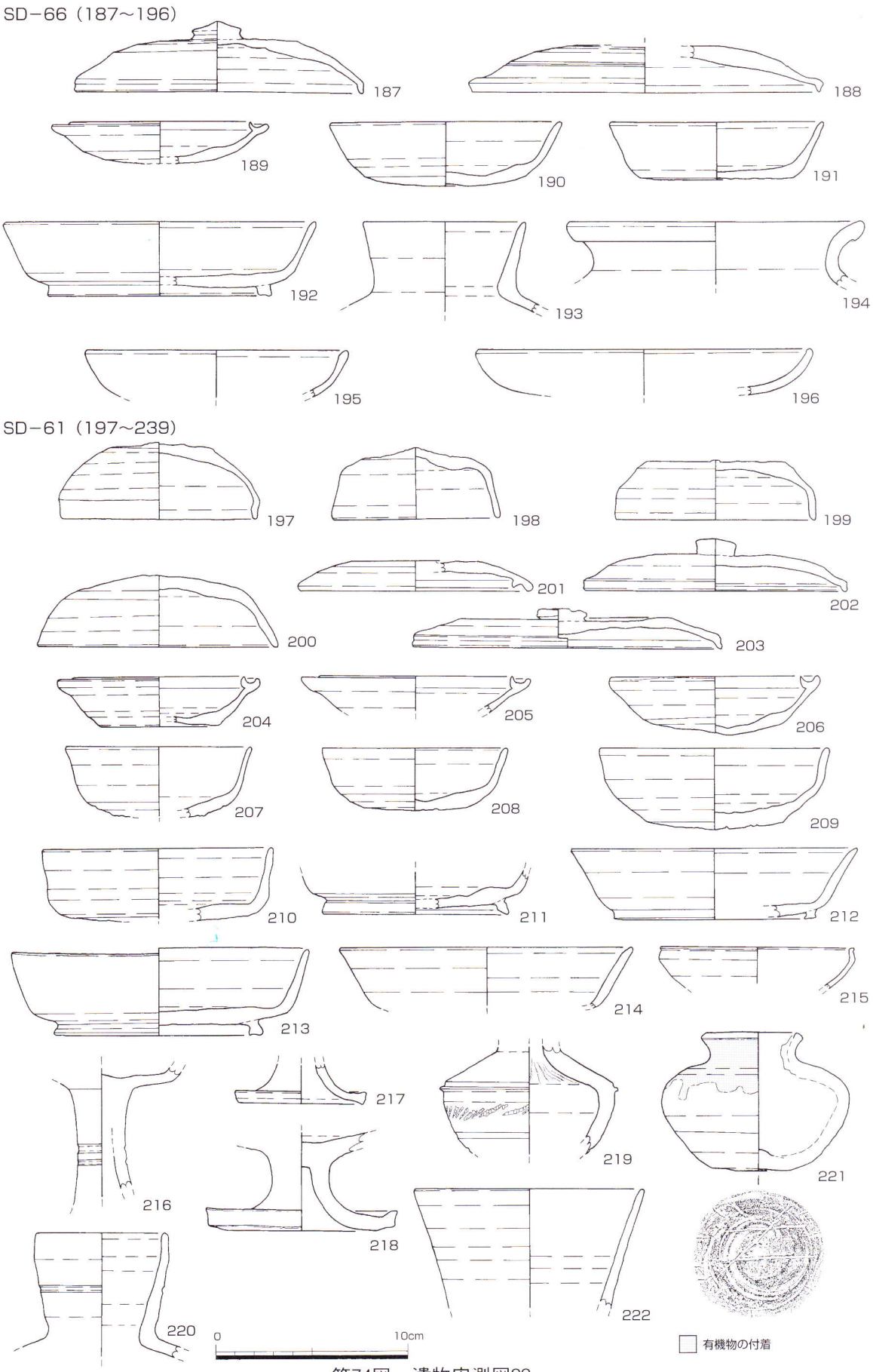
SD－63	1	10YR4/2（灰黄褐）粗砂混シルト
〃	2	10YR4/2（灰黄褐）シルト混粗砂
〃	3	10YR4/3（にぶい黄褐）粗砂混粘土
SD－62	1	10YR4/2（灰黄褐）粗砂混シルト
〃	2	10YR4/3（にぶい黄褐）粗砂混粘土
〃	3	10YR4/3（にぶい黄褐）粘土
〃	4	10YR4/4（褐）粗砂混シルト
SD－66	1	10YR5/2（灰黄褐）粗砂混シルト
〃	2	10YR4/3（にぶい黄褐）粗砂混シルト
SD－66	1	2.5Y5/4（黄褐）粗砂混シルト（褐色粒を含む）
〃	2	2.5Y5/2（暗灰黄）粗砂混シルト
〃	3	2.5Y5/3（黄褐）粗砂
〃	4	10YR4/3（にぶい黄褐）シルト混粗砂
SD－73	1	10YR4/3（にぶい黄褐）粗砂混シルト（褐色粒を含む）
〃	2	10YR4/3（にぶい黄褐）シルト混粗砂
〃	3	10YR4/2（灰黄褐）粗砂
〃	4	2.5Y4/2（暗灰黄）細砂混粘土
〃	5	5Y4/1（灰）粘土
SD－61	1a	10YR4/3（にぶい黄褐）粗砂混シルト（褐色粒を含む）
〃	1b	10YR5/3（にぶい黄褐）粗砂混シルト（褐色粒を含む）
〃	2a	10YR5/2（灰黄褐）シルト
〃	2b	2.5Y5/2（暗灰黄）シルト混粗砂
〃	3	2.5Y4/2（暗灰黄）礫混粗砂

SD－61	1	10YR5/3（にぶい黄褐）粗砂混シルト（褐色粒を含む）
〃	2	2.5Y5/2（暗灰黄）粗砂混シルト
〃	3	5Y5/1（灰）粗砂
〃	4	5Y4/1（灰）粘土
〃	5	2.5Y4/2（暗灰黄）粘土
SD－64	1	2.5Y5/2（暗灰黄）粗砂混シルト
〃	2	10YR4/3（にぶい黄褐）粗砂混シルト
SD－65	1	10YR5/3（にぶい黄褐）粗砂混シルト
〃	2	10YR5/2（灰黄褐）粗砂混シルト
SD－67	1	10YR5/2（灰黄褐）粗砂混シルト
〃	2	10YR5/4（にぶい黄褐）粗砂混シルト

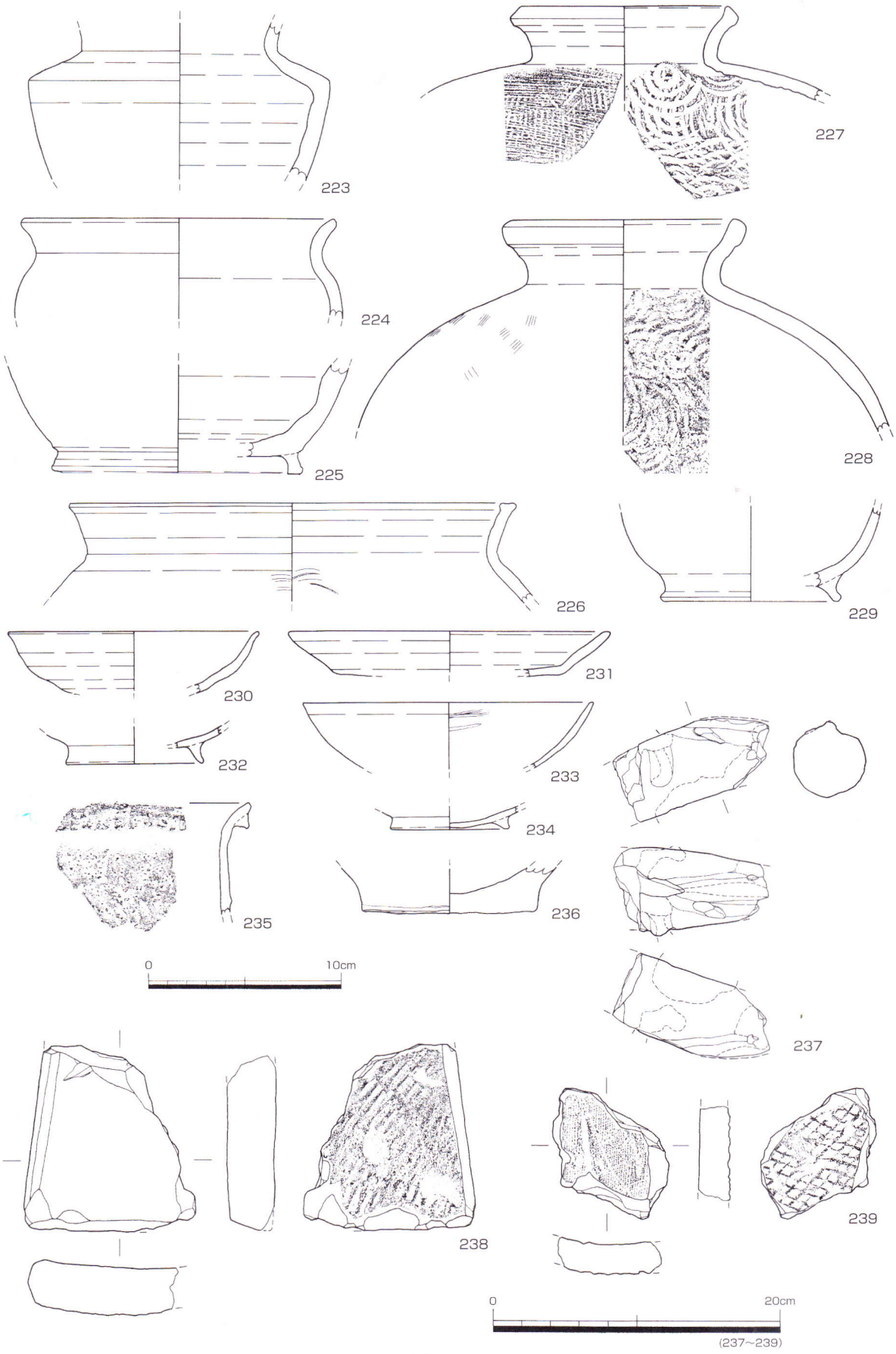
第73図　SD－61～67・73土層断面図

SD−66（187〜196）

SD−61（197〜239）



第74図　遺物実測図22



第75図　遺物実測図23

状に成形し、鞍及び手綱は粘土紐を貼り付けて表現している。ただし遺存状態は悪く、手綱と鞍の一部が残るのみである。この土馬は、奈良時代の水辺の祭祀に使用されたものとみられ、SD－61の性格を知る上で重要な遺物である。

〔SK－61〕（第67図）

第30区北西隅部で検出したSK－61は、最大径が6.0m以上、深さ24cmを測る。遺構覆土は、2単位に細分が可能であり、第1層はにぶい黄褐色礫混粗砂、第2層は灰黄褐色粗砂混シルトである。

遺構の時期は、SD－66が埋没した後に掘削されていること及び、出土した須恵器甕（第76図241・242）の型式から奈良時代中期以降と考えられる。その他の遺物には、長方形透かしをもつ須恵器高杯脚部（240）、古墳時代後期の須恵器提瓶（243）、縄文時代晩期中葉の浅鉢（244・245）のほか、打製石器としてサヌカイト製の石鏃（246・247）がある。このうち244は、口縁部外面に細い棒状工具による沈線が施されている。

〔SX－1〕（第67図）

第31区中央部東側で検出したSX－1は、第31区の微低地部に位置するもので、長辺7.5m以上、短辺5.1m、深さは検出面から約20cmを測る長方形状の落ち込みである。この落ち込みの長軸は、ほぼ東西方向であり、その方向性がSD－61との関連性を感じさせる。またこの落ち込みの北東隅部には、北東方向（SD－61）に向かって溝状遺構が延びる。よってこの遺構の性格としては、北東隅部に取水口をもつ池状遺構となる可能性がある。覆土は、褐灰色細砂混シルトの単一層である。遺構の時期は、覆土内から出土した須恵器杯B（第76図249）などから判断して奈良時代のものと考えられる。その他の遺物には、飛鳥時代に遡る須恵器杯G（248）や土師器杯B（250）、弥生時代の結晶片岩製石庖丁（251）などが出土している。

〔SK－63・75〕（第67図）

第30区の中央部西側、SD－61北肩部において検出したSK－63は、SD－61に先行する土坑であり、覆土内から宝珠つまみをもつ飛鳥時代の須恵器杯蓋（第76図255）が出土している。また第31区の中央部、SD－61屈折部北肩部において検出したSK－75は、SD－61の一部の掘り残しの可能性があるもので、覆土内から飛鳥時代のものと考えられる須恵器甑（252）が出土している。

〔SD－71〕（第67図）

第31区の中央部において検出したSD－71は、微低地部に掘削された幅35～50cm、深さ3～5cmを測る溝で覆土内から飛鳥時代のものと考えられる須恵器杯身（第76図253）が出土している。

〔P－289〕（第67図）

第31区の中央部東側において検出したP－289は、直径55～60cmを測るものであり、覆土内より飛鳥時代から奈良時代のものとみられる須恵器杯B（第76図254）が出土している。この周辺では飛鳥時代の掘立柱建物（SH－1・2）が検出されており、微高地部におけるこれら以外の建物の存在を示す遺構である。

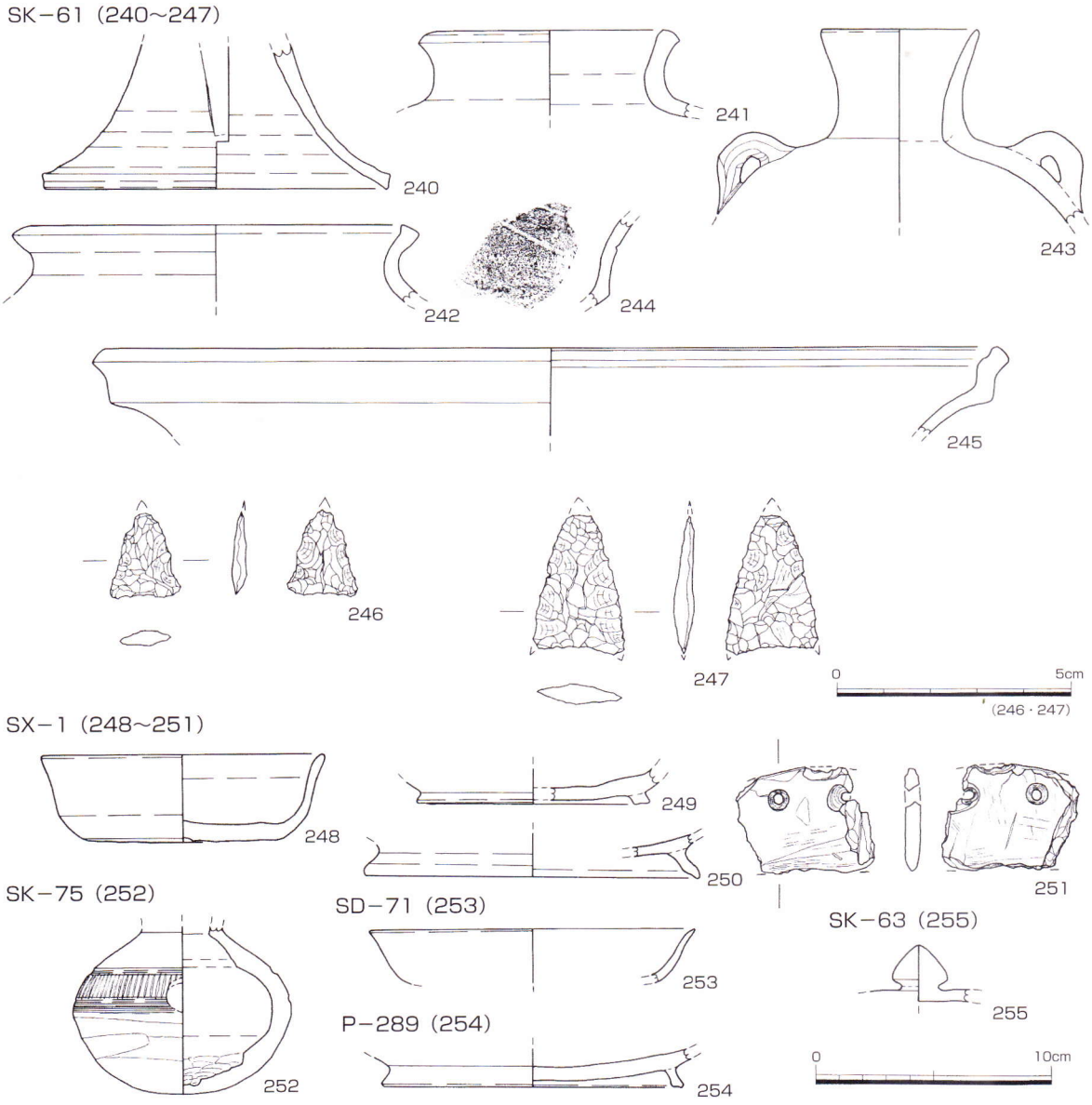
〔SK－77・102・103・P－325〕（第61図、図版24）

第31区の北西部で検出したSK－77・102・103やP－325は、平面形が隅丸方形及び円形を呈する土坑であり、遺構覆土に炭層が堆積するものである。そのうちSK－77は直径75cm前後、深さ10cmを測るもので、覆土は2単位に細分が可能であり、第1層が灰黄褐色の粗砂混シルト、第2層が炭層で

ある。また遺構壁面及び底面が火を受け赤変するものである。SK－102は一辺60㎝、深さ24㎝を測る隅丸方形のもので、覆土は３単位に細分が可能であり、第１層が黄灰色の粗砂混シルト、第２層が褐灰色の粗砂混シルト、第３層が炭層である。このSK－102も遺構壁面が火を受け赤変するものである。SK－103は長径90㎝、短径75㎝、深さ28㎝を測る楕円形のものである。覆土は４単位に細分が可能であり、第１層が黄灰色の粗砂混シルト、第２層が褐灰色の粗砂混シルト、第３層が炭層であり、第４層が褐灰色の粗砂混シルトである。これらの遺構は、奈良時代以降のものとみられ、ある一定範囲にまとまりをもって検出されたことに特徴がある。しかしながら、その性格については出土遺物が細片で少なく詳細は不明である。

〔SD－57・64〕（第67図、図版30上）

第30区の東端部から第31区の東端部にかけて検出したSD－57は、東西方向にやや弧を描きながら調査区外に延びるもので幅35～75㎝、深さは５～15㎝を測り、遺構底面の標高より東から西に低く傾斜するものである。遺構覆土はにぶい黄褐色の粗砂混シルトの単一層である。この溝の埋没時



第76図　遺物実測図24

期は、遺構覆土に中世土師器などが含まれること及び、この溝が埋没した後に鎌倉時代のものと考えられる柵（SA－３）が構築されていることなどから平安時代の範疇と考えられる。

第30区の北端部において検出したSD－64は、東西方向にやや弧を描きながら調査区外に延びる溝で幅35～62㎝、深さは最深部で約20㎝を測る（第73図）。この溝の埋没時期は、覆土内から土師器皿（第77図256）・黒色土器A類椀（257）が出土しており平安時代前期と考えられる。

〔SD－67〕（第73図、図版30上）

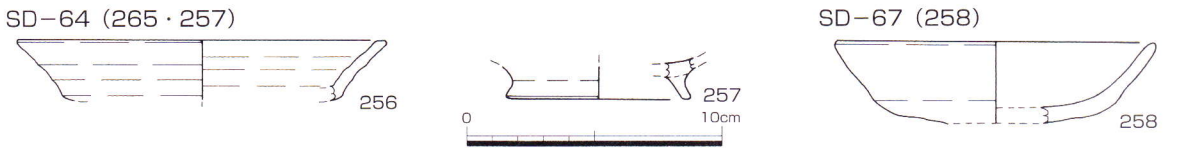
第31区の中央部やや東側から第30区北西端部にかけて検出したSD－67は、第５層上面から掘削されたほぼ直線的に延びる溝で幅1.15～1.60m、深さ約15㎝を測る。またその方向性はN－24°－Eである。遺構覆土からは、黒色土器・瓦器・中世土師器・馬歯（図版54 318）などが出土した他、鎌倉時代の土師器皿（第77図258）が出土している。この遺構の時期は、検出面が第５層上面であることや出土遺物から判断して鎌倉時代のものと考えられる。

〔SA－３〕（第78図）

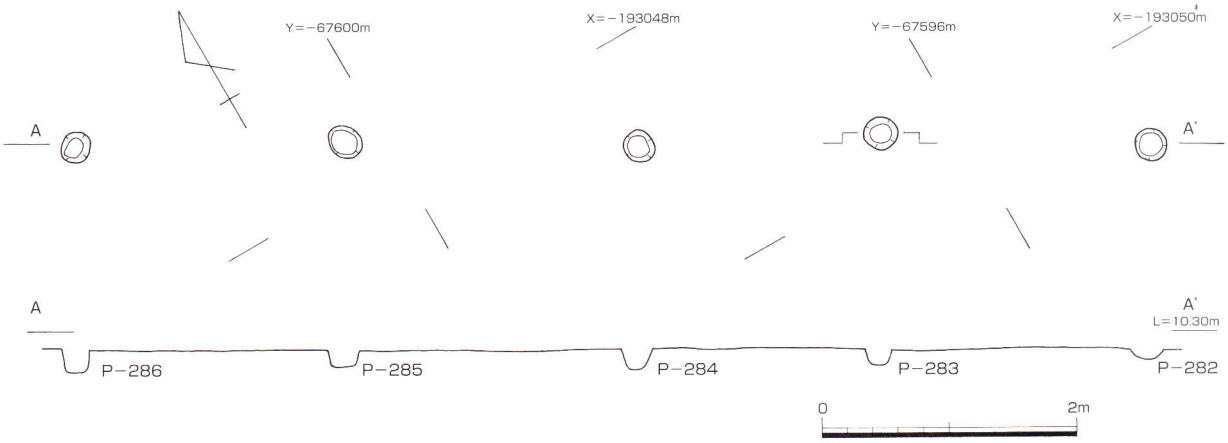
第30区の南東部において検出したSA－１は、P－282～286で構成される柵と考えられるもので、柱穴の規模は直径25㎝前後、深さは８～19㎝、柱の中心間の距離は1.95～2.3mを測る。またその方向性はN－61°－Wである。この柵は、P－284・285の覆土に中世土師器が含まれていることや、SD－57に後出するものであることから鎌倉時代以降のものと考えられる。

〔SK－53・65〕（第67図）

第31区の中央部北側において検出したSK－65は、一辺80㎝、深さは検出面から19㎝を測る隅丸方形の土坑である。遺構覆土は褐灰色細砂混シルトの単一層である。この土坑の時期については、覆土内から中世土師器が出土することから鎌倉時代以降のものと考えられる。この他、第30区の南東隅部で検出したSK－53は、不定形な楕円形を呈するものである。遺構覆土はにぶい黄色の粗砂混シルトであり、中世土師器を含むことから鎌倉時代以降のものと判断した。



第77図　遺物実測図25



第78図　SA－３遺構平面図及び断面図

（２）第31区北第１遺構面の調査（第79図、図版30下）

第31区北は、第３次確認調査の２－８区（調査区２ｍ×５ｍ）をその中央部に含むもので、第３次確認調査時に付した遺構番号は、煩雑さを避けるため本報告における連番に改めた。

第１遺構面では、古墳時代後期の溝や土坑及びピット、また古墳時代のものとみられる柱穴をはじめ、鎌倉時代のピット、さらに第４層上面から掘削された江戸時代の粘土採掘坑など多数の遺構を検出した。そのうち古墳時代では、後期の溝（SD－80・81）、土坑（SK－182）、ピット（P－385・391）の他、第３次確認調査において検出したP－362～370、またこれらに関連するとみられるP－358・359・361・375がある。その他、鎌倉時代ではピット（P－326・328・331・332・335・337・340・348・350）がある。また、第４層上面で検出したものとして、江戸時代の粘土採掘坑（SD－87・SK－80～84・87・89・90）がある。

第１遺構面における遺構分布は、古墳時代の遺構が調査区の南半部に集中し、鎌倉時代の遺構が北半部に集中する傾向がある。また第30区及び第31区で主体となる飛鳥時代から奈良時代にかけての遺構及び遺物については明確なものを確認することができなかった。以下、古い時期のものから主な遺構及び遺物について説明する。

〔P－391〕（第80図、図版30上）

第31区北の南端部において検出したP－391は、長径40㎝、短径28㎝、深さ22㎝を測る楕円形の小型のピットである。覆土内からは口縁部をN－135°－Wに向け、底面に横倒しの状態で据えられた古墳時代後期の須恵器甕（259）が１点出土した。このピットの出土遺物はこの甕１点のみであり、意図的に埋められたものと考えられる。

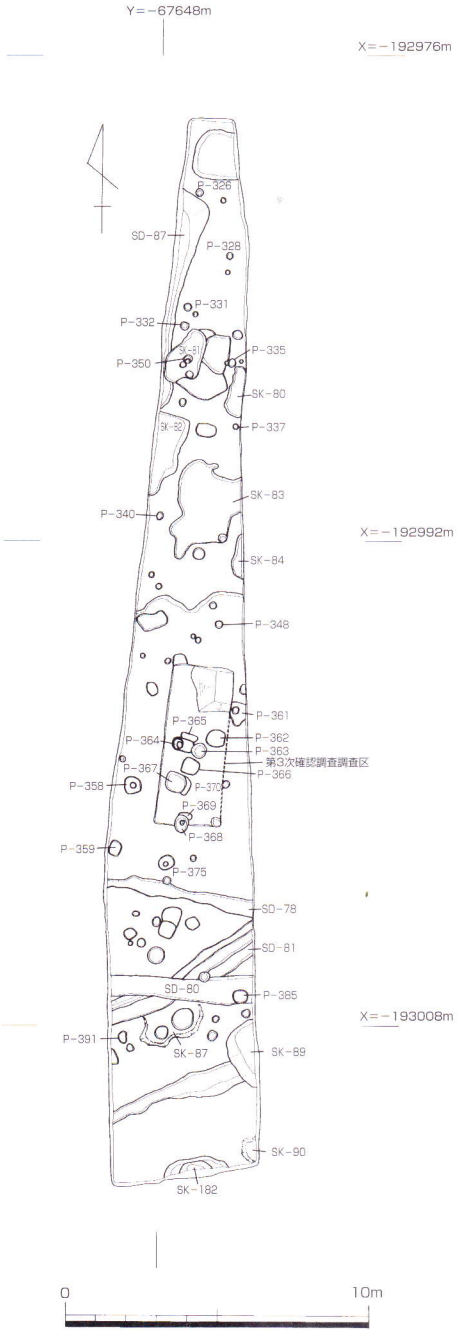
遺構の時期については、底面に据えられた須恵器甕がTK－209型式に位置づけられることから古墳時代後期のものと考えられる。

〔SK－182〕（第81図）

第31区北の南壁際において検出したSK－182は、検出最大径3.08m、深さは検出面から1.06mを測る。遺構底面の状況は緩やかに落ち込んだ後、直径約1.0mの範囲がさらに落ち込むもので、断面形状がすり鉢状を呈する。よってこの遺構は井戸であった可能性が高い。遺構の時期は、出土遺物から古墳時代後期のものと考えられる。

〔SD－81〕（第82図）

第31区北の南端部において検出したSD－81は、幅0.75～1.05m、深さ22㎝を測るもので、その方向性はN－62°－Eである。遺構底面の状況は約７㎝の高低差で東から西方向に

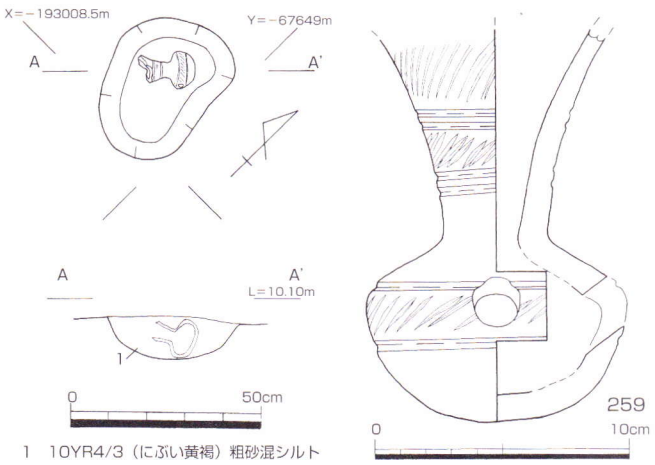


第79図　第31区北第１遺構面遺構平面図

傾斜をもつ。遺構覆土は3単位に細分が可能であり、その堆積状況から少なくとも2度の再掘削が行われている。遺構の時期は、覆土内から出土した須恵器甕の把手（第83図263）から、古墳時代後期のものと考えられる。

〔SD－80〕（第79・83図）

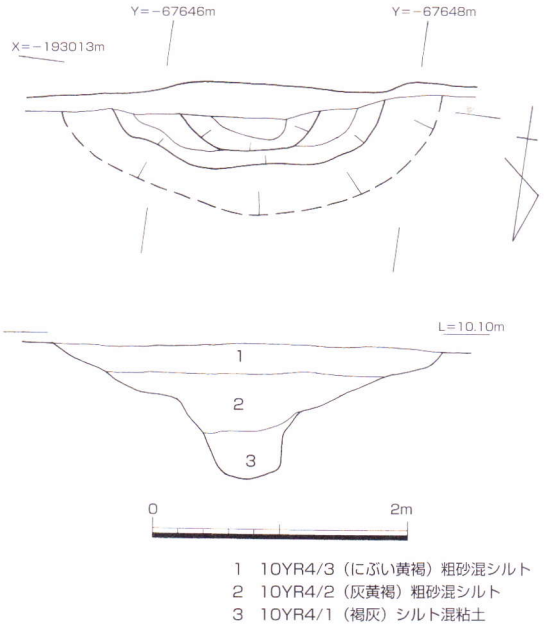
第31区北の南端部で検出したSD－80は、幅65～90cm、深さ3～17cmを測るもので、その方向性はほぼ東西方向である。遺構覆土は、にぶい黄褐色粗砂混シルトの単一層である。この遺構の時期は、覆土内からTK－209型式に位置付けられる須恵器杯身（第83図260）及び無蓋高杯（261）、長脚二段高杯（262）が出土していることから古墳時代後期と考えられる。



第80図　P－391遺構平面図及び土層断面図・遺物実測図

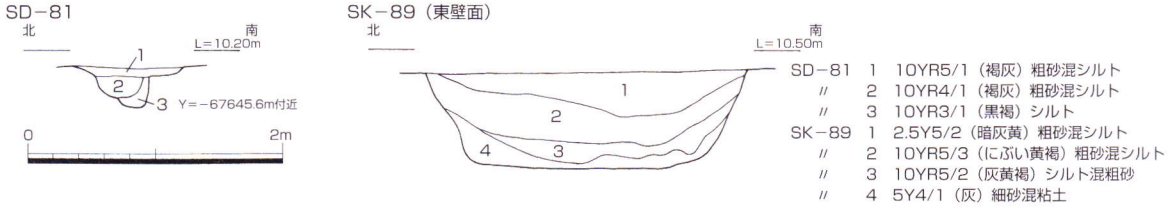
〔P－361～370・358・359・375〕（第79図、図版30下）

第31区北の中央部において検出したP－362～370は、第3次確認調査で検出したものであり、そのうち柱痕を確認したことから掘立柱建物を構成する柱穴と判断できるものにはP－362～364・367・368がある。また遺構の重複関係から柱痕が確認できないものの、柱穴の可能性が考えられるものとしてP－365・366・369がある。その他、今回の調査で新たに検出し先述の柱穴と関連する可能性があるものとして、柱痕が認められるP－358・361・375をはじめ、柱痕は確認できないが規模やホリカタの形状が類似するP－359がある。



第81図　SK－182遺構平面図及び土層断面図

そのうちP－358は、直径60～65cm、深さは11cmを測る隅丸方形のもので、遺構覆土はホリカタが暗褐色粗砂混シルト、柱痕部分が灰黄褐色粗砂混粘土である。またP－361は最大長80cm、深さ18cmを測る不定形のもので、遺構覆土はホリカタが暗褐色粗砂混シルト、柱痕が灰黄褐色粗砂混シルトである。P－375は、長径55cm、短径45cm、深さは32cmを測る楕円形のもので、遺構覆土は、ホリカタ及び柱痕ともににぶい黄褐色の粗砂混シルトである。その他、P－359は一辺40～50cmを測る隅丸



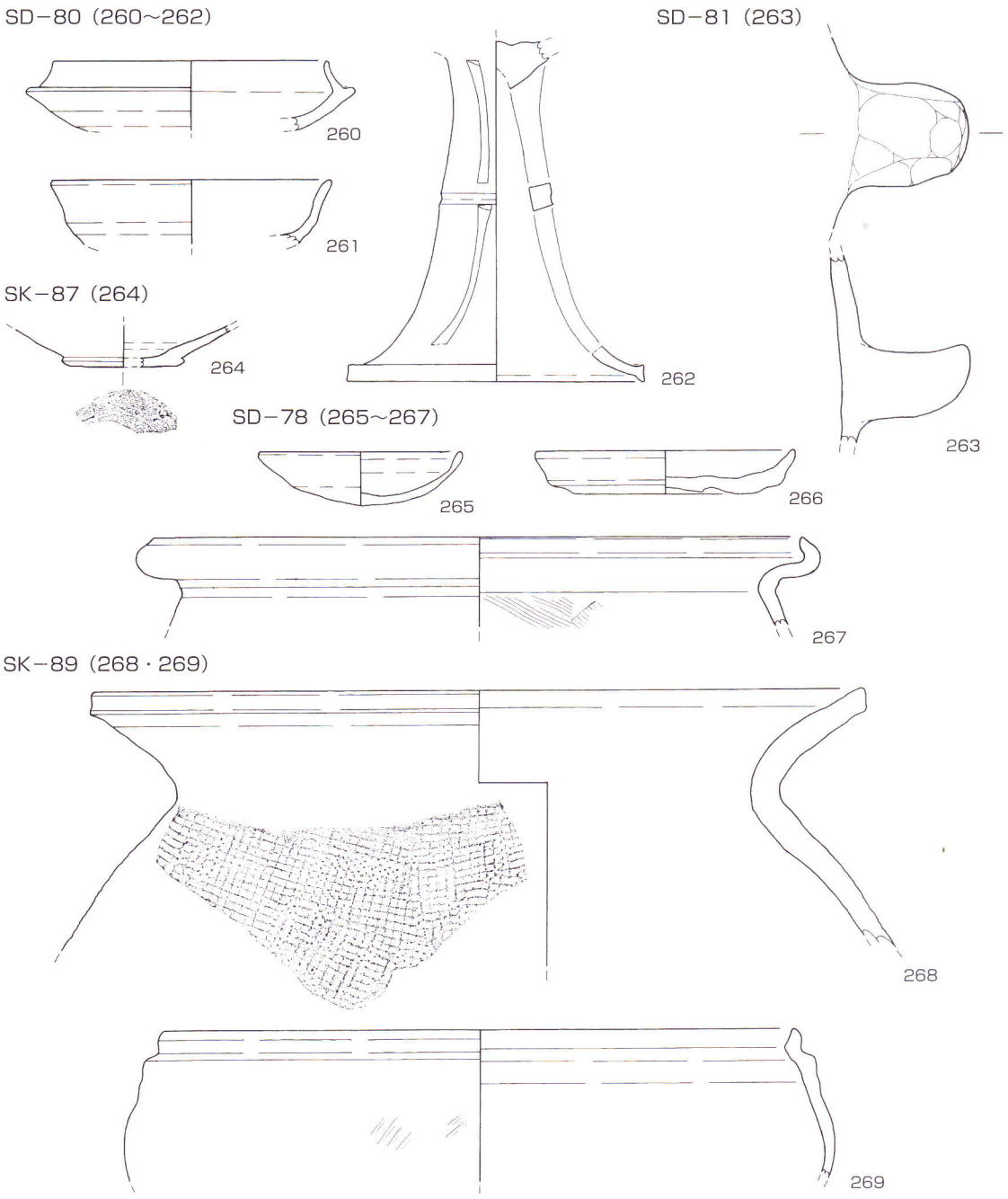
第82図　SD－81・SK－89土層断面図

方形のもので、遺構覆土はにぶい黄褐色の粗砂混シルトである。これらの柱穴の時期は、出土遺物から古墳時代のものと考えられる。

第３次確認調査を含め今回の調査では、これらの柱穴で構成される掘立柱建物を明確に検出することはできなかったものの、多数の柱穴が密集して検出される状況から、調査区近辺に古墳時代の建物群が存在する可能性を指摘することができる。

〔SD－78〕（第79・83図）

第31区北の中央部南側で検出したSD－78は、幅13～30㎝、深さ11㎝を測るもので、その方向性はほぼ東西方向である。遺構覆土はにぶい黄褐色シルト混粗砂である。遺構の時期は、覆土内から土



第83図　遺物実測図26

師器皿（第83図265・266）の他、土師器釜（267）が出土しており、鎌倉時代のものと考えられる。
〔P－326・328・331・332・335・337・340・348・350〕（第79図）

これらのピットは、直径15～30cmを測る小型のものが主体となるものの、今回の調査における第1遺構面では最も高所に位置する本調査地の北側に鎌倉時代の集落域が広がる可能性を示す遺構群として重要である。

〔SD－87・SK－80～84・87・89・90〕（第79図）

SD－87・SK－80～84・87・89・90は、第4層上面から掘削された江戸時代の粘土採掘坑と考えられる不定形な土坑である。そのうち調査区南端部東壁際において検出したSK－89は、検出長2.2m、深さ74cmを測る隅丸方形の土坑とみられるもので、遺構覆土は4単位に細分が可能である。遺物は、混入したとみられる室町時代の土師器堝（第83図269）、平安時代のものと考えられる須恵器甕（268）が出土している。その他、SK－81・90の遺構覆土内からは、平安時代の緑釉陶器椀（図版54 319）及び壺（図版54 320）が出土し、またSK－87では底部糸切りの痕跡が明瞭に残る平安時代の須恵器椀（264）が出土している。

これらの遺物は、調査地周辺に平安時代から室町時代にかけての遺構が存在する可能性を示すものである。

（3）第30・31区第2遺構面の調査（第84・85図、図版31・32上）

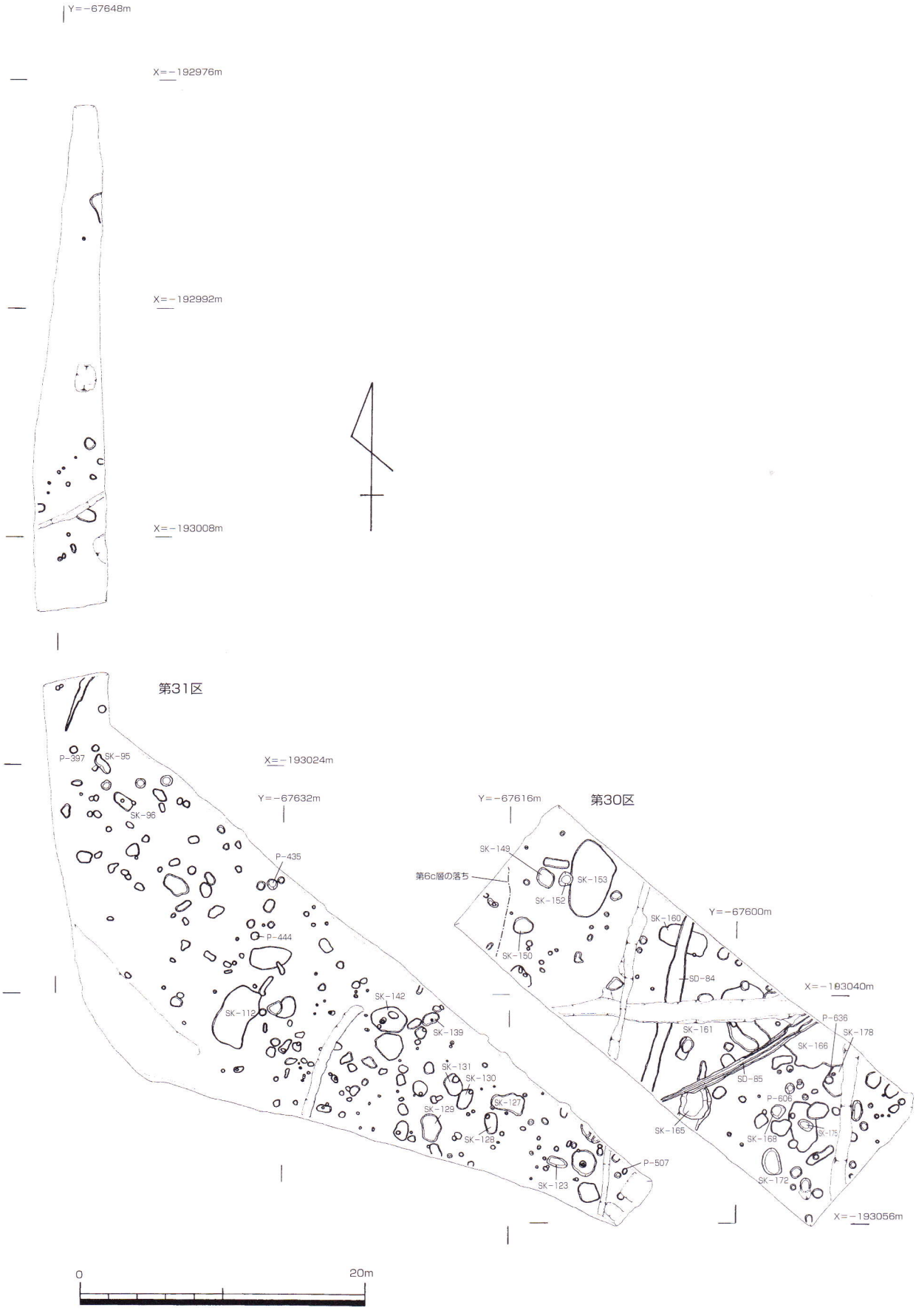
第2遺構面では、縄文時代晩期中葉の土器棺墓（SK－152・168）をはじめ、溝状遺構（SD－84・86）や土坑（SK－123・149・153・165・175・178）、ピット（P－507・606・636）の他、弥生時代の溝（SD－85）など多数の遺構を検出した。これらの遺構群の分布傾向としては、微低地となる第31区検出の遺構では不定形な土坑及びピットが主体となり、各遺構覆土の遺物含有量も低いものである。これとは対照的に微高地となる第30区検出の遺構は、土器棺墓や溝状遺構などの他、土坑及びピットが主体となり、各遺構覆土の遺物含有量も高いものとなる。このことは、第5層の堆積からみた微低地の形成が縄文時代晩期にまで遡ることを示すもので、第30区周辺の微高地に向かって遺構及び遺物の密度が高くなる傾向といえる。また第31区北では、明確な遺構を検出することができなかった（図版32下）。これは、第31区北周辺における縄文時代晩期の生活面の標高が高く、後世の地形改変などによって削平されているためと考えられる。

また今回の調査で検出した遺構は、出土遺物から縄文時代晩期中葉の滋賀里Ⅲb式（篠原式）に併行するものであり、その後出現する晩期後葉の突帯文土器を指標とする滋賀里Ⅳ式期の遺構は確認できなかった。ただし遺物包含層である第6層には、ごく少量ではあるものの突帯文土器が含まれていることから、縄文時代晩期後葉の遺構が存在する可能性がある。以下、主な遺構及び遺物について説明する。

〔SK－152〕（第86図、図版33）

第30区の北西隅部において検出したSK－152は、長径1.10m、短径89cm、深さは34cmを測る不正楕円形の土器棺墓である。棺としての深鉢は、この土坑の中央部に口縁部を斜め上方に向け、底面に横倒しの状態で埋設されていた。その開口方向は、N－160°－Wである。また遺構覆土は暗褐色粗砂混シルトの単一層であり、副葬品等は棺内外から出土しなかった。

出土した深鉢（第87図270）は、緩やかに外反する口頸部を経て、体部上位に最大径があり、底部

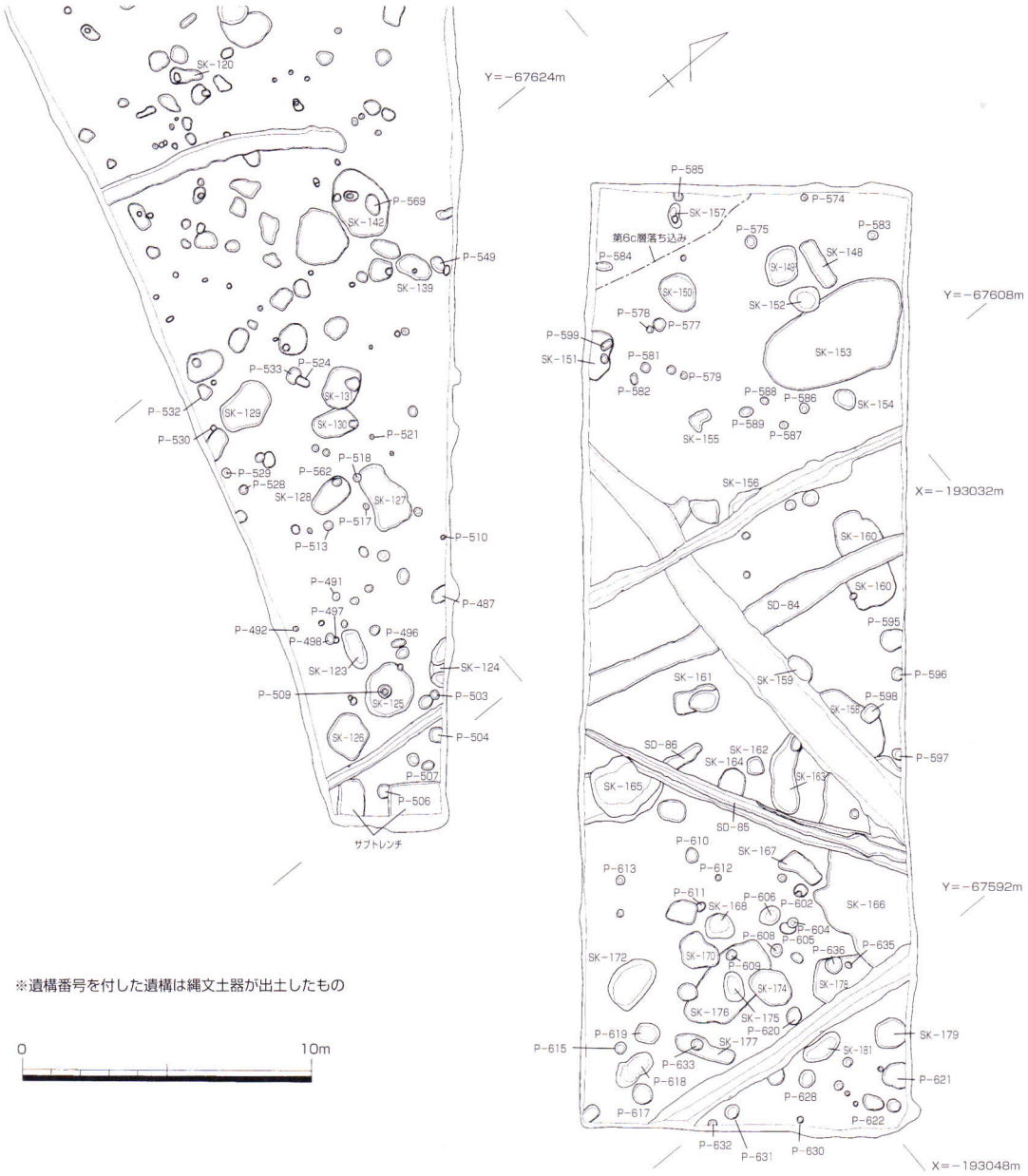


第84図　第30・31区第２遺構面遺構平面図

が尖底の大型品である。口唇部には刻目があり、また肩部には半截竹管状工具を押引きし、連結するD字形の刺突文を横方向に施し、その後、口縁を6等分する位置に同じ刺突文を縦方向に施している。このような文様構成は、瀬戸内地域からの影響と考えられている。外面の調整は、口縁部から底部方向に縦方向のヘラケズリを施した後、肩部付近に横方向のヘラケズリを部分的に施し、口頸部にヨコナデを丁寧に施すものである。また体部上位には、棒状工具による沈線状の擦痕が数条認められる。成形は粗く、幅3㎝前後の粘土紐積み上げ痕が明瞭に残る。遺構の時期は、出土した深鉢が滋賀里Ⅲb式（篠原式新段階）に併行するものとみられることから縄文時代晩期中葉と考えられる。

〔SK－168〕（第86図、図版34）

第30区の南東部において検出したSK－168は、長径1.10m、短径85㎝、深さ49㎝を測る不正楕円形の土坑であり、西端部において口縁部を斜め上方に向け、底面に横倒しの状態で埋設された浅鉢を



第85図　第30・31区第2遺構面主要遺構平面図

検出した。よって、この土坑は土器棺墓と考えられるが、棺としての浅鉢の底部が欠失しているため詳細は不明である。口縁部の開口方向は、N－16°－Eである。また遺構覆土は、焼土を含むにぶい黄褐色粗砂混シルトの単一層であり、副葬品等は棺の内外から出土しなかった。

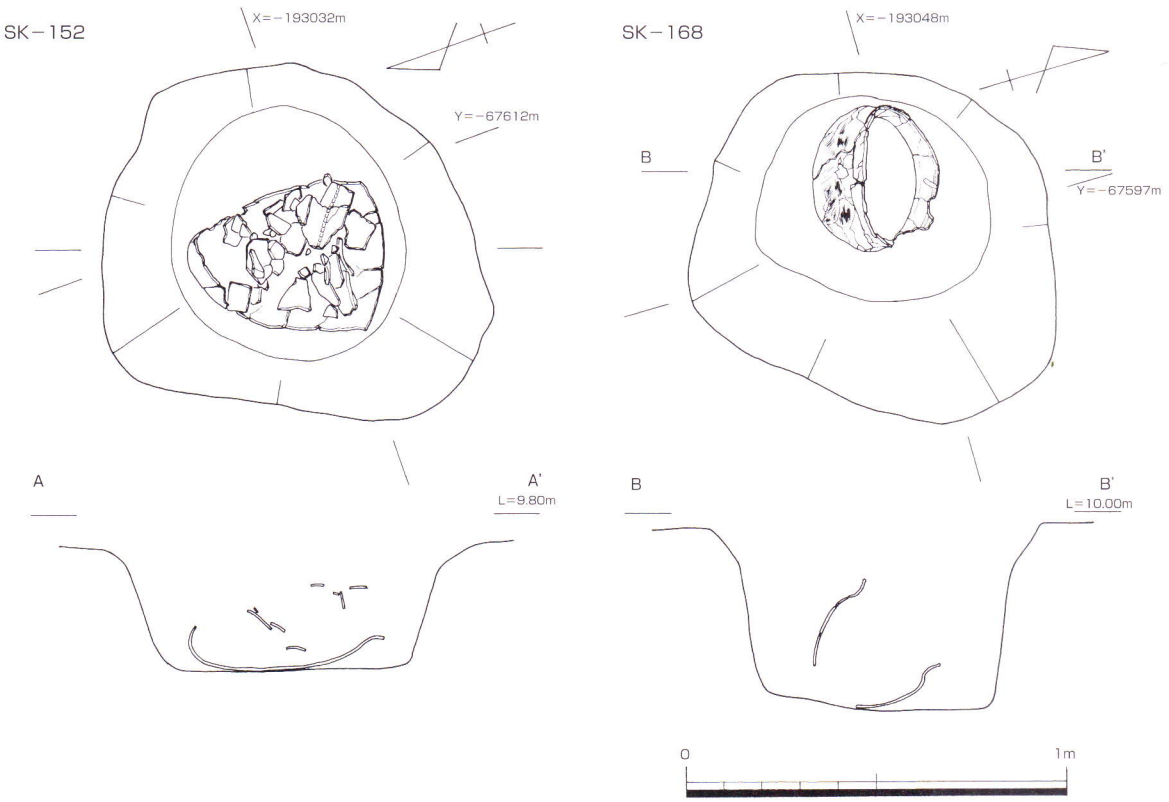
出土した浅鉢（第87図271）は、緩やかに外反する口頸部から、丸味をもって大きく張り出す体部上位に最大径をもつ椀型のもので、口縁部には口縁を３等分する位置に幅13㎝前後を測る横長の台形状突起がみられるものである。外面の調整は、成形時にヘラケズリが施されており、このヘラケズリの後に体部下位には二枚貝条痕を施し、体部上位から口縁部にかけては横方向のヘラミガキが施されている。また内面の調整は、口頸部に横方向のヘラミガキを施し、体部にはナデが施されている。その他、体部上位には黒漆によるとみられる直径７㎜前後の黒点が１点認められる。遺構の時期は、出土した浅鉢が滋賀里Ⅲb式（篠原式新段階）に併行するものと考えられることから、縄文時代晩期中葉と考えられる。

〔SD－84〕（第85図）

第30区の中央部を南北に検出したSD－84は、幅0.75～1.25m、深さ８～29㎝を測る溝状遺構であり、その方向性はN－16°－Eである。遺構覆土はにぶい黄褐色シルト混粗砂の単一層である。また遺構底面の状況は、北から南に向かって29㎝の高低差で低くなる。この遺構の時期は、覆土内に含まれる遺物から縄文時代のものと考えられる。

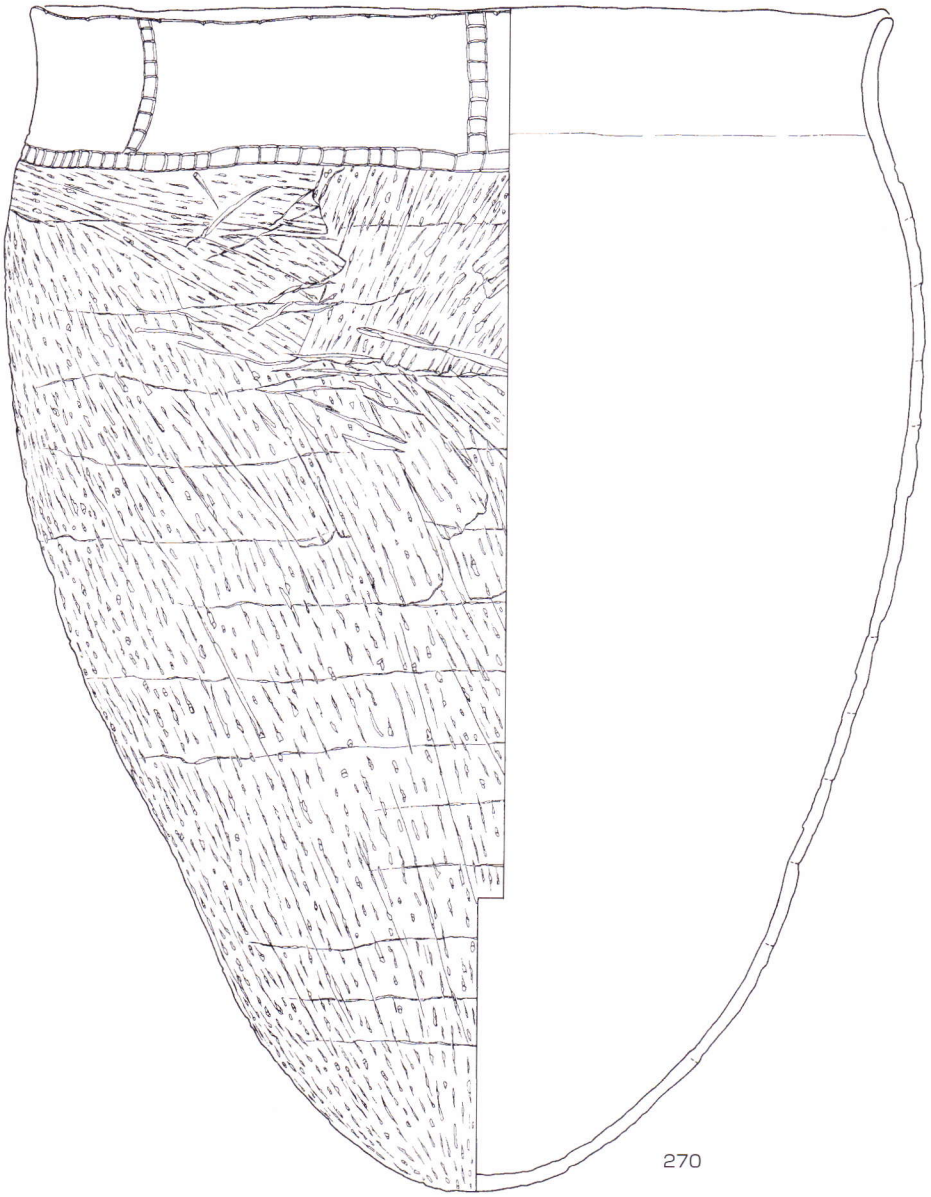
〔SK－165〕（第88図、図版34下）

第30区南壁中央部のやや東側において検出したSK－165は、長径2.8m以上、短径2.2mを測る不定形の土坑であり、遺構底面の状況は土坑北側において長径2.4m、短径2.0mの範囲が一段低く落ち込むものである。また遺構覆土は、レンズ状に堆積する黒褐色土であり、２単位に細分が可能である。

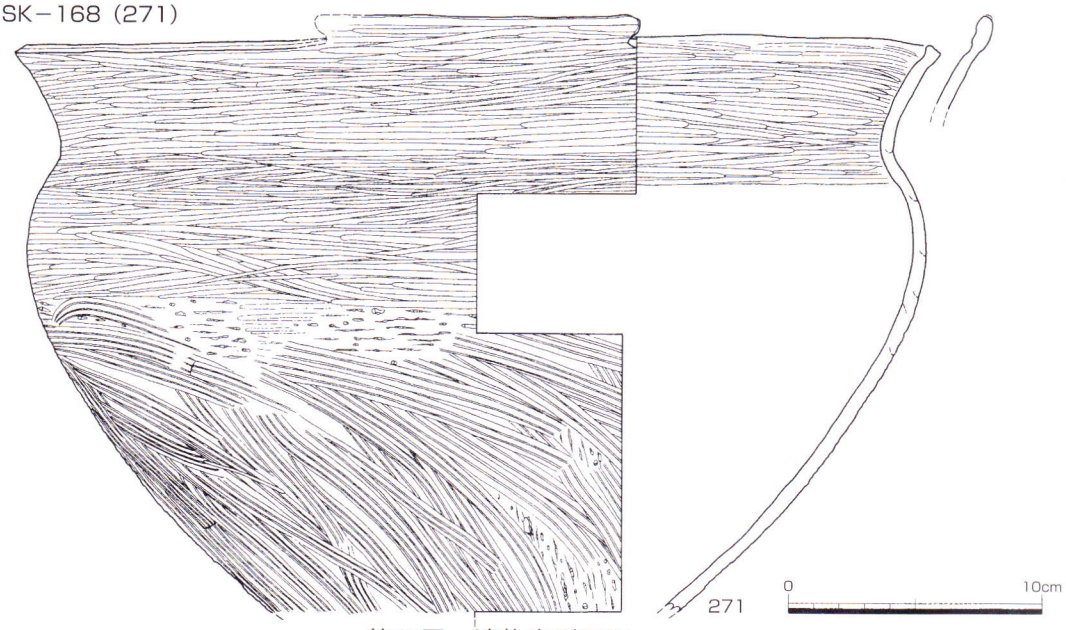


第86図　SK－152・168遺構平面図及び断面図

SK－152 (270)



SK－168 (271)



第87図　遺物実測図27

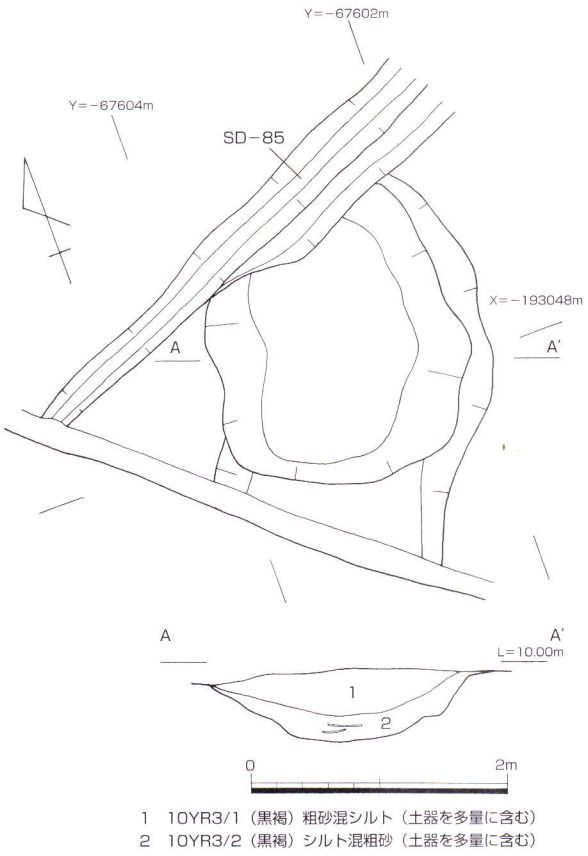
出土遺物としては、縄文時代晩期中葉の一括性の高い土器（第89～91図272～295）及び石器（第91図296～305）が遺物収納コンテナに３箱分出土した。そのうち272～286は深鉢、287は鉢、288～295及び324～326（図版57上）が浅鉢である。深鉢は、272が波状口縁で口縁端部を刻むもの、285が尖底の底部である。その他は、口頸部に括れをもつ形態のものである。これらの調整は、口頸部外面を最終的にナデ調整するものが主体となるものの、第２層から出土した280・282はヘラケズリ調整であり、また第１層から出土した283・284・286は二枚貝条痕を施すもので、284はその後さらにナデ調整を施している。体部外面の調整については、すべてヘラケズリ調整である。口頸部の文様は、273に棒状工具の押引きによる沈線が施されている他、275がヘラ状工具による連続刺突文と、そこから棒状工具による刺突文を縦方向に２列施し、その間を半截竹管状工具によるC字形の文様で埋めるものである。また276は、275と文様構成が類似するもので、半截竹管状工具によるD字形の連続刺突文を縦横に施している。これら275・276の文様構成は瀬戸内地域からの影響と考えられている。この他、274・277は同じく半截竹管状工具によるD字形の連続刺突文を施すもので、246は左方向に施している。口縁端部は、272・275・277～286が刻目を施すもので、273には認められず、276が摩滅のため不明である。

浅鉢は、緩やかに長く外反する口縁部から鋭く屈曲し体部に移行するもの（288・289）と、同じく外反する口縁部から丸味をもって移行するもの（290・291）、また短くのびる口縁部から「く」の字状に屈曲し体部に移行するもの（293～295）がある。その他、292は外反し長く伸びる口縁部の端部内面に刻目をもつものである。内外面の調整は、289～292が口頸部の内外面にヘラミガキを施すもので、また289・290の体部外面にはヘラケズリが施されている。また295が口縁部外面及び内面にヘラミガキを施し、体部外面にはヘラケズリを施すものである。288の調整は、器表面の剥離が著しく不明瞭である。

288～291・293～295の口縁端部の形状は、玉縁状に肥厚させ内側を抉るものである。そのうち290・291は幅広の台形状突起をもつもので、突起内面では前述の肥厚部分が突帯状となる。これらの他、写真図版にのみ掲載した324・325は複合突起となるものであり、また326は口縁部直下の外面に赤採された１条の沈線をめぐらすものである。

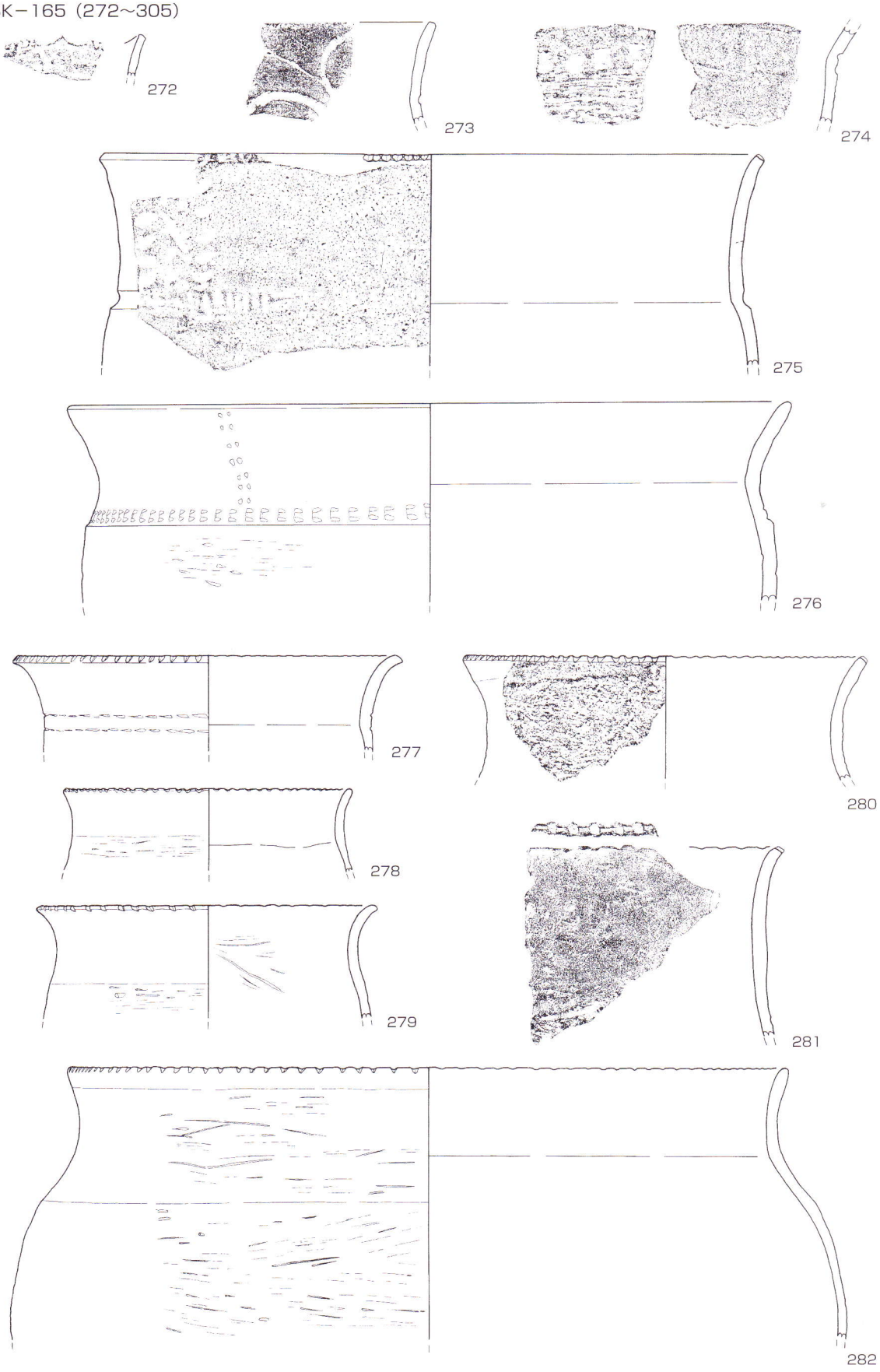
これらの縄文土器は、その特徴が滋賀里Ⅲb式（篠原式新段階）に併行するものとみられることから縄文時代晩期中葉のものと考えられる。

石器では、打製石器としてサヌカイト製の石鏃（296）や石錐（297）があり、結晶片岩製のものとして石鍬と思われるもの（298・299）が

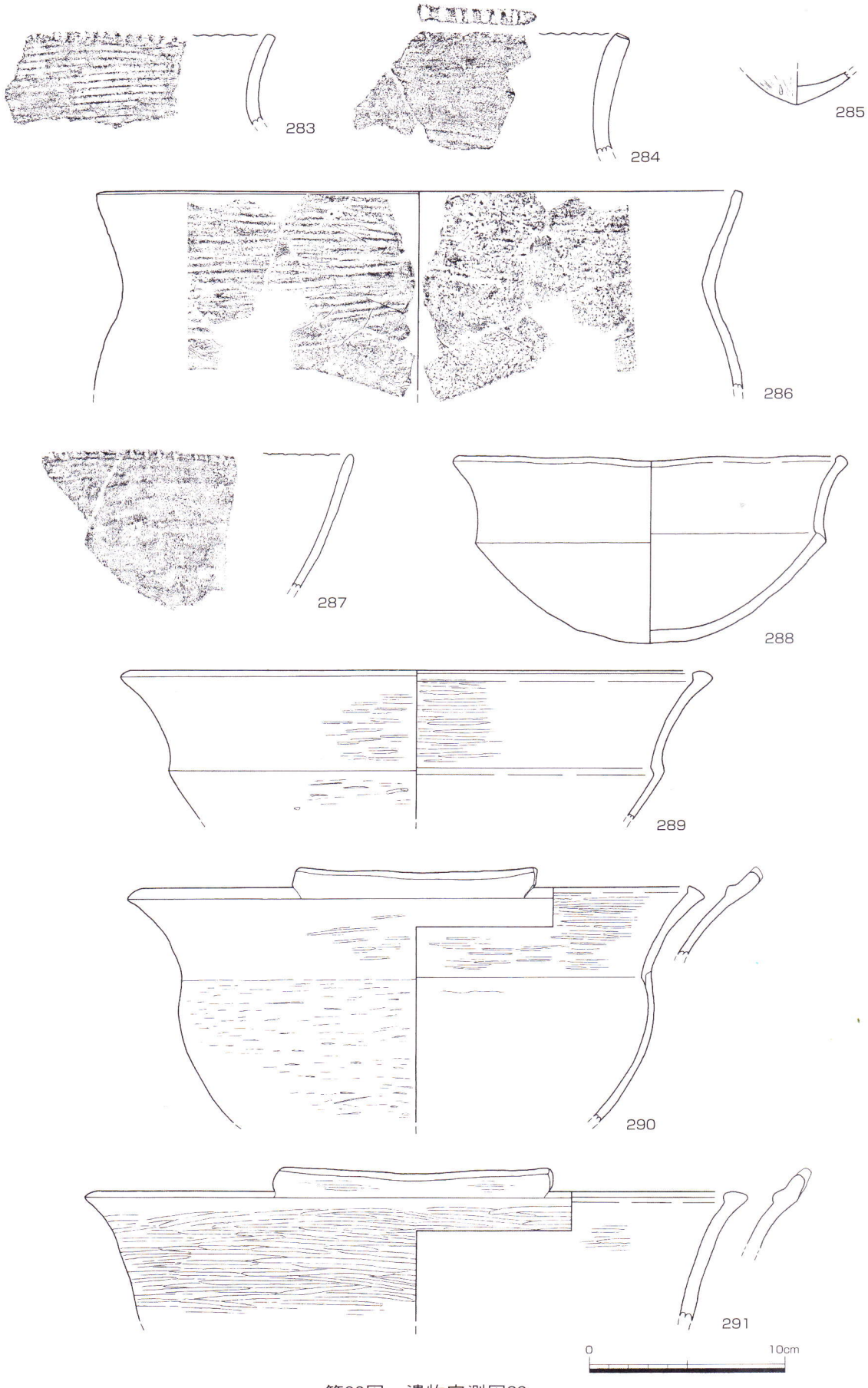


第88図　SK－165遺構平面図及び土層断面図

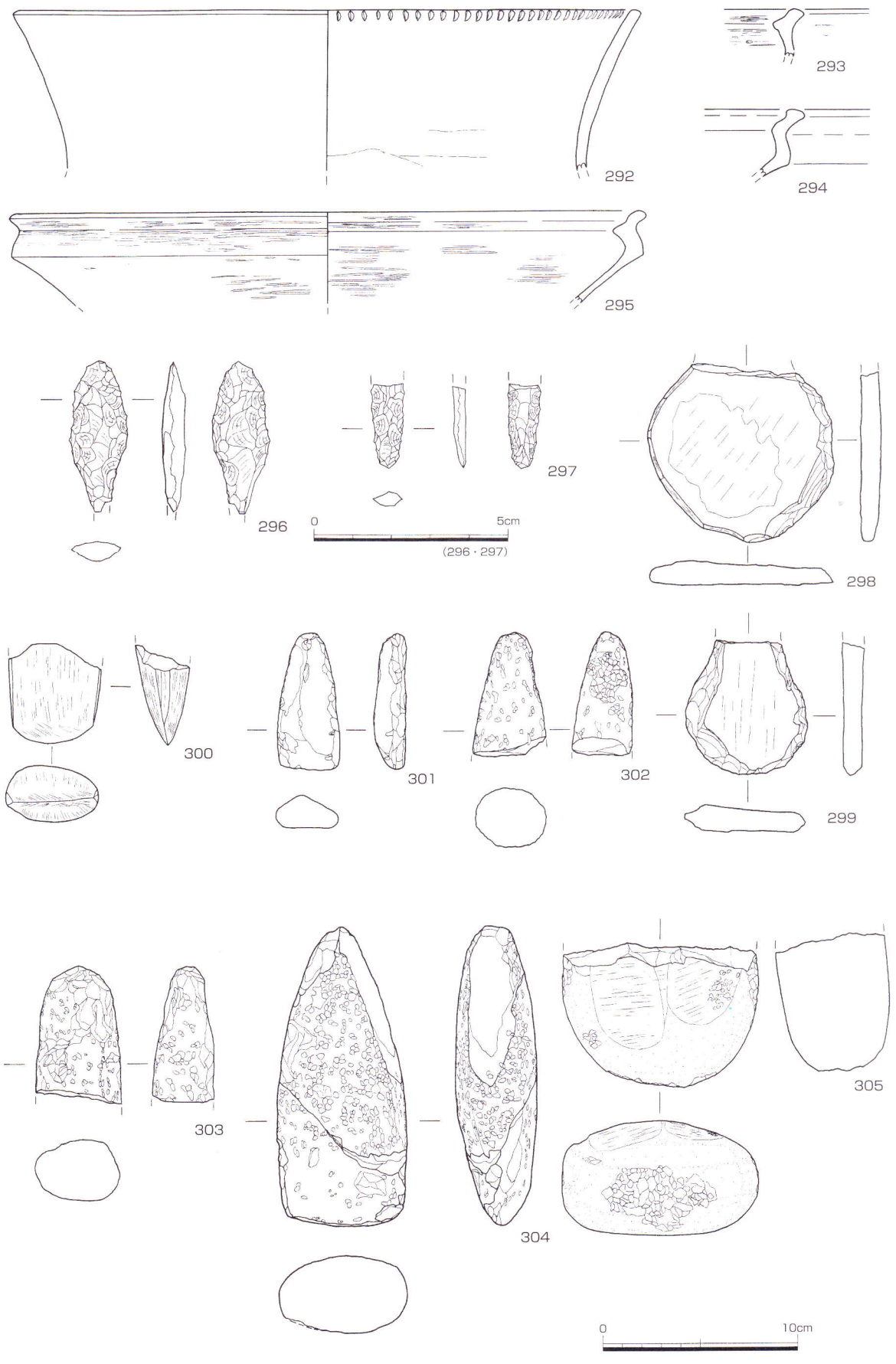
SK－165（272～305）



第89図　遺物実測図28



第90図　遺物実測図29



第91図　遺物実測図30

出土している。また磨製石器では、砂岩製の石斧（300）の他、最終成形の敲打痕が顕著に残る石斧未製品（301～304）がある。さらに礫石器としては、石材の側端部を叩石として使用し、平滑面は磨石として使用した複合石器（305）が出土している。

〔その他の縄文時代の遺構と遺物〕（第85図）

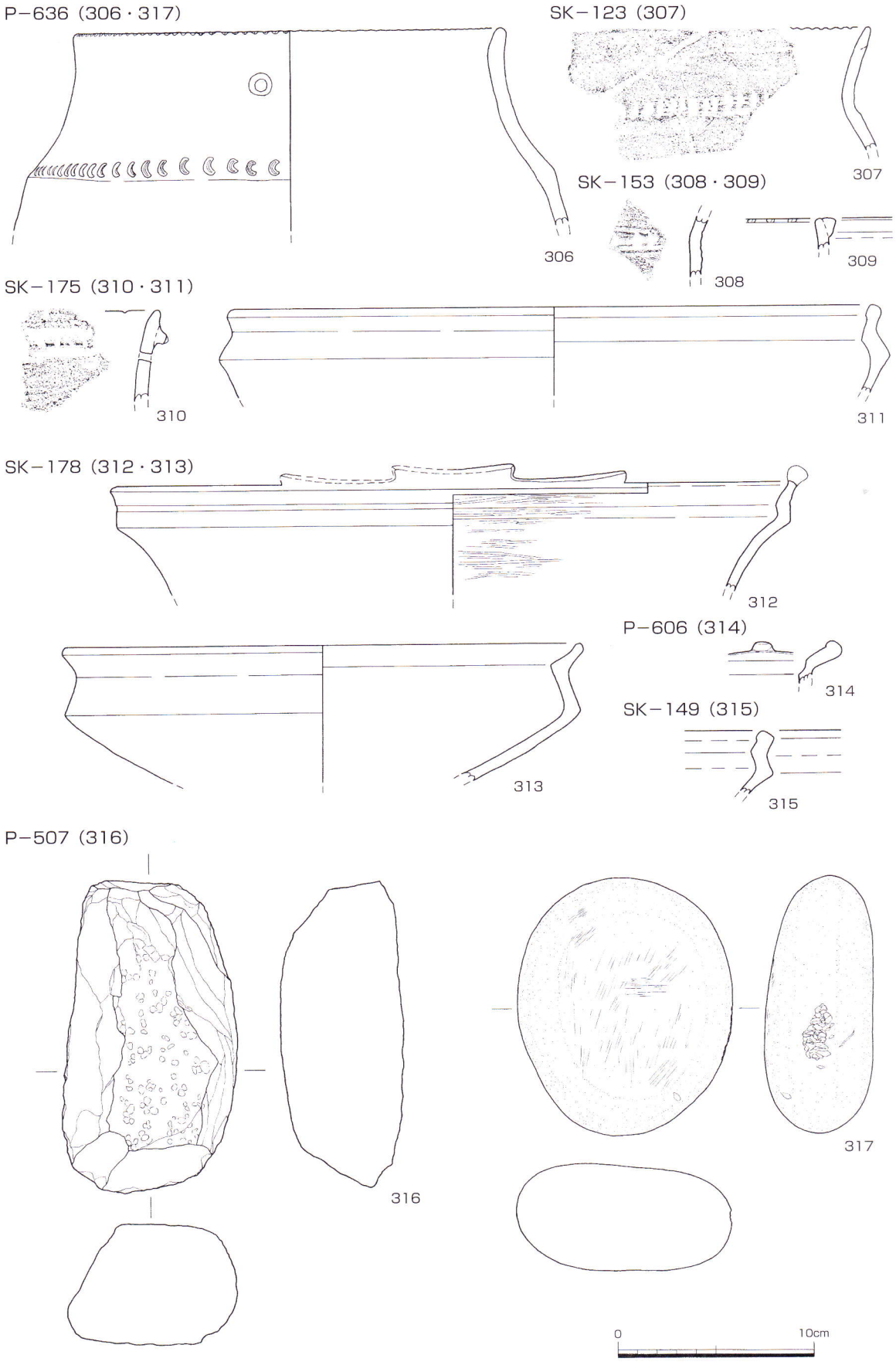
第30区の東部で検出した遺構にはSK－175・178、P－606・636がある。SK－175は、長径1.07m、短径68㎝、深さ10㎝を測るものである。遺構覆土は灰黄褐色粗砂混シルトで、覆土内から縄文時代晩期後葉の深鉢（第92図310）、晩期中葉の浅鉢（311）などが出土している。このうち310は、口縁端部直下に刻目を施す突帯をめぐらす突帯文土器で、焼成後に小さな円孔が穿たれている。SK－178は最大幅2.15m、深さ５～９㎝を測るものである。遺構覆土は灰黄褐色の粗砂混シルトで、覆土内から縄文時代晩期中葉の浅鉢（312･313）などが出土している。このうち、312は、２段に突出する台形状突起をもつものである。またP－606は長径80㎝、短径64㎝、深さ16㎝を測るもので、遺構覆土はにぶい黄褐色粗砂混シルトである。この覆土内から丸い小さな突起をもつ縄文時代晩期の浅鉢（314）などが出土している。P－636は、直径60㎝、深さ20㎝を測るものである。遺構覆土は灰黄褐色のシルト混粗砂で、覆土内から縄文時代晩期中葉の深鉢（306）や砂岩製の叩石（317）などが出土している。この深鉢は、口頸部に半截竹管状工具によるC字爪形文を施し、口縁端部に刻目をもつもので、円孔が穿たれている。

第30区の北西隅部で検出した遺構にはSK－153・149がある。は、SK－153は長径5.54m、短径3.2m、深さ４～８㎝を測るものである。遺構覆土はにぶい黄褐色シルト混粗砂で、覆土内から縄文時代晩期中葉の深鉢（第92図308）や晩期後葉の深鉢（309）が出土している。このうち308は、口頸部外面に二枚貝条痕を施し、ヘラ状工具による連続刺突文が施されるものである。また309は口縁端部を刻み、口縁端部直下に断面三角形を呈する貼付突帯をめぐらす突帯文土器である。またSK－149は、長径1.55m、短径1.1m、深さ８㎝を測るものである。遺構覆土はにぶい黄褐色粗砂混シルトであり、覆土内から縄文時代晩期中葉の浅鉢（315）が出土している。この浅鉢の外面には、赤色顔料が塗布されている。

第31区の東部で検出した遺構にはSK－123・P－507がある。SK－123は、長径1.44m、短径67㎝、深さ13～20㎝を測るものである。遺構覆土は灰黄褐色細砂混シルトで、覆土内から縄文時代晩期中葉の深鉢（第92図307）が出土している。この深鉢は、口頸部に半截竹管状工具による逆C字爪形文を施すもので、口縁端部に刻目が施されている。P－507は、長径44㎝、短径35㎝を測るものである。遺構覆土は、にぶい黄褐色の粗砂混シルトで、覆土内から砂岩製の磨製石斧未製品（316）が出土している。

〔弥生時代の遺構〕（第85図、図版34下）

第30区の東半部において検出したSD－85は幅30～90㎝、深さ25㎝を測るもので、その方向性はN－60°－Eである。遺構底面の状況は約17㎝の高低差で東から西に向かって低く傾斜する。遺構覆土は２単位に細分が可能であり、覆土内から弥生土器が出土した。よってSD－85は弥生時代の溝と考えられる。



第92図　遺物実測図31

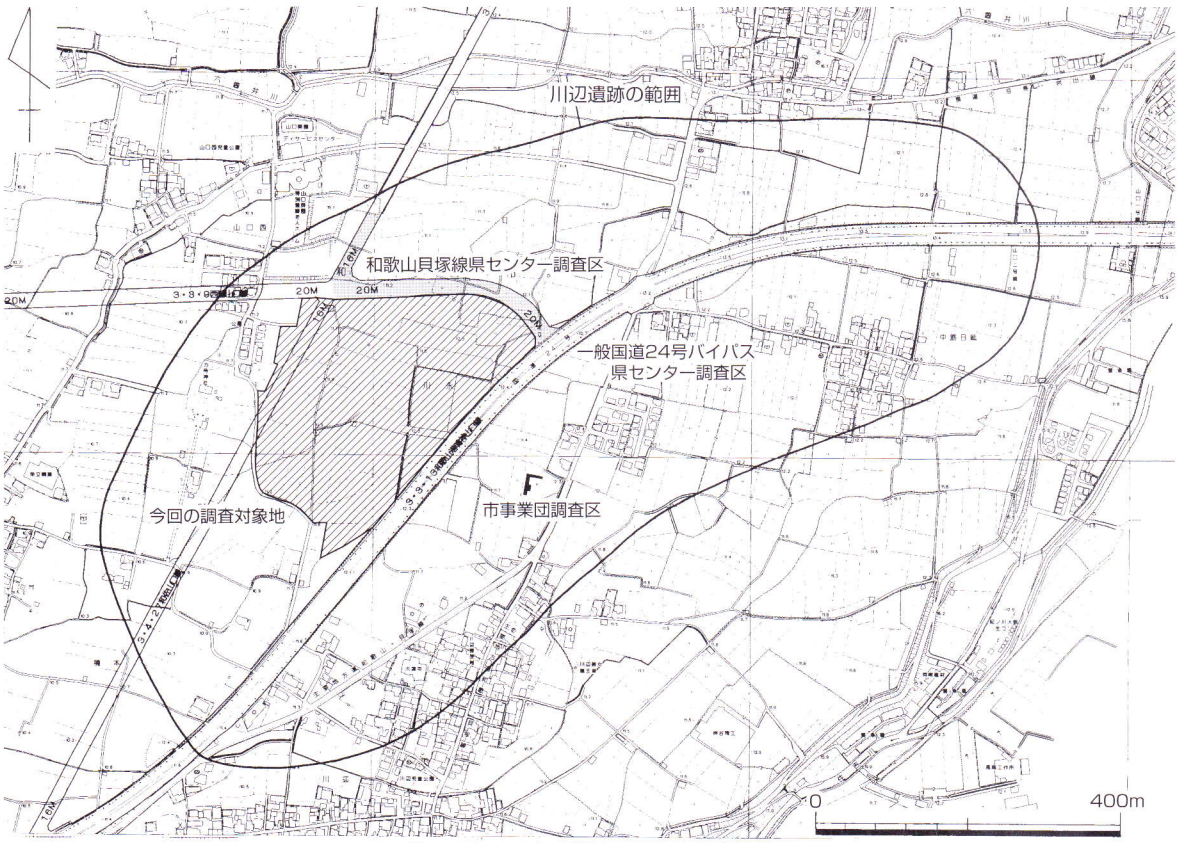
第５章　まとめ

第１節　川辺遺跡内の遺構分布について

川辺遺跡は東西約１㎞、南北約650mの広大な範囲をもち、縄文時代から中世にかけての大規模な集落遺跡として知られている（第93図）。当遺跡の調査は県センターが行った、遺跡範囲のほぼ中央部を東西に貫く形で計画された一般国道24号バイパス建設に伴う事前調査（県センター 1995年）に始まり、同じく県センターが行ったこの国道に取り付く形で計画された県道和歌山貝塚線道路改良工事に伴う発掘調査がある。また、市事業団が遺跡の実態解明を目的とした発掘調査を実施している。先述の調査成果を踏まえ、川辺遺跡内における遺構分布に関して、報告書に示されている（県センター 2005年）。しかし、同報告書でも指摘されているように広範囲にわたる遺跡範囲のなかにトレンチを入れた程度の調査範囲では、調査地とその周辺部の様相のみを明らかにしたに過ぎず、とうてい遺跡全体の把握には至っていない。

今回の調査は、上記の県センターが行った２例の調査範囲の南西部に隣接する開発計画範囲約70,000㎡を対象としたもので、事前に行った遺跡確認調査（市第２・３次確認調査）も含めて遺跡南西部における土層の堆積状況からみた旧地形の復元と遺構分布について整理を行う。

まず遺跡確認調査の結果からみた今回の対象地内における古環境の状況は、和泉山脈の南麓雄ノ山峠の谷筋から広がる扇状地形の末端部が対象地北半部にまで至っており、この扇状地を形成する砂礫層（第７層）が堆積している。また対象地南半部分は紀ノ川の沖積作用によって堆積したシルト質土（第６層）が安定した微高地部を形成する。そして、この境界部分は周囲よりやや低い微低地を形成していることを確認している。この扇状地形の裾部推定ラインを第96図に示した。なお、

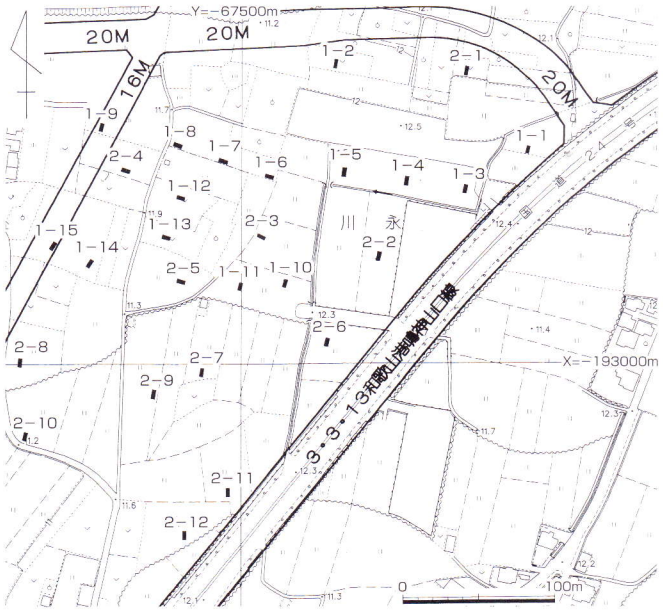


第93図　川辺遺跡の調査位置図

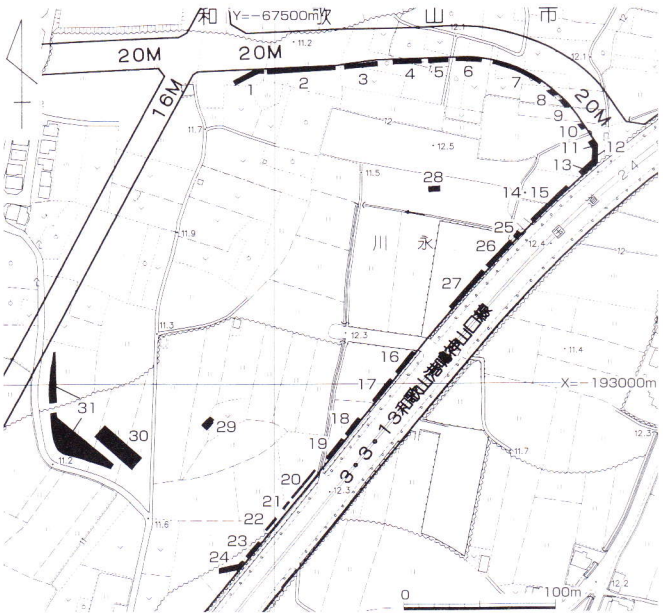
この微地形は、集落の形成にも少なからず影響を与えているとみられ、今回の発掘調査成果とともに時期的な変遷と集落の立地を以下に記述する。

1．対象地北部の様相（第95図）

第４次調査第１～13区は県センターが行った県道和歌山貝塚線・県道粉河加太線道路改良工事に伴う発掘調査の南側隣接地にあたる地点であり、扇状地上の比較的安定した地形環境に立地する。今回の第１～５区にかけては、鎌倉時代を中心とするピット列やピット群、溝や土坑などを検出し、同時期を中心とする集落域の範囲であることが明確である。この状況は、既存の分布図に示された中世の範囲が東側に広がることを示す。また第５区から東側には古墳時代初頭の庄内式併行期から布留式期にかけての竪穴住居（SB－１・７）や土坑（SK－11）があり、最東端である第12区においても遺存状態の良い竪穴住居（SB－10）も検出し、さらに第13区において検出した比較的規模の大きな溝（SD－21）が当該時期の東限と考えられる。この状況から庄内式併行期の集落範囲もやや東側に広がりをみせる様相である。また飛鳥時代の様相は、第７区から第８区にかけて検出した竪穴住居（SB－２・５・８）がその範囲内にあたり、また第12区では多量の須恵器提瓶が出土した素掘り状の井戸（SE－１）があり、さらに第13区において検出した溝群（SD－17・18）から当該期の東限も同地点と判断できる。また第12区と第13区の境界部分で検出した鎌倉時代の土葬墓（SK－19）は土葬儀礼を考える上で貴重な成果といえる。



第94図　確認調査位置図



第95図　今回の調査位置図

以上の対象地北部は安定した微高地部に形成された集落域として位置づけられる。そしてこの集落域の南限は、微高地の範囲に収まるものと考えられる。また確認調査の成果から西半部にあたる１－６～１－９区（第94図）にかけての範囲は遺構が確認されず、中世の集落域はこの地点まで及んでいないものと考えられよう。

2．対象地東部の様相（第95図）

第４次調査第14～24区及び第５次調査第

25～27区は県センターが行った一般国道24号バイパス建設に伴う事前調査の西側隣接地にあたる地点であり、先述の第13区南端部から南側に向け谷状に落ち込む窪地状の微低地となり、第16・17区周辺ではやや安定するものの第18・19区周辺は再び微低地となり、第23区以南においてようやく安定した微高地となる。

今回の第14～15区にかけては、微低地であるにもかかわらず古墳時代と弥生時代の２面の遺構面を検出し、溝や土坑などの遺構を確認した。これらの遺構の性格としては、遺物量が比較的少なく、集落域とは異なる様相であり、特に弥生時代の遺構面の広がりが今後の検討課題の一つと考えられる。

第15区の南側にあたる第５次調査として実施した第25～27区では、４面の遺構面を確認した。これらの遺構面のうち最下面にあたる第４遺構面では多数の遺構を確認し、縄文時代晩期に限定できる遺構群と考えられる。また第25～27区と関連して、その西側にあたる第６次調査第28区では、２面の遺構面を確認し、第２遺構面では層位的に縄文時代晩期の遺構とみられる溝（SD－68～70）を検出している。このことは、県センターの調査例と同じく縄文時代晩期の遺構分布がみられる地点と位置づけられる。

さらに南側にあたる第４次調査第16～24区は集落の空白域として位置づけられていた地点である。今回の第16・17区では３面の遺構面を検出し、第１遺構面において平安時代の溝１条（SD－30）、第２遺構面において古墳時代の溝４条（SD－27・29・31・33）、奈良時代の溝１条（SD－32）などを、また第３遺構面において溝３条などを検出し、明確ではないものの層位的にみて弥生時代中期頃に位置づけられるものと考えられる。そして、第18～21区の地点では前区画の第２遺構面に対応する遺構面において、前区に類似する溝群（SD－34～37）などを検出した。これらの溝群は県センターの調査区から続くもので、ほぼ東西方向に主軸をとる水路と考えられ、微低地を利用した生産域の遺構群と考えられる。

第23区から第24区にかけては、前区画の第２遺構面に対応する遺構面の標高が高くなり、微高地部を形成する状況にある。特に第24区では建物に伴うと考えられるピット群を検出し、県センターの調査で明確となっている飛鳥時代の集落域の北限を示す遺構群と考えられよう。

3．対象地南西部の様相（第95図）

第６次調査第29～31区北にかけての調査区周辺は、これまで本発掘調査例のなかった地点に位置し、今回の調査において縄文時代晩期から江戸時代の遺構を検出したことは、川辺遺跡内部における遺構分布として新しい知見を得ることができたものと言える。そのうち、今回の調査では縄文時代晩期及び飛鳥時代から奈良時代にかけての遺構や遺物についてまとまった成果が得られた。

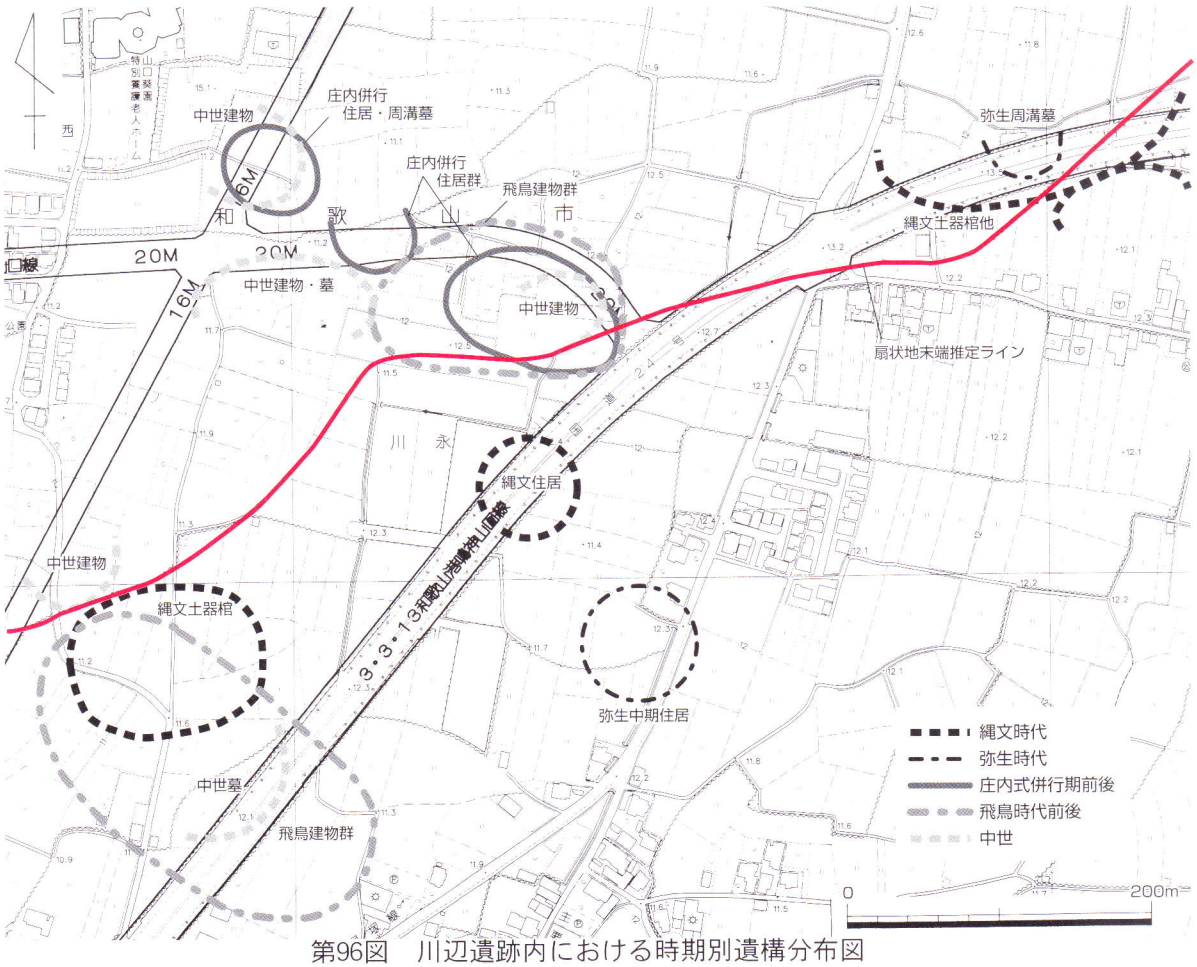
まず縄文時代の様相としては、第31区東半部及び第30区において、縄文時代晩期中葉の土器棺墓（SK－152・168）や一括性のある土器及び石器が多量に出土した土坑（SK－156）など多数の遺構群を検出した。このことは、遺跡中央部の県センター及び第５次調査において確認された縄文時代晩期集落がさらに西側に広がる可能性を示すものである。ただし、遺構の分布状況では、第31区中央部以東において土器棺墓や土坑及びピットなど、その密度が高くなり、以西では浅く不定形な土坑及びピットのみとなり、密度も低くなる傾向がある。さらに遺構覆土に含まれる遺物の含有量についても同様の傾向が指摘できる。このことは、第31区中央部に向かって遺構検出面である第６c

層が落ち込む状況と密接に関わるものとみられ、地形的に低くなる第31区中央部以西は微低地であり、縄文時代晩期集落の中心を微高地である調査地の東側に想定することができる。また東側への広がりについては、第29区においても層位的に縄文時代晩期の遺構を検出していることから、その周辺部にまで延びるものと考えられる。

また飛鳥時代では、縄文時代晩期に微低地であった第31区中央部に溝群（SD－66・71～76）が掘削され、微高地である第30・31区東部に竪穴住居（SB－11）や掘立柱建物（SH－１・２）など居住に関わる遺構群が検出される傾向がある。これらの飛鳥時代の遺構群は、県センターが行った一般国道24号バイパス南端部における飛鳥時代の遺構群がさらに西側に広がる可能性を示すものであり、第31区中央部における微低地においてその西端を想定することも可能と考えられる。

さらに奈良時代では、微低地において飛鳥時代の溝と同じ方向性をもつ前期の溝（SD－66）を検出したほか、第30区の中央部を横切り、第31区中央部の微低地において南に屈折する中期の大溝（SD－61）を検出した。この大溝はその特徴的な流路方向から、排水を目的としたものと考えられるものの、縄文時代以降の微地形に左右されることなくほぼ東西方向に掘削されており、第31区中央部東側で検出した池状遺構（SX－１）との規格性を感じさせるものである。また遺構覆土からは、県センター調査例（1995）と合わせ本遺跡２例目となる土馬が出土し、律令的な祭祀の存在を窺わせるものとして注目される。

このことから、調査地周辺では奈良時代の前期から中期にかけて飛鳥時代から続く土地利用のあり方に大きな変化を認めることができる。この要因については、今後の検討課題である。



第96図　川辺遺跡内における時期別遺構分布図

4. 遺跡内における時期別の様相（第96図）

今回の調査地における遺構の様相は先述の通りである。最後に、県センターの調査成果を踏まえ遺跡全体の時期別様相についてふれ、まとめとしたい。

まず縄文時代の状況は、遺跡中央部において晩期の竪穴住居など居住域と考えられる遺構があり、また北東部には土器棺墓など多数の遺構が検出され、縄文時代晩期集落が形成されていたことは明らかである。また今回の調査において確認した南西部でも同じく晩期段階の土器棺や多数の遺物が含まれた土坑などを検出し、新たな晩期段階の集落域を確認した。このように、晩期段階の集落形成は、扇状地の末端部を中心として形成されており、後世の微高地形成以前の状況を窺わせるものと考えられる。また遺跡中心部では、後期段階の土器の出土が認められ、遺構は見つかっていないものの後期段階の集落が存在する可能性も指摘できる。

弥生時代の様相は、中期段階の竪穴住居や方形周溝墓などが遺跡中央部から東部にかけて部分的に確認されている。また遺跡西部には遺物散布もほとんど見られない状況にある。このことは、同時期の集落の中心部が遺跡東部にあり、遺物量からみても紀ノ川南岸の太田・黒田遺跡のような拠点集落ではない一般的な集落と考えられる。また遺跡東部から出土する前期段階の遺物群は、同段階の集落の存在を窺わせるものとして重要である。

古墳時代初頭から前期段階の竪穴住居などを含む遺構分布は、遺跡北部の扇状地が形成した微高地上に限られる。また微底地部を中心として多数の溝が検出されている。このことは、微高地部である遺跡北部を居住域にし、また微底地部を生産域として利用していたものと考えられよう。

次に、飛鳥時代を中心とし、その前後の時代を含めた時期では、「川辺屯倉」との関係を考えなければならないところである。今回の調査において遺跡南西部の集落範囲が北西部に広がりを見せることが明らかとなり、南西部の微高地上には同時期の集落形成が認められる。また遺跡中央部の扇状地上でも多数の建物群が検出されている。このことは、遺跡内の微高地を中心として集落形成が行われ、多数検出されている総柱の掘立柱建物などが屯倉に繋がる遺構群とも考えられよう。

最後に、鎌倉時代を中心とした中世段階の様相は、今回の成果も含め遺跡北部の扇状地上の微高地に形成されている。また県センターの調査で確認された南西部の土葬墓群は、古代以降に形成された微高地上に形成されていることから、遺跡全体的に見て西部の微高地上にまとまりがあるものとみられる。また集落の形態として大規模な屋敷地ではなく一般的な中世集落の様相が窺われる。

以上のように、本対象地の調査は、確認調査を含めると９ヶ月間の調査期間を経て、約2,300㎡の面積の調査を行った。特に、対象地南西部における遺跡の状況は、飛鳥時代から奈良時代にかけての集落域の広がりを明確にするとともに縄文時代晩期の新たな様相も確認できたことは重要な成果であったものといえよう。

【参考文献】

『川辺遺跡発掘調査報告書』財団法人和歌山県文化財センター　1995年
「川辺遺跡発掘調査」『和歌山市内遺跡発掘調査概報－平成13年度－』和歌山市教育委員会　2003年
「川辺遺跡発掘調査」『和歌山市埋蔵文化財発掘調査年報８－平成12年度（2000年度）・13年度（2001年度）－』和歌山市教育委員会・財団法人文化体育振興事業団　2004年
『山口遺跡・川辺遺跡発掘調査報告書－県道和歌山貝塚線・県道粉河加太線道路改良事業に伴う発掘調査－』財団法人和歌山県文化財センター　2005年
「川辺遺跡第２・３次確認調査」『和歌山市内遺跡発掘調査概報－平成18年度－』和歌山市教育委員会　2003年
『歴史の道調査報告書（Ⅱ）－南海道・大和街道他－』和歌山県教育委員会　1980年

遺物観察表

凡　　例

1　遺物番号は、遺物実測図番号を示す。

2　計測値欄の（　　）は復元径・残存高・残存重量を示す。

3　残存率１／10未満は「小片」、１／20以下は「細片」とそれぞれ表記した。

4　観察表の作成にあたっては、主に以下の参考文献を参照した。

なお、縄文土器及び古代の土器に関しては、以下の参考文献の分類に基づいた型式を本文に記した。

・縄文土器

林謙作編　1996『縄紋晩期前葉－中葉の広域編年』

・弥生土器

寺沢薫・森岡秀人編　1989『弥生土器の様式と編年　－近畿編Ⅰ－』木耳社

・古墳時代の土器

財団法人大阪府文化財センター　2003『古墳出現期の土師器と実年代』

田辺昭三　1981『須恵器大成』角川書店

・古代の土器

古代の土器研究会編　1992～1994『都城の土器集成』Ⅰ～Ⅲ　真陽社

・中世の土器

中世土器研究会編　1995『概説　中世の土器・陶磁器』真陽社

・銭貨

永井久美男編　1996『日本出土銭総覧』（1996年版）兵庫埋蔵銭研究会

目　　次

表１（土器類・瓦）…… 79
表２（土製品）…… 87
表３（石器・石製品）…… 88
表４（金属器）…… 89
表５（銭貨）…… 89
表６（自然遺物）…… 89

表1　出土遺物観察表（1）

遺物番号	挿図番号	出土地区・遺構・層位	器種	計測値（cm）	形態の特徴	技法	胎土・焼成	色調	残存率	備考
1	第10図 図版37上	第2区 SD-6b	土師器 壺	底径　(3.7) 器高　(2.9)	上げ底状。摩滅が著しい。	外面　ナデ 内面　不明	胎土：粗　結晶片岩・石英・赤色軟質粒 焼成：やや軟	内：　褐色 外：　赤褐色	底部のみ残存	
2	第10図 図版37上	第2区 SD-6a	須恵器 甕	口径　11.6 器高　(4.7)	口縁端部が肥厚して内湾する。頸部外面にクシ先で描いた様な記号が1ヶ所有り。	口縁　ヨコナデ 体部外　タタキ後ナデ 体部内　当て具痕	胎土：やや粗　白色粒 焼成：良好	内外：暗灰色～淡灰色	体部以上のみ残存	
3	第10図 図版37上	第1区 SK-1	瓦器 小椀	口径　(6.8) 底径　(2.0) 器高　2.7	高台は貼付による。口縁端部が摩滅気味。	口縁　ヨコナデ 体部内　ナデ 体部外　指頭圧痕	胎土：密 焼成：良好	内外：黒灰色	1/4	
4	第10図 図版37上	第1区 P-3	瓦器 皿	口径　(9.6) 器高　(1.7)	口縁部は強いヨコナデによってシャープに仕上げる。	口縁　ヨコナデ 体部外　ナデ	胎土：密 焼成：良好	内外：灰色	1/8	
5	第10図 図版37上	第2区 P-58	土師器 皿	口径　7.4 器高　1.3	内面に成形時のヘラ状工具によるとみられる痕跡が放射状に残る。	口縁　ヨコナデ 体部外　ナデ	胎土：密　赤色軟質粒 焼成：やや軟	内外：乳褐色	完形	地鎮に使用か
6	第10図 図版37上	第2区 P-58	土師器 皿	口径　(11.4) 器高　2.4	体部中位に強いヨコナデによる稜がみられる。胎土に白色粘土の部分有り。	口縁　ヨコナデ 底部　指頭圧痕	胎土：密　赤色軟質粒 焼成：やや軟	内外：淡赤褐色	1/4	地鎮に使用か
7	第10図 図版37上	第2区 第4層	中国製 白磁 皿	底径　(7.0) 器高　(1.5)	内底面にヘラ切りによる稜が巡る。	内外　施釉	胎土：緻密 焼成：良好	内外：白色	底部 1/5	
8	第14図 図版37下	第6区 SB-7	土師器 壺 複合口縁	口径　(28.0) 器高　(6.8)	口縁外端面に竹管文、屈折部に円形浮文と竹管文によって加飾。摩滅が著しい。	口縁　ヨコナデ？	胎土：粗　結晶片岩・赤色軟質粒 焼成：軟	内：　黒褐色 外：　赤褐色	口縁 1/4	
9	第14図 図版37下	第6区 SB-7	土師器 鉢	口径　(15.0) 器高　(4.2)	全体的に剥離気味。	口縁　ヨコナデ 体部内　不明 体部外　ミガキ？	胎土：やや粗　結晶片岩・赤色軟質粒 焼成：やや軟	内外：淡褐色	小片	
10	第14図 図版37下	第6区 SB-7	土師器 高杯	口径　(20.6) 器高　(4.8)	大きく屈折し、外反しながら長く伸びる口縁部を形成。内面は摩滅気味。	口縁　ヨコナデ 体部内　不明 体部外　ヘラミガキ	胎土：やや粗　赤色軟質粒 焼成：やや軟	内外：赤褐色	杯部 1/6	
11	第14図 図版37下	第6区 SB-7	土師器 壺？	底径　(5.6) 器高　(5.7)	上げ底状。	体部内　ナデ 体部外　タタキ後ナデ 底部　指頭圧痕	胎土：やや粗　結晶片岩・赤色軟質粒 焼成：良好	内外：暗褐色	底部 1/2	
12	第14図 図版37下	第6区 SB-7	土師器 壺	底径　3.2 器高　(1.8)	上げ底状。内面が剥離著しい。	体部外　ヘラミガキ 底部　ヨコナデ	胎土：やや粗　結晶片岩・石英 焼成：軟	内外：淡赤褐色	底部のみ残存	
14	第14図 図版38上	第6区 SB-1	土師器 小型鉢	口径　(10.0) 器高　(1.5)	精製器種。丸底になるものか。	口縁　ヨコナデ 体部内　ヨコナデ 体部外　ヘラミガキ	胎土：密　結晶片岩・赤色軟質粒 焼成：良好	内外：黒色	口縁 小片	
15	第14図 図版38上	第6区 SB-1 壁溝	土師器 壺	体径　(12.2) 器高　(9.0)	体部は球体。	体部内　ナデ 体部外　ヘラミガキ	胎土：やや粗　結晶片岩・赤色軟質粒 焼成：良好	内外：淡赤褐色	体部 1/2	
16	第14図 図版38上	第6区 SK-11 第1層	土師器 壺	口径　(11.4) 器高　(5.3)	頸部外面に接合痕が顕著に残り、接合時の指頭圧痕が観察できる。	口縁　ヨコナデ 体部内　ナデ 体部外　タタキ後ヘラミガキ	胎土：密　結晶片岩・赤色軟質粒 焼成：良好	内外：赤褐色	口縁 1/2	
17	第14図 図版38上	第6区 SK-11 第1層	土師器 鉢	口径　9.6 器高　4.8	底部に粗いヘラケズリ痕を残す。	口縁　ヨコナデ 体部内　ナデ 体部外　ヘラミガキ 底部　ヘラケズリ	胎土：密 焼成：良好	内外：淡褐色	ほぼ完形	
18	第14図 図版38上	第6区 SK-11 第1層	土師器 壺	底径　4.0 器高　(3.0)	平底。外底面の1/3に黒斑有り。	体部内　ナデ 体部外　ナデ 底部　ナデ	胎土：密　赤色軟質粒 焼成：良好	内：　暗灰褐色 外：　淡褐色	底部のみ残存	
19	第14図 図版38上	第6区 SK-11 第1層	土師器 壺？	底径　3.4 器高　(3.8)	やや上げ底状。底部周辺にのみタタキ痕が残る。	体部内　ナデ 体部外　タタキ後ナデ 底部　ナデ	胎土：やや粗　結晶片岩・石英 焼成：良好	内外：暗赤褐色	体部下半のみ残存	
20	第14図 図版38上	第6区 SK-11 第1層	土師器 鉢？	底径　7.6 器高　(4.6)	全体的に剥離が著しい。	脚部内　不明 脚部外　不明	胎土：粗　結晶片岩 焼成：軟	内外：灰褐色	脚部のみ残存	
21	第14図 図版38下	第4区 SD-25	須恵器 杯蓋	口径　(12.2) 器高　(2.0)	天井部の回転ヘラケズリは1/2程度。つまみは欠失。	口縁　ヨコナデ 体部内　ヨコナデ 天井部　ヘラケズリ	胎土：密 焼成：良好	内外：淡灰色	1/4	
22	第14図 図版38下	第4区 第4層	須恵器 杯蓋	口径　(10.4) 器高　(1.4)	かえり部は肥厚させて丸くおさめている。	口縁　ヨコナデ	胎土：密 焼成：良好	内外：淡灰色	小片	
23	第14図 図版38下	第4区 第4層	須恵器 杯蓋	径　(13.5) つまみ径　1.9 器高　(1.6)	偏平なつまみを有する。天井残存部の大半は回転ヘラケズリ。	つまみ　ヨコナデ 体部内　ヨコナデ 天井部　ヘラケズリ	胎土：密　黒色粒・白色粒 焼成：良好	内外：淡灰色	1/4	
24	第14図 図版38下	第4区 第4層	須恵器 杯身	口径　(13.4) 器高　(3.1)	口縁部は外反しながらシャープに仕上げる。	口縁　ヨコナデ	胎土：密　黒色粒・白色粒 焼成：良好	内外：灰色	1/6	
25	第14図 図版38下	第4区 第4層	須恵器 杯身	口径　(11.2) 器高　(3.0)	口縁部は強いヨコナデによってシャープに仕上げる。	口縁　ヨコナデ 体部内　ヨコナデ 体部外　ヨコナデ	胎土：密　白色粒 焼成：良好	内外：暗灰色	1/8	
26	第14図 図版38下	第4区 第4層	土師器 杯	口径　(15.6) 器高　(2.6)	口縁端部を内側に肥厚させて丸くおさめている。全体にヒビ割れ有り。	口縁　ヨコナデ 体部内　ヨコナデ 体部外　ヘラミガキ	胎土：密　白色粒 焼成：やや軟	内外：淡赤褐色	小片	
27	第14図 図版38下	第4区 第4層	土師器 壺	口径　(18.2) 器高　(3.1)	口縁端部を内側にやや肥厚させて丸くおさめている。内面には放射状の暗文が観察できる。	口縁　ヨコナデ 体部内　ヨコナデ 体部外　ヘラミガキ	胎土：密 焼成：良好	内外：赤褐色	細片	
30	第17図 図版39上	第7区 第5層	縄文土器 深鉢	器高　(3.1)	口縁外端面に粘土紐を貼付け、強いヨコナデによる沈線の上・下端部に刻み目を施している。	口縁　ヨコナデ	胎土：粗 焼成：やや軟	内：　淡褐色 外：　暗褐色	細片	
31	第17図 図版39上	第7区 第5層	弥生土器 壺？	底径　(7.0) 器高　(2.7)	平底。胎土に混和材と考えられる砂粒を多量に含む。摩滅気味。	底部内　不明 底部外　不明	胎土：極めて粗　結晶片岩・石英 焼成：軟	内外：赤褐色	底部 1/3	
32	第17図 図版39上	第7区 第5層	土師器 壺	口径　(13.3) 器高　(4.8)	大きく外反する口縁部は短く、全体に肥厚させている。	口縁　ヨコナデ 頸部内　ヘラミガキ 体部外　ヘラミガキ？ 体部内　ナデ	胎土：やや粗　結晶片岩・赤色軟質粒 焼成：良好	内外：赤褐色	口縁 1/6	
33	第17図 図版39下	第7区 第5層	土師器 甕	口径　(19.8) 器高　(4.6)	口縁部の肥厚は比較的少ない。	口縁　ヨコナデ 体部内　不明 体部外　ハケ	胎土：やや粗　石英 焼成：やや軟	内外：淡褐色	口縁 1/8	
34	第17図 図版39下	第7区 第5層	土師器 高杯 有段	器高　(3.8)	剥離気味。	杯上位　ヨコナデ 杯部内　不明 杯部外　ヘラミガキ？	胎土：やや粗　結晶片岩・赤色軟質粒 焼成：やや軟	内：　淡褐色 外：　淡赤褐色	杯部 1/4	
35	第17図 図版39上	第7区 第5層	土師器 高杯	器高　(6.4)	脚部は大きく屈折し開く。下半部に穿たれた円孔は径9㎜で数は不明。	脚部内　ナデ 脚部外　ハケ	胎土：やや粗　結晶片岩・赤色軟質粒 焼成：やや軟	内外：赤褐色	脚部上位のみ残存	
36	第17図 図版39下	第7区 第5層	土師器 甕	底径　4.8 器高　(2.3)	ひずみが著しい。平底の底面は平滑。	体部内　ナデ 体部外　タタキ 底部　ナデ？	胎土：やや粗　赤色軟質粒 焼成：良好	内外：淡赤褐色	底部のみ残存	
37	第17図 図版39下	第7区 第5層	土師器 鉢	底径　(2.9) 器高　(2.7)	平底。外面にはナデ調整に先行するハケ状の痕跡が残る。内面のナデは板状工具による。	体部内　ナデ 体部外　ナデ 底部　ナデ	胎土：やや粗　結晶片岩・赤色軟質粒 焼成：良好	内：　灰褐色 外：　黒褐色	底部 1/2	
38	第17図 図版39下	第7区 第5層	土師器 杯	口径　(12.6) 器高　(4.5)	肥厚しながらのびる口縁部は端部に至り外反する。剥離著しい。	口縁　ナデ? 体部内　不明 体部外　不明	胎土：やや粗 焼成：軟	内外：淡褐色	口縁 1/8	

表1　出土遺物観察表（2）

遺物番号	挿図番号	出土位置	器種	法量（cm）	形態の特徴	技法の特徴	胎土・焼成	色調	残存率	備考
39	第17図 図版39下	第7区 第5層	土師器 把手	長さ　6.0 幅　4.2	手づくね成形。接合方法は突起部のみ差し込み。堝の可能性が考えられる。	全面　ナデ 指頭圧痕	胎土：粗　結晶片岩・石英・赤色軟質粒 焼成：良好	外：　淡赤褐色	把手部のみ残存	
40	第17図 図版39下	第7区 第5層	土師器 把手	長さ　5.8 幅　4.8	手づくね成形。接合方法は基部全体の差し込み。堝の可能性が考えられる。摩滅気味。	全面　ナデ 指頭圧痕	胎土：やや粗　結晶片岩・赤色軟質粒 焼成：やや軟	外：　淡赤褐色	把手部のみ残存	
41	第17図 図版39下	第7区 第5層	須恵器 杯蓋	口径　(11.2) 器高　(3.2)	器高が比較的高い形状。	口縁　ヨコナデ	胎土：密　黒色粒・白色粒 焼成：良好	内：　灰色 外：　暗灰色	口縁 1/6	
42	第17図 図版39下	第7区 第5層	須恵器 杯蓋	口径　(13.5) 内径　(11.5) 器高　(2.2)	天井部の回転ヘラケズリは1/2程度。つまみは欠失。	口縁　ヨコナデ 体部内　ヨコナデ 天井部　ヘラケズリ	胎土：密 焼成：良好	内：　灰色 外：　灰色～淡灰色	1/4	
43	第17図 図版39上	第7区 第5層	須恵器 杯身	口径　(9.6) 器高　(2.8)	内傾する口縁部は比較的肉厚。	口縁　ヨコナデ 体部内　ヨコナデ 体部外　ヨコナデ	胎土：密 焼成：良好	内外：灰色	口縁 1/3	
44	第17図 図版39上	第7区 第5層	須恵器 杯身	口径　(11.2) 器高　(2.7)	全体的に薄手でシャープに仕上げている。	口縁　ヨコナデ 体部内　ヨコナデ 体部外　ヨコナデ	胎土：密 焼成：良好	内外：灰色	口縁 1/6	
45	第17図 図版39下	第7区 第5層	須恵器 鉢	口径　(25.7) 器高　(12.4)	極めて軟質焼成。全体的に摩滅気味。	口縁　ヨコナデ 体部内　ヨコナデ 体部外　ヨコナデ	胎土：密 焼成：軟	内外：乳褐色	体部 1/8	
47	第21図 図版40上	第7区 SB-2 第1層	須恵器 杯身	口径　(12.2) 器高　(3.2)	内傾する口縁部は肥厚させて丸くおさめている。	口縁　ヨコナデ 体部内　ヨコナデ 体部外　ヨコナデ 底部　ヘラケズリ	胎土：密　白色粒 焼成：良好	内外：淡灰色	1/4	
48	第21図 図版40上	第7区 SB-2 第1層	土師器 甕	口径　(26.7) 器高　(5.8)	肉厚な体部からのびる口縁部は短く、シャープに仕上げている。全体的に摩滅気味。	口縁　ヨコナデ? 体部内　不明 体部外　不明	胎土：やや粗　石英・赤色軟質粒 焼成：やや軟	内外：乳褐色	小片	
49	第21図 図版40上	第7区 SB-2 第1層	土師器 高杯	杯径　(13.4) 器高　(8.8)	杯部は緩やかな稜をもつ。脚部は屈折して大きく開く。杯中央にヘラ状工具によるかき取り痕が観察できる。	杯部内　ナデ 杯部外　不明 脚部内　しぼり目・ナデ 脚部外　ヘラミガキ?	胎土：やや粗　石英・赤色軟質粒・長石 焼成：やや軟	内外：淡褐色	1/6	
50	第21図 図版40下	第7区 SB-5 第2層	須恵器 杯蓋	口径　(11.2) 器高　(3.3)	口縁部は直立気味でシャープに仕上げている。天井部の回転ヘラケズリは1/2程度。	口縁　ヨコナデ 体部内　ヨコナデ 天井部　ヘラケズリ	胎土：密　石英 焼成：良好	内外：淡灰色	1/4	
51	第21図 図版40下	第7区 SB-5 第1層	須恵器 杯蓋	口径　(11.2) 器高　3.3	天井部の回転ヘラケズリは1/2程度。	口縁　ヨコナデ 体部内　ヨコナデ 天井部　ヘラケズリ	胎土：密　黒色粒・白色粒 焼成：良好	内：　灰白色 外：　淡灰色	1/4	
52	第21図 図版40下	第7区 SB-5 第2層	須恵器 杯身	口径　10.5 器高　4.0	口縁部は直立気味でシャープに仕上げている。底部の回転ヘラケズリは2/3程度で後ナデ消し。	口縁　ヨコナデ 体部内　ヨコナデ 底部　ヘラケズリ	胎土：密　白色粒 焼成：良好	内：　暗灰褐色 外：　暗灰色	2/3	
53	第21図 図版40下	第7区 SB-5 第1層	須恵器 杯身	口径　(11.0) 器高　(3.1)	口縁部は内傾気味でシャープに仕上げている。底部の回転ヘラケズリは1/2程度で後ナデ消し。	口縁　ヨコナデ 体部内　ヨコナデ 底部　ヘラケズリ	胎土：密　長石 焼成：良好	内外：淡灰色	1/4	
54	第21図 図版40上	第7区 SB-5 第2層	須恵器 鉢	口径　(7.7) 器高　(8.1)	底部はヘラ切り未調整。外底面及びその周囲に自然釉が付着。	体部内　ヨコナデ 体部外　ヨコナデ 底部　ヘラ切り	胎土：密 焼成：良好	内：　灰白色 外：　淡灰褐色	下半部のみ残存	
55	第21図 図版40上	第7区 SB-5 第2層	須恵器 甕	口径　(16.2) 器高　(6.2)	口縁端部は肥厚させて丸くおさめている。	口縁　ヨコナデ 体部内　当て具痕 体部外　タタキ後回転カキメ	胎土：密 焼成：軟（瓦質に近い）	内：　灰白色 外：　灰白色～灰色	口縁 1/3	
56	第21図 図版40下	第7区 SB-5 第1層	土師器 甕	口径　(17.6) 器高　(4.7)	大きく外反する口縁部は中位で肥厚させている。剥離気味。	口縁　ヨコナデ 頸部内　ヨコハケ 体部内　ナデ 体部外　ハケ	胎土：やや粗　結晶片岩・赤色軟質粒 焼成：やや軟	内外：淡褐色	口縁 1/4	
57	第21図 図版40下	第7区 SB-5 第2層	土師器 甕	口径　(27.9) 器高　(9.5)	口縁部全体が肥厚する。剥離が著しい。	口縁　ヨコナデ 体部内　不明 体部外　ハケ	胎土：粗　結晶片岩・石英・赤色軟質粒 焼成：軟	内外：赤褐色	口縁 1/8	
58	第25図 図版41上	第8区 SB-8	土師器 甑	口径　(20.6) 器高　(6.5)	体部から外反気味に延びる口縁部は端部に至りやや内傾し丸くおさめている。一部剥離気味。	口縁　ヨコナデ 体部内　ヨコハケ 体部外　タテハケ	胎土：粗　赤色軟質粒・石英 焼成：やや軟	内外：赤褐色	口縁 1/8	
59	第25図 図版41上	第8区 SD-24	須恵器 甕	口径　(21.3) 器高　(6.5)	強いヨコナデによって外端面に稜をなす。極めて軟質焼成のため全体が摩滅。	口縁　不明 体部内　不明 体部外　不明	胎土：密　黒色粒 焼成：軟	内外：灰白色	口縁 1/4	
60	第25図 図版41上	第8区 第5層	須恵器 杯蓋	口径　(11.6) 器高　3.6	天井部の回転ヘラケズリは2/3程度。	口縁　ヨコナデ 体部内　ヨコナデ 体部外　ヘラケズリ	胎土：密　長石 焼成：軟	内：　淡赤灰色 外：　灰白色	1/2	
61	第25図 図版41上	第8区 第5層	須恵器 甕	口径　(15.6) 器高　(5.2)	外反する口縁端部は上下に肥厚する。	口縁　ヨコナデ 体部内　当て具痕 体部外　ナデ	胎土：密 焼成：やや軟	内外：黄褐色	口縁 1/8	
62	第29図 図版41下	第12区 SB-10 第2層	土師器 壺	口径　(19.8) 器高　(4.3)	口縁外端面に刻み目、上端面に波状文、外面屈折部にクシ描直線文を施している。全体的に摩滅気味。	口縁　不明	胎土：密　石英 焼成：軟	内：　黄褐色 外：　淡赤褐色	口縁 1/8	
63	第29図 図版41下	第12区 SB-10 第2層	土師器 壺	口径　(17.0) 器高　(4.1)	頸部にクシ描直線文の痕跡。外面に粘土紐の接合痕が観察できる。	口縁　ヨコナデ?	胎土：粗　結晶片岩・赤色軟質粒 焼成：やや軟	内：　淡赤褐色 外：　赤褐色	口縁 1/4	
64	第29図 図版41下	第12区 SB-10 ホ	土師器 壺	口径　(14.5) 器高　(4.7)	口縁上端部が剥落して欠失。比較的シャープな作り。	口縁　ヨコナデ	胎土：やや粗　石英 焼成：良好	内外：淡灰褐色	口縁 小片	
65	第29図 図版41下	第12区 SB-10 P-218	土師器 壺 複合口縁	口径　(20.8) 器高　(4.6)	口縁外端面下部に円形浮文を貼付け竹管文によって加飾している。同一の個体破片がSB-10第2層からも出土。	口縁内　ヘラミガキ 口縁外　ヨコナデ	胎土：密　結晶片岩・石英・赤色軟質粒 焼成：良好	内外：淡赤褐色	口縁 1/4	
66	第29図 図版41下	第12区 SB-10 第2層	土師器 壺 複合口縁	口径　(22.4) 器高　(4.3)	全体的に摩滅著しい。	口縁　不明	胎土：やや粗　石英・赤色軟質粒 焼成：やや軟	内外：淡黄褐色	口縁 1/6	
67	第29図 図版41下	第12区 SB-10 第2層	土師器 鉢	体径　(11.2) 底径　3.8 器高　(7.0)	同一個体と考えられる口縁部破片が同一層から出土している。	体部内　不明 体部外　タタキ 底部　ナデ?	胎土：密　結晶片岩・石英・赤色軟質粒 焼成：軟	内外：淡赤褐色	体部 1/2	
68	第29図 図版42上	第12区 SB-10 第2層	土師器 小型器台	底径　7.8 器高　(6.2)	脚部は短く内傾気味に接地する。中央部に穿たれた円孔は径11mmで4ヶ所。	脚部内　ナデ 脚部外　ナデ	胎土：密　赤色軟質粒 焼成：良好	内外：淡赤褐色	脚部 3/4	
69	第29図 図版42上	第12区 SB-10 第2層	土師器 高杯	器高　(8.9)	大きく開く脚下部に円孔が穿たれていた痕跡が残る。	杯内　ミガキ？ 脚部内　不明 脚部外　不明	胎土：密 焼成：軟	内：　褐色 外：　赤褐色	脚柱部のみ残存	
70	第29図 図版42上	第12区 SB-10 P-218	土師器 壺 底部	底径　4.5 器高　(2.1)	平底。比較的大振りの砂粒を含む。	体部内　ナデ・ハケ 体部外　ヘラミガキ 底部　ナデ	胎土：やや粗　結晶片岩・石英 焼成：良好	内：　黒褐色 外：　赤褐色	底部のみ残存	
71	第29図 図版42上	第12区 SB-10 第2層	土師器 壺 底部	底径　4.3 器高　(2.5)	平底。比較的大振りの砂粒を含む。外面に黒褐色の黒斑がある。内面にヘラ状工具による掻き取り痕が残る。	体部内　ナデ 体部外　タタキ後ナデ 底部　ナデ	胎土：やや粗　石英・赤色軟質粒 焼成：良好	内：　淡灰褐色 外：　赤褐色	底部のみ残存	
72	第29図 図版42上	第12区 SB-10 第2層	土師器 有孔鉢	底径　(4.2) 器高　(3.6)	上げ底の底部中央に径11mmの円孔が穿たれている。	体部内　ナデ 体部外　ナデ・指頭圧痕 底部　ナデ	胎土：密　長石・赤色軟質粒 焼成：良好	内外：淡赤褐色	底部 1/2	

表1　出土遺物観察表（3）

遺物番号	挿図番号	出土位置	器種	法量（cm）	形態の特徴	技法の特徴	胎土・焼成	色調	残存率	備考
73	第29図 図版42上	第12区 SB-10 第2層	土師器 壺 底部	底径　4.3 器高　(2.2)	平底。	体部内　ナデ 体部外　タタキ後ナデ 底部　ナデ	胎土：やや粗　結晶片岩・石英・赤色軟質粒 焼成：良好	内：　褐色 外：　赤褐色	底部のみ残存	
74	第29図 図版42上	第12区 SB-10 第2層	土師器 甕 底部	底径　4.5 器高　(1.7)	外底面中央部がやや凹む。	体部内　板ナデ 体部外　タタキ 底部　ナデ	胎土：密　結晶片岩・長石・赤色軟質粒 焼成：良好	内：　淡褐～黒褐色 外：　暗赤褐色	底部のみ残存	
75	第29図 図版42下	第12区 SE-1 第1a層	土師器 壺	口径　(14.2) 器高　(3.7)	頸部は短く、大きく外反して口縁部を形成する。	口縁　ヨコナデ	胎土：やや粗　結晶片岩・石英・赤色軟質粒 焼成：良好	内外：赤褐色	口縁 1/4	SB-10からの混入？
76	第29図 図版42下	第12区 SE-1 第1a層	土師器 壺 複合口縁	口径　(18.0) 器高　(4.0)	全体的に摩滅が著しく、口縁外端面下部に円形浮文の痕跡のみが残る。	口縁　不明	胎土：やや粗　結晶片岩・石英・赤色軟質粒 焼成：軟	内外：淡褐色	口縁 1/8	SB-10からの混入？
77	第29図 図版42下	第12区 SE-1 第1a層	土師器 壺 底部	底径　3.2 器高　(2.4)	外底面中央部がやや凹む。外面に黒斑の痕跡が残る。	体部内　ナデ 体部外　不明 底部　ナデ？	胎土：やや粗　石英・赤色軟質粒 焼成：良好	内：　淡褐色 外：　乳褐色	底部のみ残存	SB-10からの混入？
78	第29図 図版42下	第12区 SE-1 第1a層	土師器 壺 底部	底径　4.0 器高　(2.3)	上げ底状。底部下半に成形時のタタキ痕が残る。	体部内　ナデ 体部外　ナデ 底部　ナデ	胎土：密　赤色軟質粒 焼成：良好	内外：淡褐色	底部のみ残存	SB-10からの混入？
79	第29図 図版42下	第12区 SE-1 第1a層	土師器 甕	底径　4.0 器高　(6.6)	外面に煤が付着。外底面に繊維状の圧痕が残る。	体部内　ナデ 体部外　タタキ 底部　ナデ	胎土：密　結晶片岩 焼成：良好	内：　淡褐色 外：　暗褐色	体部下半 1/2	SB-10からの混入？
80	第29図 図版42下	第12区 SE-1 第1a層	土師器 鉢 底部	底径　3.4 器高　(1.9)	平底。全体的に摩滅が著しい。	体部内　ハケ？ 体部外　不明 底部　不明	胎土：密　赤色軟質粒 焼成：軟	内外：淡赤褐色	底部のみ残存	SB-10からの混入？
81	第29図 図版42下	第12区 SE-1 第1a層	土師器 壺 底部	底径　(3.0) 器高　(3.1)	平底。体部は丸みを帯びる。	体部内　ハケ・ナデ 体部外　ナデ 底部　ナデ	胎土：やや粗　長石・赤色軟質粒 焼成：良好	内外：淡赤褐色	底部 1/2	SB-10からの混入？
82	第29図 図版42下	第12区 SE-1 第1a層	土師器 高杯 脚部	底径　(12.0) 器高　(2.5)	脚端部は大きく屈折し接地する。下半部に穿たれた円孔は径11㎜で7ヶ所。さらに上段にも円孔の痕跡が確認できる。	脚部内　ヘラケズリ後ナデ 脚部外　ミガキ	胎土：密 焼成：良好	内外：淡褐色	脚部 1/6	SB-10からの混入？
83	第30図 図版43上	第12区 SE-1 第1a層	須恵器 杯蓋	口径　(15.1) 器高　4.1	口縁部は直立気味でシャープに仕上げている。天井部の回転ヘラケズリは2/3程度。	口縁　ヨコナデ 体部内　ナデ 天井部　ヘラケズリ	胎土：やや粗　石英・黒色粒 焼成：良好	内外：灰色	1/2	
84	第30図 図版43下	第12区 SE-1 第1b層	須恵器 壺	口径　(13.2) 器高　(3.6)	口縁部を下方に折り曲げ丸く仕上げる。	口縁　ヨコナデ	胎土：密　黒色粒 焼成：良好	内：　灰色 外：　淡灰色	口縁 1/6	
85	第30図 図版43下	第12区 SE-1 第1a層	須恵器 壺	口径　(11.2) 器高　(5.8)	口縁内端部を内側に突出させ稜をなす。	口縁　ヨコナデ 体部内　ヨコナデ 体部外　ヨコナデ	胎土：密　白色粒 焼成：良好	内外：淡灰色	口縁 1/4	
86	第30図 図版43下	第12区 SE-1 第1a層	須恵器 壺	口径　(12.5) 器高　(5.2)	口縁部外面に沈線2条とヘラによる刻み目によって加飾する。内外面ともに自然釉が付着。	口縁　ヨコナデ	胎土：やや粗　長石・石英・黒色粒 焼成：良好	内：　淡灰色 外：　暗灰褐色	口縁 1/4	
87	第30図 図版43下	第12区 SE-1 第1b層	須恵器 甕	口径　(15.2) 器高　(3.8)	口縁部が外側に肥厚し、上端面を作り出す。頸部外面にヨコナデに先行するカキメ状の痕跡がある。	口縁　ヨコナデ	胎土：密　白色粒 焼成：軟	内外：乳褐色	口縁 1/3	
88	第30図 図版43上	第12区 SE-1 第1a層	須恵器 提瓶	体径　17.6 器高　(12.6)	肩部に貼付けた把手は径15㎜のボタン状。	頸部　ヨコナデ 体部表　回転カキメ 体部裏　ヘラケズリ 体部内　ヨコナデ	胎土：密 焼成：良好	内：　淡灰色 外：　淡灰褐色	体部上半部のみ	
89	第30図 図版43上	第12区 SE-1 第1b層	須恵器 提瓶	口径　(7.5) 体径　(19.3) 器高　(18.2)	肩部に貼付けた把手は指オサエで丸くおさめたもの。	口縁　ヨコナデ 体部内　ナデ 体部外　回転カキメ	胎土：密　白色粒・赤色軟質粒 焼成：やや軟	内：　淡灰褐色 外：　淡灰色	体部上半部のみ	
90	第30図 図版43下	第12区 SE-1 第1a層	須恵器 提瓶？	口径　(7.4) 器高　(4.7)	口縁端部を除く内面に自然釉が付着。	口縁　ヨコナデ	胎土：密　白色粒 焼成：良好	内：　灰褐色 外：　淡灰色	口縁 1/3	
91	第30図 図版43下	第12区 SE-1 第1a層	須恵器 提瓶？	口径　(7.2) 器高　(4.6)	口縁端部に棒状のもので押さえた凹みが1ヶ所あり。内外面とも自然釉が付着。	口縁　ヨコナデ	胎土：密 焼成：良好	内：　灰色 外：　暗灰色	口縁 1/3	
92	第30図 図版43下	第12区 SE-1 第1a層	須恵器 提瓶	器高　(2.5)	肩部に貼付けた把手は指オサエで丸くおさめたもの。	体部内　ナデ 体部外　ナデ	胎土：密　石英 焼成：良好	内：　淡灰色 外：　灰褐色	細片	
93	第30図 図版43上	第12区 SE-1 第1a層	須恵器 横瓶？	口径　(5.4) 器高　(5.5)	外反してのびる口縁部は外側に肥厚させて丸くおさめる。94の口縁部と考えられる。	口縁　ヨコナデ 体部内　ヨコナデ 体部外　ナデ	胎土：やや粗　長石・黒色粒・白色粒 焼成：良好	内外：淡灰色	口縁 1/3	
94	第30図 図版43上	第12区 SE-1 第1a層	須恵器 横瓶	体径　(15.0) 器高　(4.2)	外面にナデ調整に先行する粗いカキメの痕跡が残る。93の体部と考えられる。	頸部　ヨコナデ 体部内　ヨコナデ 体部外　ナデ	胎土：やや粗　長石・黒色粒・白色粒 焼成：良好	内外：淡灰色	体部上位 1/2	
95	第30図 図版43下	第12区 SE-1 第1b層	土師器 壺	口径　(11.5) 器高　(7.1)	外面に施されたヘラミガキは暗文状。	口縁　ヨコナデ	胎土：密　長石 焼成：良好	内外：淡赤褐色	口縁 小片	
96	第30図 図版43下	第12区 SE-1 第1a層	土師器 把手	長さ　3.9 幅　3.1	手づくね成形。鳩の可能性が考えられる。	全面　ナデ 指頭圧痕	胎土：密　赤色軟質粒 焼成：やや軟	内：　淡褐色 外：　淡褐～暗褐色	把手部のみ残存	
97	第30図 図版43下	第12区 SE-1 第1a層	土師器 甕	口径　(18.6) 器高　(6.5)	全体的に剥離気味。	口縁　ヨコナデ 体部内　不明 体部外　ハケ	胎土：粗　結晶片岩・石英・赤色軟質粒 焼成：軟	内外：赤褐色	口縁 1/8	
98	第30図 図版44上	第12区 第2層	須恵器 提瓶	体径　(15.1) 器高　(14.2)	肩部に貼付けた把手は円環状。	体部内　ヨコナデ 体部外　ヨコナデ ヘラケズリ	胎土：やや粗　長石 焼成：良好	内外：灰色	体部 1/2	
99	第30図 図版44上	第12区 第5層	須恵器 壺	口径　(9.8) 器高　(7.4)	外面中位に2条の沈線が巡る。口縁端部が剥離気味。	口縁　ヨコナデ 回転カキメ	胎土：密　黒色粒・白色粒 焼成：良好	内：　淡灰色～灰色 外：　灰褐色～灰色	口縁 1/6	
100	第30図 図版44上	第12区 第5層	須恵器 壺	口径　(10.8) 器高　(2.4)	口縁端部を下方に肥厚させ丸く仕上げている。	口縁　ヨコナデ 回転カキメ	胎土：やや粗　石英・黒色粒・白色粒 焼成：良好	内：　淡灰色～灰色 外：　淡灰色	口縁 1/6	
101	第30図 図版44上	第12区 第5層	須恵器 壺	口径　(10.1) 器高　(2.2)	口縁端部を上下に肥厚させ丸く仕上げている。	口縁　ヨコナデ	胎土：密　石英 焼成：良好	内外：淡灰色	口縁 1/4	
102	第32図 図版44上	第13区 SD-21	土師器 壺 複合口縁	口径　(16.2) 器高　(2.8)	剥離及び摩滅が著しい。	口縁　不明	胎土：粗　石英 焼成：軟	内：　灰褐色 外：　赤褐色	口縁 1/6	
103	第32図 図版44上	第13区 SD-21	土師器 甕 底部	底径　(5.2) 器高　(3.4)	胎土に混和材としての砂粒を多く含む。	体部内　ナデ 体部外　ナデ 底部　ナデ	胎土：やや粗 焼成：良好	内：　黒褐色 外：　赤褐色	底部 1/4	
104	第32図 図版44上	第13区 SD-21	土師器 甕 底部	口径　(5.9) 器高　(2.9)	平底。外面の黒斑は底面の1/4程度。	体部内　不明 体部外　タタキ・ナデ 底部　ナデ	胎土：密　石英 焼成：やや軟	内：　暗褐色 外：　赤褐色～褐色	底部 1/2	
105	第35図 図版44下	第13区 SK-19	土師器 皿	口径　(8.5) 器高　1.3	全体的に剥離著しい。2次焼成か。	口縁　ヨコナデ 底部　指頭圧痕	胎土：密　赤色軟質粒 焼成：やや軟	内外：赤褐色	1/2	
106	第35図 図版44下	第13区 SK-19	土師器 皿	口径　8.0 器高　1.5	全体的に肉厚。	口縁　ヨコナデ 底部　指頭圧痕	胎土：密　赤色軟質粒 焼成：良好	内外：乳褐色	完形	

表1　出土遺物観察表（4）

遺物番号	挿図番号	出土位置	器種	法量（cm）	形態の特徴	技法の特徴	胎土・焼成	色調	残存率	備考
107	第35図 図版44下	第13区 SK-19	土師器 皿	口径　8.5 器高　1.4	口縁部は強いヨコナデによってシャープに仕上げている。	口縁　ヨコナデ 底部　指頭圧痕	胎土：密　赤色軟質粒 焼成：良好	内外：乳褐色	完形	
108	第35図 図版44下	第13区 SK-19	瓦器 椀	口径　12.8～11.6 底径　3.6 器高　4.1～2.3	体部から口縁部にかけて楕円形に大きく歪む。外面に重ね焼きの痕跡と考えられる色調の異なるラインが入る。高台は粘土紐を貼付けただけのもの。見込み部の暗文は不明。	口縁　ヨコナデ 体部内　暗文 体部外　ナデ・指頭圧痕 底部　ナデ	胎土：密　黒色粒 焼成：軟	内外：淡灰～黒灰色	ほぼ完形	
118	第39図 図版45下	第14区 層位不明	中国製 青磁 碗	口径　(15.2) 器高　(3.6)	内面に華花文を描く。	口縁　施釉	胎土：緻密 焼成：良好	内外：淡緑灰色	小片	龍泉窯Ⅰ類 碗12C後半
119	第43図 図版45下	第17区 SD-32	須恵器 杯身	底径　(11.5) 器高　(2.4)	高台は貼付でやや外側に広がり接地する。	体部内　ヨコナデ 体部外　ヨコナデ 底部　ヘラケズリ	胎土：密　長石・黒色粒 焼成：良好	内外：灰色	底部 1/4	
120	第43図 図版45下	第17区 第6b層	弥生土器 脚部	底径　(13.6) 器高　(4.7)	胎土に混和材とみられる径2㎜大の砂粒を多量に含む。外面に黒褐色の黒斑あり。	脚部内　ナデ 脚部外　ヨコナデ	胎土：粗　結晶片岩 焼成：やや軟	内外：赤褐色	小片	
121	第47図 図版45下	第19区 第5層	須恵器 杯身	口径　(12.4) 器高　(3.9)	口縁部は外反しながら大きく開く。内底面に沈線が1条巡る。	口縁　ヨコナデ 体部内　ヨコナデ 底部　ヘラケズリ	胎土：密　長石・黒色粒 焼成：良好	内外：淡灰色	1/4	
122	第54図 図版45上	第26区 P-270	縄文土器 深鉢	口径　不明 器高　(6.7)	外面の条痕は3～4条。口縁部外面の一部のみ暗灰色に発色。	口縁　不明 体部内　ナデ 体部外　条痕	胎土：粗　石英 焼成：軟	内：　暗灰褐色 外：　淡灰褐色	口縁 細片	
123	第54図 図版45上	第26区 P-270	縄文土器 深鉢	口径　不明 器高　(5.6)	口縁部外面の条痕はナデ消されている。	口縁　ナデ 体部内　ナデ 体部外　条痕	胎土：粗　石英 焼成：軟	内：　黒褐色 外：　暗褐～黒褐色	口縁 細片	
124	第54図 図版45下	第27区 第6a層	弥生土器 高杯	口径　(20.0) 器高　(3.8)	大きく屈折して垂直に立ち上がる口縁部を形成。端部は外側に突出して上端面を形成。剥離気味。	口縁　ヨコナデ 杯部内　不明 杯部外　不明	胎土：粗　結晶片岩・石英 焼成：やや軟	内：　黒褐色 外：　黒褐色～褐色	口縁 小片	
125	第59図 図版46上	第29区 SK-46	須恵器 甕	口径　(33.0) 器高　(7.7)	口縁部外面にヘラ描きによる波状文が1条巡る。	口縁　ヨコナデ	胎土：密　白色粒 焼成：良好	内：　灰色 外：　淡灰色	口縁 小片	
126	第59図 図版46上	第29区 SD-55	須恵器 甕	口径　(33.0) 器高　(5.0)	口縁端部は上下に肥厚し、外端面に2条の沈線が巡る。	口縁　ヨコナデ	胎土：粗　結晶片岩・石英 焼成：良好	内外：淡灰色	口縁 1/8	
127	第61図 図版46下	第31区 第4層	須恵器 杯蓋	口径　(10.2) 器高　(1.3)	口縁かえり部はやや下方に突出して接地する。	口縁　ヨコナデ	胎土：密　白色粒 焼成：良好	内外：淡灰色	口縁 1/6	
128	第61図 図版46下	第31区 第4層	須恵器 杯身	底径　(12.8) 器高　(2.1)	高台は貼付でやや外側に広がり接地する。	体部内　ヨコナデ 体部外　ヨコナデ 底部　ナデ	胎土：密　黒色粒・白色粒 焼成：良好	内外：淡灰色	底部 1/6	
129	第61図 図版46下	第31区 第4層	須恵器 杯身	底径　(9.0) 器高　(2.0)	高台は貼付で大きく外側に広がり内端部で接地する。	体部内　ヨコナデ 体部外　ヨコナデ 底部　ヘラケズリ	胎土：密　黒色粒・白色粒 焼成：良好	内外：淡灰色	底部 1/3	
130	第61図 図版46下	第31区 第4層	須恵器 杯身	底径　11.6 器高　(1.7)	高台は貼付でやや外側に広がり内端部で接地する。	体部内　ナデ 体部外　ヨコナデ 底部　ヘラケズリ	胎土：やや粗　黒色粒 焼成：良好	内：　淡灰色 外：　淡灰褐色	底部のみ 残存	
131	第61図 図版46下	第31区 第4層	須恵器 杯身？	口径　(13.8) 器高　(3.5)	口縁部は外反気味に開く。無蓋高杯の可能性もある。外面に自然釉が付着。	口縁　ヨコナデ	胎土：密 焼成：良好	内外：淡灰色	口縁 1/6	
132	第61図 図版46下	第31区 第4層	須恵器 高杯	底径　(7.5) 器高　(2.5)	低脚の高杯で、脚端部は偏平に大きく開き下方に屈折して接地する。	杯部内　ナデ 脚部内　ヨコナデ 脚部外　ヨコナデ	胎土：密　石英・白色粒 焼成：良好	杯内：淡灰色 脚内外：灰色	脚部 1/2	
133	第61図 図版46上	第31区 第4層	須恵器 鉢	口径　7.5 器高　(5.6)	肉厚な底部を形成する。	体部内　ヨコナデ 体部外　ヨコナデ 底部　ヘラケズリ・ナデ	胎土：密　白色粒 焼成：やや軟	内：　淡灰色 外：　淡灰～黄灰色	下半部 1/2	
134	第61図 図版46下	第31区 第4層	須恵器 壺	口径　(17.2) 器高　(4.1)	口縁部は強いヨコナデによってシャープに仕上げている。内面に少量の自然釉が付着。	口縁　ヨコナデ	胎土：密 焼成：良好	内外：淡灰色	口縁 1/6	
135	第61図 図版46上	第31区 第4層	須恵器 壺	底径　(11.6) 器高　(11.6)	外面肩部及び内底面に暗緑色の自然釉が付着。	体部内　ヨコナデ 体部外　ヨコナデ・ヘラケズリ 底部　ナデ	胎土：密 焼成：良好	内：　淡灰色 外：　灰褐色	体部 1/3	
136	第61図 図版46下	第31区 第4層	土師器 杯	口径　(13.6) 器高　(3.0)	全体的に摩滅が著しい。	口縁　ヨコナデ？	胎土：やや粗　赤色軟質粒 焼成：軟	内外：乳褐色	口縁 1/4	
137	第61図 図版46下	第31区 第4層	土師器 皿	口径　(18.6) 器高　(3.0)	外反気味にのびる口縁端部を内側に肥厚させている。外面がやや摩滅気味。	口縁　ヨコナデ	胎土：密 焼成：やや軟	内：　乳褐色 外：　黄褐色	口縁 1/6	
141	第62図 図版47上	第31区 第5a層	須恵器 杯蓋 つまみ部	つまみ径　2.0 器高　(1.8)	宝珠状のつまみ。	体部内　ヨコナデ 体部外　ヨコナデ	胎土：密　黒色粒 焼成：良好	内外：淡灰色	つまみ部 のみ残存	
142	第62図 図版47上	第31区 第5a層	須恵器 杯蓋	口径　(14.2) 器高　(1.3)	かえり部は内側におさまる。	口縁　ヨコナデ 体部内　ヨコナデ 体部外　ヘラケズリ・ヨコナデ	胎土：密　白色粒 焼成：良好	内外：淡灰色	口縁 1/8	
143	第62図 図版47上	第31区 第5a層	須恵器 杯蓋	口径　(13.5) 器高　(1.8)	天井部の回転ヘラケズリは丁寧にナデ消されている。	口縁　ヨコナデ 体部内　ヨコナデ 体部外　ヘラケズリ・ヨコナデ	胎土：密　石英 焼成：良好	内外：淡灰色	口縁 1/4	
144	第62図 図版48上	第31区 第5b層	須恵器 杯蓋	口径　17.0 つまみ径　2.9 器高　3.6	天井部の回転ヘラケズリはナデ消され、つまみは偏平である。口縁部に歪みがあり、同一破片が第4層からも出土している。	口縁　ヨコナデ 体部内　ヨコナデ 体部外　ヘラケズリ・ヨコナデ	胎土：密　石英・黒色粒 焼成：良好	内外：灰色	2/3	
145	第62図 図版47上	第31区 第5b層	須恵器 杯蓋	口径　(19.2) 器高　(2.1)	口縁端部はやや内側に屈折して接地する。	口縁　ヨコナデ 体部内　ヨコナデ 体部外　ヨコナデ	胎土：やや粗　石英 焼成：良好	内外：淡灰色	口縁 1/8	
146	第62図 図版47上	第31区 第5層	須恵器 杯蓋？	口径　(22.4) 器高　(3.3)	第6層から出土したものであるが、第5層からの混入遺物と判断した。	口縁　ヨコナデ 体部内　ナデ 体部外　ヘラケズリ	胎土：やや粗　黒色粒・白色粒 焼成：良好	内外：淡灰色	口縁 1/6	
147	第62図 図版47上	第31区 第5a層	須恵器 杯身	口径　(12.2) 器高　(2.9)	口縁部は肉厚で比較的長くのびる。	口縁　ヨコナデ 体部内　ヨコナデ 体部外　ヘラケズリ	胎土：やや粗　石英・白色粒 焼成：良好	内：　灰色 外：　淡灰色	口縁 1/8	
148	第62図 図版47上	第31区 第5a層	須恵器 杯身	口径　(8.0) 器高　(2.0)	体部外面にヘラ記号？が観察できる。	口縁　ヨコナデ	胎土：密 焼成：良好	内外：淡灰色	口縁 小片	
149	第62図 図版47上	第31区 第5b層	須恵器 杯身	口径　(9.4) 器高　(2.4)	かえり部は短く、内側におさまる。外面に自然釉が付着。	口縁　ヨコナデ 体部内　ヨコナデ 体部外　ヘラケズリ	胎土：密　石英 焼成：良好	内：　灰白色 外：　淡灰褐色	口縁 1/3	
150	第62図 図版47上	第31区 第5a層	須恵器 杯身	口径　(14.0) 器高　(3.6)	口縁部は外反気味にシャープに仕上げている。底面の回転ヘラケズリは1/2程度。	口縁　ヨコナデ 体部内　ヨコナデ 体部外　ヘラケズリ	胎土：密　黒色粒・白色粒 焼成：良好	内外：淡灰色	1/8	
151	第62図 図版47上	第31区 第5a・b層	須恵器 杯身	口径　(13.8) 底径　(10.2) 器高　3.2	第5a層と第5b層の接合資料。底面に棒状の圧痕が残る。	口縁　ヨコナデ 体部内　ヨコナデ 底部　ヘラケズリ	胎土：密　黒色粒・白色粒 焼成：良好	内外：灰色	1/2	

表1　出土遺物観察表（5）

遺物番号	挿図番号	出土位置	器種	法量（cm）	形態の特徴	技法の特徴	胎土・焼成	色調	残存率	備考
152	第62図 図版47上	第31区 第5a層	須恵器 杯身	口径　(14.5) 底径　(11.2) 器高　3.2	全体がヨコナデによってシャープに仕上げている。貼付による高台はほぼ水平に接地する。	口縁　ヨコナデ 体部内　ヨコナデ 底部　ヨコナデ	胎土：やや粗　石英・黒色粒 焼成：良好	内外：暗灰色	1/6	
153	第62図 図版47上	第31区 第5b層	須恵器 杯身	底径　(7.6) 器高　(1.9)	比較的内側に貼付された高台は外側に肥厚して接地する。高台部分は摩滅気味。	体部内　ヨコナデ 体部外　ヨコナデ 底部　ヨコナデ	胎土：密 焼成：やや軟	内外：淡灰色	底部 1/4	
154	第62図 図版47上	第31区 第5b層	須恵器 杯身	底径　(10.4) 器高　(2.6)	底部は肉厚で比較的粗雑な作り。体部下半のヘラケズリはナデ消されている。	体部内　ヨコナデ 体部外　ヘラケズリ・ヨコナデ 底部　ヘラケズリ後ナデ	胎土：密　黒色粒・白色粒 焼成：良好	内外：淡灰色	下半部 1/2	
155	第62図 図版47上	第31区 第5b層	須恵器 杯身	底径　(10.1) 器高　(1.8)	高台は貼付で内側に屈折し内端部で接地する。	体部内　ヨコナデ 体部外　ヘラケズリ・ヨコナデ 底部　ヘラケズリ	胎土：密 焼成：良好	内外：灰色	底部 1/4	
156	第62図 図版47上	第31区 第5層	須恵器 杯身	底径　(11.6) 器高　(2.4)	高台は貼付で比較的低く、内端部で接地する。	体部内　ヨコナデ 体部外　ヨコナデ 底部　ヘラケズリ	胎土：やや粗　石英・長石 焼成：良好	内外：灰色	底部 1/2	
157	第62図 図版47上	第31区 第5b層	須恵器 杯身	底径　(12.0) 器高　(2.2)	高台は比較的外側に貼付られ、外面に貼付時の接合痕が明瞭に残る。	体部内　ヨコナデ 体部外　ヨコナデ 底部　ヘラケズリ後ナデ	胎土：密　黒色粒 焼成：良好	内外：淡灰色	底部 1/3	
158	第62図 図版47下	第31区 第5層	須恵器 高杯？ 脚部	底径　(14.6) 器高　(2.6)	ヘラ切りによるすかし孔の形状は不明。	脚内　ヨコナデ 脚外　ヨコナデ	胎土：やや粗　石英・白色粒 焼成：良好	内：　淡灰色 外：　灰色	脚部下半 小片	
159	第62図 図版47下	第31区 第5b層	須恵器 壺	器高　(5.1)	外面に2条の沈線が巡る。	体部内　ヨコナデ・しぼり目 体部外　ヨコナデ	胎土：密　白色粒 焼成：良好	内：　明灰色 外：　灰色	頸部 2/3	
160	第62図 図版47下	第31区 第5層	須恵器 壺 底部	底径　(6.6) 器高　(3.6)	全体をシャープに仕上げている。	体部内　ヨコナデ 体部外　ヘラケズリ・ヨコナデ 底部　ヘラケズリ	胎土：密 焼成：良好	内外：淡灰色	下半部 1/3	
161	第62図 図版47下	第31区 第5層	須恵器 甕	口径　(19.0) 器高　(4.1)	口縁端部を上下に肥厚させて外端面を形成する。比較的シャープな作りで、頸部に凸線が1条巡る。	口縁　ヨコナデ	胎土：密　白色粒 焼成：良好	内：　灰色 外：　暗灰色	口縁 1/8	
162	第62図 図版47下	第31区 第5b層	須恵器 甕	口径　(17.4) 器高　(2.8)	口縁端部を外側に肥厚させて外端面を作り出している。	口縁　ヨコナデ	胎土：やや粗　石英・黒色粒 焼成：やや軟	内外：淡灰色	口縁 小片	
163	第62図 図版47下	第31区 第5b層	須恵器 甑？	器高　(9.0)	手づくね成形の把手が付く。体部中位に沈線状のラインが1条巡る。	体部内　あて具痕後ヨコナデ 体部外　ヘラケズリ・ヨコナデ	胎土：密　黒色粒・白色粒 焼成：良好	内外：灰色	体部 1/8	
164	第62図 図版47下	第31区 第5層	須恵器 壺 脚部	底径　(15.4) 器高　(5.4)	脚部に円形のすかし孔が穿たれている。内底面の調整が粗雑。	体部内　ヨコナデ・指頭圧痕 体部外　ヨコナデ 底部　ナデ	胎土：密　石英・長石 焼成：良好	内：　淡灰色 外：　灰色	脚部 1/6	
165	第62図 図版48上	第31区 第5b層	須恵器 壺？ 脚部	底径　14.4 器高　(6.7)	ヘラ切りによる方形のすかし孔を3方に施している。全体をシャープに仕上げている。	体部内　ヨコナデ 体部外　ヘラケズリ・ヨコナデ 脚部　ヨコナデ	胎土：密　石英・長石・黒色粒 焼成：良好	内外：灰色	脚部のみ 残存	
166	第62図 図版47下	第31区 第5b層	土師器 杯蓋 つまみ部	つまみ径　3.8 器高　(1.4)	やや剥離気味であるものの、比較的シャープな作り	体部内　ナデ 体部外　ヨコナデ・ナデ	胎土：密　赤色軟質粒 焼成：良好	内外：淡褐色	つまみ部 のみ残存	
167	第62図 図版47下	第31区 第5層	土師器 皿	口径　(15.2) 器高　(2.3)	大きく外反する口縁端部を外側に屈折させて上端面を作り出している。	口縁　ヨコナデ 体部内　ヨコナデ 体部外　ヨコナデ	胎土：密　結晶片岩・赤色軟質粒 焼成：やや軟	内：　暗褐色 外：　暗赤褐～黒褐色	小片	
168	第62図 図版48上	第31区 第5b層	土師器 甕	口径　(39.2) 器高　(10.3)	体部上位に手づくね成形の把手が付く。全体的に摩滅が著しい。	口縁　ヨコナデ？ 体部内　指頭圧痕 体部外　ハケ？	胎土：やや粗　石英・赤色軟質粒 焼成：軟	内外：淡赤褐色	口縁 1/4	
169	第63図 図版48上	第31区 第5a層	平瓦	長さ　(22.0) 幅　(12.0) 厚さ　2.4	比較的硬質に焼成されている。	凹面　斜めコビキ・布目痕・ナデ 凸面　格子目タタキ	胎土：密　黒色粒・白色粒 焼成：良好	凹：　淡灰褐色 凸：　淡灰色	1/3	
170	第63図 図版48上	第31区 第5b層	丸瓦	長さ　(6.3) 幅　(8.2) 厚さ　2.3	全体的に摩滅が著しい。	凹面　布目痕 凸面　不明	胎土：粗　赤色軟質粒 焼成：軟	凹凸：淡褐色	小片	
171	第64図 図版48下	第30区 第6層	縄文土器 深鉢	器高　(9.1)	外面に半截竹管状工具によるC字爪形文が施されている。外面の摩滅が著しい。	体部内　ナデ 体部外　不明	胎土：粗　石英・赤色軟質粒 焼成：軟	内：　赤褐色 外：　赤褐～淡褐色	頸部 細片	
172	第64図 図版48下	第30区 第6層	縄文土器 深鉢	器高　(1.8)	口縁部外面に貼付による突帯がめぐり、上端面に刻み目が施されている。	口縁　不明	胎土：粗 焼成：軟	内外：暗褐色	口縁 細片	
173	第64図 図版48下	第31区 第6b層	縄文土器 浅鉢	器高　(3.0)	口縁部は外側に大きく肥厚させて丸くおさめている。	口縁　ヨコナデ	胎土：やや粗 焼成：やや軟	内：　暗褐色 外：　暗褐～淡褐色	口縁 細片	
181	第69図 図版49上	第31区 SB-11 第1層	須恵器 杯身	口径　(4.7) 器高　(1.5)	口縁部は内傾気味に短くのびる。	口縁　ヨコナデ	胎土：密 焼成：良好	内外：淡灰色	口縁 1/8	
182	第69図 図版49上	第31区 SB-11 第1層	土師器 高杯？	底径　(12.5) 器高　(3.2)	貼付による脚部は大きく外反して接地する。全体的に摩滅気味。	体部内　不明 体部外　不明 脚部　不明	胎土：密　赤色軟質粒 焼成：やや軟	内外：淡赤褐色	脚部 1/2	
183	第69図 図版49上	第31区 SB-11 カマド内	土師器 高杯	口径　13.9 底径　(9.4) 器高　7.1	全体的に摩滅が著しい。逆位の状態でカマドの支脚として使用されていたもの。	口縁　不明 体部内　不明 体部外　不明 脚部　不明	胎土：やや粗　長石・赤色軟質粒 焼成：やや軟	内外：淡赤褐色	脚部の一部のみ欠失	
184	第69図 図版49上	第31区 SB-11 カマド内	土師器 甕	口径　(13.4) 器高　(5.0)	全体的に剥離が著しく調整不明。	口縁　不明 体部内　不明 体部外　不明	胎土：密　赤色軟質粒 焼成：軟	内：　暗褐～淡褐色 外：　暗褐色	口縁 1/8	
185	第71図 図版49上	第30区 SH-1 P-280	須恵器 杯蓋	口径　(9.8) 器高　(3.1)	天井部の一部に自然釉が付着。	口縁　ヨコナデ 体部内　ヨコナデ 体部外　ヘラケズリ・ヨコナデ	胎土：やや粗 焼成：良好	内外：淡灰色	1/8	
186	第71図 図版49上	第30区 SH-1 P-279	須恵器 高杯	底径　(7.8) 器高　(3.6)	脚端部は大きく外側に屈折し、下方に肥厚して接地する。全体的に摩滅気味。	体部内　ヨコナデ 体部外　ヨコナデ 脚部　不明	胎土：密　赤色軟質粒 焼成：軟	内外：乳白色	脚部 1/2	
187	第74図 図版49下	第31区 SD-66 第2層	須恵器 杯蓋	口径　14.9 つまみ径　2.6 器高　3.7	貼付によるつまみはやや扁平。天井部のヘラケズリは1/2程度。口縁部の一部に歪みがある。	口縁　ヨコナデ 体部内　ヨコナデ 体部外　ヘラケズリ・ヨコナデ	胎土：やや粗　長石 焼成：良好	内外：灰褐～灰色	ほぼ完形	
188	第74図 図版49下	第31区 SD-66 第1層	須恵器 杯蓋	口径　(18.2) 器高　(2.5)	外面の中位に沈線状のラインが1条めぐる。	口縁　ヨコナデ 体部内　ヨコナデ 体部外　ヘラケズリ・ヨコナデ	胎土：密　黒色粒 焼成：良好	内外：淡灰色	1/3	
189	第74図 図版49下	第31区 SD-66 第1層	須恵器 杯身	口径　(9.4) 器高　(2.2)	内傾する口縁部は極めて短い。外底面に自然釉？が付着。	口縁　ヨコナデ 体部内　ヨコナデ 体部外　ヘラケズリ・ヨコナデ	胎土：密　長石 焼成：良好	内外：淡灰色	1/4	

表1　出土遺物観察表（6）

遺物番号	挿図番号	出土位置	器種	法量（cm）	形態の特徴	技法の特徴	胎土・焼成	色調	残存率	備考
190	第74図 図版49下	第31区 SD-66 第1層	須恵器 杯身	口径　(12.0) 器高　(3.4)	外底面のヘラケズリはナデ消されている。口縁部に歪みがある。	口縁　ヨコナデ 体部内　ヨコナデ・ナデ 体部外　ヘラケズリ・ヨコナデ	胎土：密　黒色粒・白色粒 焼成：良好	内外：淡灰色	1/2	
191	第74図 図版49下	第31区 SD-66 第2層	須恵器 杯身	口径　(11.1) 底径　(8.0) 器高　(3.0)	内面に自然釉が付着。	口縁　ヨコナデ 体部内　ヨコナデ 体部外　ヨコナデ 底部　ヘラ切り	胎土：密　白色粒 焼成：良好	内外：淡灰～灰色	1/3	
192	第74図 図版49下	第31区 SD-66 第2層	須恵器 杯身	口径　(16.2) 底径　(11.5) 器高　(3.9)	高台は貼付による。外底面のヘラケズリはナデ消されている。	口縁　ヨコナデ 体部内　ヨコナデ 体部外　ヨコナデ 底部　ヘラケズリ後ヨコナデ	胎土：やや粗　石英・長石 焼成：良好	内外：灰色 高台内：淡灰色	1/2	
193	第74図 図版49下	第31区 SD-66	須恵器 提瓶？	口径　(8.4) 器高　(4.7)	口縁部は外上方に向け直にのびる。	口縁　ヨコナデ 体部内　ナデ 体部外　ナデ	胎土：密　黒色粒 焼成：良好	内外：淡灰色	口縁 1/4	
194	第74図 図版49下	第31区 SD-66	須恵器 甕	口径　(15.2) 器高　(3.4)	口縁部は外側に肥厚させて丸く仕上げている。	口縁　ヨコナデ	胎土：密　黒色粒 焼成：良好	内外：灰色	口縁 1/4	
195	第74図 図版49下	第31区 SD-66 第2層	土師器 杯？	口径　(13.6) 器高　(2.5)	口縁部は内側に肥厚させて丸く仕上げている。全体的に摩滅気味。	口縁　ヨコナデ	胎土：密　白色粒 焼成：やや軟	内外：淡褐色	口縁 1/8	
196	第74図 図版49下	第31区 SD-66 第1層	土師器 皿	口径　(17.4) 器高　(2.4)	口縁端部を内側に肥厚させ稜を成す。外面は剥離気味。	口縁　ヨコナデ 体部内　ミガキ？ 体部外　不明	胎土：密　石英 焼成：やや軟	内：　淡赤褐色 外：　淡赤褐～乳褐色	小片	
197	第74図 図版50上	第30区 SD-61 第3層	須恵器 杯蓋	口径　10.2 器高　4.1	天井部はヘラ切りの後ナデ消している。	口縁　ヨコナデ 体部内　ヨコナデ 体部外　ヘラケズリ後ヨコナデ	胎土：やや粗　石英・黒色粒・白色粒 焼成：良好	内外：灰色	完形	
198	第74図 図版50下	第31区 SD-61 第3層	須恵器 杯蓋	口径　(8.6) 器高　3.7	天井部は屈曲しながら盛り上がる形状。	口縁　ヨコナデ 体部内　ヨコナデ 体部外　ヘラケズリ・ヨコナデ	胎土：密　黒色粒 焼成：良好	内外：淡灰色	1/3	
199	第74図 図版50下	第30区 SD-61 第3層	須恵器 杯蓋	口径　(10.3) 器高　3.1	天井部はヘラ切りの後未調整。	口縁　ヨコナデ 体部内　ヨコナデ 体部外　ヘラケズリ・ヨコナデ	胎土：やや粗　白色粒 焼成：良好	内外：暗灰色	1/3	
200	第74図 図版50上	第31区 SD-61 第2層	須恵器 杯蓋	口径　12.5 器高　3.8	外面のヘラケズリは丁寧にナデ消されている。	口縁　ヨコナデ 体部内　ヨコナデ 体部外　ヘラケズリ・ヨコナデ	胎土：密　白色粒 焼成：良好	内：　暗灰褐色 外：　灰色	2/3	
201	第74図 図版50下	第31区 SD-61 第2層	須恵器 杯蓋	口径　(11.9) 器高　(1.6)	かえり部は口縁内側におさまる。	口縁　ヨコナデ 体部内　ヨコナデ 体部外　ヘラケズリ後ヨコナデ	胎土：密　白色粒 焼成：良好	内外：灰色	1/3	
202	第74図 図版50下	第31区 SD-61 第2層	須恵器 杯蓋	口径　13.5 器高　2.8	貼付によるつまみの断面は台形状。	口縁　ヨコナデ 体部内　ヨコナデ 体部外　ヨコナデ	胎土：密　黒色粒・白色粒 焼成：良好	内外：灰色	2/3	
203	第74図 図版50上	第31区 SD-61 第1層	須恵器 杯蓋	口径　16.0 器高　2.1	天井部のつまみはやや中心からずれた位置に貼付されている。全体的に偏平な形状。	口縁　ヨコナデ 体部内　ヨコナデ 体部外　ヘラケズリ・ヨコナデ	胎土：やや粗　黒色粒・白色粒 焼成：良好	内外：灰色	ほぼ完形	
204	第74図 図版50下	第31区 SD-61 第1層	須恵器 杯身	口径　(8.9) 器高　2.6	ヘラケズリによる底面はやや上げ底状となる。	口縁　ヨコナデ 体部内　ヨコナデ 体部外　ヘラケズリ・ヨコナデ	胎土：密　黒色粒 焼成：良好	内：　淡灰色 外：　淡灰～灰色	1/6	
205	第74図 図版50下	第30区 SD-61 第3層	須恵器 杯身	口径　(10.0) 器高　(1.8)	直立する短い口縁部を形成する。	口縁　ヨコナデ	胎土：密　白色粒 焼成：良好	内外：灰色	口縁 1/8	
206	第74図 図版50上	第31区 SD-61 第3層	須恵器 杯身	口径　10.7 器高　3.1	かえり部は口縁内側におさまる。外面全体に自然釉が付着している。	口縁　ヨコナデ 体部内　ヨコナデ 体部外　ヘラケズリ・ヨコナデ	胎土：密　白色粒 焼成：良好	内：　淡灰色 外：　緑灰色	完存	
207	第74図 図版50下	第31区 SD-61 第1層	須恵器 杯身	口径　(9.5) 器高　(3.6)	外底面のヘラケズリの範囲は1/2程度。	口縁　ヨコナデ 体部内　ヨコナデ 体部外　ヘラケズリ・ヨコナデ	胎土：密　黒色粒 焼成：良好	内：　灰白色 外：　淡灰色	1/6	
208	第74図 図版50下	第31区 SD-61 第2層	須恵器 杯身	口径　(9.7) 器高　3.3	外底面のヘラケズリの範囲は1/2程度で丁寧にナデ消されている。	口縁　ヨコナデ 体部内　ヨコナデ 体部外　ヘラケズリ・ヨコナデ	胎土：密　白色粒 焼成：良好	内外：灰色	1/3	
209	第74図 図版50下	第31区 SD-61 第2層	須恵器 杯身	口径　(11.8) 器高　4.3	外底面のヘラケズリの範囲は1/3程度。	口縁　ヨコナデ 体部内　ヨコナデ 体部外　ヘラケズリ・ヨコナデ	胎土：密　白色粒 焼成：良好	内外：淡灰色	口縁1/4 底部完存	
210	第74図 図版50下	第30区 SD-61 第2層	須恵器 杯身	口径　(11.8) 器高　(3.8)	外底面はヘラ切りの後ナデ消している。	口縁　ヨコナデ 体部内　ヨコナデ 体部外　ヘラケズリ・ヨコナデ	胎土：密　白色粒 焼成：良好	内：　灰褐色 外：　暗灰褐色	1/4	
211	第74図 図版50下	第31区 SD-61 第3層	須恵器 杯身	底径　(9.5) 器高　(2.3)	貼付による高台はやや外側に開き、外端部で接地する。	口縁　ヨコナデ 体部内　ヨコナデ 体部外　ヘラケズリ・ヨコナデ 底部　ヘラケズリ	胎土：密　白色粒 焼成：良好	内外：灰色	底部 1/6	
212	第74図 図版50下	第31区 SD-61 第2層	須恵器 杯身	底径　(10.5) 器高　3.7	貼付によるやや短い高台は、内側に突出して接地する。	口縁　ヨコナデ 体部内　ヨコナデ 体部外　ヘラケズリ・ヨコナデ 底部　ヘラケズリ	胎土：密　白色粒 焼成：良好	内：　淡赤褐色 外：　暗灰色	1/3	214と同一個体か。
213	第74図 図版51上	第31区 SD-61 第3層	須恵器 杯身	口径　15.3 底径　10.9 器高　4.6	貼付による高台は内外に肥厚して水平に接地する。全体的に摩滅気味。	口縁　ヨコナデ 体部内　ヨコナデ 体部外　ヘラケズリ・ヨコナデ	胎土：やや粗　黒色粒・赤色軟質粒 焼成：軟	内：　淡褐～淡灰色 外：　淡灰色	ほぼ完存	
214	第74図 図版50下	第31区 SD-61 第1層	須恵器 杯身	口径　(15.2) 器高　(3.2)	外上方にのびる口縁部は端部に至りやや外反する。	口縁　ヨコナデ	胎土：密　白色粒 焼成：良好	内：　淡赤褐色 外：　淡赤褐～暗灰色	口縁 1/8	212と同一個体か。
215	第74図 図版50下	第30区 SD-61 第2層	須恵器 鉢	口径　(10.1) 器高　(2.2)	器壁の薄い個体で、口縁端部を外側に折り曲げている。	口縁　ヨコナデ	胎土：密　白色粒 焼成：良好	内外：灰色	口縁 1/8	
216	第74図 図版51上	第31区 SD-61 第1層	須恵器 高杯	器高　(7.1)	脚部上位の外面に2条の沈線が施されている。杯部内面及び脚部外面に緑灰色の自然釉が付着している。	杯内　ヨコナデ 体部外　ヘラケズリ・ヨコナデ 脚部内　ヨコナデ	胎土：密　白色粒 焼成：良好	内：　灰～淡灰色 外：　淡灰色	脚柱部のみ残存	
217	第74図 図版51上	第31区 SD-61 第1層	須恵器 高杯 脚部	底径　(6.4) 器高　(2.1)	大きく開く脚端部は上下に肥厚し、接地する。	脚内　ヨコナデ 脚外　ヨコナデ	胎土：密　白色粒 焼成：良好	内：　灰色 外：　淡灰色	脚部 1/3	

表1　出土遺物観察表（7）

遺物番号	挿図番号	出土位置	器種	法量（cm）	形態の特徴	技法の特徴	胎土・焼成	色調	残存率	備考
218	第74図 図版51上	第31区 SD-61 第2層	須恵器 高杯	底径　9.6 器高　(5.1)	大きく下方に開く脚端部は上方に屈折してはね上がる。	杯内　ヨコナデ 脚内　ヨコナデ 脚外　ヨコナデ	胎土：密　白色粒 焼成：良好	内：　灰色 外：　暗灰～灰色	脚部のみ残存	
219	第74図 図版51上	第30区 SD-61 第3層	須恵器 甕	体部径　(9.3) 器高　(5.7)	肩部に1条の突線を作り、その下方に刺突文をめぐらしている。肩部に自然釉が付着。	体部内　ヨコナデ・しぼり目 体部外　ヘラケズリ・ヨコナデ	胎土：密　白色粒 焼成：良好	内外：灰色	体部 1/4	
220	第74図 図版51上	第31区 SD-61 第3層	須恵器 提瓶？	口径　(6.3) 器高　(6.5)	口縁部外面中位に沈線を1条めぐらせている。	口縁　ヨコナデ	胎土：密　黒色粒・白色粒 焼成：良好	内：　淡灰色 外：　暗灰色	口縁 1/4	
221	第74図 図版51下	第31区 SD-61 第2層	須恵器 壺	口径　4.7 器高　7.2	内面から外面肩部にかけて有機物が付着。外底面にヘラ記号が施されている。	口縁　ヨコナデ 体部内　不明 体部外　ヘラケズリ・ヨコナデ	胎土：密　白色粒 焼成：良好	内：　不明 外：　淡灰～灰色	完存	
222	第74図 図版51下	第31区 SD-61 第1層	須恵器 壺？	口径　(11.9) 器高　(6.2)	外上方に直にのびる口縁部を形成する。	口縁　ヨコナデ	胎土：密 焼成：良好	内外：暗灰色	口縁 1/4	
223	第75図 図版51下	第31区 SD-61 第1層	須恵器 壺	口径　(15.7) 器高　(8.3)	肩部に明瞭な稜線をもつ。	体部内　ヨコナデ 体部外　ヨコナデ	胎土：密　白色粒 焼成：良好	内：　暗灰色 外：　暗灰～暗赤褐色	体部 1/3	
224	第75図 図版51下	第30区 SD-61 第3層	須恵器 壺	口径　(16.1) 器高　(5.2)	比較的丸みをもつ器形。	口縁　ヨコナデ 体部内　ヨコナデ 体部外　ヨコナデ	胎土：密　白色粒 焼成：良好	内：　暗赤褐～灰色 外：　暗灰色	口縁 1/8	
225	第75図 図版51下	第31区 SD-61 第1層	須恵器 壺 底部	底径　(13.0) 器高　(5.5)	足高の高台は内端部で接地する。高台は貼付による。	体部内　ヨコナデ 体部外　ヘラケズリ後ヨコナデ	胎土：密　黒色粒 焼成：良好	内：　暗灰色 外：　灰色	底部 1/4	
226	第75図 図版51下	第31区 SD-61 第2層	須恵器 甕	口径　(23.2) 器高　(5.1)	口縁部は内外に肥厚させて上端面を作り出している。体部内外面のタタキ痕及びあて具痕をナデ消している。	口縁　ヨコナデ 体部内　ナデ 体部外　タタキ後ナデ	胎土：密　白色粒・赤色軟質粒 焼成：良好	内外：淡灰褐色	口縁 1/6	
227	第75図 図版51下	第30区 SD-61 第2層	須恵器 横瓶？	底径　(10.7) 器高　(4.9)	口縁端部を上方に肥厚させて外端面を形成する。	口縁　ヨコナデ 体部内　あて具痕 体部外　タタキ後カキメ	胎土：密　白色粒 焼成：良好	内外：淡灰色	口縁 1/4	
228	第75図 図版51下	第30区 SD-61 第1層	須恵器 横瓶？	口径　(11.4) 器高　(11.0)	口縁部は外側に肥厚させ丸く仕上げている。体部外面はタテ方向を基本とするタタキをナデ消している。全体的に摩滅気味。	口縁　ヨコナデ 体部内　あて具痕 体部外　タタキのちナデ	胎土：密　黒色粒・白色粒 焼成：やや軟	内外：淡灰色	体部上位 1/3	SD-64に同一個体がある。
229	第75図 図版52上	第31区 SD-61 第3層	土師器 壺 底部	底径　(8.9) 器高　(4.9)	足高の高台は外側に大きく踏ん張り接地する。高台は貼付による。内外面とも摩滅が著しい。	体部内　不明 体部外　ヨコナデ	胎土：密　白色粒・赤色軟質粒 焼成：軟	内外：褐色	底部 1/8	
230	第75図 図版52上	第30区 SD-61 第2層	土師器 杯	口径　(13.0) 器高　(3.2)	口縁部は強いヨコナデによって外反する。	口縁　ヨコナデ	胎土：密　白色粒・赤色軟質粒 焼成：やや軟	内：　淡黄褐色 外：　淡赤褐色	口縁 1/6	
231	第75図 図版52上	第31区 SD-61 第3層	土師器 皿	口径　(16.7) 器高　(2.4)	口縁部は外上方に向け外反気味にのびる形状。内外面とも摩滅気味。	口縁　ヨコナデ	胎土：やや粗　結晶片岩・石英・赤色軟質粒 焼成：やや軟	内：　灰黄褐色 外：　淡褐色	1/6	
232	第75図 図版52上	第31区 SD-61 第2層	土師器 椀	底径　(7.0) 器高　(2.0)	貼付による足高の高台を有する。	体部内　ヨコナデ 体部外　ヨコナデ	胎土：やや粗　結晶片岩・石英 焼成：良好	内：　黄褐色 外：　黄褐～灰褐色	底部 1/4	
233	第75図 図版52上	第31区 SD-61 第2層	黒色土器 椀	口径　(15.1) 器高　(3.4)	内外面とも摩滅気味。内面のヘラミガキは不明瞭。	口縁　ヨコナデ 体部内　ミガキ 体部外　不明	胎土：密　赤色軟質粒 焼成：やや軟	内：　黒色 外：　淡褐色	口縁 1/8	
234	第75図 図版52上	第30区 SD-61 第3層	黒色土器 椀	底径　(6.1) 器高　(1.2)	貼付による高台は外側に踏ん張る形状。	体部内　ミガキ？ 体部外　ヨコナデ	胎土：やや粗　赤色軟質粒 焼成：軟	内：　黒色 外：　黄褐～黒褐色	底部 1/6	
235	第75図 図版52上	第30区 SD-61 第1層	縄文土器 深鉢	器高　(4.7)	外反する外端面に貼付による突帯をめぐらす。外面は摩滅気味。	口縁　ヨコナデ 体部内　ヨコナデ 体部外　不明	胎土：粗　石英・チャート 焼成：良好	内：　淡赤褐色 外：　灰黄～赤褐色	口縁 細片	
236	第75図 図版52上	第30区 SD-61 第2層	弥生土器 壺 底部	底径　(9.0) 器高　(2.4)	全体的に摩滅が著しい。	体部内　不明 体部外　不明 底部　不明	胎土：粗　石英・雲母 焼成：軟	内外：暗褐色	底部 1/4	搬入品？
238	第75図 図版52上	第31区 SD-61 第3層	平瓦	長さ　(22.0) 幅　(12.0) 厚さ　2.4	側面には幅広の面取りを丁寧に施す。凹面の摩滅が著しい。	凹面　不明 凸面　平行タタキ	胎土：やや粗　白色粒・赤色軟質粒 焼成：軟	凹：　淡灰色 凸：　乳褐色	小片	
239	第75図 図版52上	第31区 SD-61 第2層	平瓦	長さ　(6.7) 幅　(7.4) 厚さ　2.2	凹面に1条の沈線あり。	凹面　布目痕 凸面　格子目タタキ	胎土：やや粗　黒色粒・白色粒 焼成：良好	凹凸：淡灰色	小片	
240	第76図 図版52下	第30区 SK-61 第1層	須恵器 高杯？ 脚部	底径　(14.5) 器高　(6.1)	脚部中位に方形のすかし孔が施されている。	脚内　ヨコナデ 脚外　ヨコナデ	胎土：密　白色粒 焼成：良好	内：　灰色 外：　淡灰色	脚部 1/3	
241	第76図 図版52下	第30区 SK-61 第1層	須恵器 甕	口径　(9.6) 器高　(3.7)	全体的に摩滅気味。	口縁　ヨコナデ 体部内　ナデ 体部外　ナデ？	胎土：密　結晶片岩 焼成：やや軟	内外：乳褐色	口縁 1/4	
242	第76図 図版52下	第30区 SK-61 第1層	須恵器 甕	口径　(15.8) 器高　(3.3)	全体的に摩滅気味。	口縁　ヨコナデ	胎土：密　長石・黒色粒 焼成：軟	内外：乳褐色	口縁 1/8	
243	第76図 図版52下	第30区 SK-61 第1層	須恵器 提瓶	口径　(6.6) 器高　(8.2)	把手は手づくね成形で貼付による。外面に自然釉が付着。	口縁　ヨコナデ 体部内　ナデ 体部外　ナデ？	胎土：やや粗　石英・黒色粒・白色粒 焼成：良好	内外：灰褐色	体部上位 1/3	
244	第76図 図版52下	第30区 SK-61 第3層	縄文土器 浅鉢	器高　(3.7)	外面に細い棒状工具による2条の沈線。	体部内　ヨコナデ 体部外　ヨコナデ？	胎土：やや粗　石英・結晶片岩 焼成：やや軟	内：　黒褐色 外：　淡褐色	体部 小片	
245	第76図 図版52下	第30区 SK-61 第3層	縄文土器 浅鉢	口径　(38.0) 器高　(3.7)	調整は剥離が著しく不明。	口縁　不明 体部内　不明 体部外　不明	胎土：やや粗　雲母・石英 焼成：やや軟	内外：暗褐色	口縁 小片	
248	第76図 図版53上	第31区 SX-1	須恵器 杯身	口径　(11.9) 底径　(8.2) 器高　3.7	口縁部に歪みがある。	口縁　ヨコナデ 体部内　ヨコナデ 底部　ヘラケズリ	胎土：やや粗　石英 焼成：良好	内外：淡灰色	1/2	
249	第76図 図版53上	第31区 SX-1	須恵器 杯身	底径　(9.8) 器高　(1.5)	高台は、貼付による。胎土に細かな砂粒を多く含む。	体部内　ヨコナデ 底部　ヨコナデ	胎土：やや粗　黒色粒 焼成：良好	内外：淡灰色	底部 1/4	
250	第76図 図版53上	第31区 SX-1	土師器 杯？	底径　(14.0) 器高　(1.9)	高台は、貼付による。部分的にヘラミガキが施されていた可能性がある。	体部内　不明 底部　ヨコナデ	胎土：密　石英・赤色軟質粒 焼成：やや軟	内外：赤褐色	底部 小片	
252	第76図 図版53上	第31区 SK-75	須恵器 甕	体部径　(9.3) 器高　(7.1)	肩部に2条の沈線を巡らせ沈線間に刻み目を施している。内底面にあて具痕が明瞭に残る。	体部内　ヨコナデ 体部外　ヨコナデ・カキメ・ヘラケズリ 底部　ナデ	胎土：やや粗　石英 焼成：良好	内外：淡灰色	体部 1/2	
253	第76図 図版53上	第31区 SD-71	須恵器 杯身？	口径　(13.8) 器高　(2.3)	口縁部はシャープに外反する。	口縁　ヨコナデ	胎土：密　黒色粒・白色粒 焼成：良好	内外：淡灰色	口縁 1/6	
254	第76図 図版53上	第30区 P-289	須恵器 杯身	底径　(12.6) 器高　(1.6)	高台は、貼付による。	体部内　ヨコナデ 底部　ヨコナデ	胎土：密　白色粒 焼成：軟	内外：乳白色	底部 1/3	

表1　出土遺物観察表（8）

遺物番号	挿図番号	出土位置	器種	法量（cm）	形態の特徴	技法の特徴	胎土・焼成	色調	残存率	備考
255	第76図 図版53上	第31区 SK-63	須恵器 杯蓋 つまみ部	つまみ径　2.3 器高　(2.4)	外面に自然釉が付着。	内面　ナデ 外面　ヨコナデ	胎土：密 焼成：良好	内：　淡灰色 外：　緑灰色	つまみ部 のみ残存	
256	第77図 図版53下	第30区 SD-64 第1層	土師器 皿	口径　(14.4) 器高　(2.4)	口縁部は強いヨコナデによって外反する。	口縁　ヨコナデ	胎土：密　結晶片岩・石英 焼成：やや軟	内：　赤褐色 外：　淡赤褐色	口縁 1/3	
257	第77図 図版53下	第30区 SD-64 第1層	黒色土器 椀	底径　(7.3) 器高　(1.6)	足高の高台を有する。内面のヘラミガキは不明瞭。	体部内　ミガキ？ 底部　ヨコナデ	胎土：密　赤色軟質粒 焼成：やや軟	内：　黒色 外：　淡褐色	底部 1/6	
258	第77図 図版53下	第31区 SD-67	土師器 皿	口径　(12.4) 器高　(3.2)	全体的に摩滅及び剥離が著しい。	口縁　ヨコナデ？ 体部内　不明 体部外　不明	胎土：密　赤色軟質粒 焼成：軟	内外：淡赤褐色	1/3	
259	第80図 図版53下	第31区 P-391	須恵器 甕	体部径　10.3 器高　(15.5)	外面の文様構成は沈線間にヘラ描による刻み目を基本とする。体部内に穿孔時の破片が残存。	体部内　ヨコナデ 体部外　ヨコナデ 底部　ヘラケズリ・ナデ	胎土：密　石英・白色粒 焼成：良好	内外：灰色	口縁部の み欠失	
260	第83図 図版53下	第31区 SD-80	須恵器 杯身	口径　(12.0) 器高　(3.1)	内傾してのびる口縁部は比較的長く、丸く仕上げている。	口縁　ヨコナデ 体部内　ヨコナデ 体部外　ヨコナデ	胎土：密　石英・白色粒 焼成：良好	内外：暗灰色	1/3	
261	第83図 図版53下	第31区 SD-80	須恵器 無蓋高杯	口径　(12.2) 器高　(2.8)	口縁部は大きく外反している。	口縁　ヨコナデ	胎土：密　白色粒 焼成：良好	内外：灰色	口縁 1/8	
262	第83図 図版53下	第31区 SD-80	須恵器 高杯 脚部	底径　(13.0) 器高　(14.8)	脚部中位に沈線を巡らせ、その上下にヘラ切りによる方形スカシを施している。	脚部内　ヨコナデ 脚部外　ヨコナデ	胎土：やや粗　石英 焼成：良好	内外：暗灰色	脚部 1/3	
263	第83図 図版53下	第31区 SD-81	土師器 塝？ 把手	器高　(8.3)	体部との接合は差し込みとみられる。全体的に剥離及び摩滅気味。	体部内　ナデ？ 体部外　ナデ？	胎土：やや粗　結晶片岩・石英・赤色軟質 焼成：粒 軟	内：　淡赤褐色 外：　赤褐色	把手部の み残存	
264	第83図 図版54上	第31区 SK-87	須恵器 椀	底径　(4.6) 器高　(1.9)	底面は糸切未調整。	体部内　ヨコナデ 体部外　ヨコナデ 底部　糸切痕	胎土：密　白色粒 焼成：良好	内外：淡灰色	底部 1/4	
265	第83図 図版54上	第31区 SD-78	土師器 皿	口径　8.8 器高　2.3	口縁部は肥厚させて丸くおさめている。	口縁　ヨコナデ 体部内　ナデ 体部外　ナデ・指頭圧痕	胎土：やや粗　白色粒・赤色軟質粒 焼成：やや軟	内外：褐色	ほぼ完形	
266	第83図 図版54上	第31区 SD-78	土師器 皿	口径　(11.3) 器高　1.9	全体的に粗雑な作り。	口縁　ヨコナデ 体部内　ナデ 体部外　ナデ・指頭圧痕	胎土：やや粗　赤色軟質粒 焼成：良好	内：　淡褐色 外：　褐色	1/4	
267	第83図 図版54上	第31区 SD-78	土師器 釜	口径　(28.4) 器高　(3.9)	口縁部は内側に大きく屈曲し、端部を丸く仕上げている。	口縁　ヨコナデ 体部内　ハケ 体部外　ナデ	胎土：粗　結晶片岩・赤色軟質粒 焼成：良好	内外：暗黄褐色	口縁 小片	
268	第83図 図版54上	第31区 SK-89	須恵器 甕	口径　(34.0) 器高　(11.2)	体部内面のあて具痕を丁寧にナデ消している。	口縁　ヨコナデ 体部内　ナデ・指頭圧痕 体部外　格子目タタキ	胎土：やや粗　黒色粒・白色粒 焼成：良好	内外：暗灰色	口縁 1/6	東播系須恵器甕
269	第83図 図版54下	第31区 SK-89 第2層	土師器 塝	口径　(27.6 器高　(6.6)	体部外面はタタキ成形とみられるが、煤の付着により不明瞭。	口縁　ヨコナデ 体部内　ヨコナデ 体部外　タタキ・ナデ	胎土：密　石英・赤色軟質粒 焼成：良好	内：　淡赤褐色 外：　黒褐色	口縁 1/8	
270	第87図 図版55上	第30区 SK-152	縄文土器 深鉢	口径　34.0 器高　46.1	口縁部外面に半截竹管状工具による押引きによって施文している。体部外面には粘土紐の接合痕が明瞭に残る。	口縁　ヨコナデ 体部内　ナデ 体部外　ヘラケズリ	胎土：やや粗　結晶片岩・石英 焼成：良好	内：　淡赤褐～褐色 外：　黄褐～黒褐色	ほぼ完形	土器棺として使用
271	第87図 図版55上	第30区 SK-168	縄文土器 浅鉢	口径　35.7 器高　(23.5)	口縁部の突起は3ヶ所の可能性が高い。体部外面に漆の付着と考えられる黒点がみられる。	口縁　ミガキ 体部内　ナデ 体部外　ヘラケズリ後ミガキ・二枚貝条痕	胎土：やや粗　結晶片岩・赤色軟質粒・白色粒 焼成：良好	内：　黒灰～黒褐色 外：　黒褐～暗褐色	底部のみ 欠失	土器棺として使用
272	第89図 図版55下	第30区 SK-165 第2層	縄文土器 深鉢	器高　(2.2)	口縁部は山形突起と刻み目によって加飾。摩滅気味。	口縁　不明	胎土：やや粗　赤色軟質粒 焼成：やや軟	内：　灰褐色 外：　淡灰褐色	口縁 細片	
273	第89図 図版55下	第30区 SK-165 第1層	縄文土器 深鉢	器高　(5.2)	外面には棒状工具による押引きによって文様が施されている。	口縁　ヨコナデ	胎土：やや粗　石英 焼成：良好	内：　淡褐色 外：　暗褐色	口縁 細片	
274	第89図 図版55下	第30区 SK-165 第1層	縄文土器 深鉢	器高　(5.0)	外面頸部に太い棒状工具による連続刺突文が施されている。	体部内　ヨコナデ 体部外　ヘラケズリ後ヨコナデ	胎土：やや粗　結晶片岩 焼成：やや軟	内：　黒褐色 外：　暗褐色	体部 細片	
275	第89図 図版55上	第30区 SK-165 第2層	縄文土器 深鉢	口径　(33.2) 器高　(10.6)	口縁部外面に棒状工具による刺突文、頸部にヘラ状工具による連続刺突文が施されている。	口縁　ヨコナデ 体部内　ヨコナデ 体部外　ヘラケズリ	胎土：やや粗 焼成：良好	内：　淡褐～黒褐色 外：　淡褐色	体部 1/6	
276	第89図 図版56上	第30区 SK-165 第1層	縄文土器 深鉢	口径　(36.3) 器高　(10.0)	口縁部外面から頸部にかけて半截竹管状工具による2条の連続刺突文によって施文している。全体的に摩滅が著しい。	口縁　ヨコナデ？ 体部内　ヨコナデ？ 体部外　ヘラケズリ	胎土：粗　結晶片岩・石英・赤色軟質粒 焼成：軟	内：　淡褐色 外：　淡赤褐色	口縁 1/6	
277	第89図 図版55下	第30区 SK-165 第2層	縄文土器 深鉢	口径　(19.0) 器高　(4.9)	頸部外面に半截竹管状工具による2条の連続刺突文がめぐる。	口縁　ヨコナデ 体部内　ヨコナデ 体部外　ヘラケズリ？	胎土：やや粗　結晶片岩・石英 焼成：やや軟	内：　黒褐色 外：　暗褐色	口縁 1/8	
278	第89図 図版55下	第30区 SK-165 第1層	縄文土器 深鉢	口径　(14.2) 器高　(4.2)	口縁上端部の刻み目は密に施されている。内面の摩滅は著しい。	口縁　ヨコナデ 体部内　ヨコナデ？ 体部外　ヘラケズリ	胎土：やや粗　石英 焼成：やや軟	内：　淡褐色 外：　赤褐色	口縁 1/6	
279	第89図 図版55下	第30区 SK-165 第1層	縄文土器 深鉢	口径　(16.6) 器高　(5.7)	内面には板状工具によるとみられる痕跡が残る。	口縁　ヨコナデ 体部内　板ナデ 体部外　ヘラケズリ	胎土：やや粗 焼成：やや軟	内外：淡赤褐色	口縁 1/8	
280	第89図 図版55下	第30区 SK-165 第2層	縄文土器 深鉢	口径　(20.0) 器高　(6.2)	口縁部は大きく外反する形状で、上端部の刻み目は単位が細かく比較的深い。	口縁　ヨコナデ 体部内　ヨコナデ 体部外　ヘラケズリ	胎土：やや粗　石英・赤色軟質粒 焼成：良好	内外：淡褐～暗褐色	口縁 1/8	
281	第89図 図版55下	第30区 SK-165 第2層	縄文土器 深鉢	器高　(9.6)	口縁上端部の刻み目は間隔をもつ単位である。内面の黒褐色の範囲は口縁端部まで及ぶ。	口縁　ヨコナデ 体部内　ヨコナデ 体部外　ヘラケズリ	胎土：やや粗 焼成：良好	内：　黒褐色 外：　淡赤褐色	口縁 小片	
282	第89図 図版56上	第30区 SK-165 第2層	縄文土器 深鉢	口径　(36.0) 器高　(13.8)	全体的に摩滅気味。	口縁　ヘラケズリ・ヨコナデ 体部内　不明 体部外　ヘラケズリ	胎土：粗　結晶片岩・石英・赤色軟質粒 焼成：軟	内：　灰褐色 外：　淡赤褐色	体部 1/4	
283	第90図 図版55下	第30区 SK-165 第1層	縄文土器 深鉢	器高　(5.7)	口縁上端部には刻み目が施されている。内面は剥離気味。	口縁内　ナデ？ 口縁外　二枚貝条痕	胎土：やや粗　石英 焼成：やや軟	内外：乳褐色	口縁 細片	
284	第90図 図版55下	第30区 SK-165 第1層	縄文土器 深鉢	器高　(6.2)	口縁上端部には刻み目が施されている。器壁が肉厚。	口縁内　ヨコナデ 口縁外　二枚貝条痕後ナデ	胎土：やや粗　結晶片岩・石英 焼成：やや軟	内外：淡褐色	口縁 細片	
285	第90図 図版55下	第30区 SK-165 第1層	縄文土器 深鉢 底部	器高　(1.7)	底部外面のヘラケズリは上方から下方。	底部内　ナデ 底部外　ヘラケズリ	胎土：やや粗　石英・赤色軟質粒 焼成：良好	内：　淡褐色 外：　淡褐～黒褐色	底部 小片	
286	第90図 図版56上	第30区 SK-165 第2層	縄文土器 深鉢	口径　(32.4 器高　(10.1)	口縁上端面に刻み目が施されている。単位は不明瞭。口縁部は内外面とも二枚貝条痕が残る。	口縁　二枚貝条痕 体部内　二枚貝条痕 体部外　ヘラケズリ	胎土：やや粗　石英・赤色軟質粒 焼成：良好	内：　淡赤褐色 外：　赤褐色	口縁 1/4	
287	第90図 図版57上	第30区 SK-165 第2層	縄文土器 鉢	器高　(6.8)	丸みをもつ口縁端部に比較的浅い刻み目が施されている。	口縁　ヨコナデ 体部内　ヨコナデ 体部外　ヘラケズリ	胎土：やや粗　結晶片岩・赤色軟質粒 焼成：良好	内：　黒褐色 外：　暗褐色	口縁 細片	
288	第90図 図版56上	第30区 SK-165 第2層	縄文土器 浅鉢	口径　19.4 器高　9.6	口縁部との接合部での破損が目立つ個体。外面の一部に黒斑とみられる黒褐色の部分がある。	口縁　ヨコナデ 体部内　ヨコナデ 体部外　ナデ	胎土：やや粗　石英 焼成：良好	内：　暗褐色 外：　黄褐～淡赤褐色	完形	

表1　出土遺物観察表（9）

遺物番号	挿図番号	出土位置	器種	法量（cm）	形態の特徴	技法の特徴	胎土・焼成	色調	残存率	備考
289	第90図 図版57上	第30区 SK-165 第1・2層	縄文土器 浅鉢	口径　(29.2) 器高　(7.6)	口縁端部は内側に大きく肥厚する。体部内面の剥離が目立つ。	口縁　ミガキ 体部内　不明 体部外　ヘラケズリ後ナデ？	胎土：やや粗　石英・赤色軟質粒 焼成：やや軟	内：　淡褐色 外：　暗褐色	口縁 1/4	第1・2層の接合資料
290	第90図 図版56下	第30区 SK-165 第1層	縄文土器 浅鉢	口径　(28.0) 器高　(13.0)	口縁端部は内外に大きく肥厚する。	口縁　ミガキ後ヨコナデ 体部内　ヨコナデ 体部外　ヘラケズリ	胎土：やや粗　赤色軟質粒 焼成：良好	内外：暗褐色	口縁 1/3	
291	第90図 図版56下	第30区 SK-165 第1層	縄文土器 浅鉢	口径　(32.6) 器高　(7.8)	口縁端部は内側に大きく肥厚する。体部内面の摩滅及び剥離が著しい。	口縁内　ミガキ？・ヨコナデ 体部内　ナデ 体部外　ミガキ・ヨコナデ	胎土：やや粗　石英・赤色軟質粒 焼成：やや軟	内外：暗褐色	口縁 1/4	
292	第91図 図版56下	第30区 SK-165 第2層	縄文土器 浅鉢	口径　(31.6) 器高　(8.3)	口縁端部内面に刻み目が施されている。外面が剥離気味。	口縁　ヨコナデ 体部内　板ナデ 体部外　ヨコナデ？	胎土：密 焼成：やや軟	内：　褐色 外：　暗褐～淡赤褐色	口縁 1/8	
293	第91図 図版57上	第30区 SK-165 第2層	縄文土器 浅鉢	器高　(2.4)	短い口縁部をもつ形状で、内頸部が内側に突出し明瞭な稜線を作り出している。	口縁内　ミガキ 口縁外　ヨコナデ 体部内　ヘラケズリ 体部外　ヘラケズリ後ナデ	胎土：密 焼成：良好	内外：暗褐色	口縁 細片	
294	第91図 図版57上	第30区 SK-165 第1層	縄文土器 浅鉢	器高　(3.5)	口縁部は屈折してのび、端部を内外に肥厚させている。	口縁　ヨコナデ 体部内　ヨコナデ 体部外　ヨコナデ	胎土：やや粗 焼成：やや軟	内：　黒褐色 外：　褐～暗褐色	口縁 細片	
295	第91図 図版56下	第30区 SK-165 第1層	縄文土器 浅鉢	口径　(32.0) 器高　(5.7)	短い口縁部をもつ形状で、内頸部が内側に突出し明瞭な稜線を作り出している。	口縁　ミガキ 体部内　ミガキ 体部外　ヘラケズリ後ミガキ	胎土：やや粗 焼成：良好	内外：暗褐色	口縁 1/4	
306	第92図 図版58下	第30区 P-636	縄文土器 深鉢	口径　(21.6) 器高　(10.1)	外面肩部に半截竹管状工具によるC字爪形文を巡らしている。口縁下部に径1.2cm 程度の円孔が穿たれている。全体的に摩滅が著しい。	口縁　不明 体部内　不明 体部外　不明	胎土：粗　石英 焼成：軟	口縁：黒褐色 内：　淡褐色 外：　淡赤褐色	口縁 1/3	
307	第92図 図版58下	第31区 SK-123	縄文土器 深鉢	器高　(6.3)	外面頸部に半截竹管状工具による逆C字爪形文を巡らしている。内面が摩滅気味。	口縁外　ヨコナデ 体部内　不明 体部外　二枚貝条痕後ナデ	胎土：粗　結晶片岩・赤色軟質粒 焼成：やや軟	内：　暗褐色 外：　淡褐色	口縁 小片	
308	第92図 図版58下	第30区 SK-153	縄文土器 深鉢	器高　(3.2)	外面に半截竹管状工具による刺突文を巡らしている。	体部内　ナデ 体部外　二枚貝条痕・ヘラケズリ？	胎土：密 焼成：良好	内：　灰褐色 外：　淡褐色	体部 細片	
309	第92図 図版58下	第30区 SK-153	縄文土器 深鉢	器高　(1.7)	口縁外端面に貼付による突帯を巡らす。	口縁　ヨコナデ	胎土：やや粗 焼成：やや軟	内外：暗褐色	口縁 細片	
310	第92図 図版58下	第30区 SK-175	縄文土器 深鉢	器高　(4.6)	口縁部外面に貼付による突帯を巡らし、突帯上面及び口縁上端面に刻み目を施している。突帯下部に径5mm程度の円孔が穿たれている。全体的に剥離気味。	口縁　ヨコナデ？	胎土：粗　石英・結晶片岩 焼成：軟	内：　淡褐色 外：　淡赤褐色	口縁 細片	
311	第92図 図版58下	第30区 SK-175	縄文土器 浅鉢	口径　(32.6) 器高　(4.5)	短い口縁部をもつ形状で、内頸部が内側に突出し明瞭な稜線を作り出している。全体的に摩滅気味。	口縁　不明 体部内　不明 体部外　不明	胎土：粗　石英・結晶片岩・赤色軟質粒 焼成：軟	内：　淡褐～黒褐色 外：　赤褐色	口縁 小片	
312	第92図 図版58下	第30区 SK-178	縄文土器 浅鉢	口径　(34.5) 器高　(6.6)	口縁部に複合の台形状突起を有する。口縁外面に棒状工具による沈線が1条巡る。外面が摩滅気味。	口縁　ヨコナデ 体部内　ミガキ 体部外　不明	胎土：粗　石英・結晶片岩・赤色軟質粒 焼成：やや軟	内：　黒褐色 外：　赤褐色	口縁 1/8	
313	第92図 図版58下	第30区 SK-178	縄文土器 浅鉢	口径　(26.4) 器高　(7.9)	大きく外反する短い口縁部は端部を丸く仕上げている。全体的に摩滅及び剥離が著しい。	口縁　ヨコナデ 体部内　ミガキ？ 体部外　不明	胎土：粗　石英 焼成：軟	内：　黒褐色 外：　褐～暗褐色	体部 1/6	
314	第92図 図版58下	第30区 P-606	縄文土器 浅鉢	器高　(2.2)	口縁部に小さく丸い突起を有する。外面が摩滅気味。	口縁内　ミガキ？ 口縁外　不明	胎土：やや粗 焼成：軟	内：　暗赤褐色 外：　淡赤褐色	口縁 細片	
315	第92図 図版58下	第30区 SK-149	縄文土器 浅鉢	器高　(3.3)	短い口縁部をもつ形状で、端部が内側に肥厚して丸くおさめている。赤色顔料が塗られている。	口縁　ヨコナデ？	胎土：やや粗 焼成：軟	内外：暗褐色	口縁 細片	
319	図版54下	第31区 SK-90	緑釉陶器 椀 土師質	器高　(－)	内面に1条の沈線がみられる。	体部内　施釉 体部外　ヘラケズリ・部分施釉	胎土：密 焼成：良好	内：　淡緑色 外：　乳白色	体部 細片	写真のみ掲載
320	図版54下	第31区 SK-81	緑釉陶器 壺 須恵質	器高　(－)	体部下半の破片。	体部内　ヨコナデ・施釉 体部外　ヨコナデ・施釉	胎土：密 焼成：良好	内外：緑灰色	体部 細片	写真のみ掲載
321	図版54下	第31区 第5層	灰釉陶器 椀	器高　(－)	体部下半の破片。	体部内　施釉 体部外　施釉・一部露胎	胎土：密 焼成：良好	内外：淡緑色	体部 細片	写真のみ掲載
324	図版57上	第30区 SK-165 第1層	縄文土器 浅鉢	器高　(－)	複合突起になるものか。	口縁　ミガキ 体部内　ミガキ 体部外　ヘラケズリ	胎土：やや粗　結晶片岩 焼成：・白色粒良好	内：　黒褐色 外：　淡褐色	口縁 小片	写真のみ掲載
325	図版57上	第30区 SK-165 第2層	縄文土器 浅鉢	器高　(－)	複合突起を有する。口縁内端部を肥厚させている。全体的に剥離が著しい。	口縁　ミガキ	胎土：粗　結晶片岩 焼成：軟	内：　黒褐色 外：　暗褐色	口縁 細片	写真のみ掲載
326	図版57上	第30区 SK-165 第2層	縄文土器 浅鉢	器高　(－)	1条の沈線内に赤色顔料が残る。	体部内　ミガキ 体部外　ミガキ	胎土：やや粗　石英 焼成：やや軟	内：　黒褐色 外：　暗褐色	体部 細片	写真のみ掲載

表2　出土遺物観察表

挿図番号	挿図番号	出土地区・遺構・層位	種類	計測値				形態の特徴	胎土・焼成	色調	残存率	備考
				長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）					
13	第14図 図版37下	第6区 SB-7	土錘 有孔	(3.3)	1.2	1.2	(6.2)	側端部はヘラ切り。孔径は5mm。	胎土：密 焼成：やや軟	灰褐色	1/2	
28	第14図 図版38下	第4区 第4層	土錘 管状	(6.5)	1.1	1.1	(7.9)	孔径は4mm。	胎土：密　赤色軟質粒 焼成：良好	乳褐色	ほぼ完形	
237	第75図 図版51下	第31区 SD-61 第2層	土師質 土馬	(10.7)	6.1	5.3	(310)	中実のもので頸部から背部が残存。貼付によって手綱・前輪・鞍を表現し、鬣はつまみ上げによって作り出している。	胎土：粗 焼成：良好	褐色	頸部～頭部付近のみ残存。	

表3　出土遺物観察表

遺物番号	挿図番号	出土地区・遺構・層位	種類	石材	計測値				形態の特徴	色調	残存率	備考
					長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）				
46	第17図 図版39上	第7区 第5層	紡錘車	滑石	4.6	(3.2)	1.9	(30.1)	全体に粗加工の面が残る。破損が著しい。	灰褐色	2/3	
109	第35図 図版44下	第13区 SK-19	砥石	石灰岩系	(5.9)	4.9	3.0	(117.6)	周囲4面とも研磨面。玉砥石状の凹み1ヶ所。刀キズ状の研磨痕あり。	乳白色	上下端部が欠失	副葬品
117	第38図 図版45上	第14区 SD-53	石鏃 凸基有茎式 打製石器	サヌカイト	(4.8)	2.5	0.6	(5.0)	細部調整は主に先端部から基部に向かって行われている。	灰色	一部のみ欠失	
138	第61図 図版46下	第31区 第4層	砥石	砂岩	8.8	8.2	4.6	430	5面中3面を研磨面として使用。	淡灰色	ほぼ完存	
139	第61図 図版46上	第31区 第4層	石鏃 平基式 打製石器	サヌカイト	2.1	(1.9)	0.4	(1.4)	比較的粗雑な作り。	暗灰色	一部のみ欠失	
140	第61図 図版46上	第31区 第4層	石鏃 凹基式 打製石器	サヌカイト	(2.5)	1.3	0.35	(0.9)	細部調整は主に先端部から基部に向かって行われている。	暗灰色	一部のみ欠失	
174	第64図 図版48下	第31区 第6b層	スクレイパー 打製石器	サヌカイト	4.8	3.4	0.7	13.8	上面及び右面に自然面を残す。	黒灰色	完存	
175	第64図 図版48下	第31区 第6b層	石鏃 凹基式 打製石器	サヌカイト	1.9	1.5	0.3	0.6	細部調整は主に基部から先端部に向かって行われている。	灰色	ほぼ完存	
176	第64図 図版48下	第30区 第6b層	石鏃 平基式 打製石器	サヌカイト	2.5	(1.6)	0.4	(1.3)	細部調整は不明瞭。	灰色	一部欠失	
177	第64図 図版48下	第30区 第6b層	石錐 打製石器	サヌカイト	3.7	1.4	0.7	2.1	細部調整は主に先端部から基部に向かって行われている。上端面に自然面を残す。	淡灰色	ほぼ完存	
178	第64図 図版48下	第30区 第6層	石錐 打製石器	サヌカイト	(3.0)	1.8	0.6	(4.1)	全体的に風化気味。	灰白色	先端部のみ欠失	
179	第64図 図版48下	第31区 第6b層	石斧 磨製石器	砂岩	(6.0)	5.2	2.7	(131.3)	叩石に転用。上面及び下面に敲打痕が観察できる。	緑白色	基部のみ残存	転用品
180	第64図 図版48下	第31区 第6b層	石斧 未製品	砂岩	(9.7)	5.9	3.7	(350)	全体に粗加工痕が残る。製作時に破損か。	暗緑色	1/2	未製品
246	第76図 図版52下	第30区 SK-61 第1層	石鏃 平基式 打製石器	サヌカイト	(1.7)	1.5	0.3	(0.8)	細部調整は主に先端部から基部に向かって行われている。比較的粗雑な作り。	暗灰色	先端部のみ欠失	
247	第76図 図版52下	第30区 SK-61 第2層	石鏃 平基式 打製石器	サヌカイト	(2.8)	2.0	0.45	(2.0)	細部調整は主に先端部から基部に向かって行われている。比較的丁寧な作り。	暗灰色	先端部のみ欠失	
251	第76図 図版53	第31区 SX-1	石庖丁 磨製石器	結晶片岩	(5.5)	4.2	0.6	(26.6)	穿孔は両面から行われている。主に両端部が欠失。	淡緑色	中央部のみ残存	
296	第91図 図版57下	第30区 SK-165 第1層	石鏃 有茎式 打製石器	サヌカイト	(3.9)	1.5	0.6	(3.8)	細部調整は主に先端部から基部に向かって行われている。基部に大剥離面を残す。	暗灰色	基部の一部のみ欠失	
297	第91図 図版57下	第30区 SK-165 第1層	石錐 打製石器	サヌカイト	(3.2)	0.8	0.3	(0.7)	細部調整は主に基部から先端部に向かって行われている。	暗灰色	先端部のみ残存	
298	第91図 図版57下	第30区 SK-165 第1層	石鍬 打製石器	結晶片岩	(8.8)	9.5	1.2	(153.5)	表・裏面に自然面を残す。	淡黄灰色	刃部のみ残存	未製品か破損品
299	第91図 図版57下	第30区 SK-165 第1層	石鍬 打製石器	結晶片岩	(6.8)	6.2	1.3	(82.2)	表・裏面に自然面を残す。	淡青灰色	刃部のみ残存	
300	第91図 図版57下	第30区 SK-165 第1層	石斧 磨製石器	砂岩	(5.1)	4.8	2.6	(85.5)	丁寧な研磨が行われている。石材は硬質。	明緑色	刃部のみ残存	
301	第91図 図版57下	第30区 SK-165 第1層	石斧	砂岩	7.1	3.2	1.7	59.2	表・裏面は自然面で、他は粗加工痕を残す。	淡緑色	完存	未製品？
302	第91図 図版57下	第30区 SK-165 第2層	石斧	砂岩	(6.2)	3.7	3.1	(110.1)	基部側面に敲打による抉りがある。全体的に粗加工痕を残す。	暗緑色	基部のみ残存	未製品？
303	第91図 図版57下	第30区 SK-165 第1層	石斧	砂岩	(6.6)	4.4	3.2	(159.7)	全体的に粗加工痕を残す。	暗緑色	基部のみ残存	未製品？
304	第91図 図版58上	第30区 SK-165 第1層	石斧	砂岩	15.5	6.6	4.2	690	基部側面に自然面を残し、他は粗加工痕を残す。	明緑色	ほぼ完存	未製品？
305	第91図 図版58上	第30区 SK-165 第1層	磨石・叩石 礫石器	砂岩	(6.7)	10.1	5.7	(630)	側面を中心として敲打痕が、上面に研磨痕が明瞭に観察できる。	淡灰褐色	1/2	複合石器
316	第92図 図版58上	第30区 P-507	石斧？	砂岩	16.0	8.7	6.3	1580	裏面及び側面に自然面を残す。粗加工痕が明瞭に観察できる。	淡緑色	完存	未製品
317	第92図 図版58上	第30区 P-636	磨石・叩石 礫石器	砂岩	13.1	11	5.4	1180	ほぼ全面に研磨痕がみられるが、特に表・裏面に研磨痕がみられ、光沢がある。敲打痕は側面のみ。	淡灰褐色	完存	複合石器
322	図版54下	第30区 SD-62 第3層	石鏃 平基式 打製石器	サヌカイト	1.7	1.4	0.3	0.6	細部調整は主に基部から先端部に向かって行われている。裏面に大剥離面を残す。	灰色	ほぼ完存	写真のみ掲載
323	図版54下	第30区 SK-59	石鏃 平基式 打製石器	サヌカイト	1.7	(1.4)	0.3	(0.6)	粗い加工。比較的粗雑な作り。	灰色	基部の一部のみ欠失	写真のみ掲載

表4　出土遺物観察表

遺物番号	挿図番号	出土地区・遺構・層位	種類	計測値				形態の特徴	残存率	備考
				長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）			
29	第14図 図版38下	第5区 P-86	塊 鉄製	6.0	(5.0)	4.0	(113.5)	全体的に気泡状の孔がある。全体的に鉄錆色。	3/4	
110	第35図 図版44下	第13区 SK-19	小刀 鉄製	30.0	3.8	2.7	220	部分的に木目が確認できることから鞘に納まったままで埋納か。呑口式の可能性あり。	ほぼ完形	副葬品

表5　出土遺物観察表

遺物番号	挿図番号	出土地区・遺構・層位	銭貨名	初鋳年	計測値				形態の特徴	残存率	備考
					直径（cm）	中央孔一辺（mm）	厚さ（mm）	重量（g）			
111	第35図 図版45上	第13区 SK-19	開元通寶	960年	2.4	0.65	1.0	2.7	真書体。裏面に錆が多い。	完存	副葬品　A単位上位
112	第35図 図版45上	第13区 SK-19	祥符元寶	1009年	2.55	0.6	1.0	3.9	真書体。表裏面に錆が多い。	完存	副葬品　A単位中位
113	第35図 図版45上	第13区 SK-19	元豊通寶	1078年	2.45	0.7	1.0	3.2	篆書体。表面に錆が多い。	完存	副葬品　A単位下位
114	第35図 図版45上	第13区 SK-19	元豊通寶	1078年	2.45	0.65	1.0	3.2	篆書体。裏面に錆が多い。	完存	副葬品　B単位上位
115	第35図 図版45上	第13区 SK-19	元豊通寶	1078年	2.4	0.7	1.0	3.6	篆書体。表裏面に錆が多い。	完存	副葬品　B単位中位
116	第35図 図版45上	第13区 SK-19	天聖元寶	1023年	2.5	0.7	1.0	4.1	篆書体。表面に錆が多い。	完存	副葬品　B単位下位

表6　出土遺物観察表

遺物番号	挿図番号	出土地区・遺構・層位	種類	計測値				形態の特徴	色調	残存率	備考
				長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）				
318	図版54下	第31区 SD-67	馬歯	(4.4)	2.8	−	10.0	臼歯の一部。	乳褐色	小片	写真のみ掲載

報告書抄録

ふりがな	かわなべいせきだい4・5・6じはっくつちょうさほうこくしょ
書名	川辺遺跡第4・5・6次発掘調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	和歌山市都市整備公社発掘調査報告書
シリーズ番号	第1集
編著者名	井馬好英　藤薮勝則
編集機関	財団法人和歌山市都市整備公社
所在地	〒640-8146　和歌山県和歌山市一番丁3　TEL　073-435-1129
発行年月日	2008年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
かわなべいせき 川辺遺跡	わかやまけんわかやまし 和歌山県和歌山市 さとかわなべふじた 里・川辺・藤田	3020150	145	34° 15′ 30″	135° 16′ 22″	20061205 20070302	977.8	店舗建設に伴う発掘調査
						20070226 20070323	135.6	
						20070322 20070524	1141.7	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
川辺遺跡	集落跡	縄文時代 弥生時代 古墳時代 飛鳥時代 奈良時代 鎌倉時代	土器棺墓・竪穴住居・掘立柱建物・土葬墓・溝・土坑・柱穴	縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・緑釉陶器・瓦器・中世土師器・中世陶器・輸入陶磁器・小刀・銭貨・馬歯	川辺遺跡中央部における調査。縄文時代晩期の土器棺墓や土坑を検出し、一括性の高い土器群が出土した。旧座標。

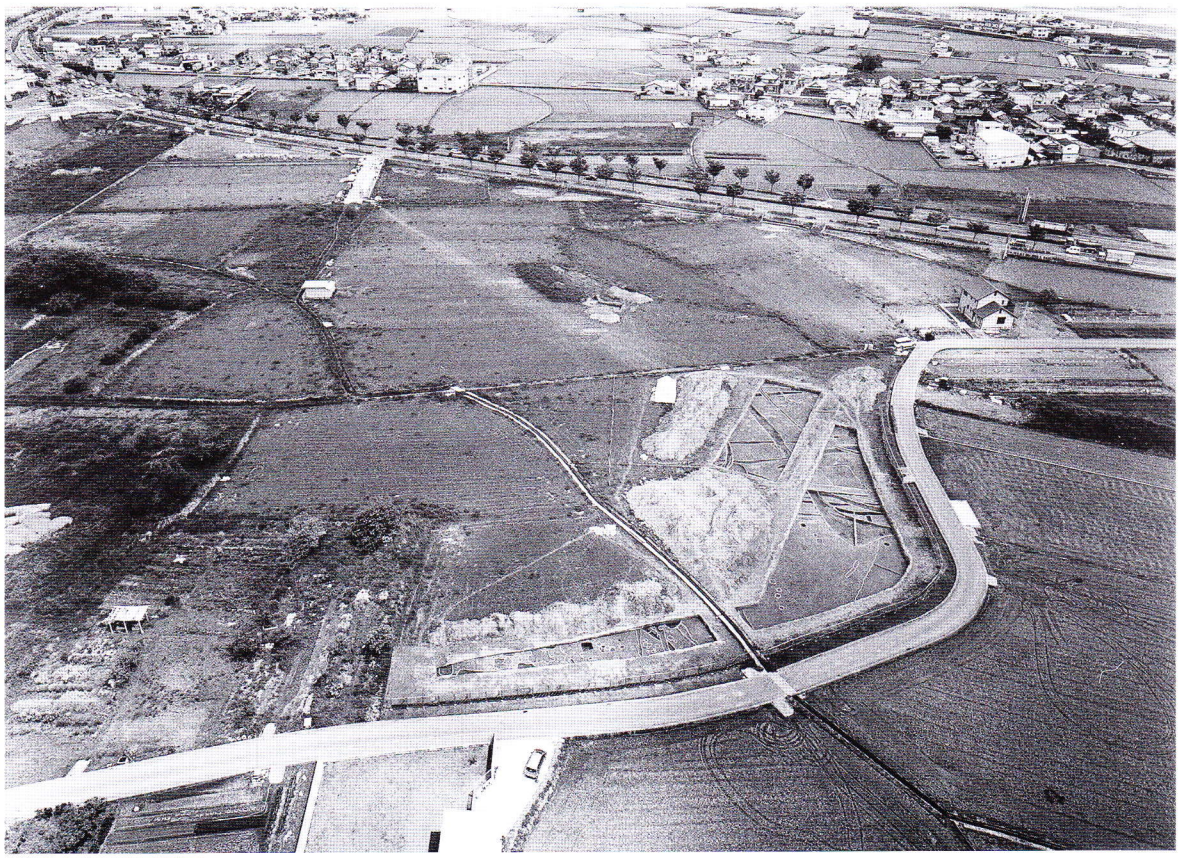
要約

川辺遺跡は、日本書記に記された「河辺屯倉」や古代官道である南海道に近接する遺跡であり、今回の調査では飛鳥時代から奈良時代にかけての竪穴住居や掘立柱建物、溝や土坑などが検出された。また遺物では土馬が出土している。その他、縄文時代晩期中葉のいわゆる滋賀里Ⅲ式（篠原式）併行期の土器棺墓や土坑、弥生時代の溝、古墳時代前期から後期にかけての竪穴住居や溝、鎌倉時代の土葬墓や溝など川辺遺跡の存続時期を示す遺構群を確認した。そのうち、縄文時代晩期中葉の土坑からは一括性の高い土器群が出土し、川辺遺跡西部における縄文時代集落の一端を明らかにした。また鎌倉時代の土葬墓には土師器皿、瓦器椀、中国銭、小刀、砥石が副葬品として納められていた。

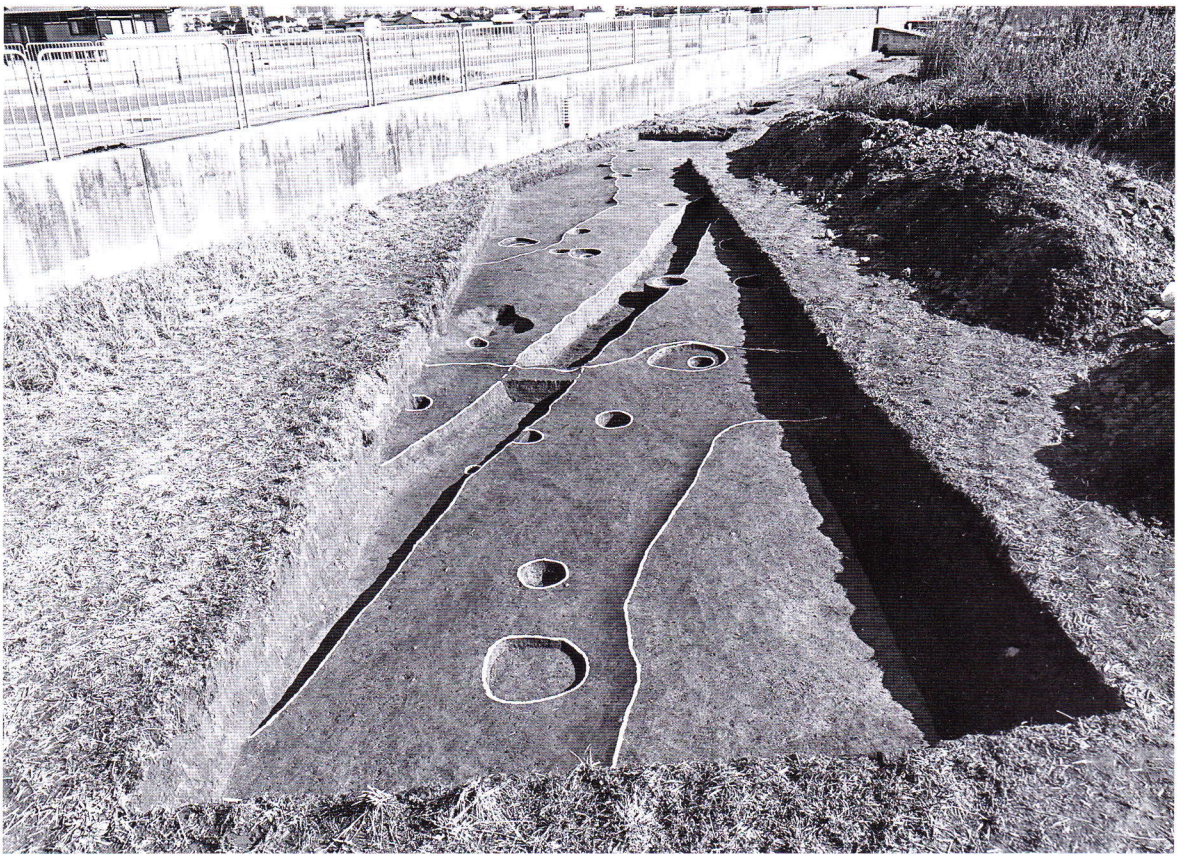
図　　版

図版1　川辺遺跡

調査地近景（南から、写真奥は和泉山脈）



調査地近景（西から、写真奥は一般国道24号バイパス）



第1区　全景（南西から）

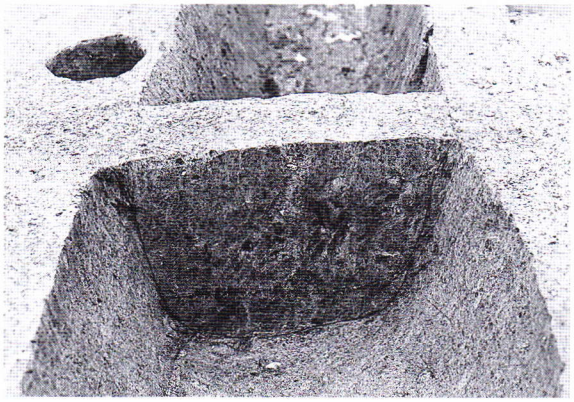
第2区　全景（東から）

第3区　全景（西から）

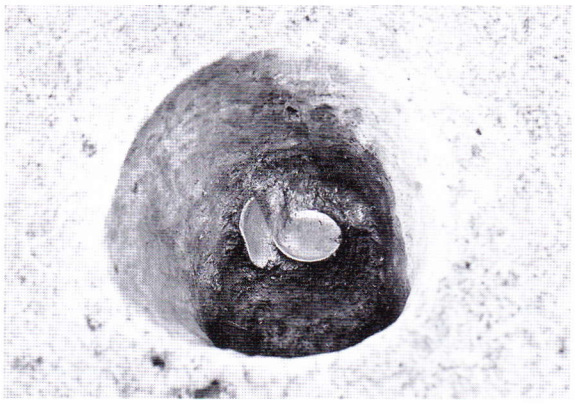
第2区　SD－6土層堆積状況（南東から）

第1区　SD－1土層堆積状況（東から）

第2区　SD－2土層堆積状況（東から）

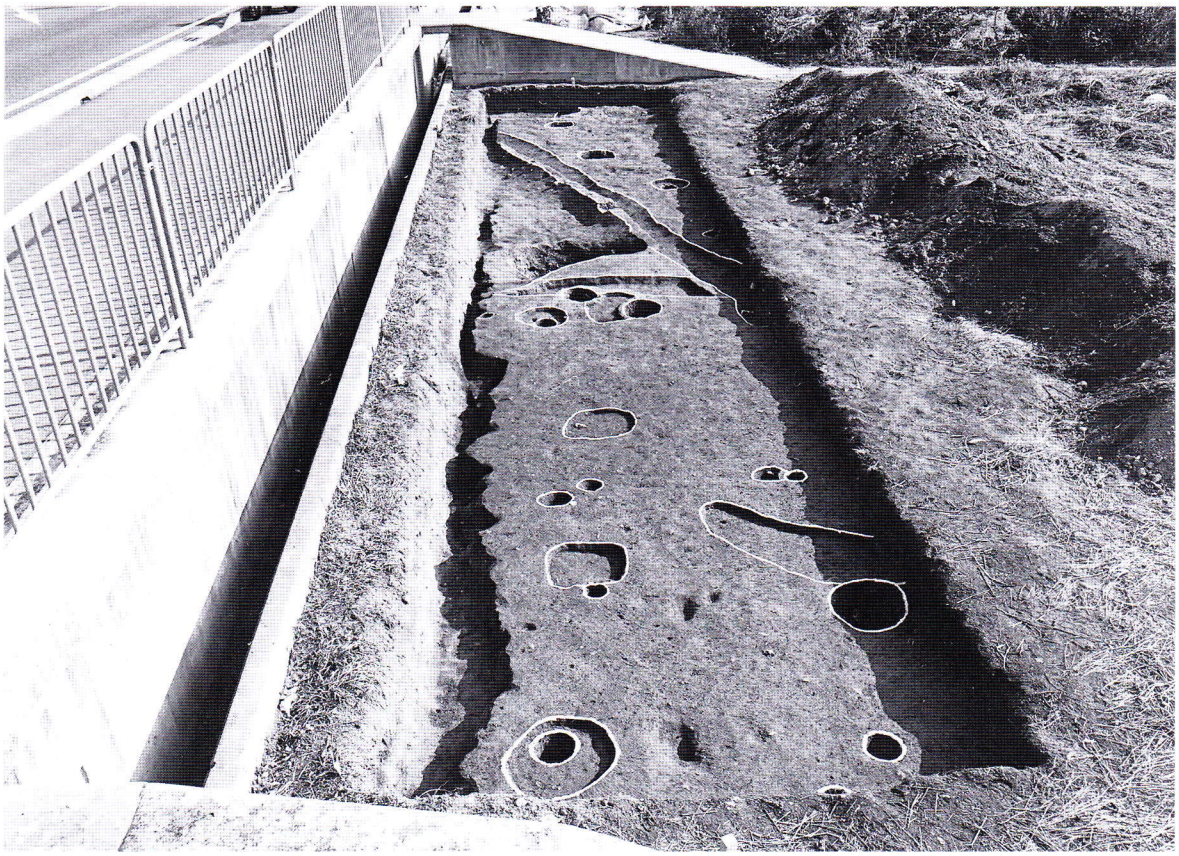


第2区　SD－5土層堆積状況（南から）



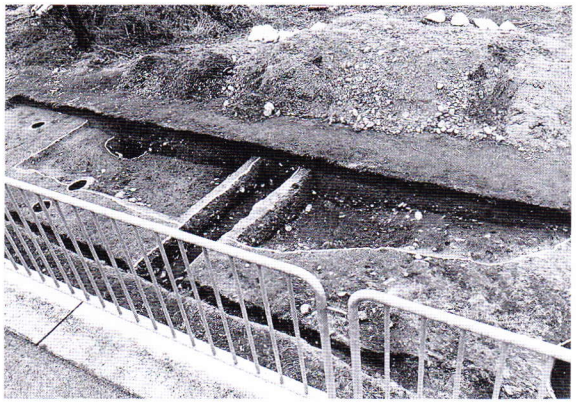
第2区　P－58遺物出土状況（東から）

第4区　全景（東から）



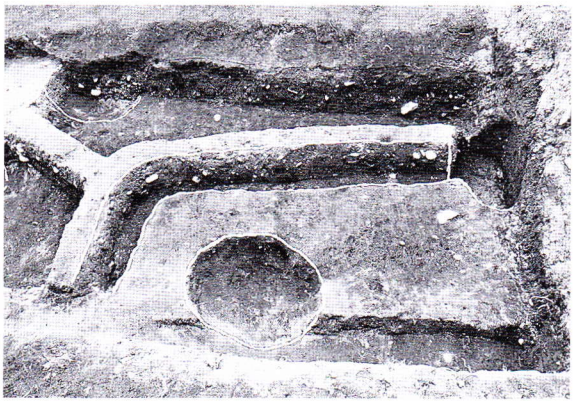
第5区　全景（西から）

第6区　全景（西から）



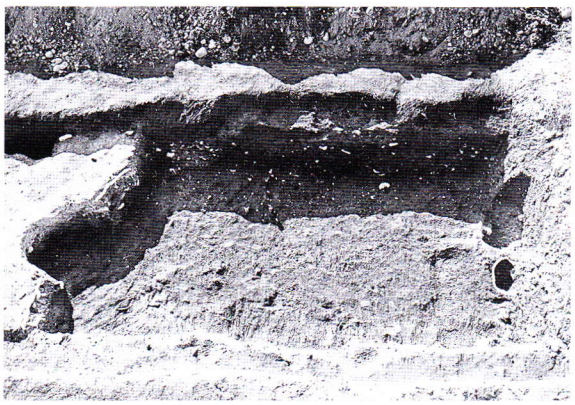
第6区　SK－11（北西から）

第6区　SK－11土層堆積状況（東から）



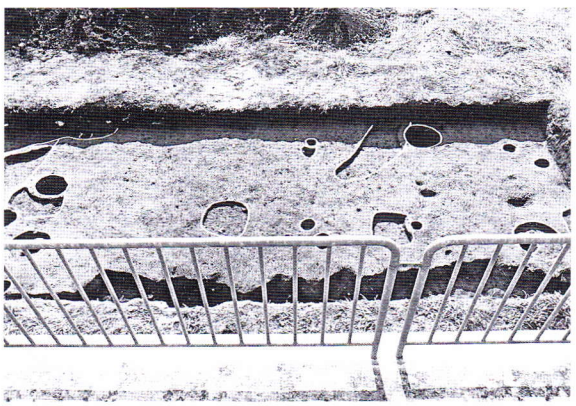
第6区　SB－1（北から）

第6区　SB－1土層堆積状況（東から）

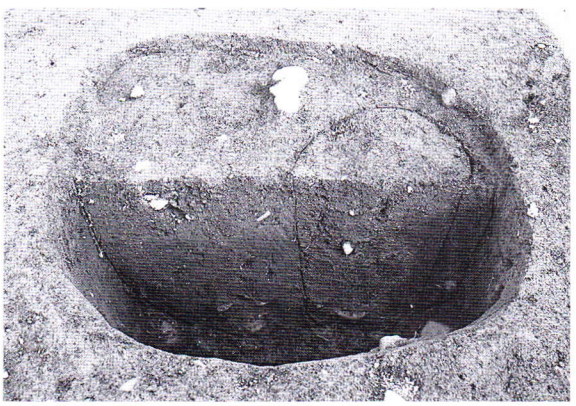


第6区　SB－7（北から）

第6区南壁面　SB－7土層堆積状況（北から）



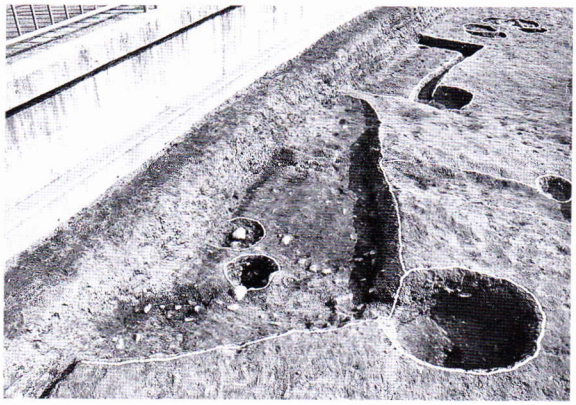
第5区　SA－2（北から）



第5区　P－83土層堆積状況（南から）

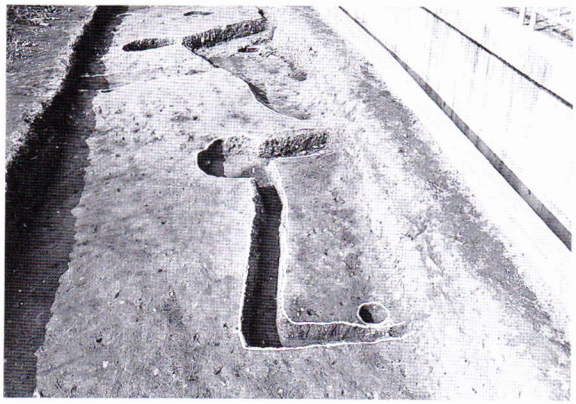
第7区　第1遺構面全景（南東から）

第7区　第2遺構面全景（南東から）



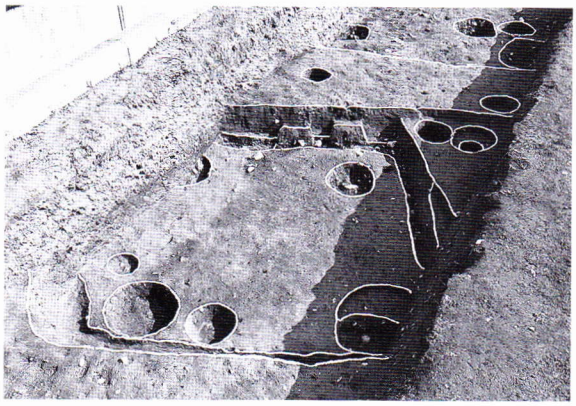
第7区　SB－2（西から）

第7区　SB－2土層堆積状況（南西から）

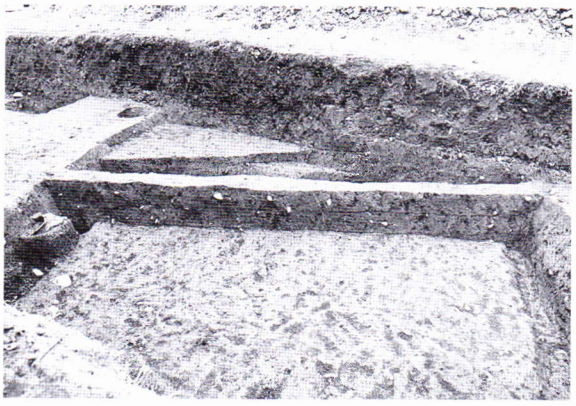


第7区　SB－3（南東から）

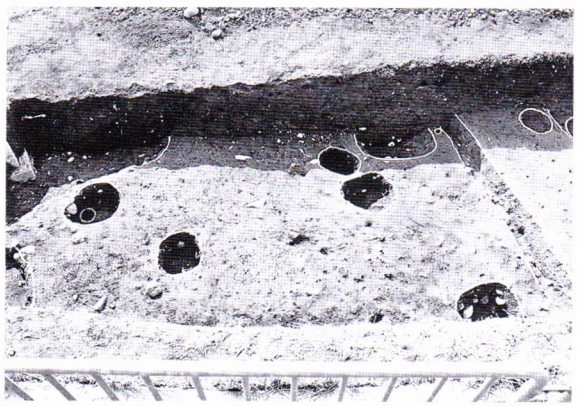
第7区　SB－3土層堆積状況（南東から）



第7区　SB－5（西から）

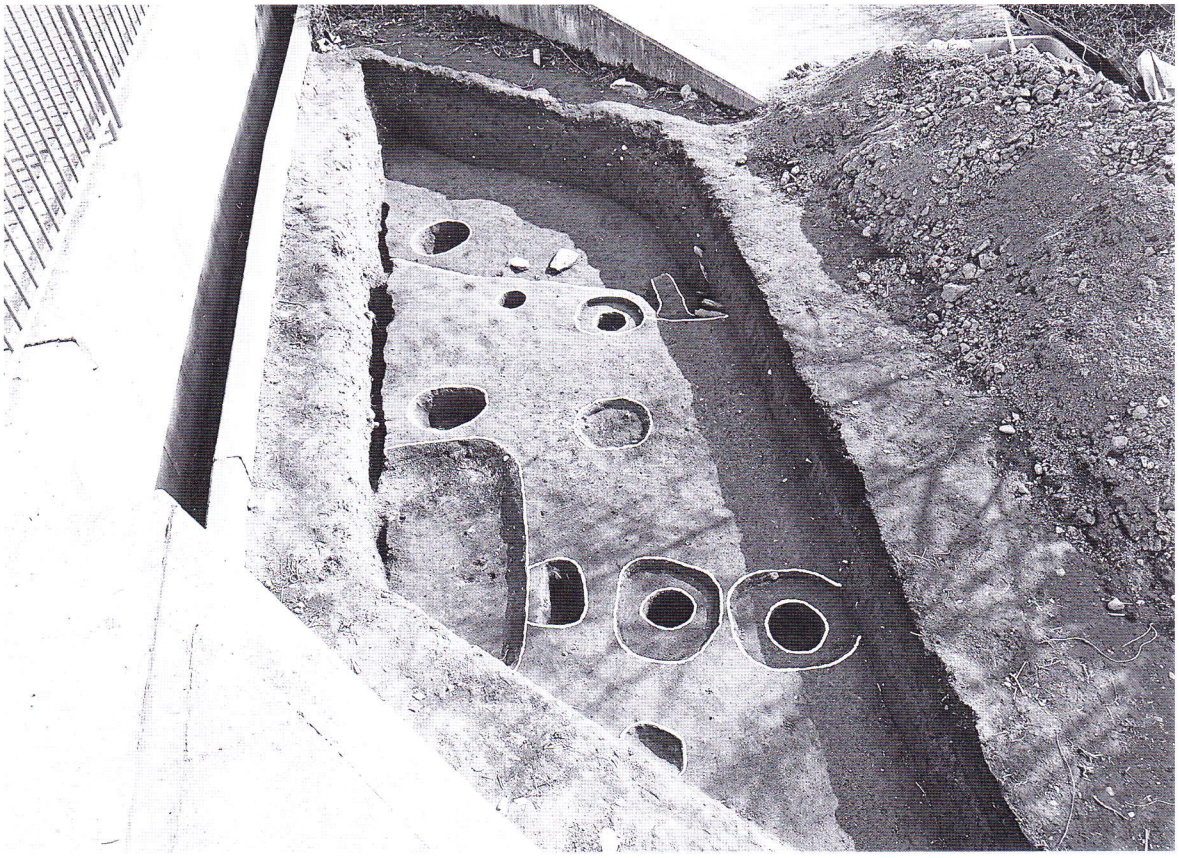


第7区　SB－5土層堆積状況（北から）

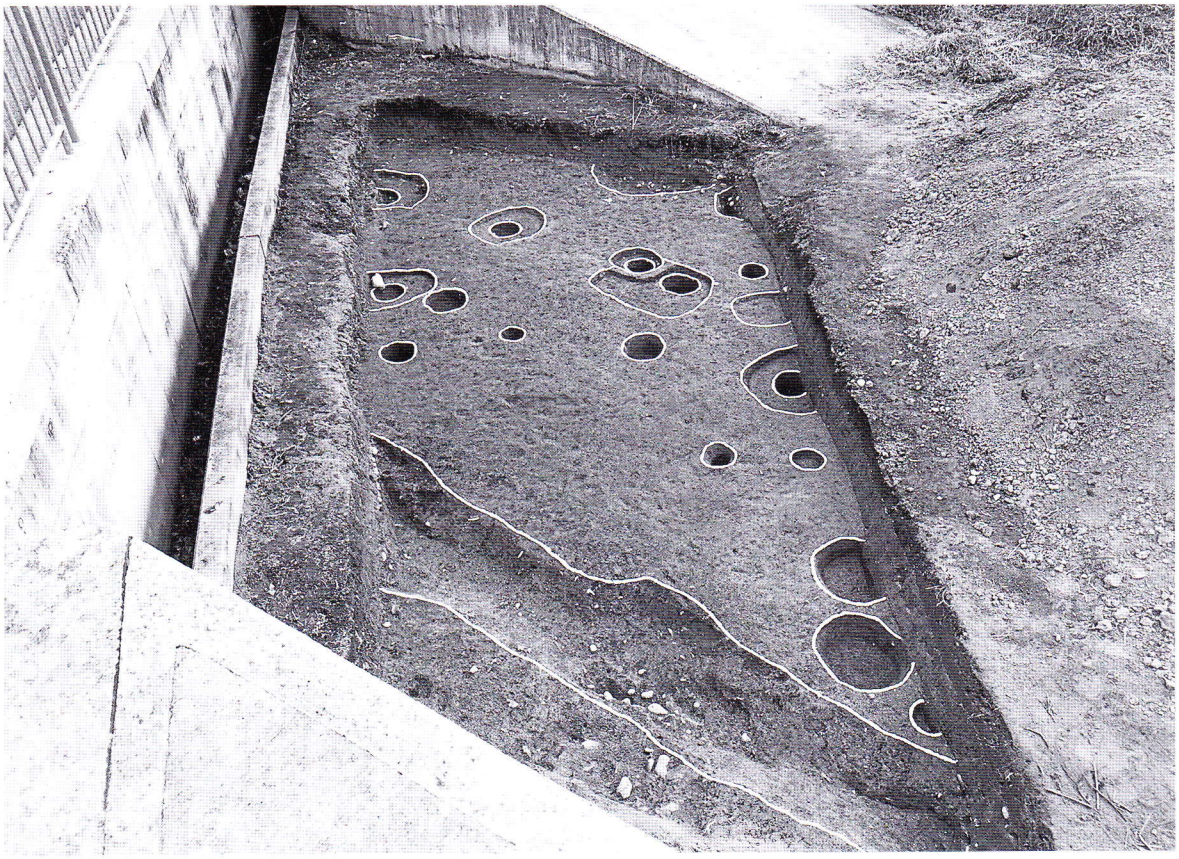


第7区　SB－6（北東から）

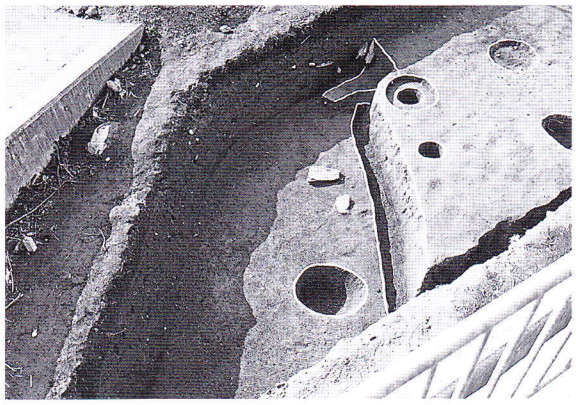
第7区　SB－6土層堆積状況（南から）



第8区　全景（北西から）

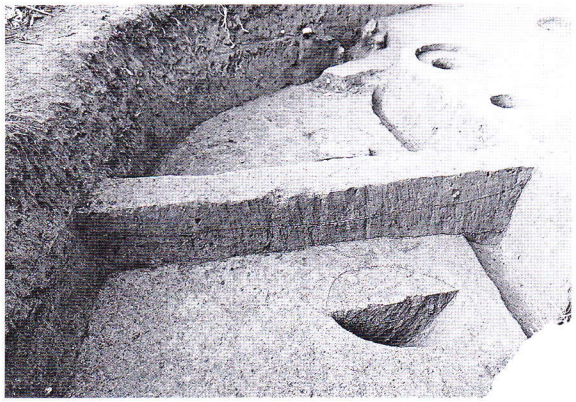


第9区　全景（北西から）



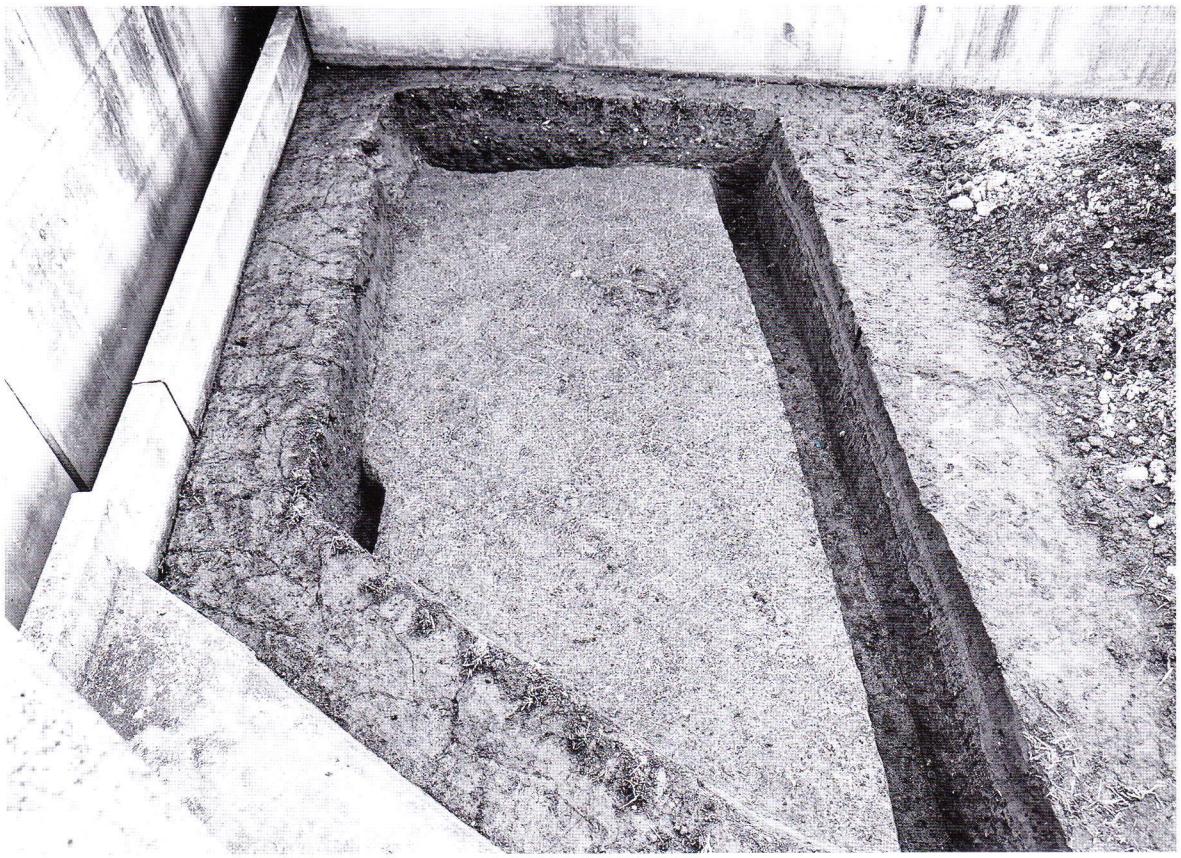
第8区　SB－8（北東から）

第8区　SB－8カマド（南東から）

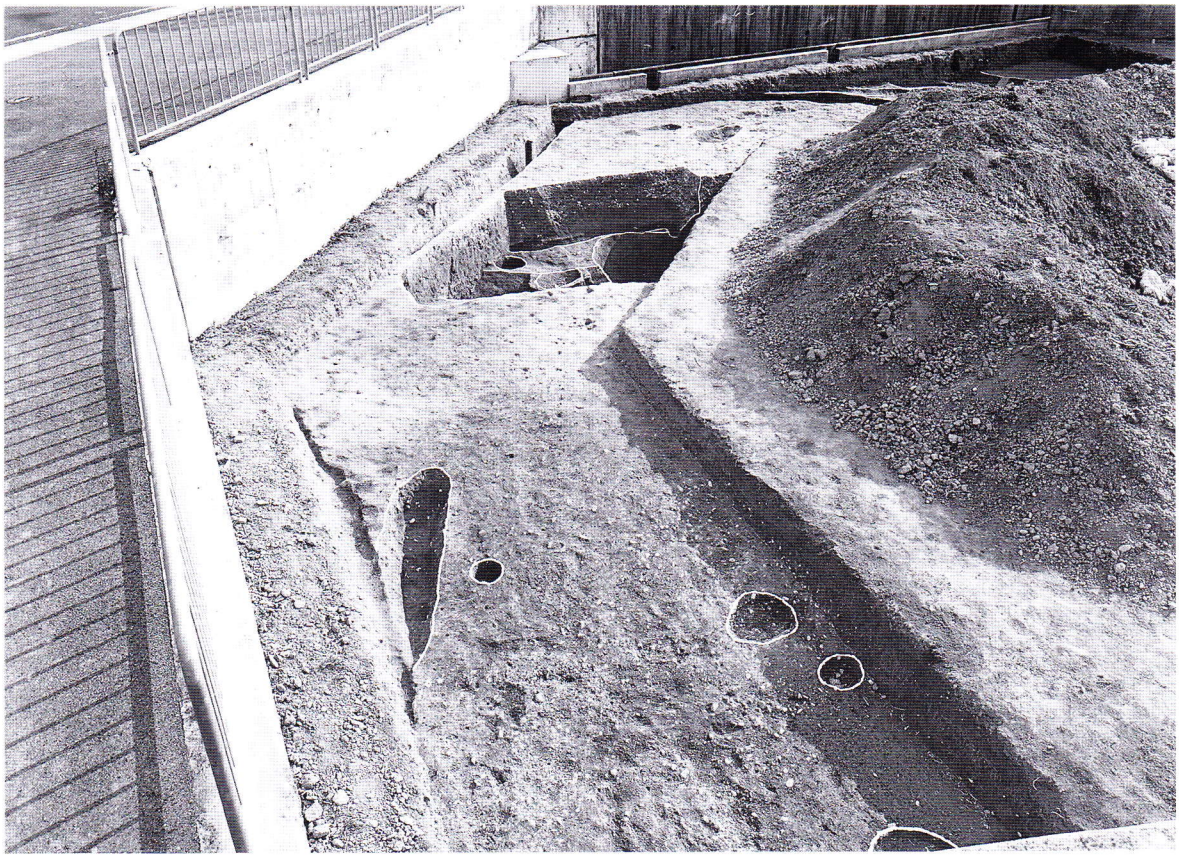


第8区　SB－8土層堆積状況（北東から）

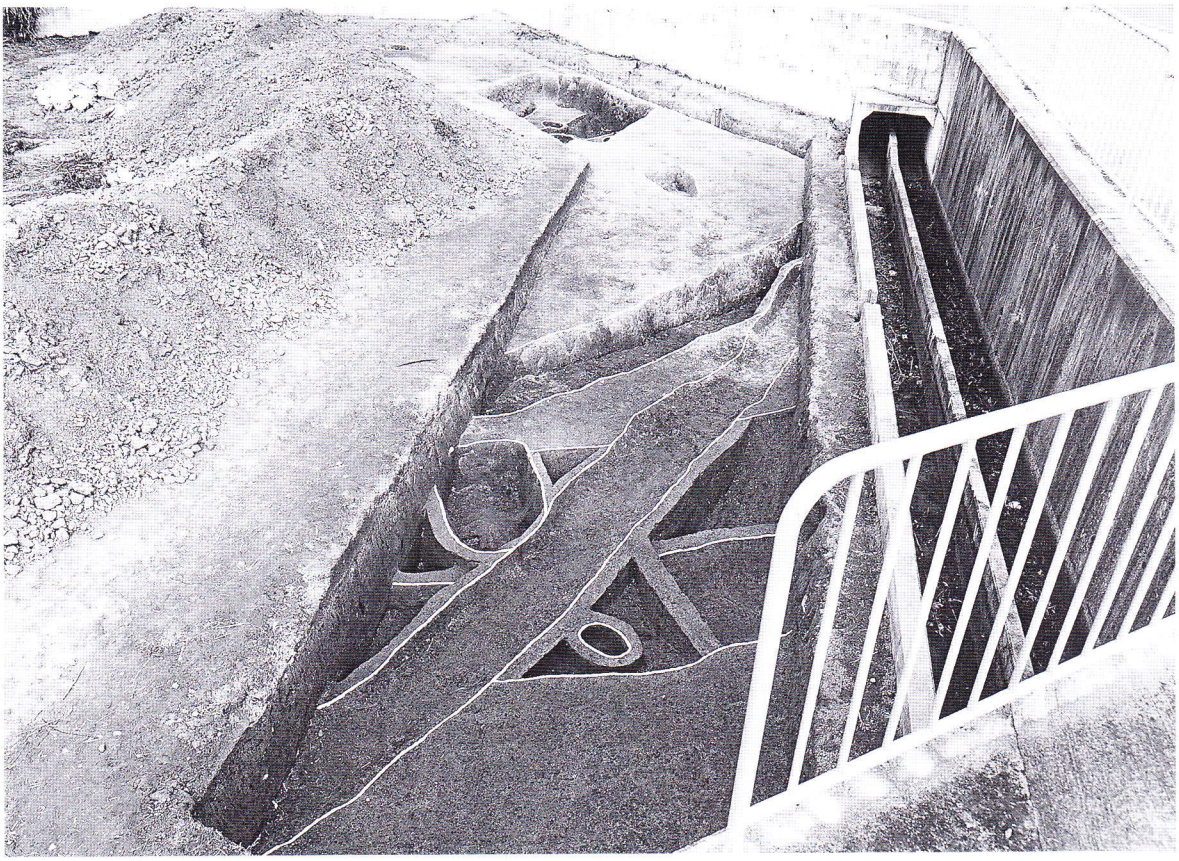
第8区　SB－8カマド内土層堆積状況（北東から）



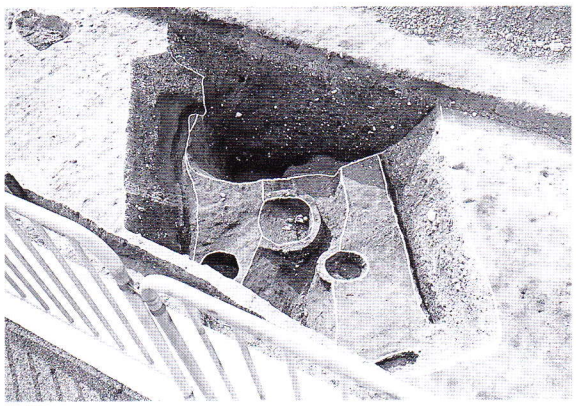
第10区　全景（北西から）



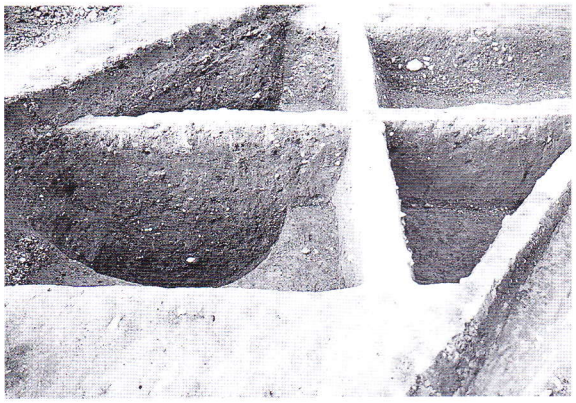
第11・12区　全景（北から）



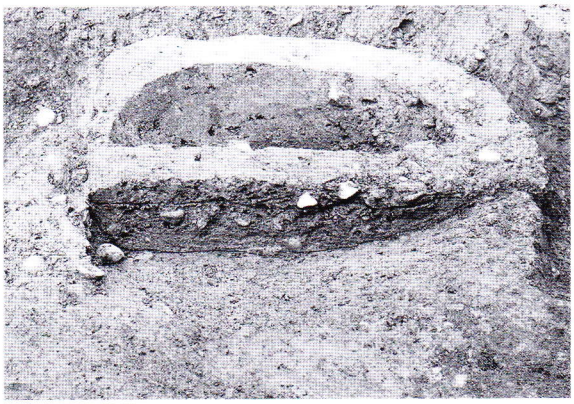
第12・13区　全景（南西から）



第12区　SB－10・SE－１（北東から）

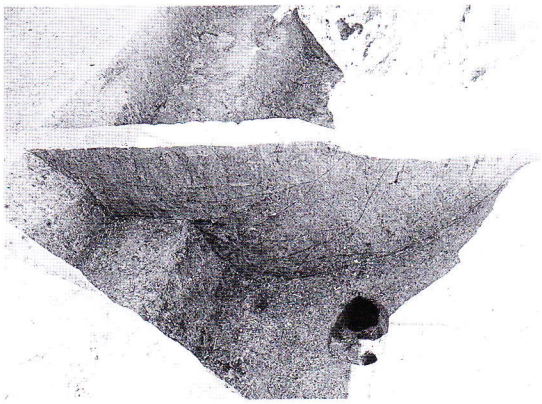


第12区　SB－10・SE－１土層堆積状況（南東から）

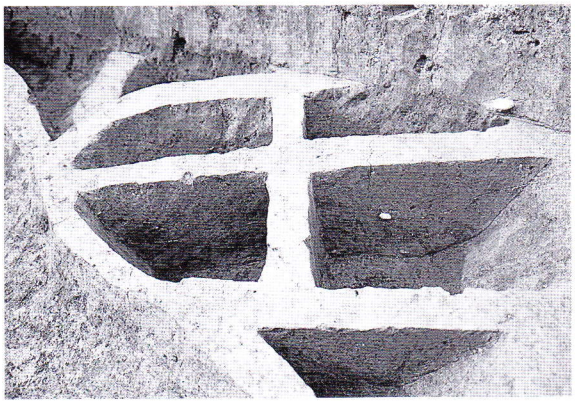


第12区　SB－10炉土層堆積状況（南東から）

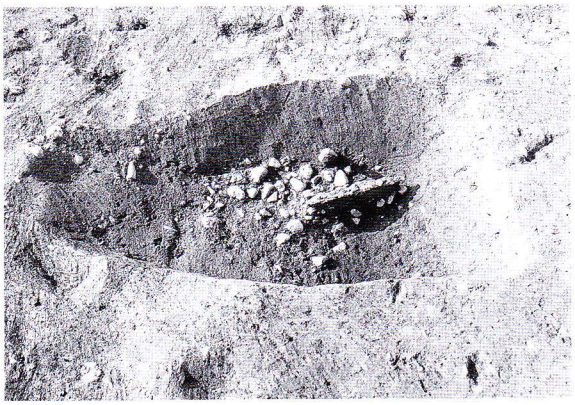
第12区西壁　SE－1土層堆積状況（東から）



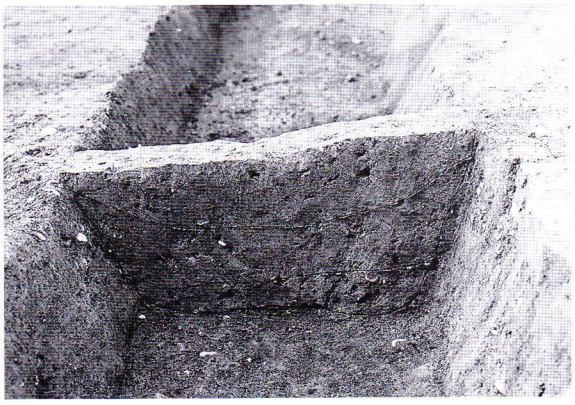
第13区　SD－21土層堆積状況（南東から）



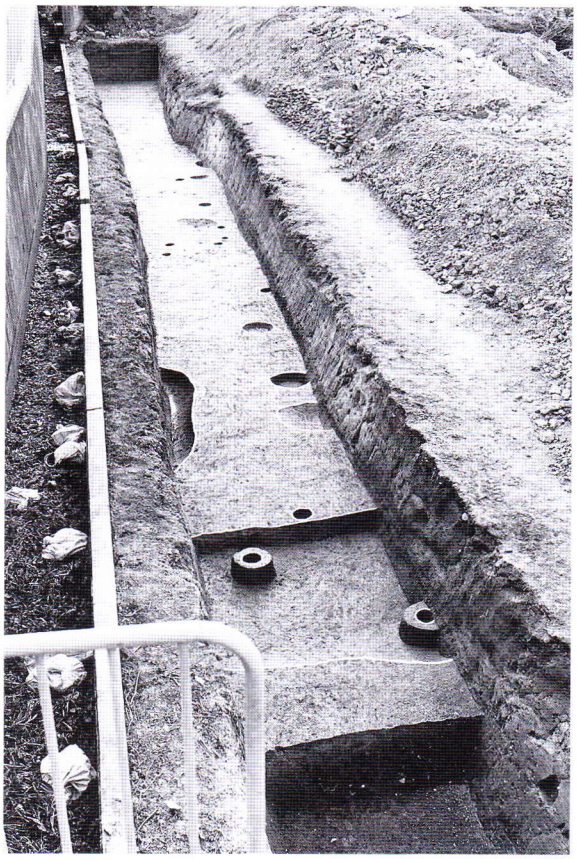
第13区　SK－20土層堆積状況（東から）



第13区　SK－19（東から）

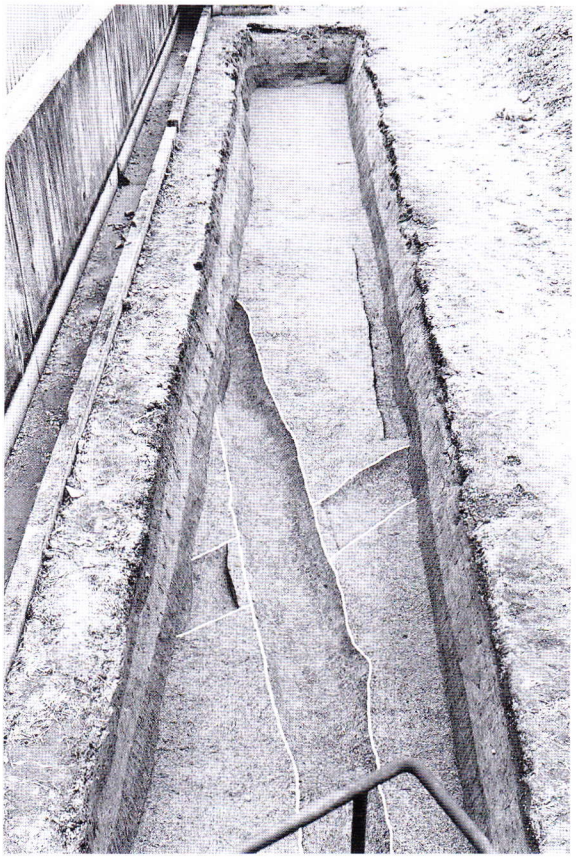


第13区　SD－18土層堆積状況（東から）



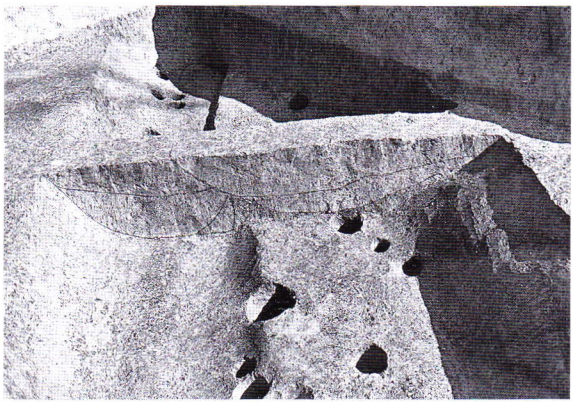
第14・15区　第1遺構面全景（北東から）

第14区　第2遺構面全景（北東から）

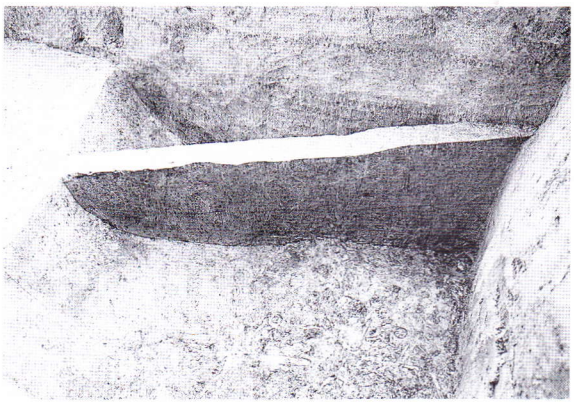


第16区　全景（北東から）

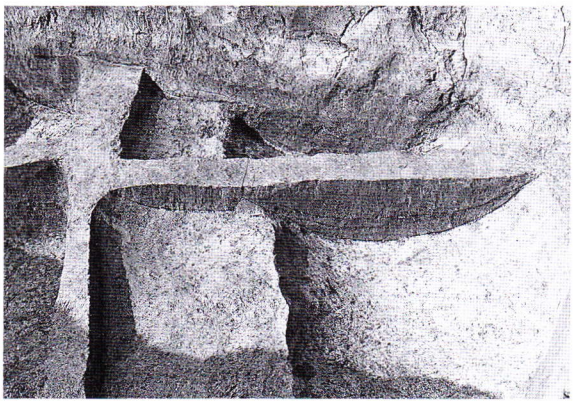
第17区　全景（南西から）



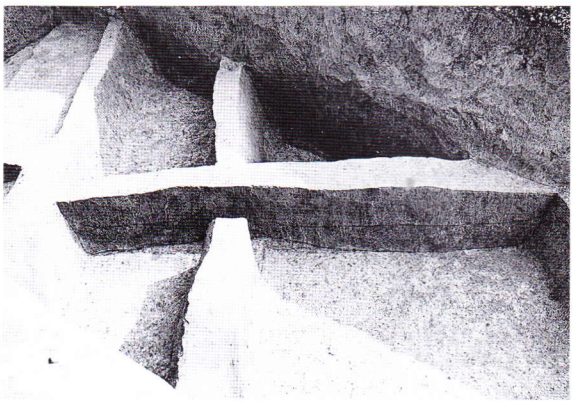
第17区　SD－29土層堆積状況（西から）



第17区　SD－32土層堆積状況（西から）



第18区　SD－35土層断面図（東から）



第18区　SD－34・36土層堆積状況（西から）

第18区　全景（北東から）

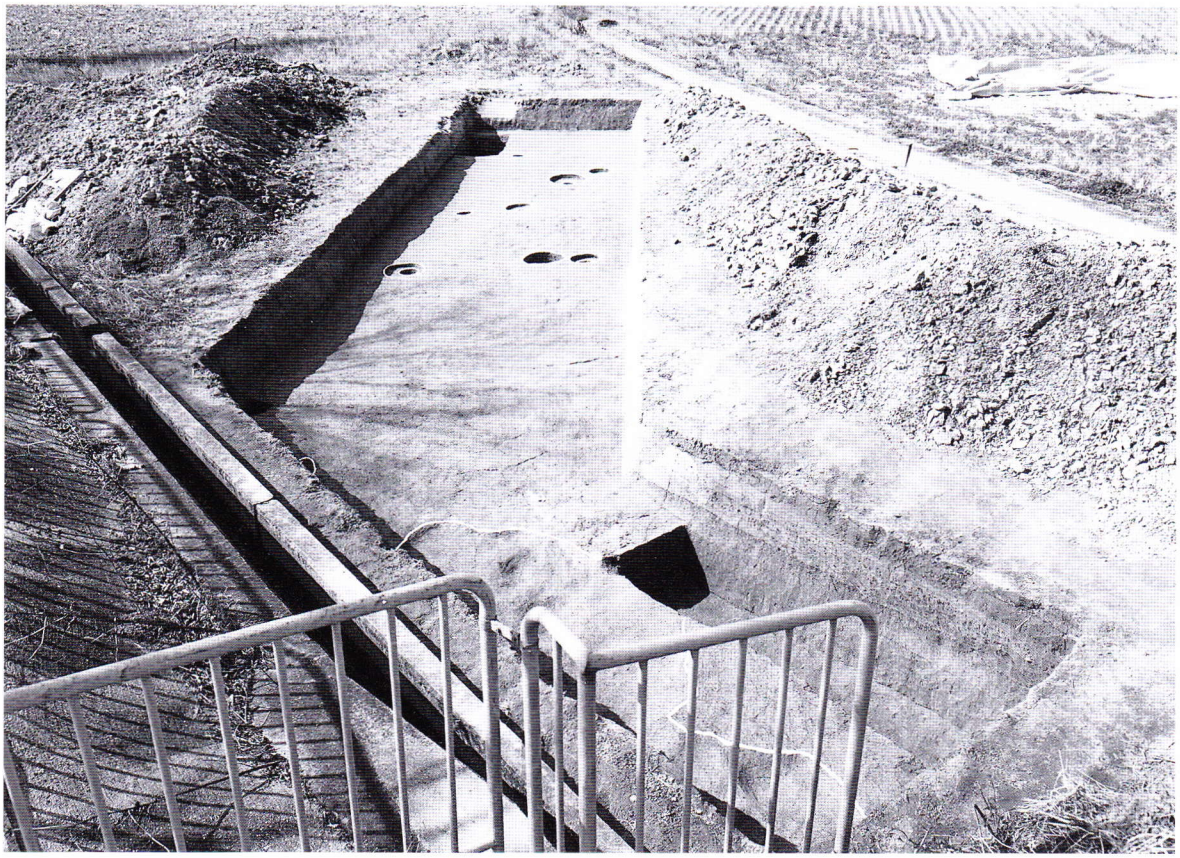
第19区　全景（北東から）

第20区　全景（北東から）

第21区　全景（北東から）

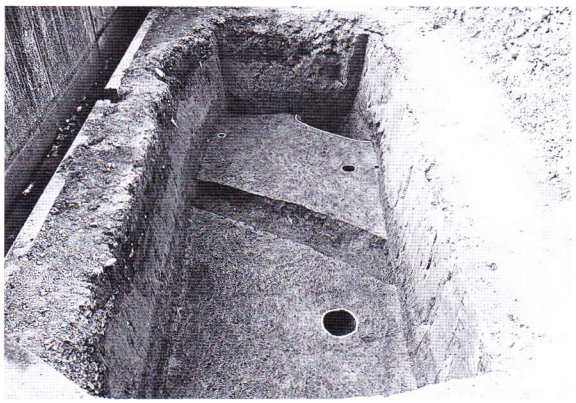
第22区　全景（北東から）

第23区　全景（北東から）



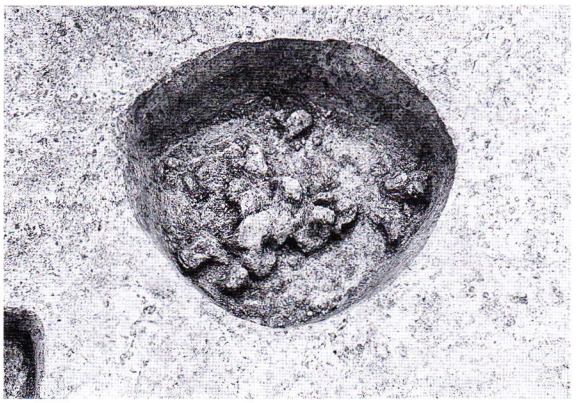
第24区　全景（東から）

第25区　第１・２遺構面全景（北東から）



第25区　第３遺構面全景（北東から）

第25区　第４遺構面全景（北東から）

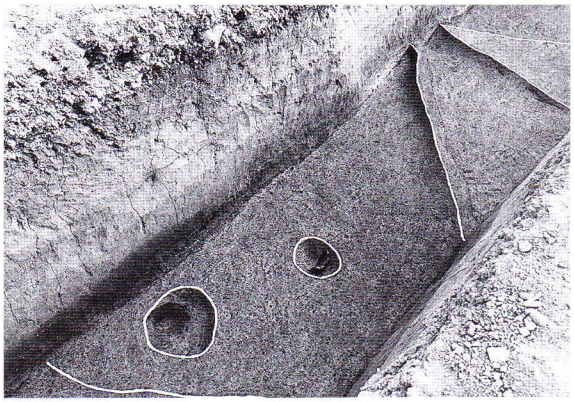


第25区　SK－38（北西から）

第26区　第２遺構面全景（南西から）

第26区　第３遺構面全景（南西から）

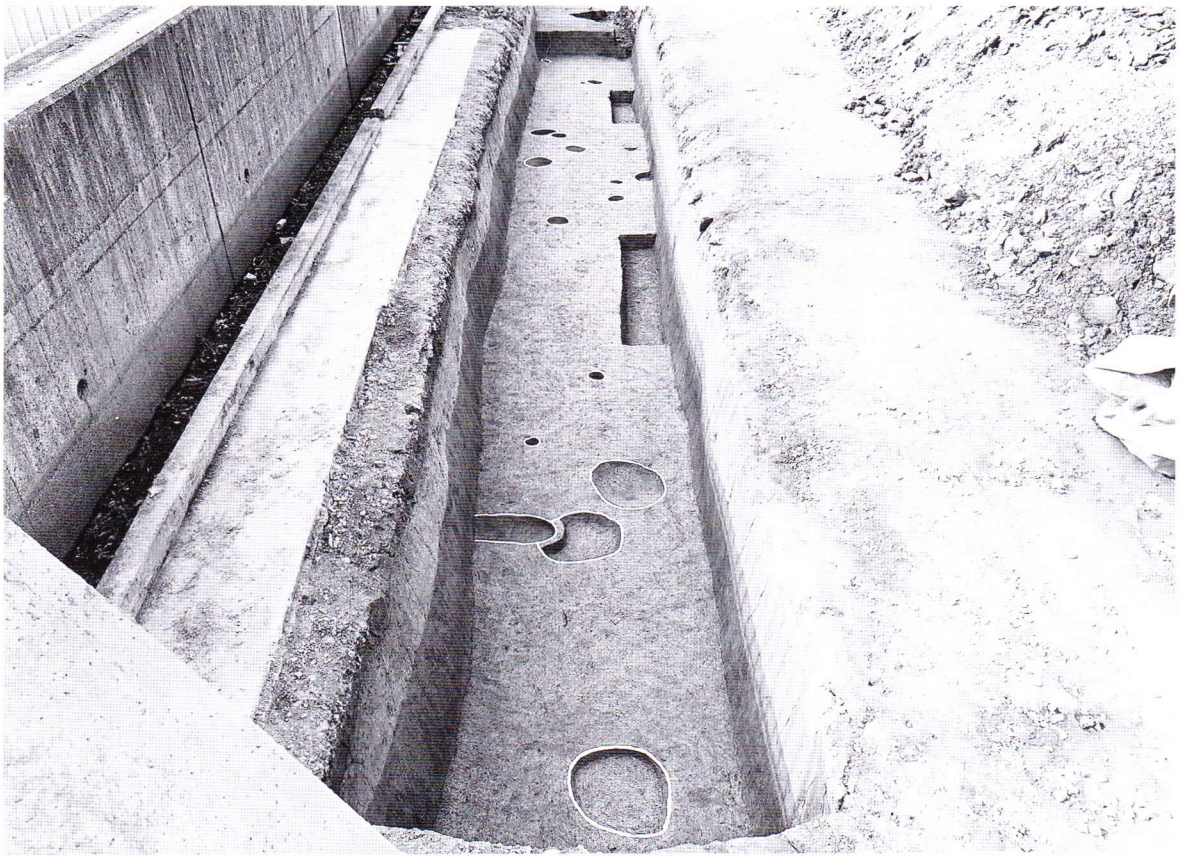
第26区　第４遺構面全景（南西から）



第26区　SK－42（北から）

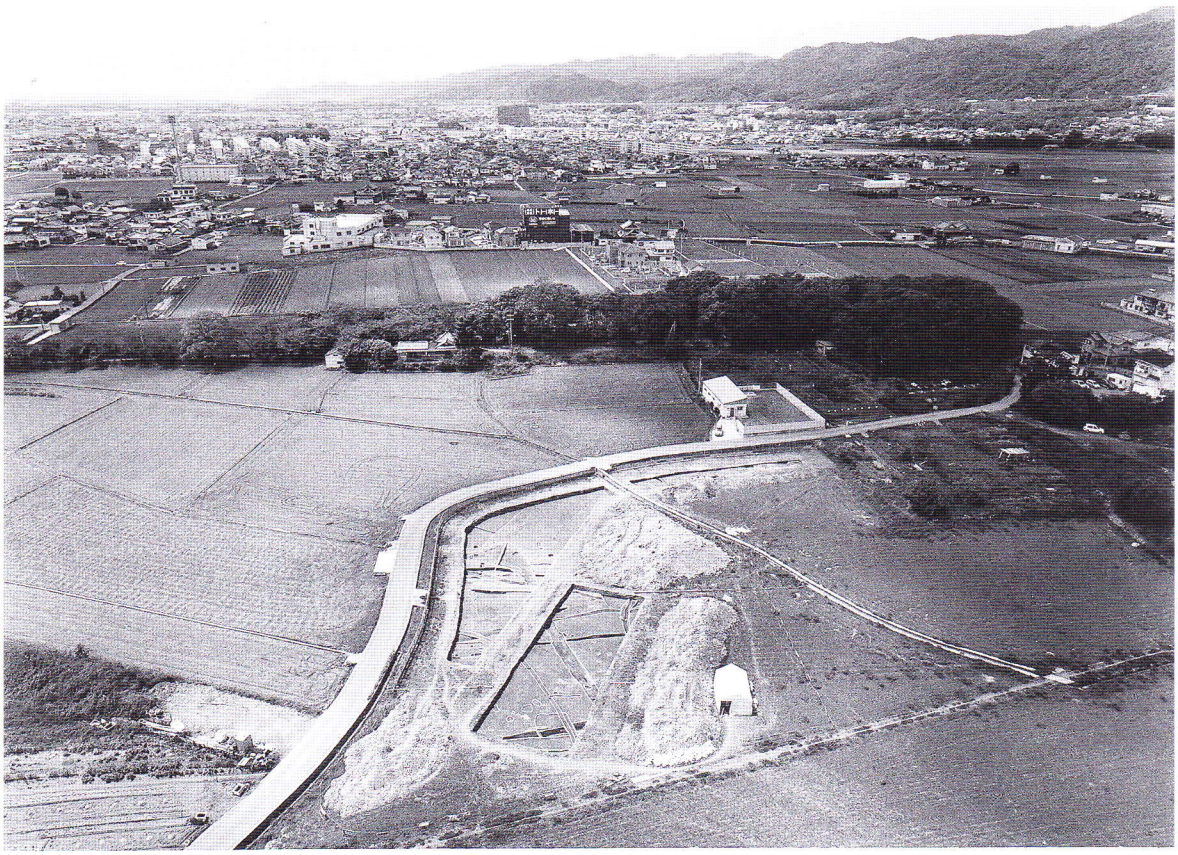
第26区　P－270（東から）

第27区　第２遺構面全景（北東から）



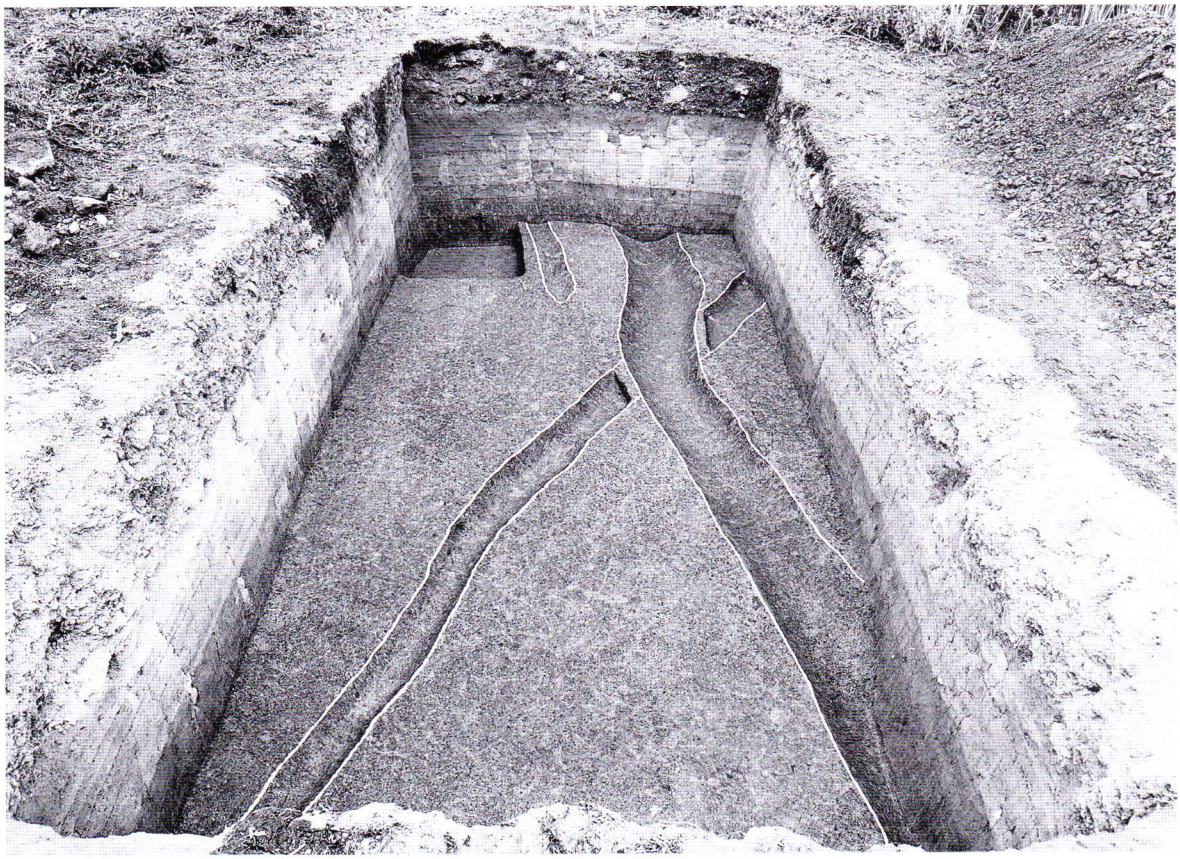
第27区　第４遺構面全景（北東から）

第6次調査地近景（北から、写真奥は紀ノ川）

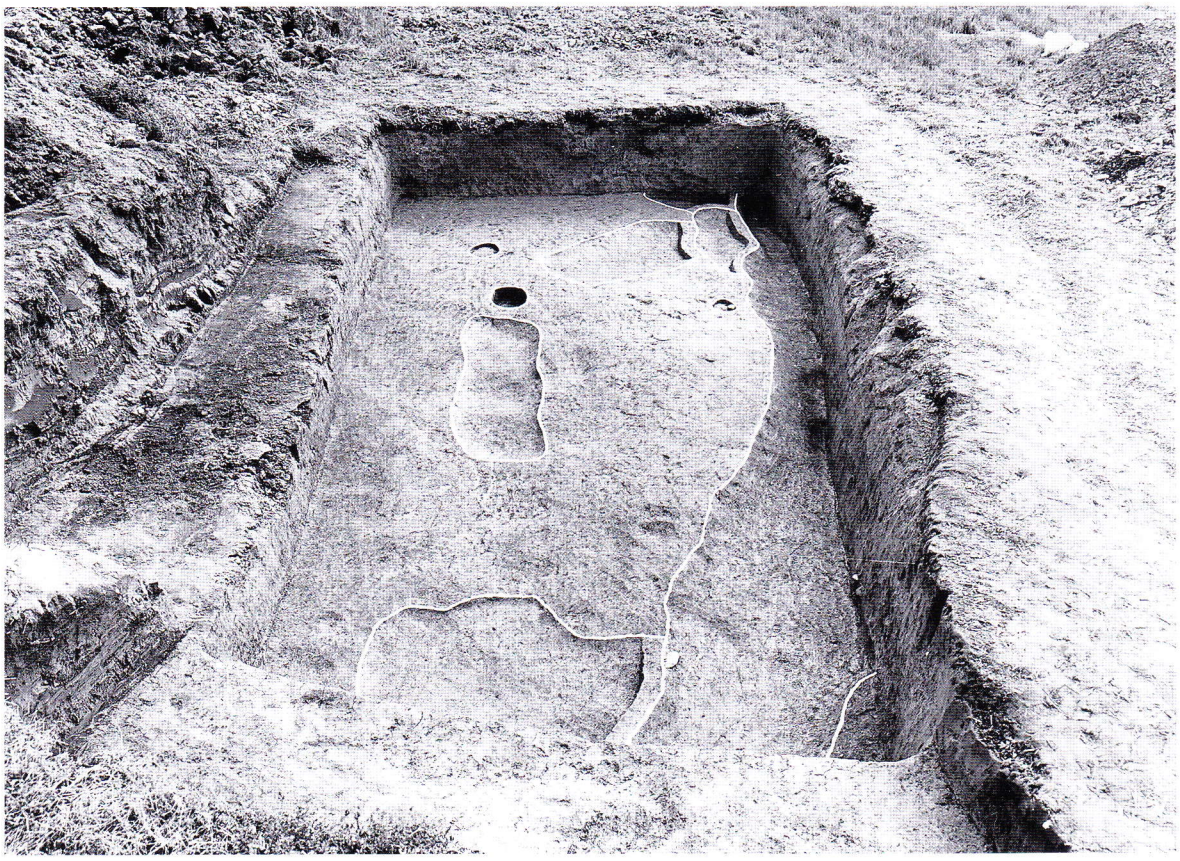


第6次調査地近景（東から、写真中央上は力侍神社、写真奥は和泉山脈）

第28区　第１遺構面全景（東から）

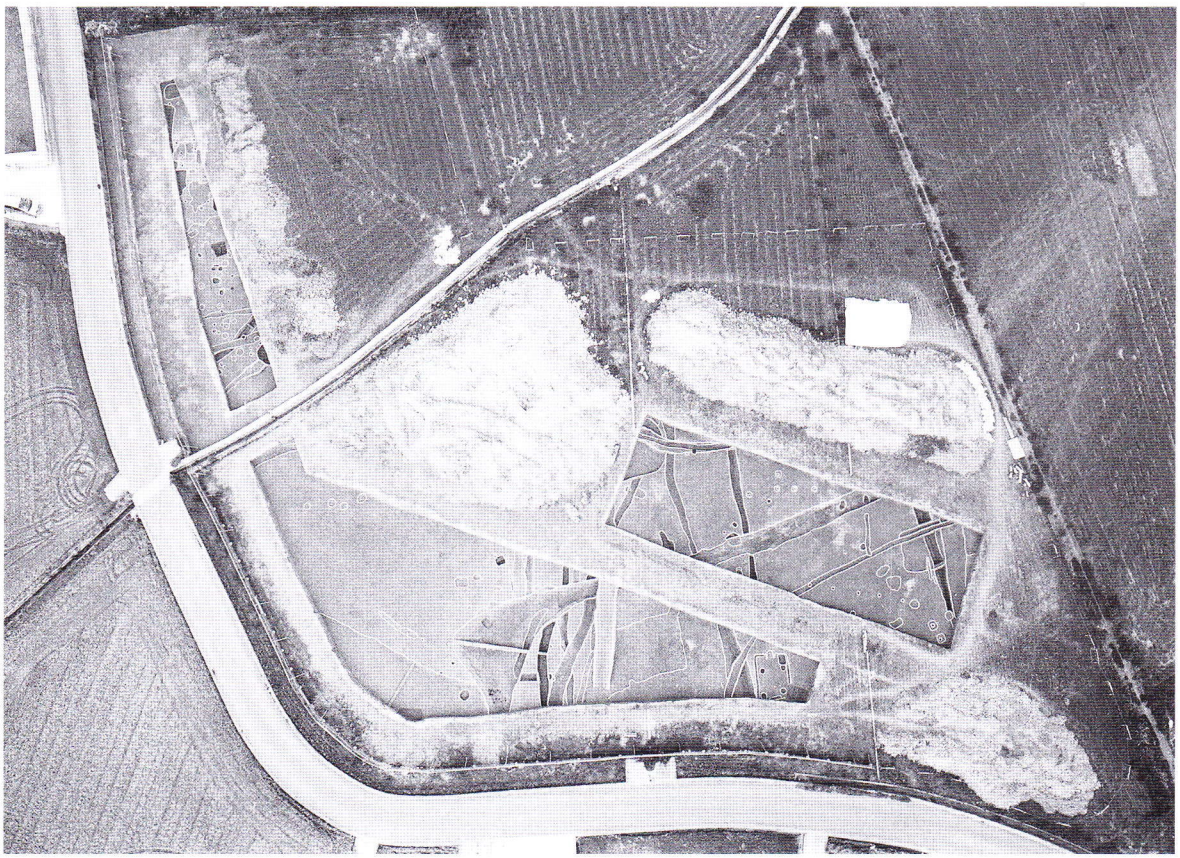


第28区　第２遺構面全景（東から）

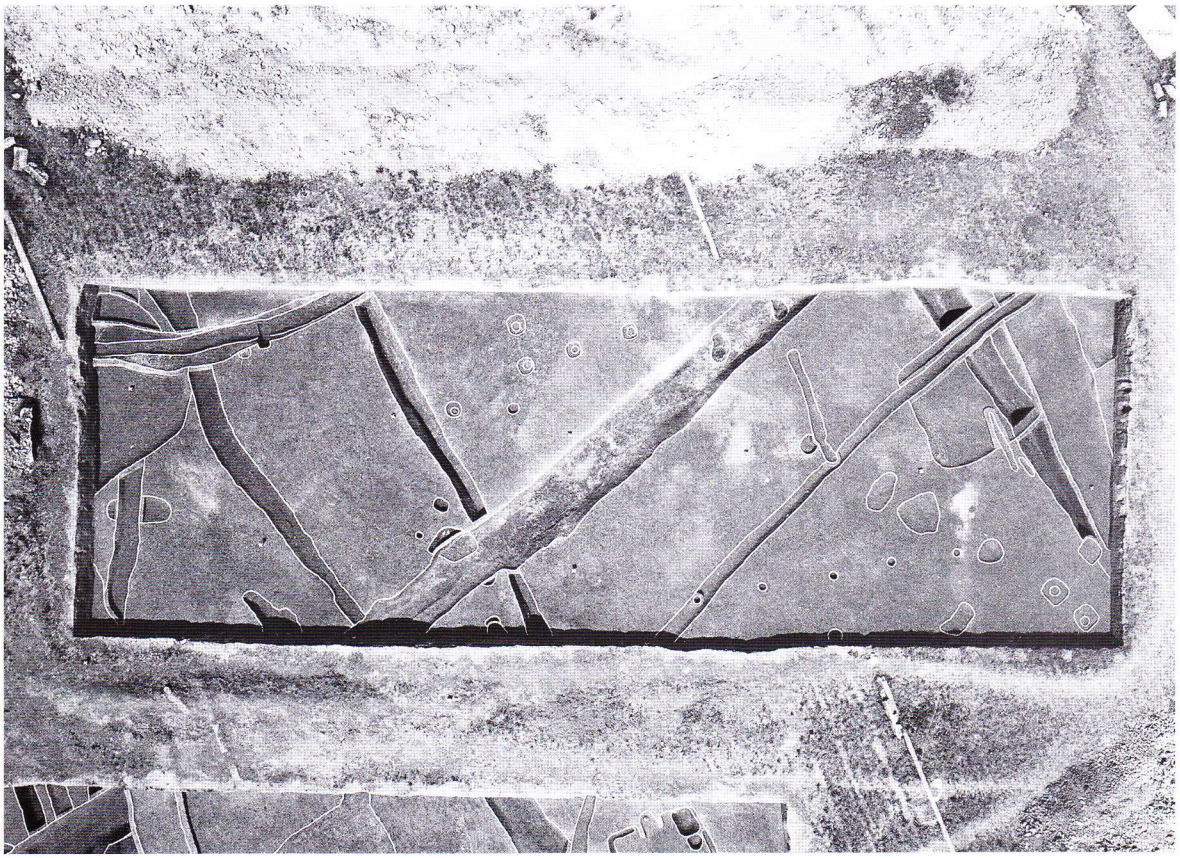


第29区　第１遺構面全景（北東から）

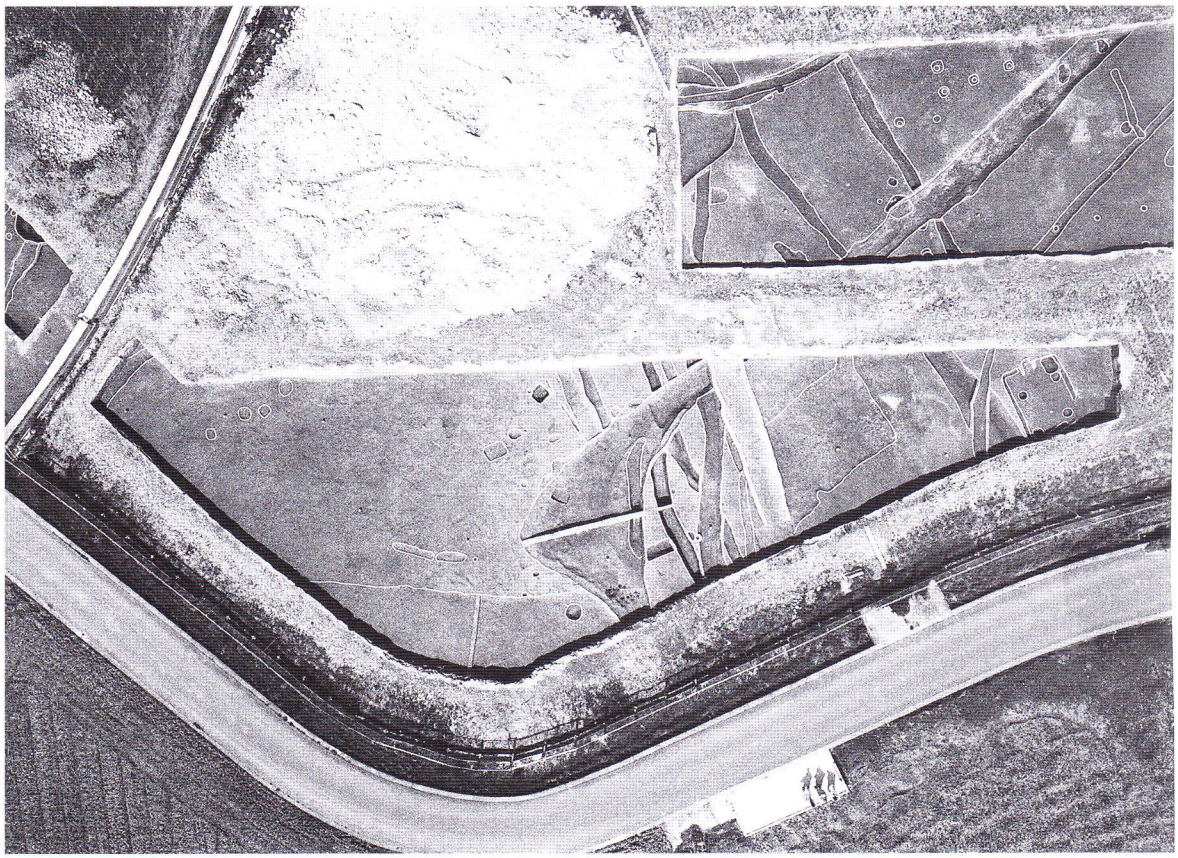
第29区　第２遺構面全景（北東から）



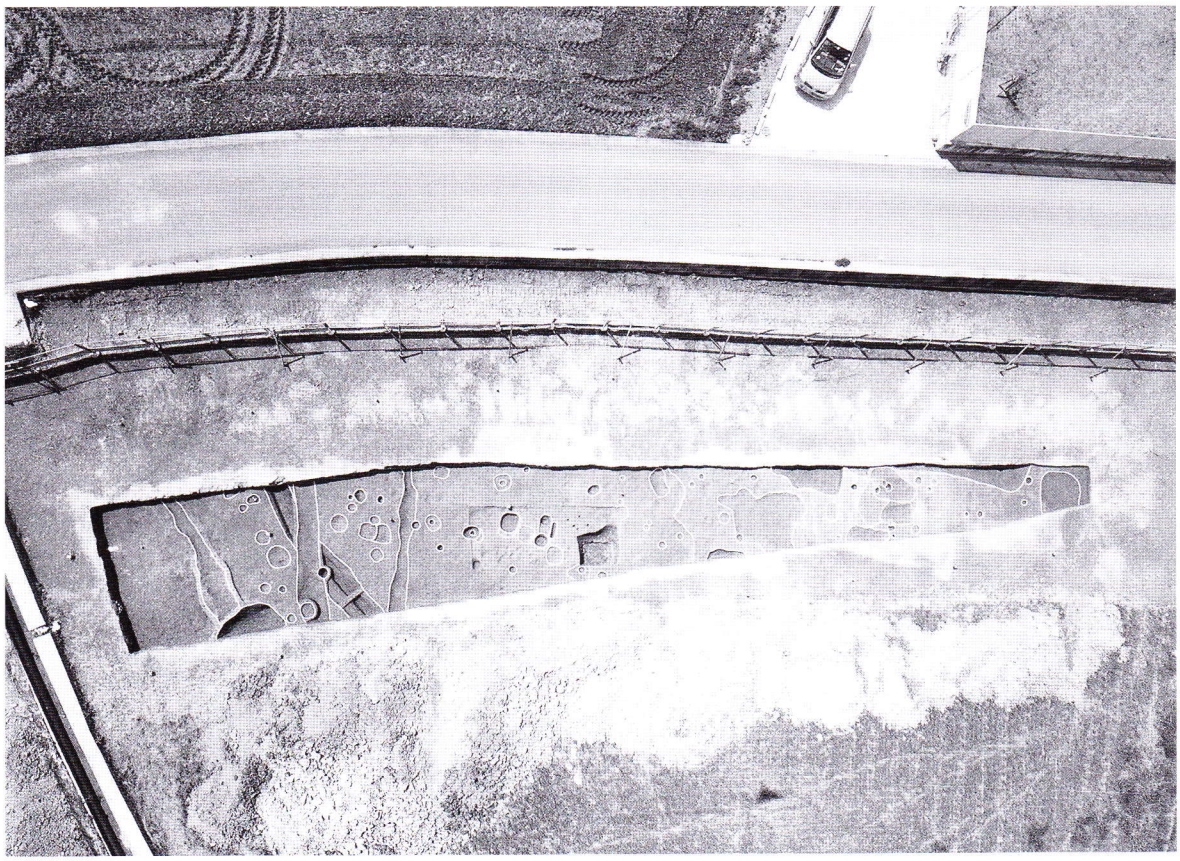
第30・31区　第１遺構面全景（上が北）



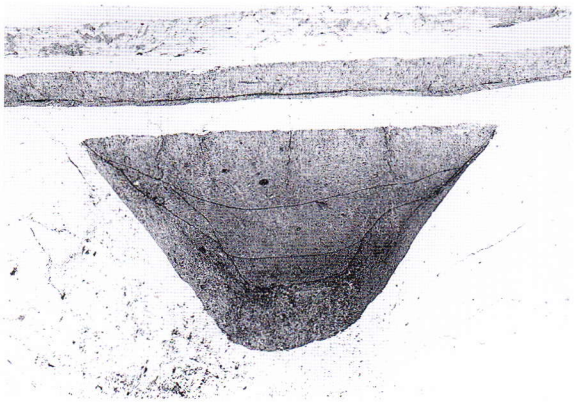
第30区　第１遺構面全景（上が北東）



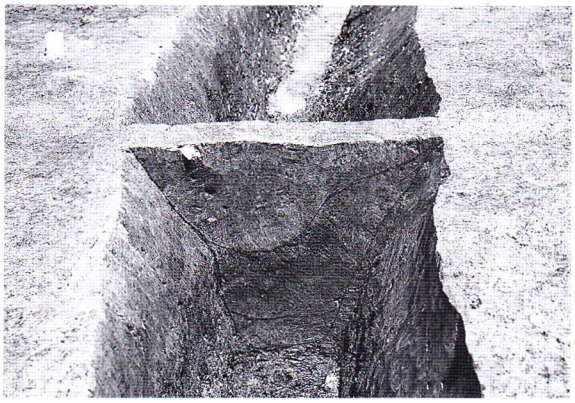
第31区　第１遺構面全景（上が北東）



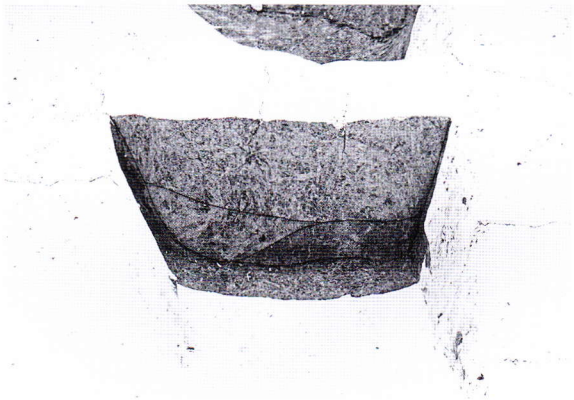
第31区北端部　第１遺構面全景（右が北）



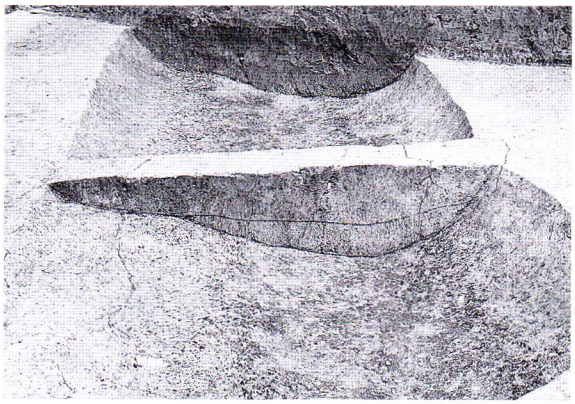
第30区　SD－62土層堆積状況（北から）



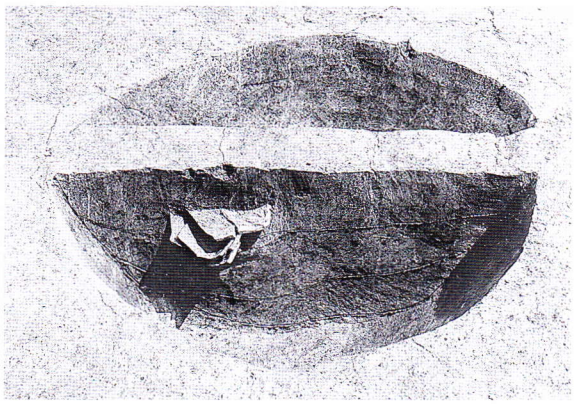
第30区　SD－63土層堆積状況（南から）



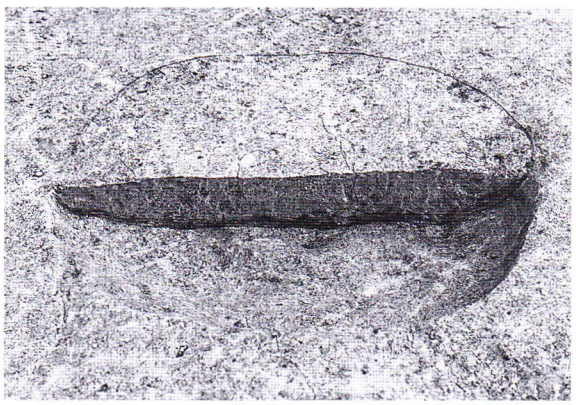
第30区　SK－59土層堆積状況（北から）



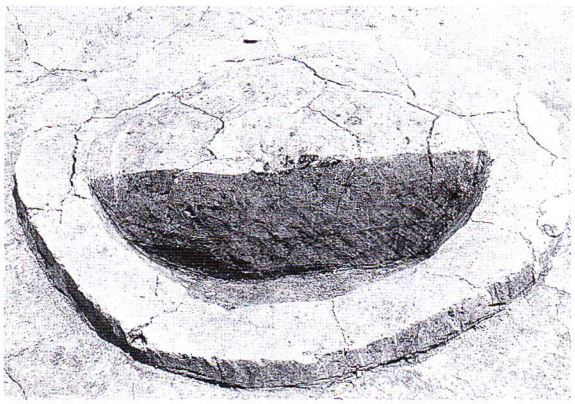
第31区　SD－65土層堆積状況（南から）



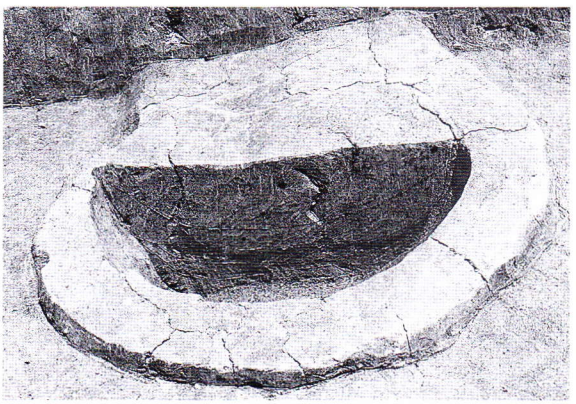
第31区　SK－78土層堆積状況（南西から）



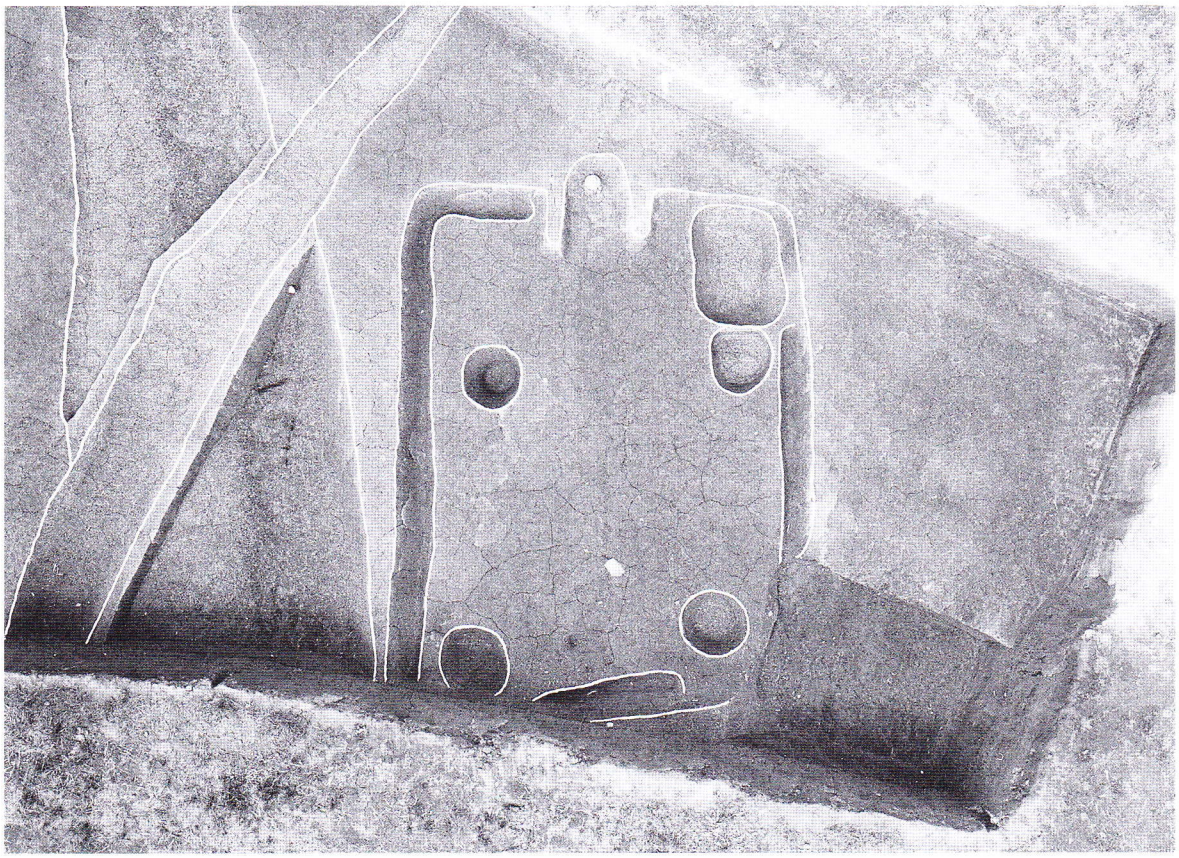
第31区　SK－77土層堆積状況（南西から）



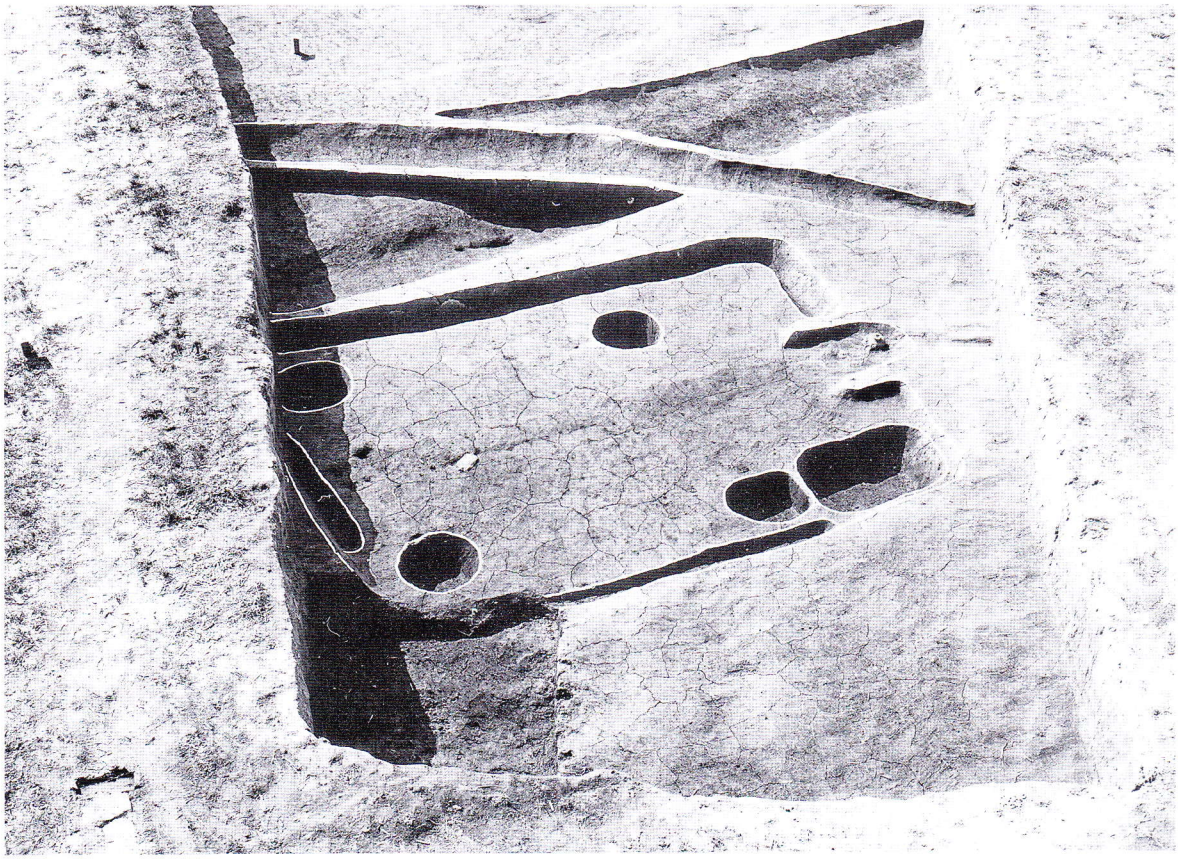
第31区　SK－102土層堆積状況（南西から）



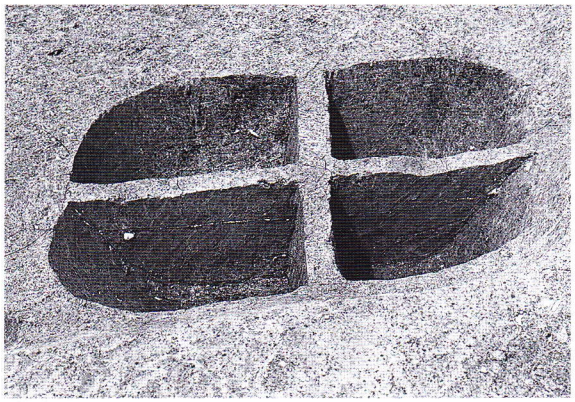
第31区　SK－103土層堆積状況（南西から）



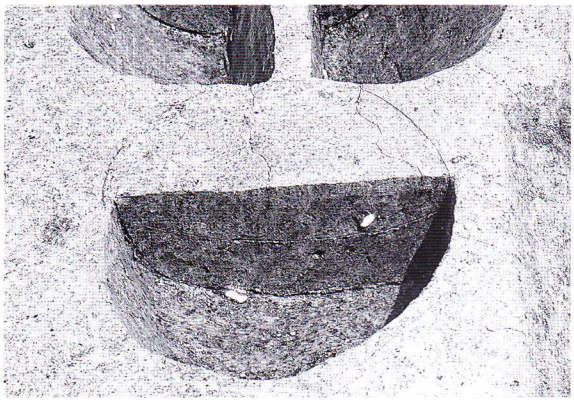
第31区　SB－11（上が北）



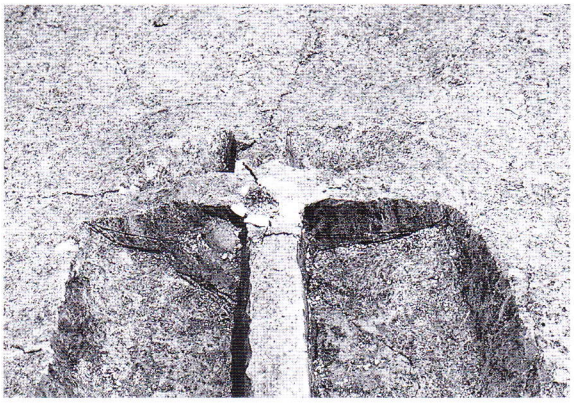
第31区　SB－11（南東から）



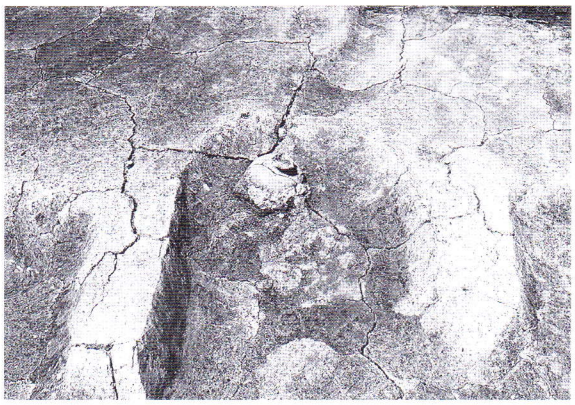
第31区　SB－11貯蔵穴土層堆積状況（東から）



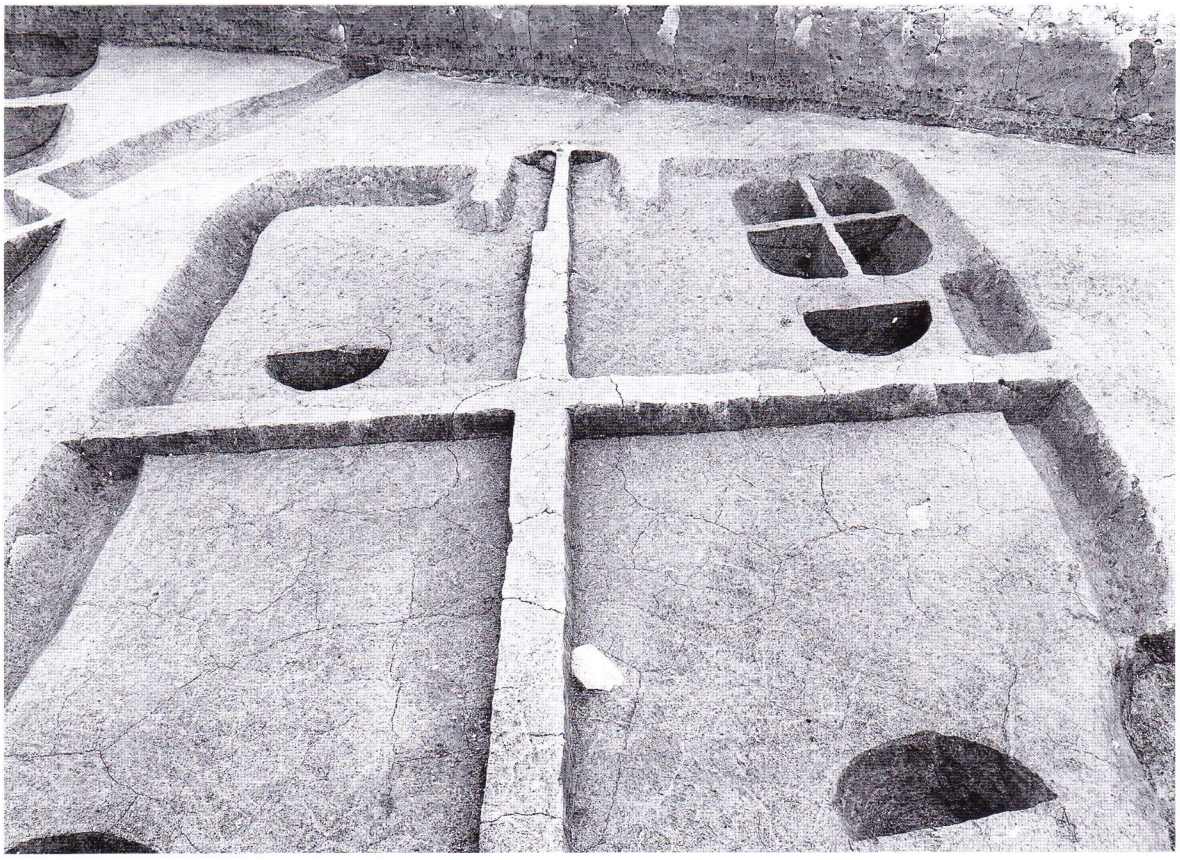
第31区　SB－11　P－301土層堆積状況（南から）



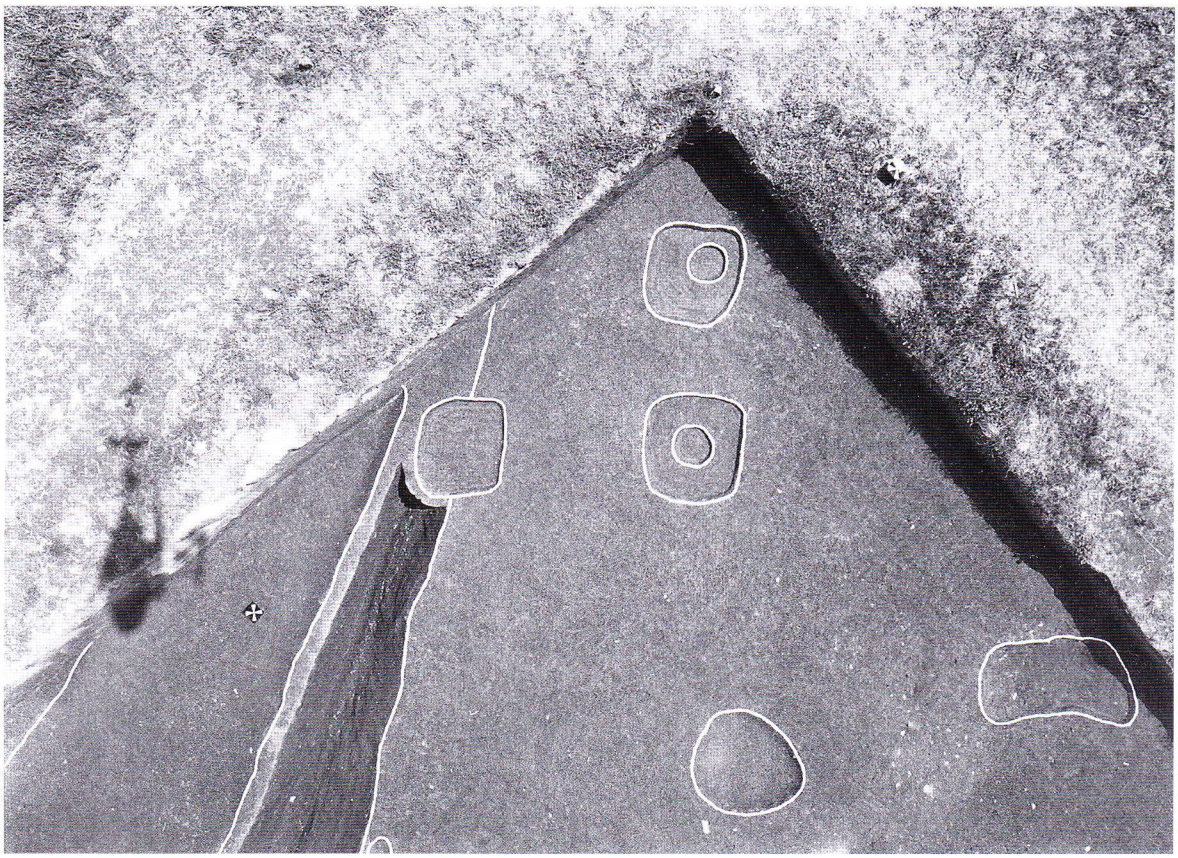
第31区　SB－11カマド内部土層堆積状況（南から）



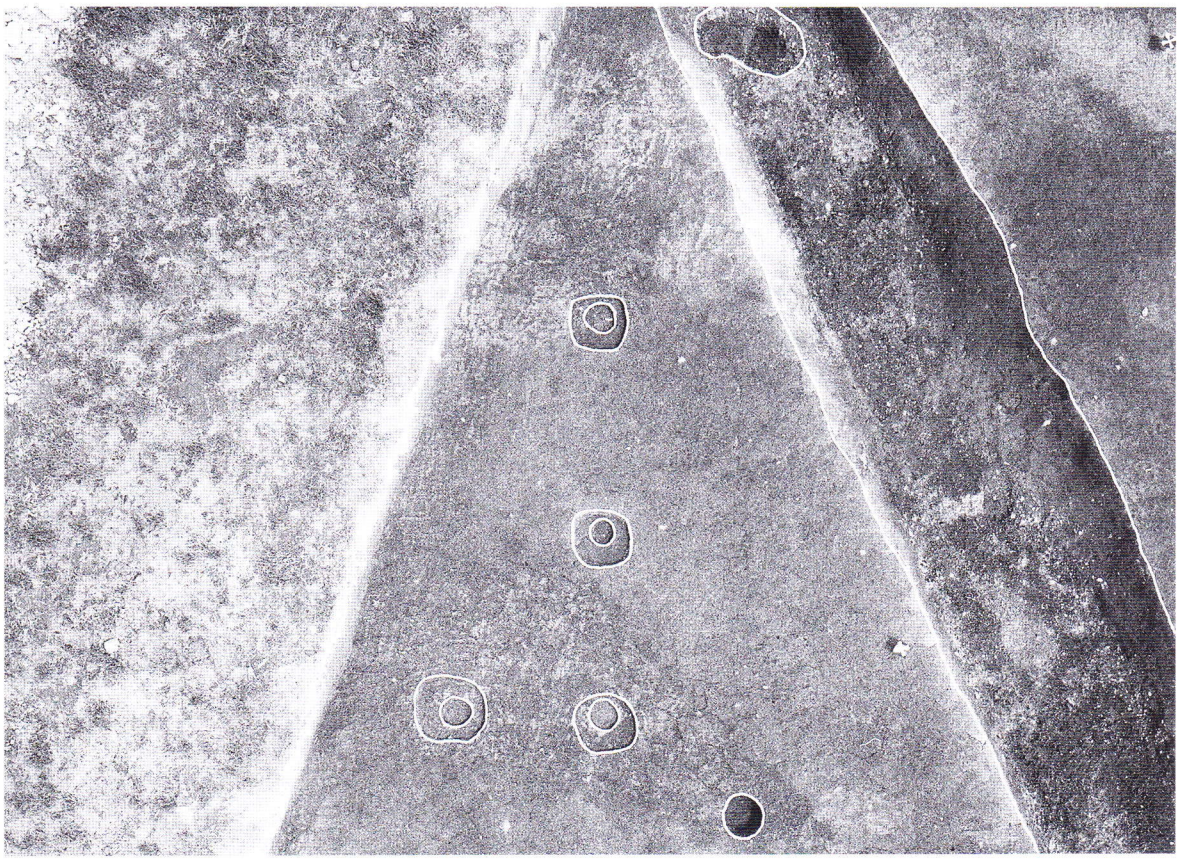
第31区　SB－11カマド（南から）



第31区　SB－11土層堆積状況（南から）



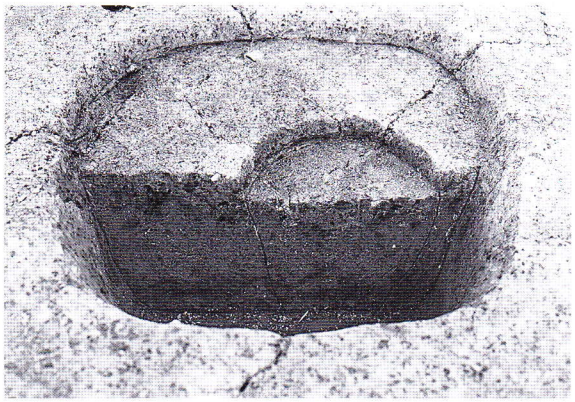
第30区　SH－1（下が北）



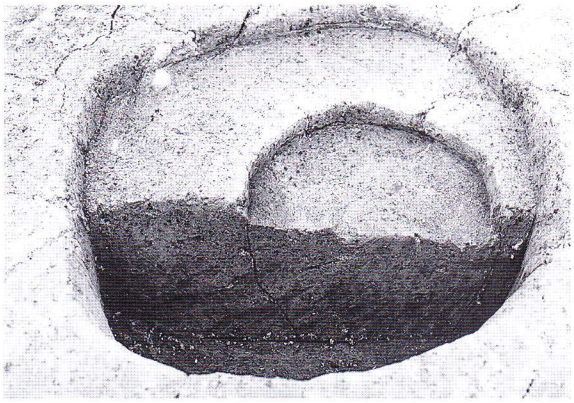
第30区　SH－2（左が北東）

第30区　P－279土層堆積状況（北東から）

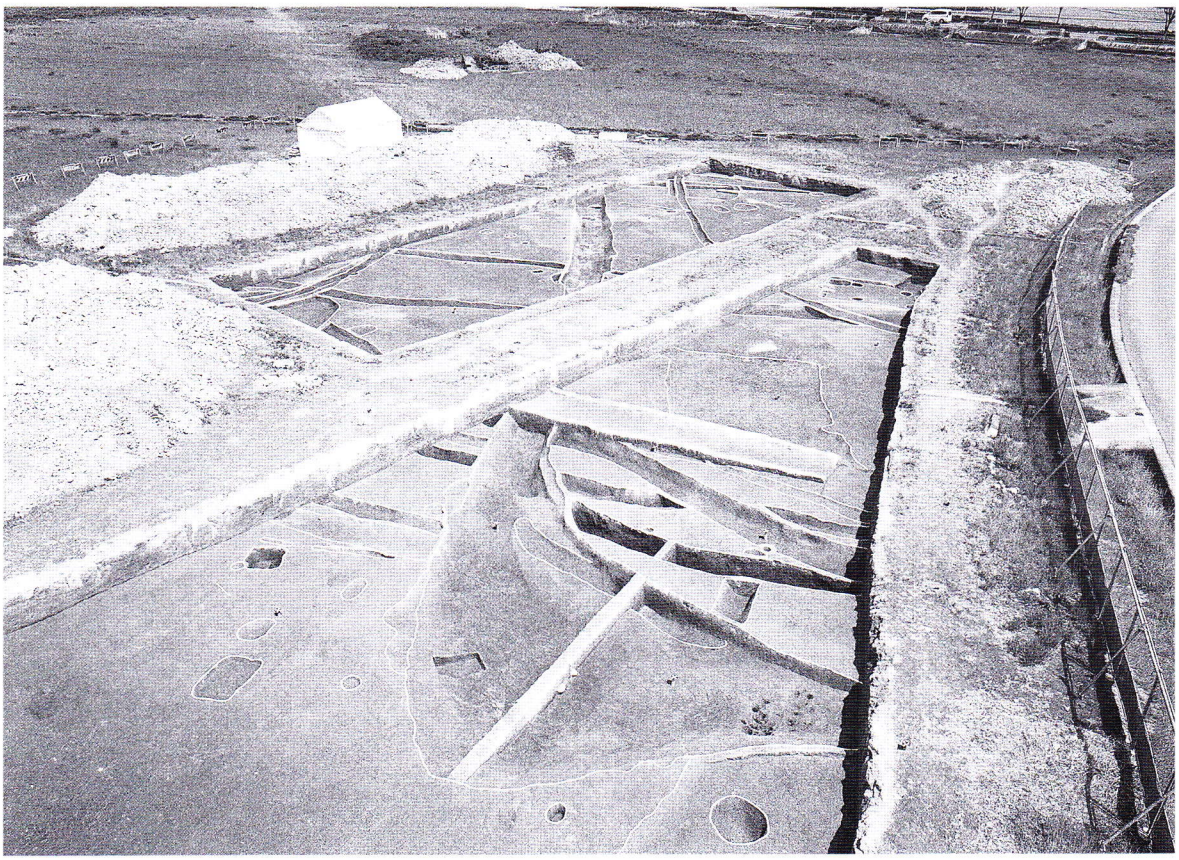
第30区　P－280土層堆積状況（北東から）



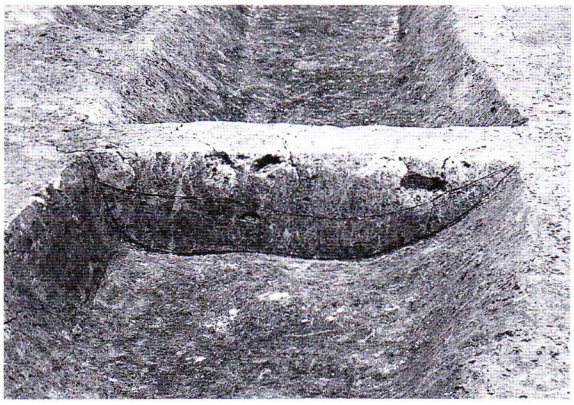
第30区　P－292土層堆積状況（南から）



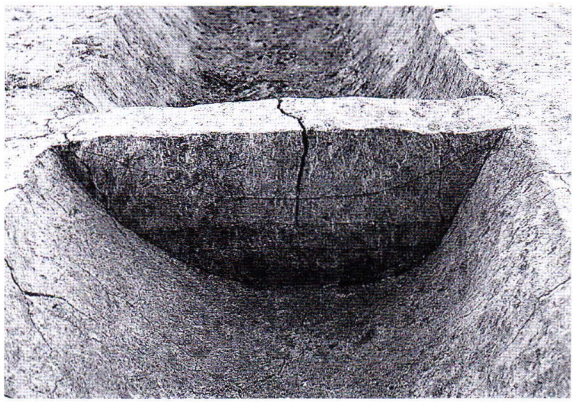
第30区　P－294土層堆積状況（南から）



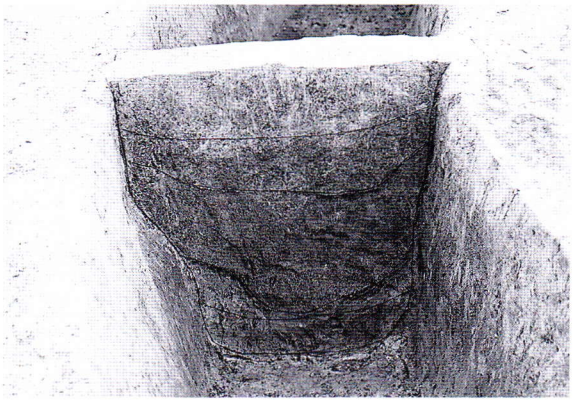
第30・31区　SD－61・66・73周辺の溝群全景（西から）



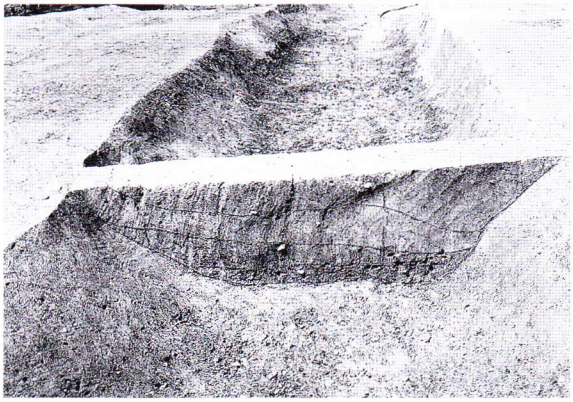
第30区　SD－66土層堆積状況（南西から）



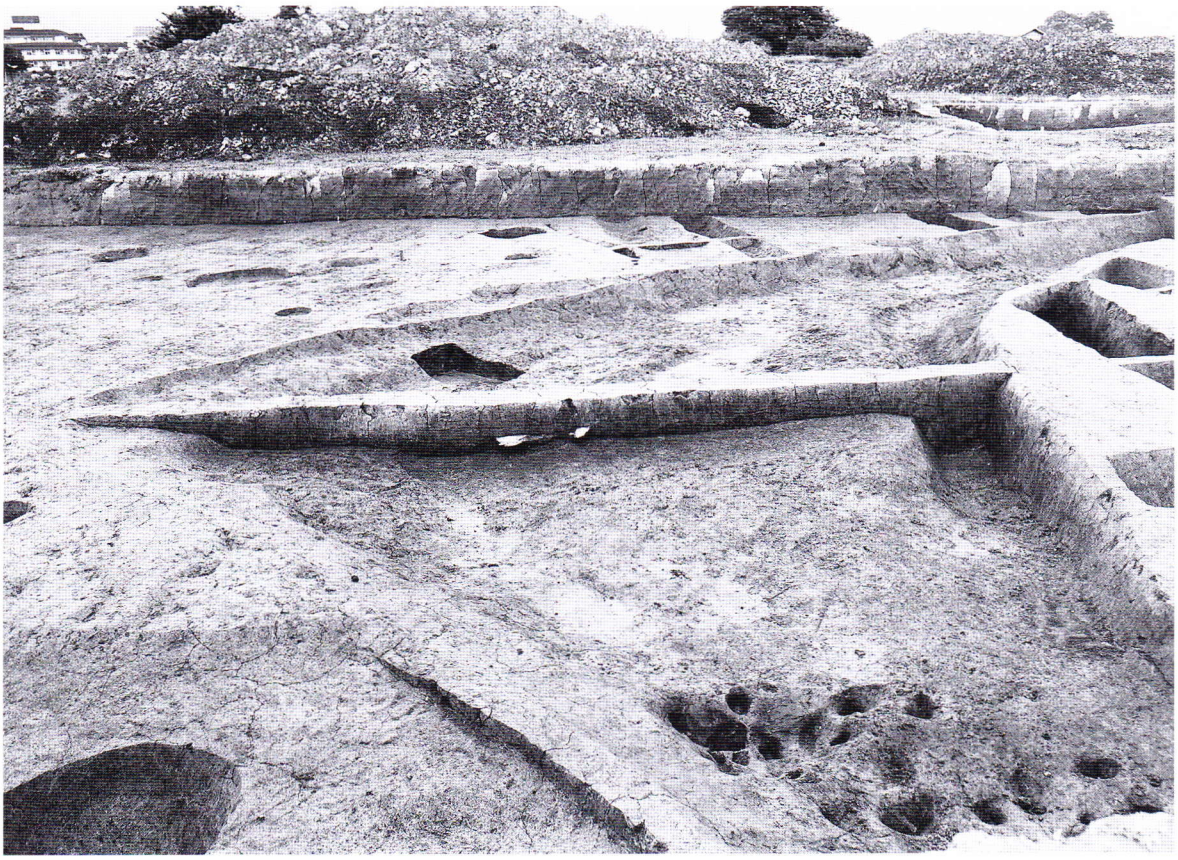
第31区　SD－66土層堆積状況（南西から）



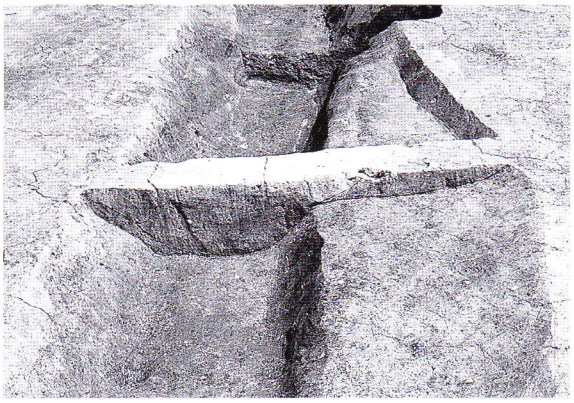
第31区　SD－73土層堆積状況（南西から）



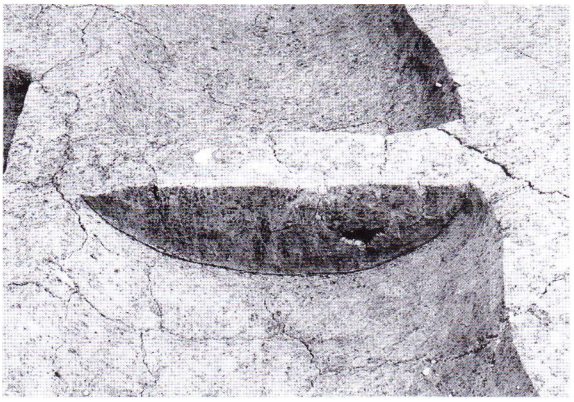
第30区　SD－61土層堆積状況（東から）



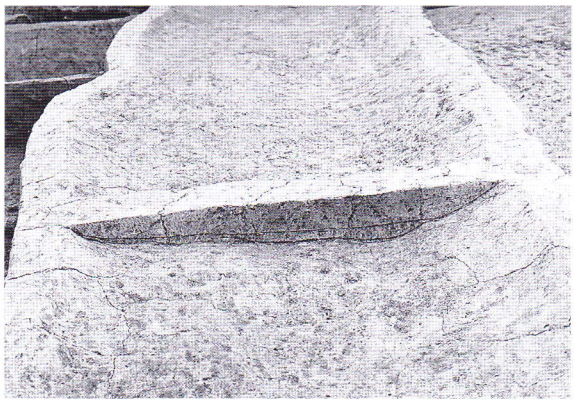
第31区　SD－61土層堆積状況（南西から）



第30区　SD－64土層堆積状況（西から）

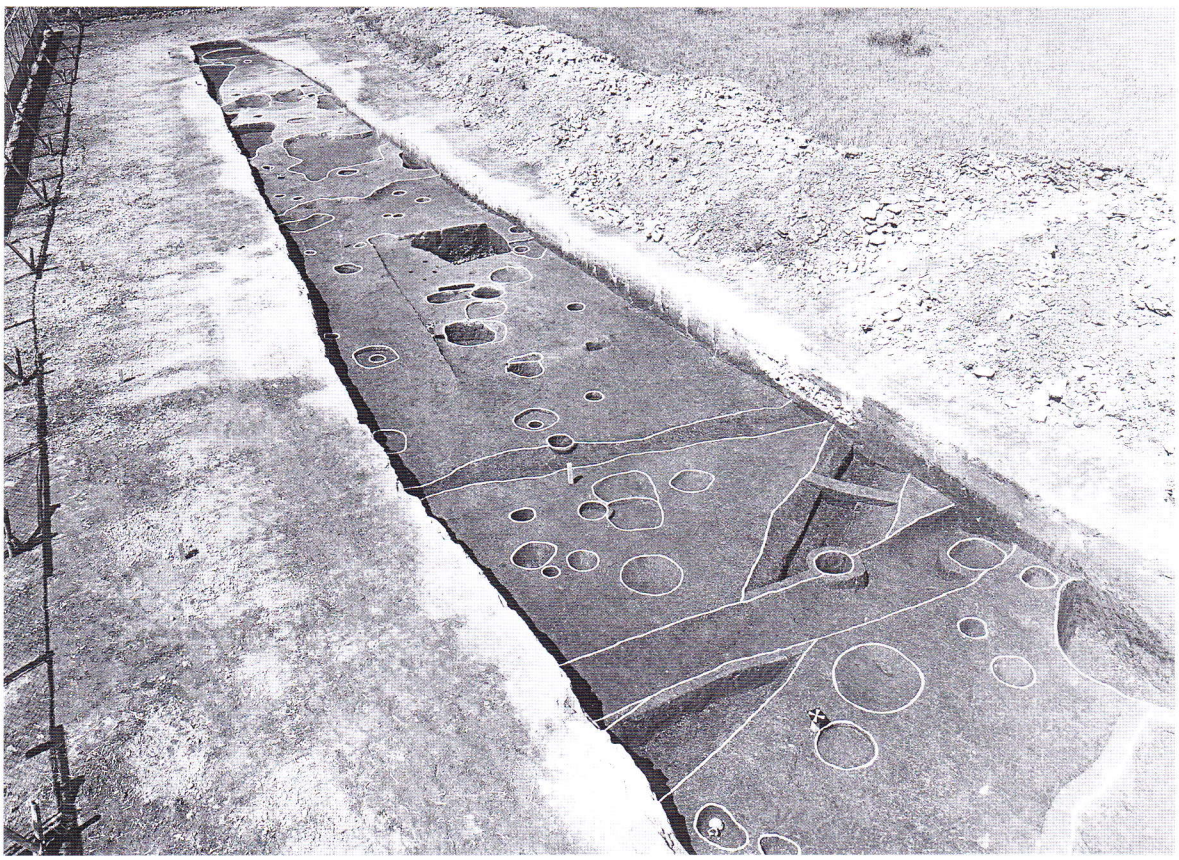


第31区　SD－57土層堆積状況（南西から）

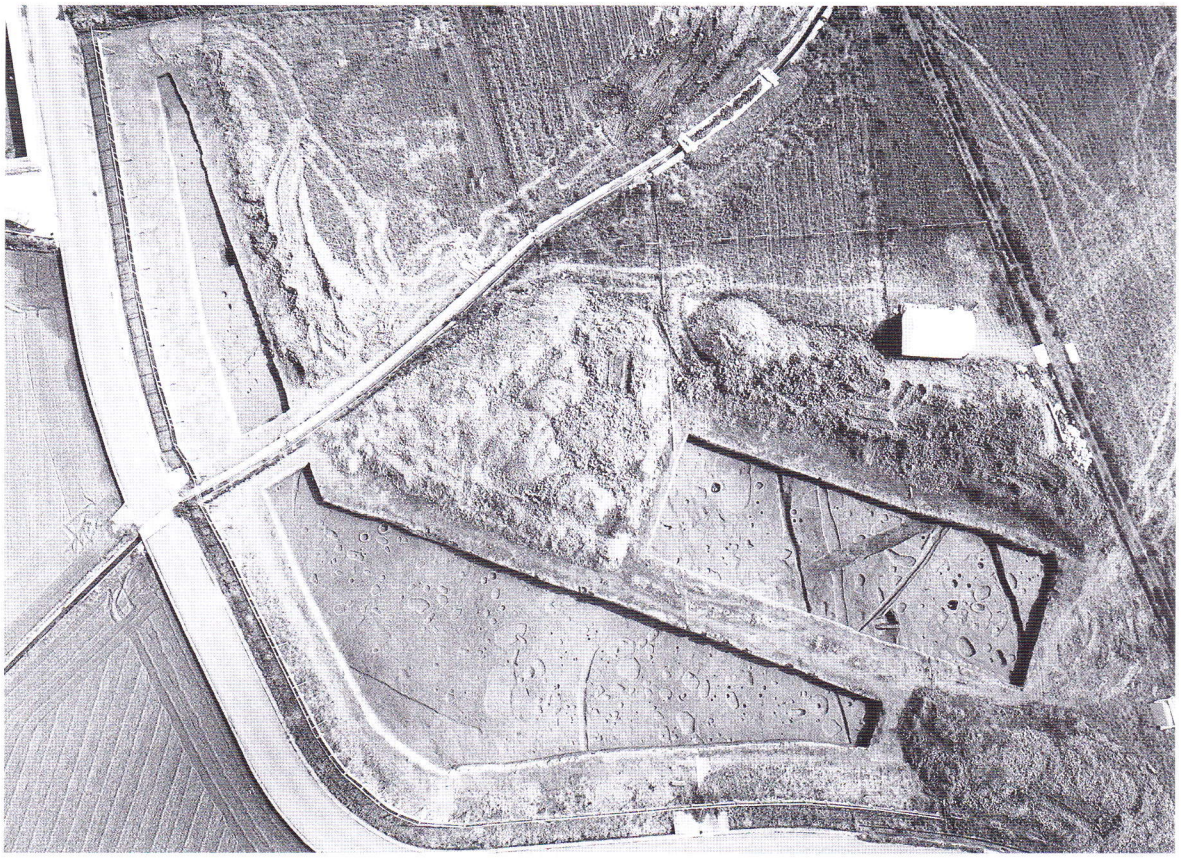


第31区　SD－67土層堆積状況（南から）

第31区　P－391（東から）

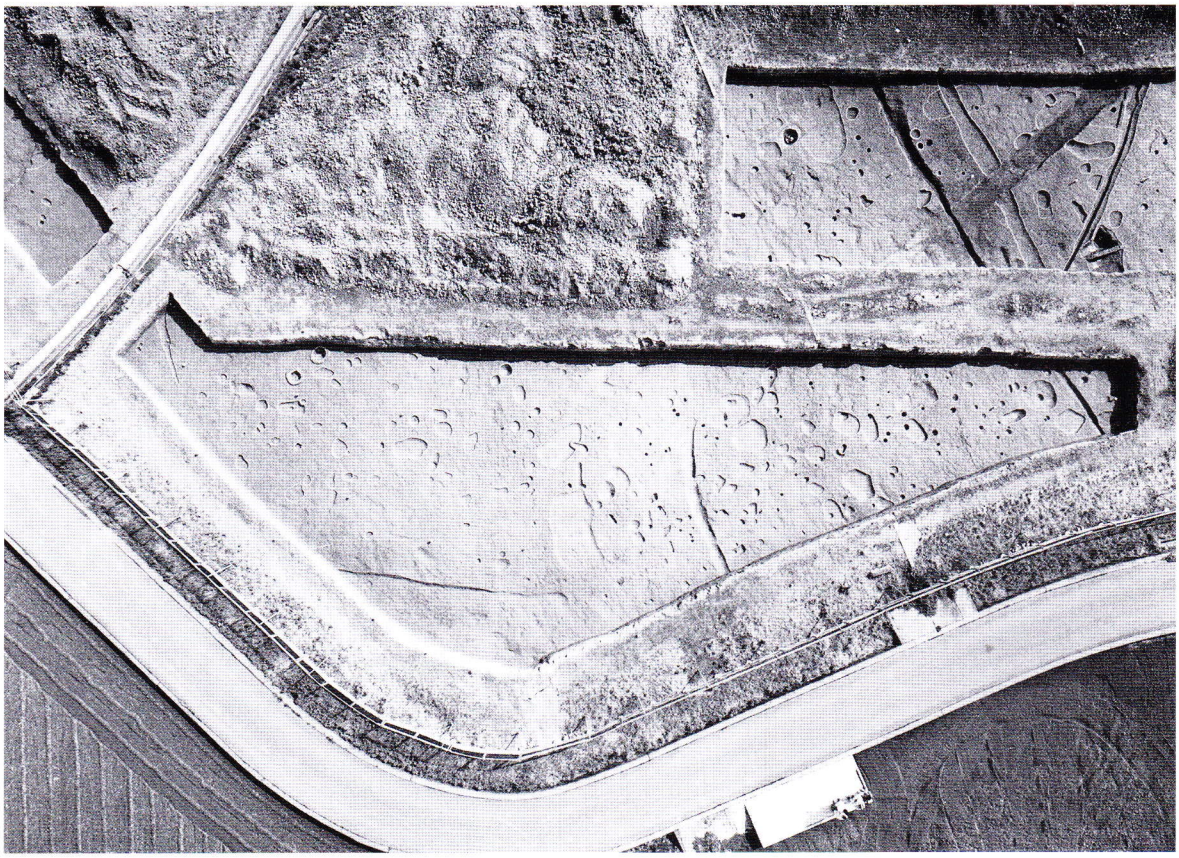


第31区北端部　第１遺構面全景（南西から）



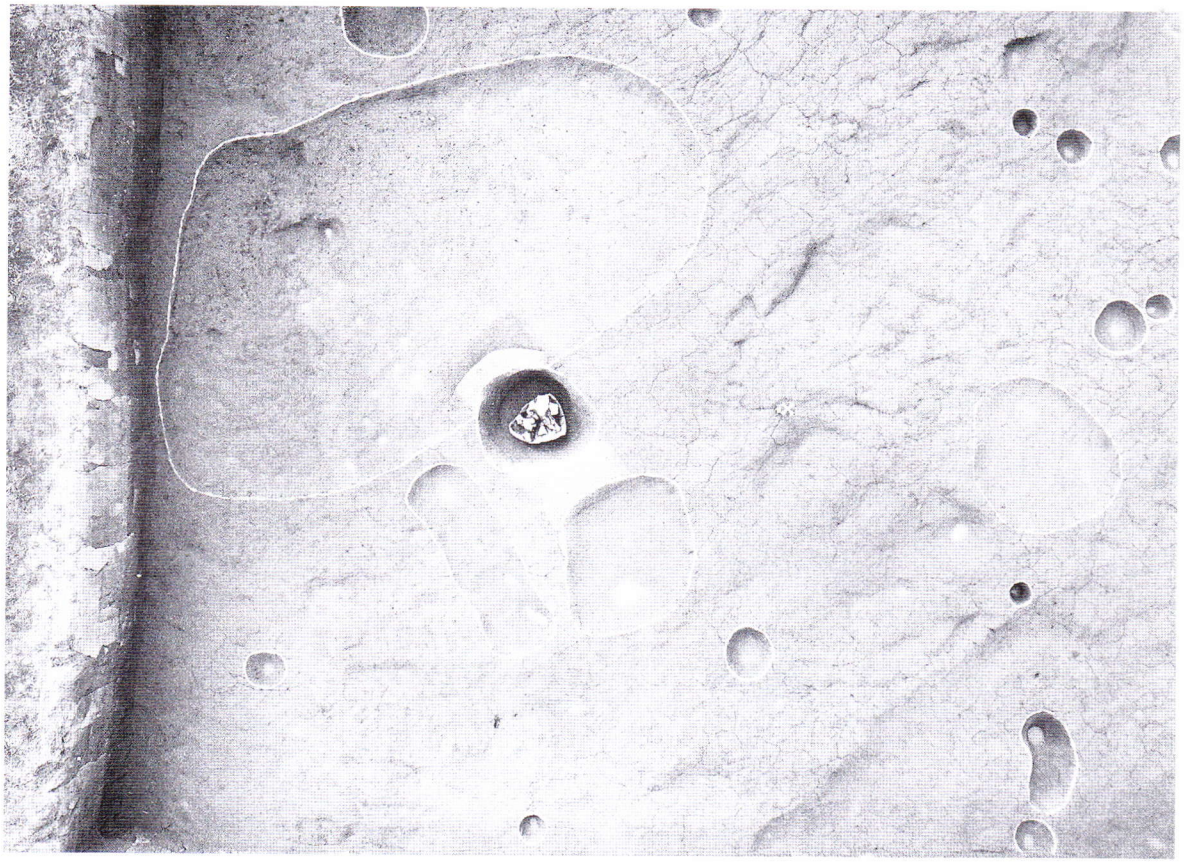
第30・31区　第２遺構面全景（上が北）

第30区　第２遺構面全景（上が北東）



第31区　第２遺構面全景（上が北東）

第31区北端部　第２遺構面全景（右が北）

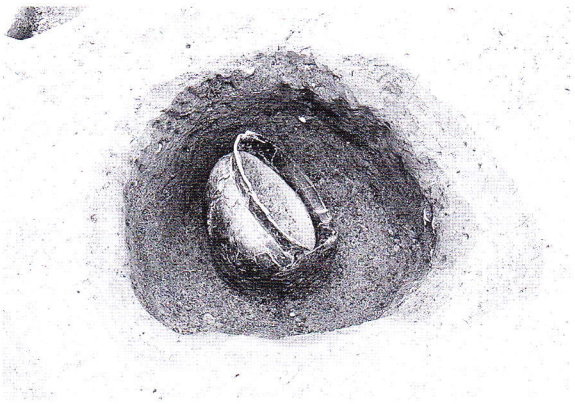


第30区　SK－152周辺（左が北）

第30区　SK－152（北から）

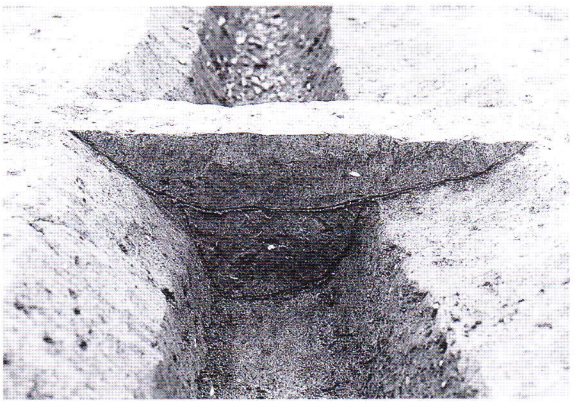
第30区　SK－168周辺（左が北）

第30区　SK－168（南西から）



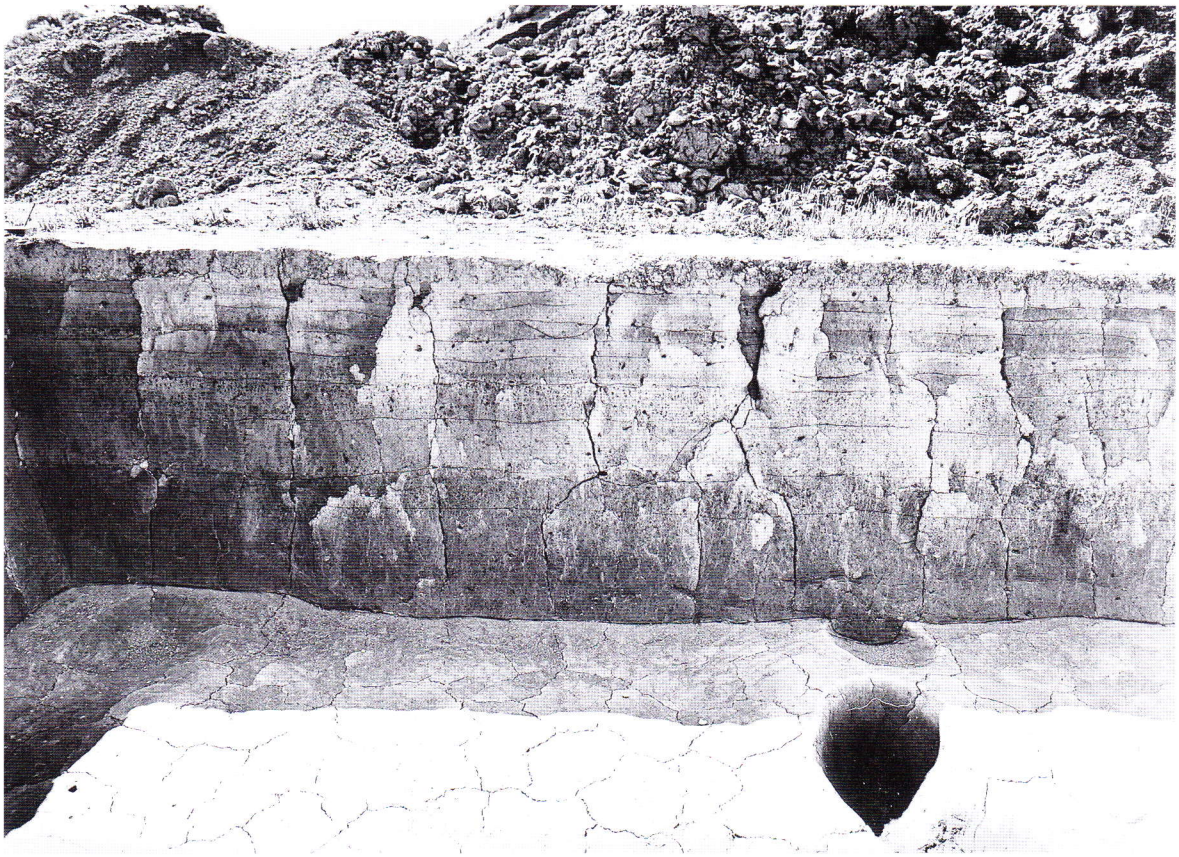
第30区　SK－168（南東から）

第30区　SK－165土層堆積状況（北から）



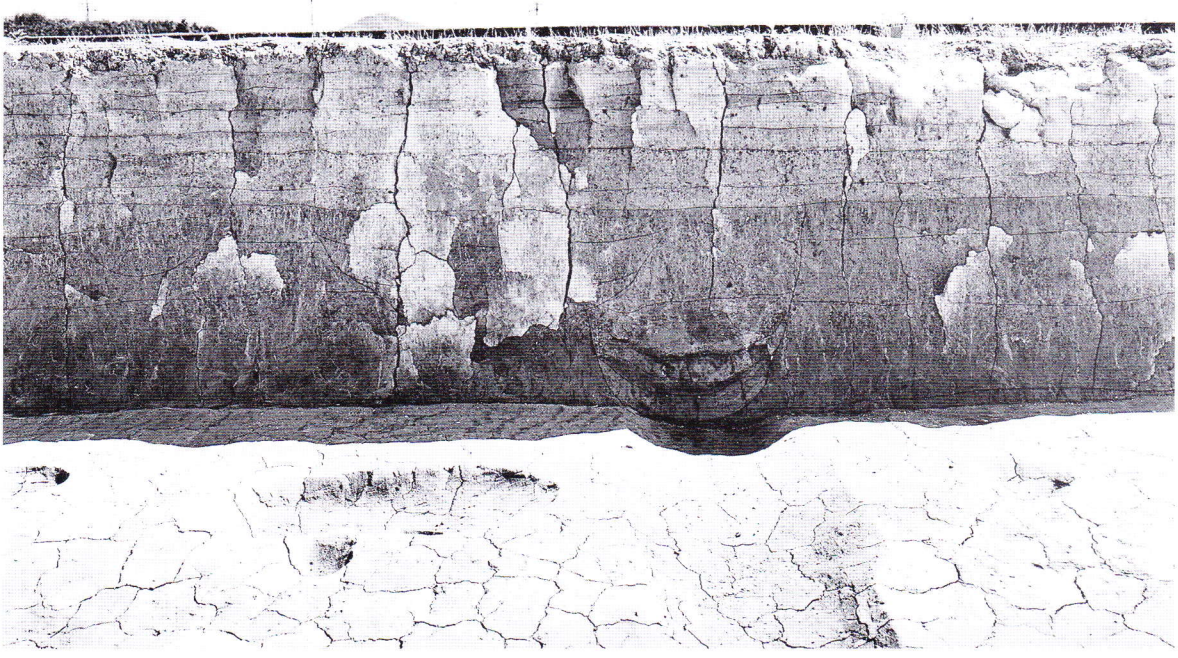
第30区　SD－85土層堆積状況（南西から）

第30区南壁　Y＝－67596m付近土層堆積状況（北から）

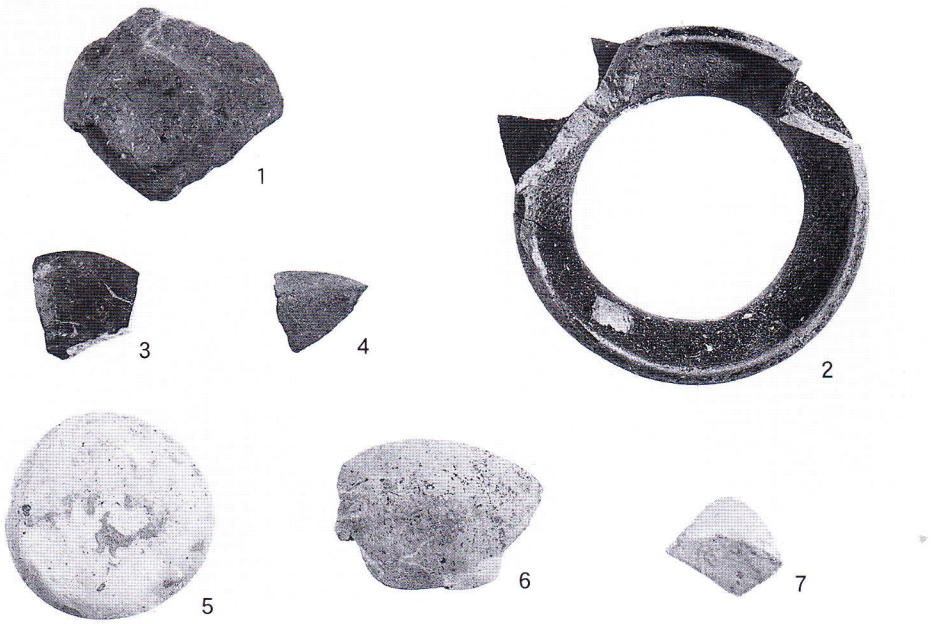


第30区西壁　X＝－193030m付近土層堆積状況（東から）

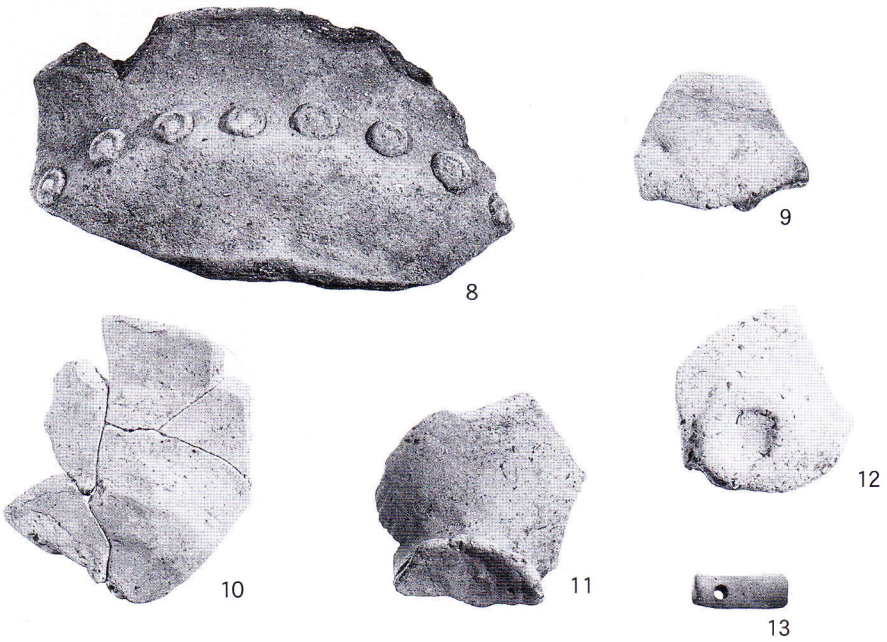
第31区南壁　Y＝－67622m付近土層堆積状況（北から）



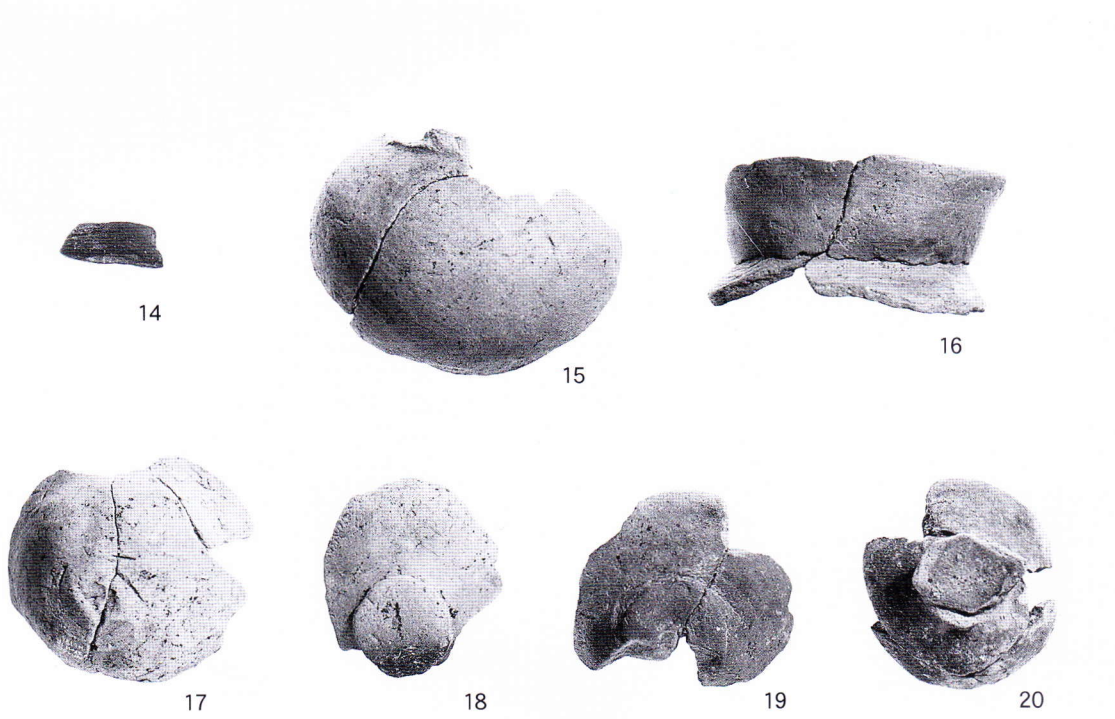
第31区南壁　Y＝－67630m付近土層堆積状況（北から）



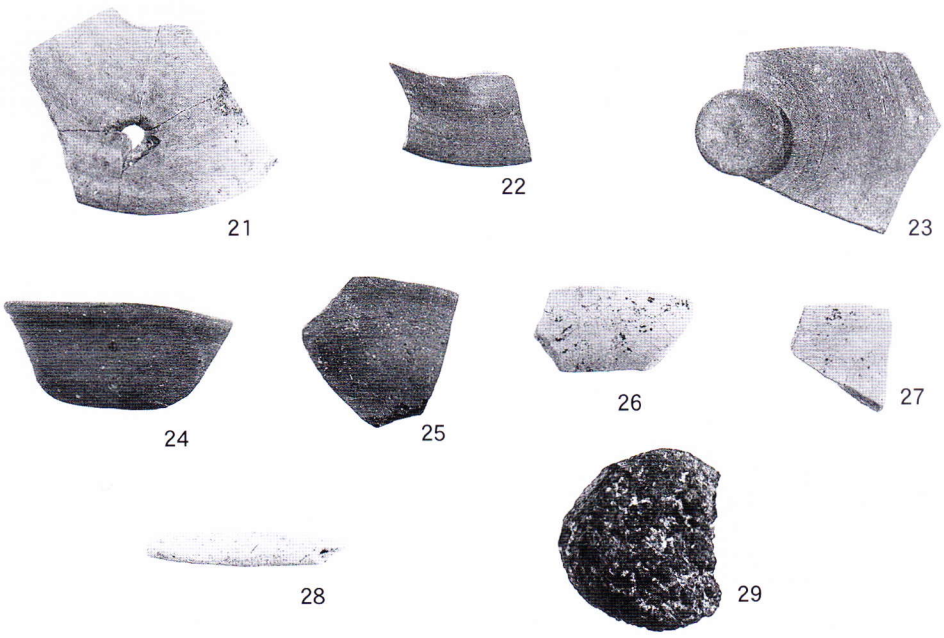
SD－6出土遺物　土師器（1壺）、須恵器（2甕）、SK－1出土遺物　瓦器（3小椀）、
P－3出土遺物　瓦器（4皿）、P－58出土遺物　土師器（5・6皿）、第2区第4層出土遺物（7中国製白磁皿）



SB－7出土遺物　土師器（8壺、9鉢、10高杯、11・12底部）、土製品（13有孔土錘）

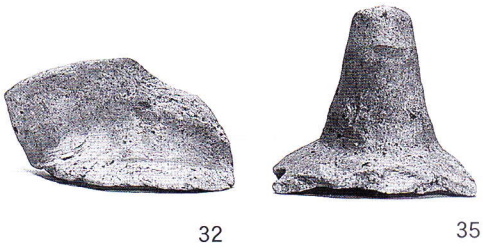


SB－1出土遺物　土師器（14鉢、15壺）、SK－11出土遺物　土師器（16壺、17鉢、18・19底部、20脚部）



SD－25出土遺物　須恵器（21杯蓋）、第4区第4層出土遺物　須恵器（22・23杯蓋、24・25杯身）、土師器（26杯、27壺）、土製品（28管状土錘）、P－86出土遺物（29鉄塊）

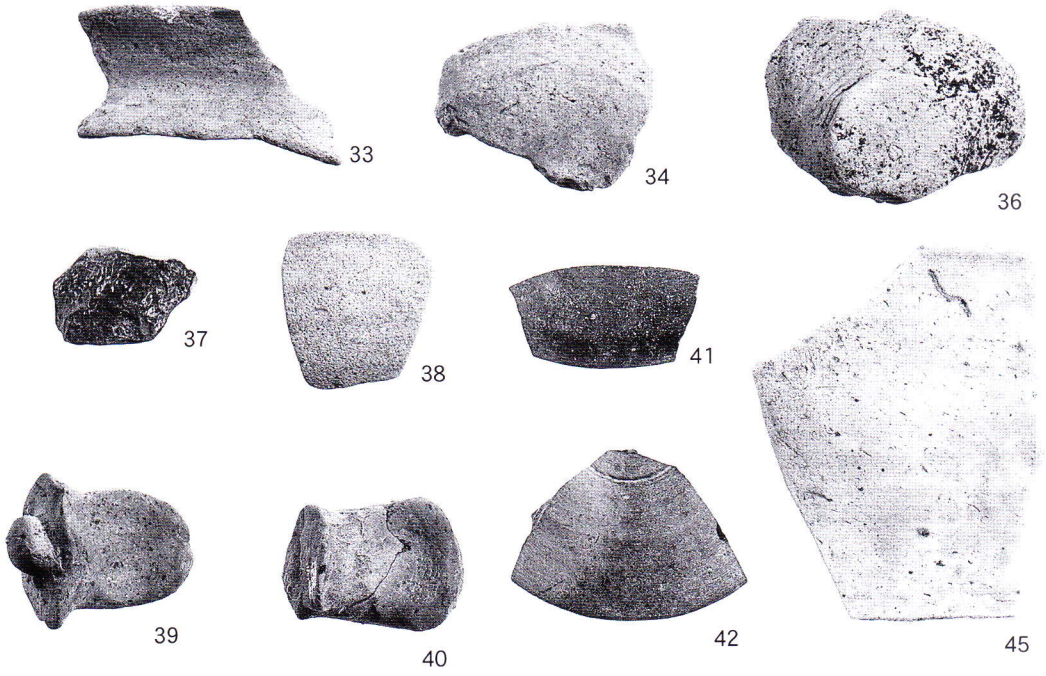
第7区第5層出土遺物　縄文土器(30深鉢)、弥生土器(31壺)



第7区第5層出土遺物　土師器（32壺、35高杯）

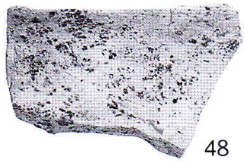
第7区第5層出土遺物　須恵器（43・44杯身）

第7区第5層出土遺物　石製品（46滑石製紡錘車）

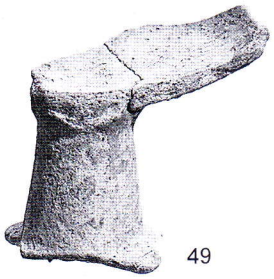


第7区第5層出土遺物　土師器（33甕、34高杯、36・37底部、38杯、39・40把手）、
須恵器（41・42杯蓋、45鉢）

47


48

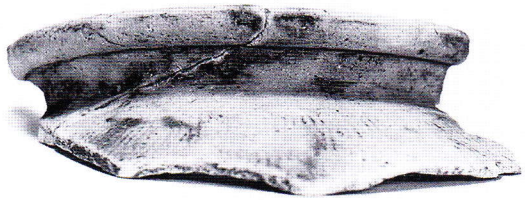
SB－2出土遺物　須恵器（47杯身）、土師器（48甕）


49

SB－2出土遺物　土師器（49高杯）

54

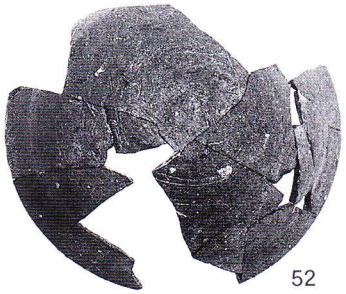
SB－5出土遺物　須恵器（54鉢）


55

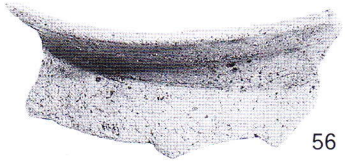
SB－5出土遺物　須恵器（55甕）

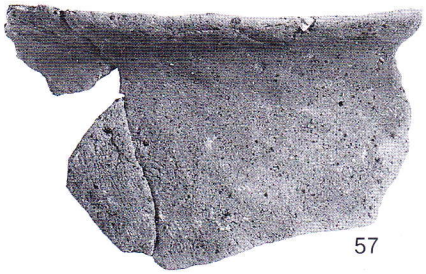
50

51

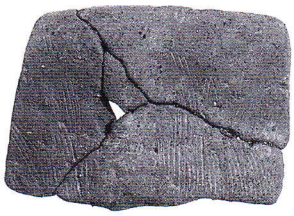

52

53

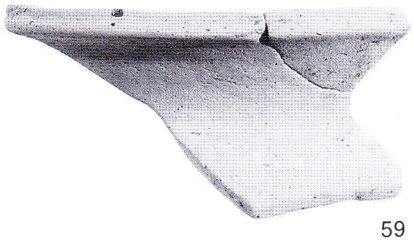

56


57

SB－5出土遺物　須恵器（50・51杯蓋、52・53杯身、56・57甕）

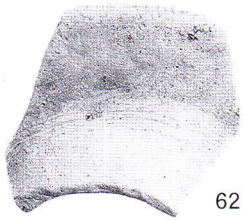

58

60


59

61

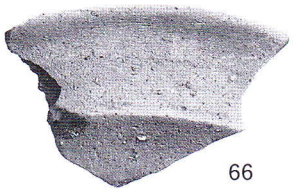
SB－8出土遺物　土師器（58甑）、SD－24出土遺物　須恵器（59甕）、第8区第5層出土遺物　須恵器（60杯蓋、61甕）


62

63

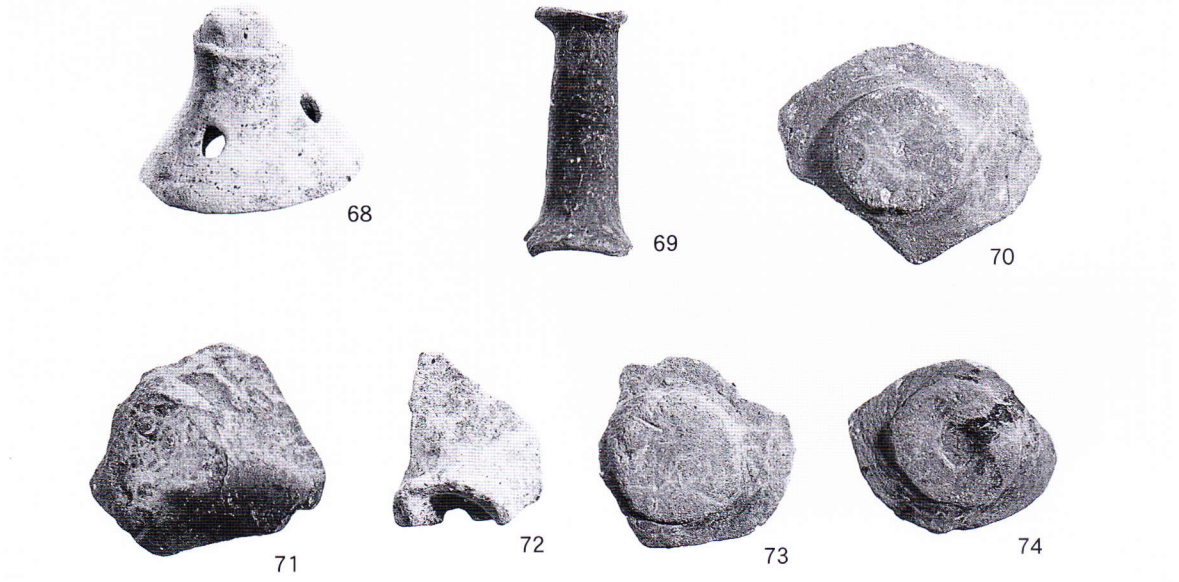
64

65

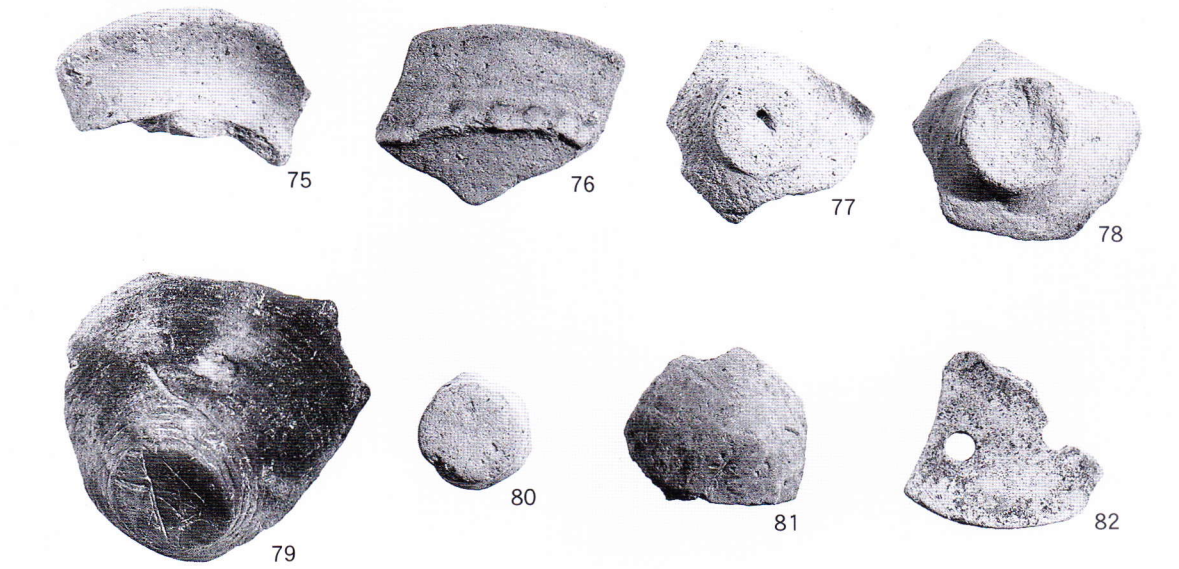

66

67

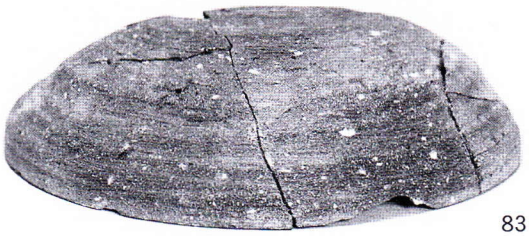
SB－10出土遺物　土師器（62～66壺、67鉢）



SB－10出土遺物　土師器（68器台、69高杯、70・71・73・74底部、72鉢）

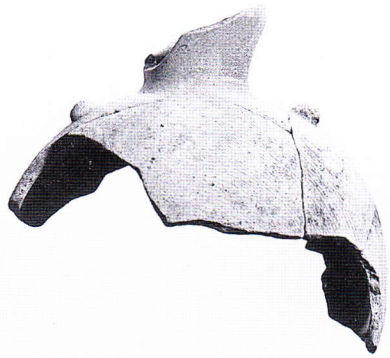


SE－1出土遺物　土師器（75・76壺、77・78・80・81底部、79甕、82脚部）

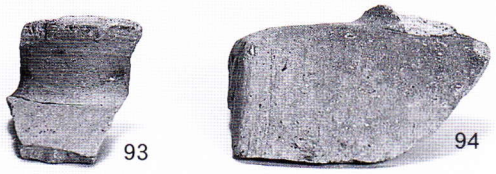


SE－1出土遺物　須恵器（83杯蓋）

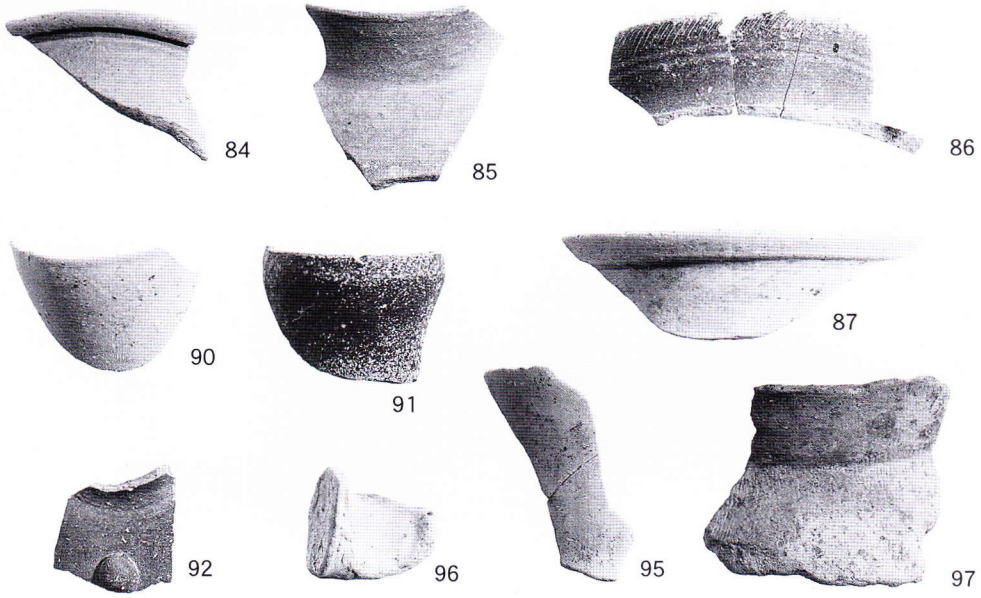
SE－1出土遺物　須恵器（88提瓶）



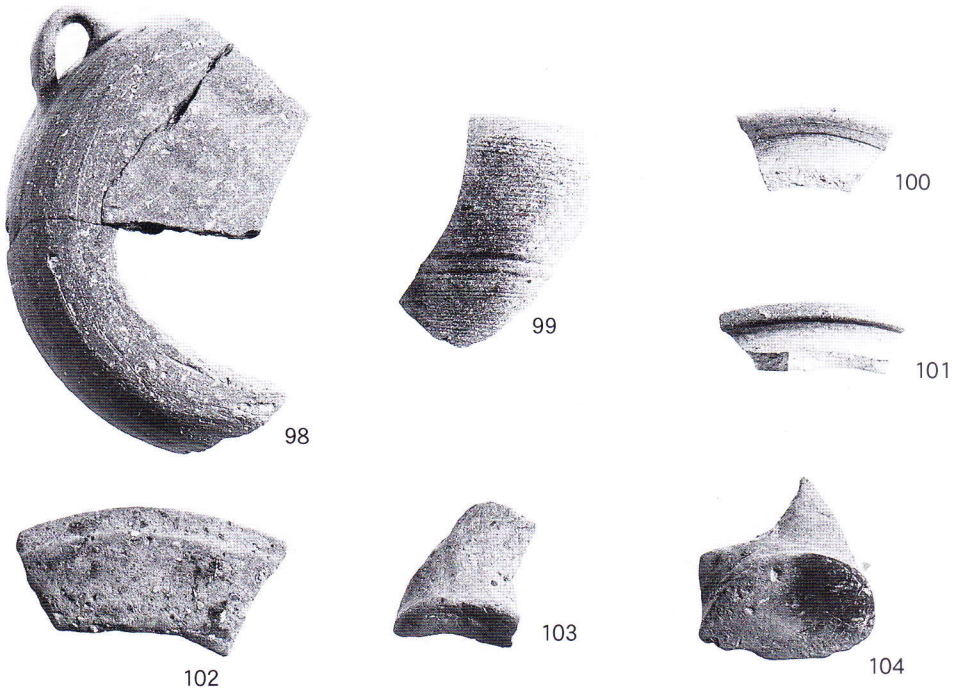
SE－1出土遺物　須恵器（89提瓶）



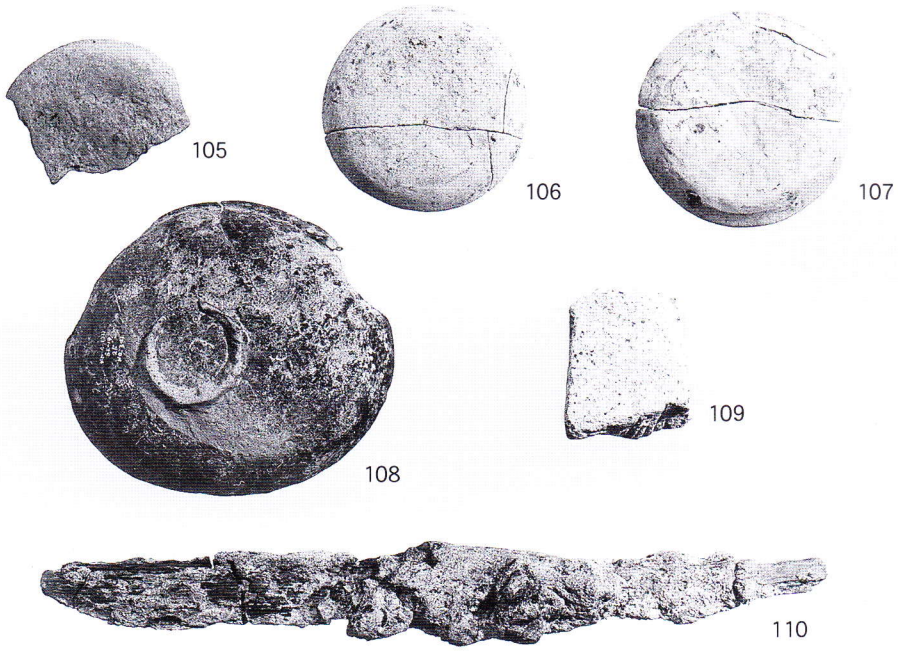
SE－1出土遺物　須恵器（93・94横瓶）



SE－1出土遺物　須恵器（84～86壺、87甕、90～92提瓶）、土師器（95壺、96把手、97甕）



第12区第２層出土遺物　須恵器（98提瓶）、第12区第５層出土遺物　須恵器（99～101壺）、
SD－21出土遺物　土師器（102壺、103・104底部）



SK－19出土遺物　土師器（105～107皿）、瓦器（108椀）、石製品（109砥石）、鉄製品（110小刀）

111

112

113

SK－19出土遺物　111～113銭貨

114

115

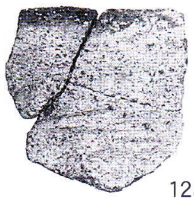
116

SK－19出土遺物　114～116銭貨

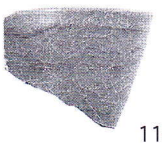
117

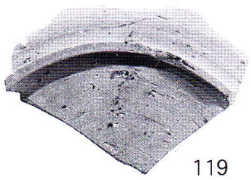
SD－53出土遺物　石器（117石鏃）

122


123

P－270出土遺物　縄文土器（122・123深鉢）


118

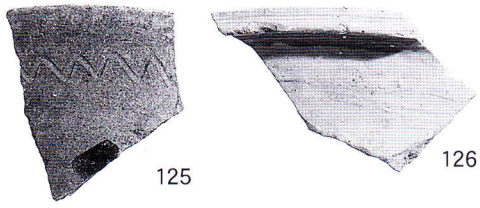

119

120

121

124

第14区出土遺物　中国製青磁（118碗）、SD－32出土遺物　須恵器（119杯身）、第17区第6b層出土遺物
弥生土器（120脚部）、第19区第5層出土遺物　須恵器（121杯身）、第27区第6a層出土遺物　弥生土器（124高杯）

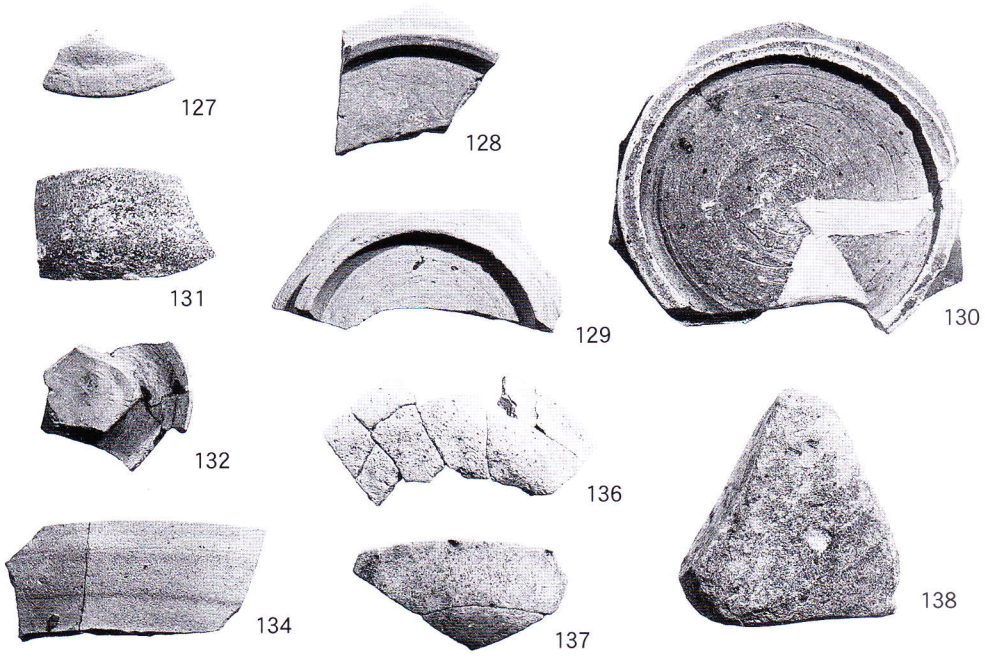


SK－46出土遺物　須恵器（125甕）、
SD－55出土遺物　須恵器（126甕）

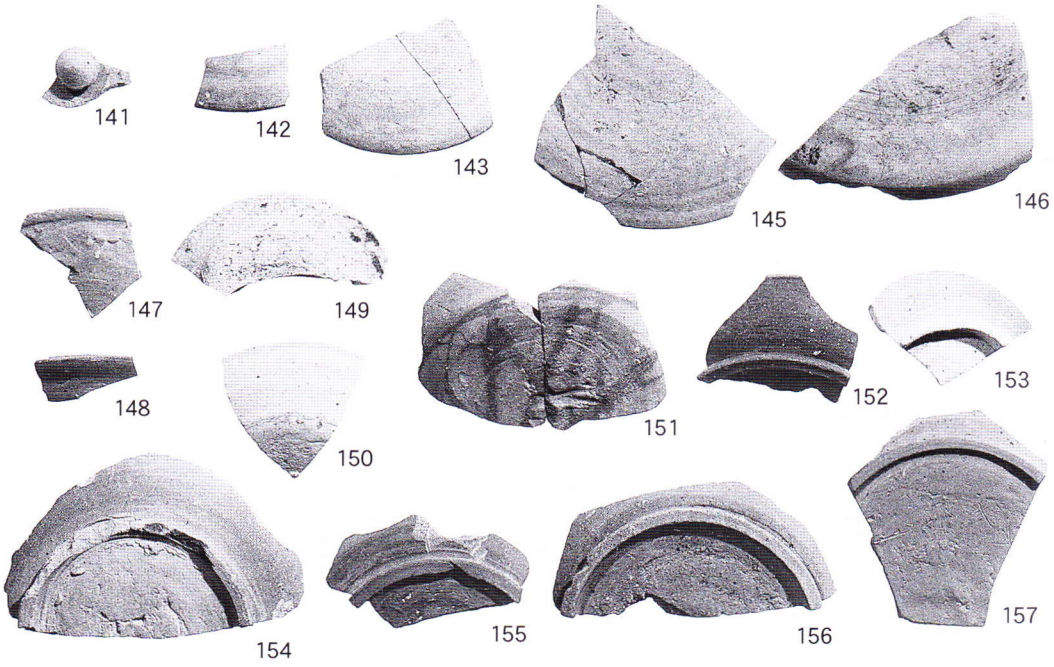
第31区第４層出土遺物　須恵器（133鉢）

第31区第４層出土遺物　須恵器（135壺）

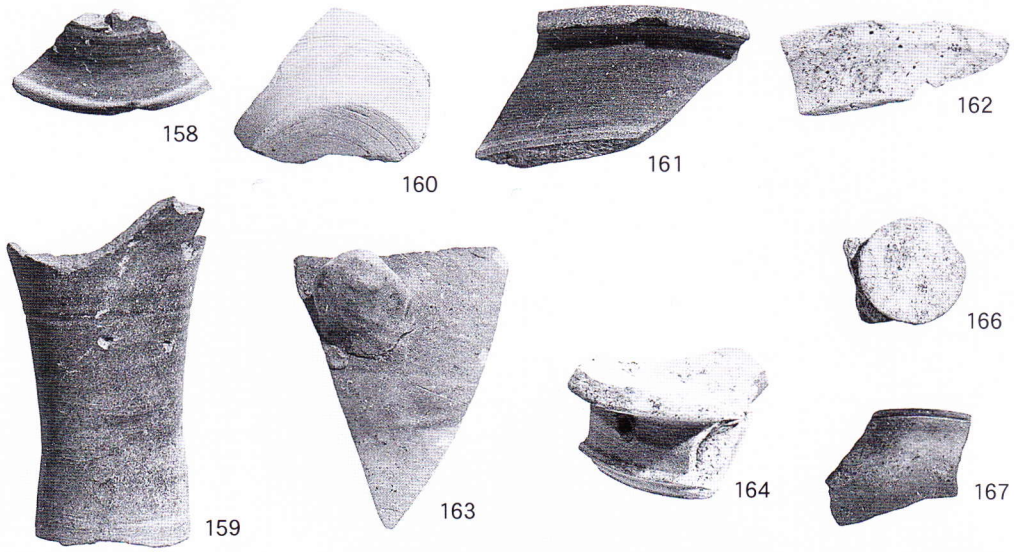
第31区第４層出土遺物　石器（139・140石鏃）



第31区第４層出土遺物　須恵器（127杯蓋、128～131杯身、132高杯、134壺）、
土師器（136杯、137皿）、石製品（138砥石）

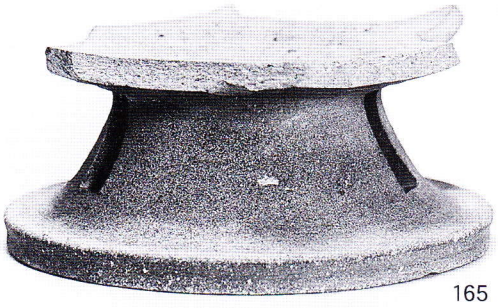


第31区第5層出土遺物　須恵器（141～143・145・146杯蓋、147～157杯身）

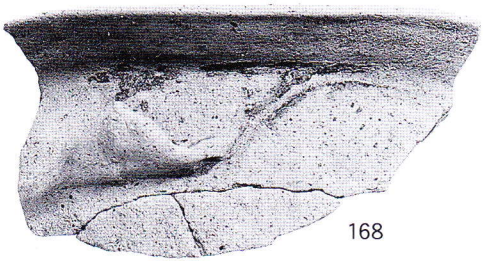


第31区第5層出土遺物　須恵器（158脚部、159壺、160底部、161・162甕、163甑、164壺脚部）、
土師器（166杯蓋、167皿）

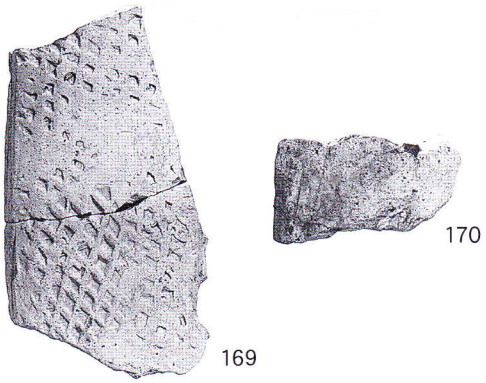
第31区第5層出土遺物　須恵器（144杯蓋）



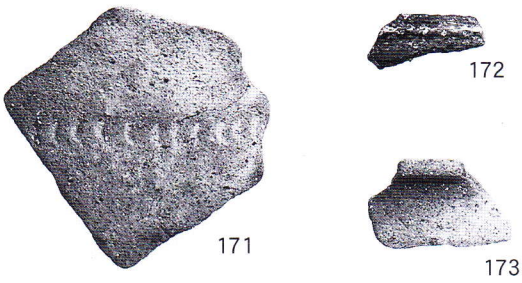
第31区第5層出土遺物　須恵器（165脚部）



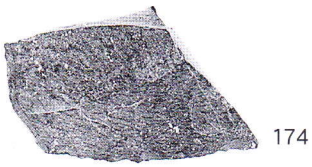
第31区第5層出土遺物　土師器（168甕）



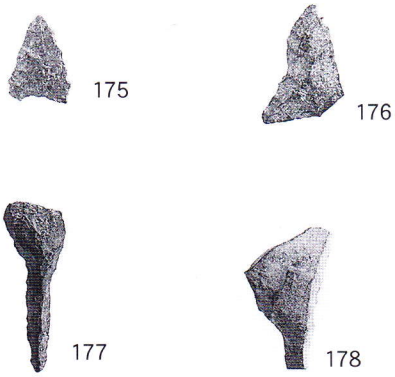
第31区第5層出土遺物　瓦（169平瓦、170丸瓦）



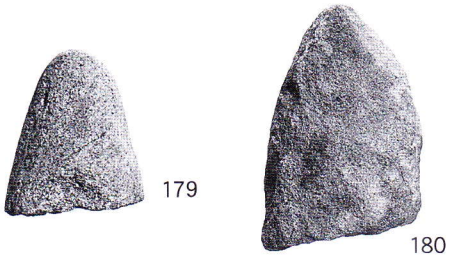
第30・31区第6層出土遺物　縄文土器（171・172深鉢、173浅鉢）



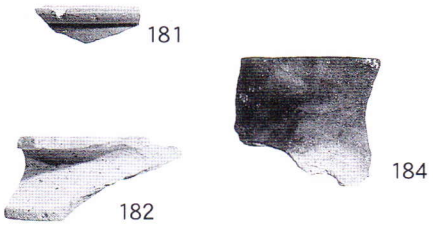
第31区第6層出土遺物　石器（174スクレイパー）



第30・31区第6層出土遺物　石器（175・176石鏃、177・178石錐）

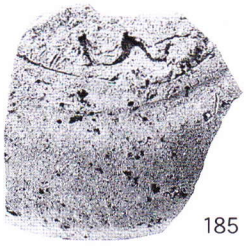


第31区第6層出土遺物　石器（179・180石斧）



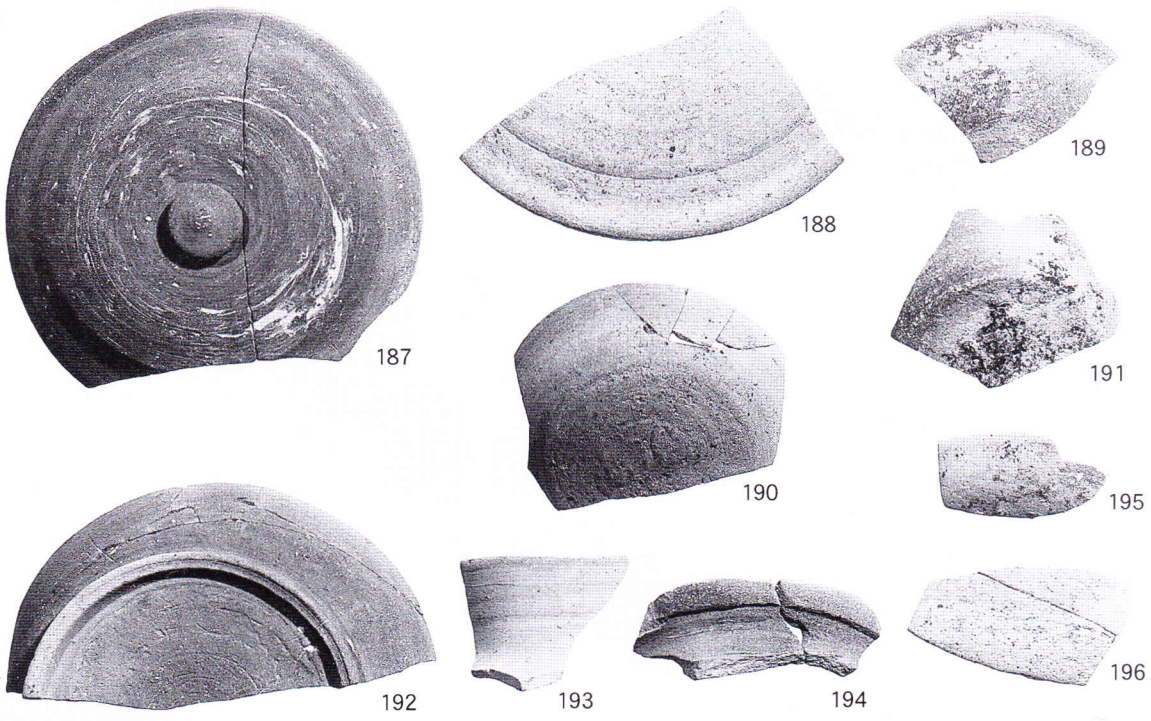
SB－11出土遺物　須恵器（181杯身）、
土師器（182高杯、184甕）

SB－11出土遺物　土師器（183高杯）



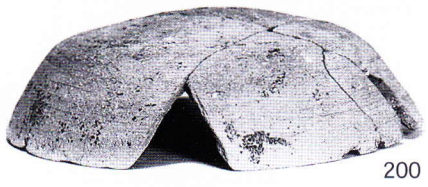
SH－1（P－280）出土遺物　須恵器（185杯蓋）

SH－1（P－279）出土遺物　須恵器（186高杯）

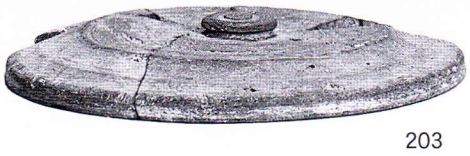


SD－66出土遺物　須恵器（187・188杯蓋、189～192杯身、193提瓶、194甕）、土師器（195杯、196皿）

SD－61出土遺物　須恵器（197杯蓋）

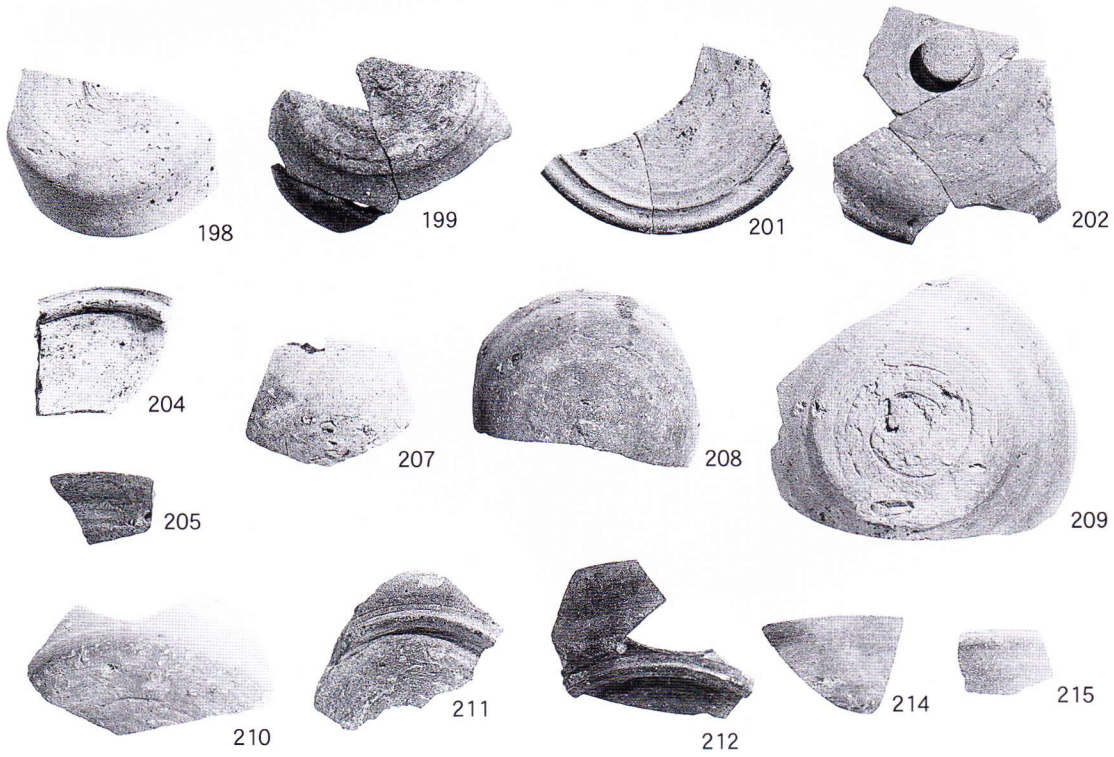


SD－61出土遺物　須恵器（200杯蓋）

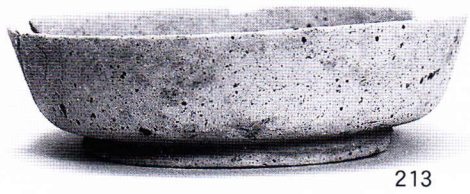


SD－61出土遺物　須恵器（203杯蓋）

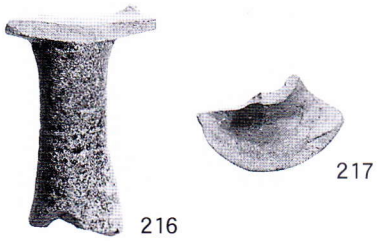
SD－61出土遺物　須恵器（206杯身）



SD－61出土遺物　須恵器（198・199・201・202杯蓋、204・205・207～212・214杯身、215鉢）



SD－61出土遺物　須恵器（213杯身）

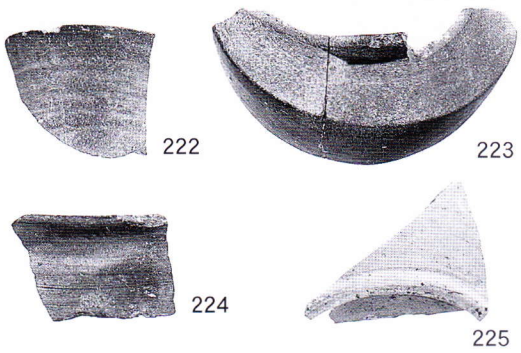


SD－61出土遺物　須恵器（216高杯、217脚部）

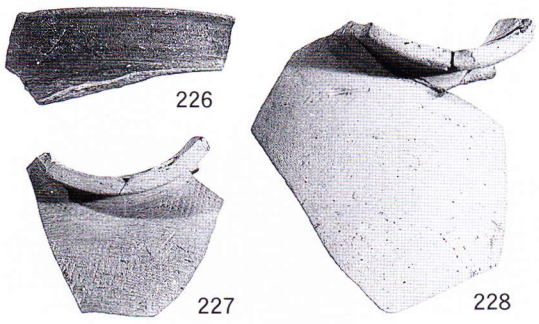
SD－61出土遺物　須恵器（218高杯）

SD－61出土遺物　須恵器（219甕、220提瓶）

SD－61出土遺物　須恵器（221壺）

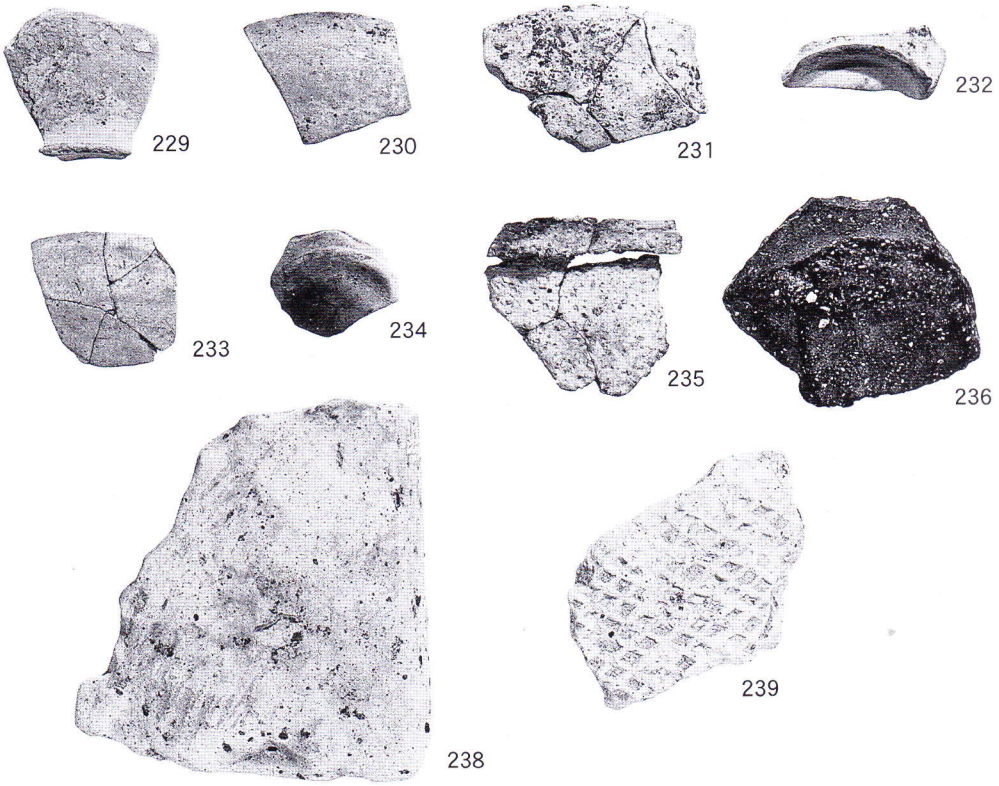


SD－61出土遺物　須恵器（222～225壺）

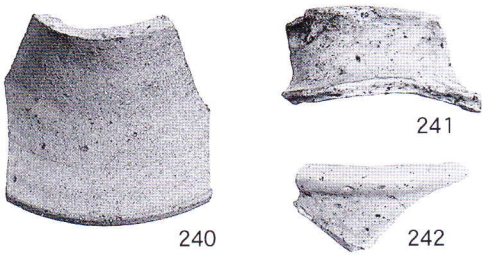


SD－61出土遺物　須恵器（226甕、227・228横瓶）

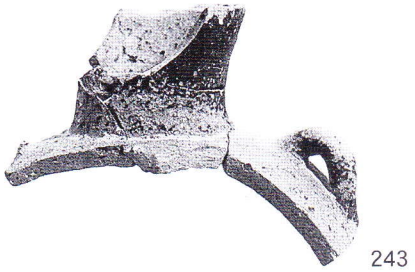
SD－61出土遺物　土製品（237土馬）



SD－61出土遺物　土師器（229壺、230杯、231皿、232椀）、黒色土器（233・234椀）、縄文土器（235深鉢）、弥生土器（236底部）、瓦（238・239平瓦）



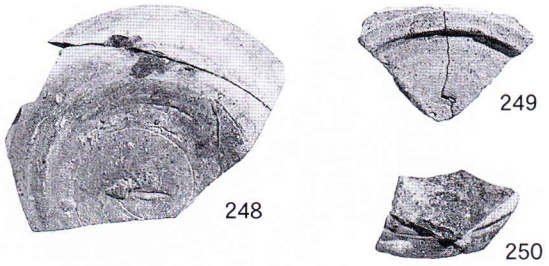
SK－61出土遺物　須恵器（240脚部、241・242甕）



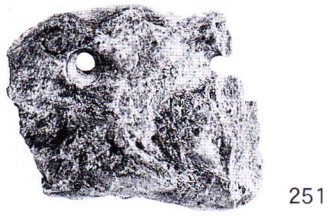
SK－61出土遺物　須恵器（243提瓶）

SK－61出土遺物　縄文土器（244・245浅鉢）

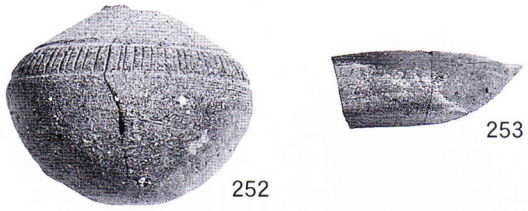
SK－61出土遺物　石器（246・247石鏃）



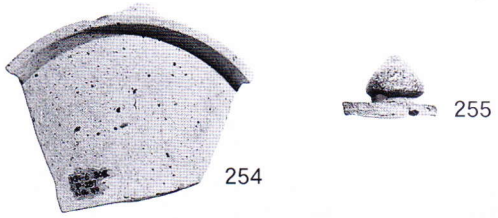
SX－1出土遺物　須恵器（248・249杯身）、土師器（250杯）



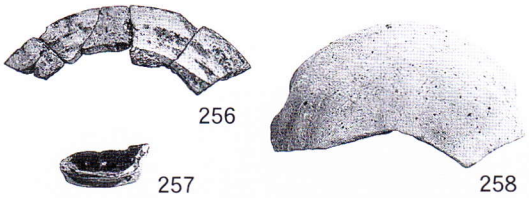
SX－1出土遺物　石器（251石庖丁）



SK－75出土遺物　須恵器（252甕）、
SD－71出土遺物　須恵器（253杯身）

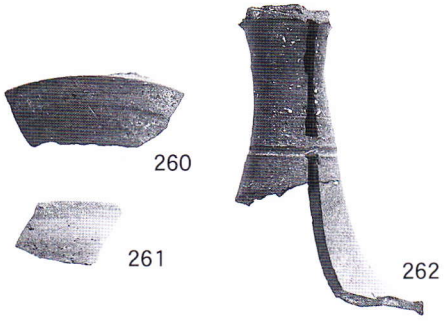


P－289出土遺物　須恵器（254杯身）、
SK－63出土遺物　須恵器（255杯蓋）



SD－64出土遺物　土師器（256皿）、黒色土器
（257椀）、SD－67出土遺物　土師器（258皿）

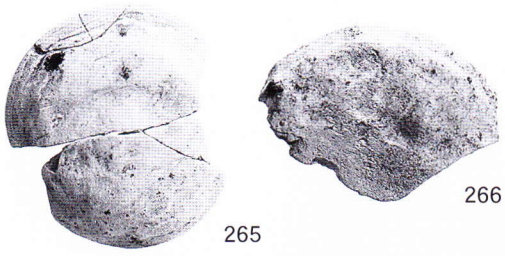
P－391出土遺物　須恵器（259甕）



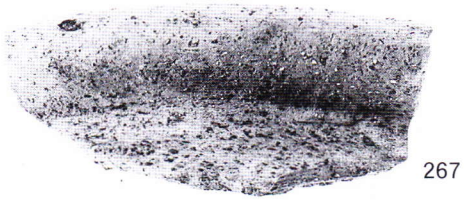
SD－80出土遺物　須恵器
（260杯身、261無蓋高杯、262高杯）

SD－81出土遺物　土師器（263把手）

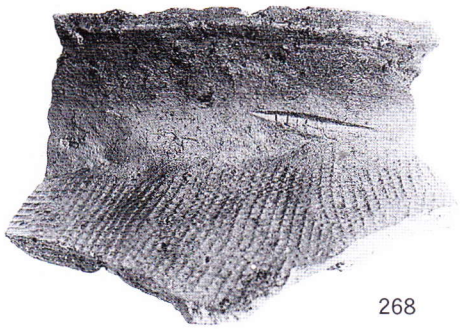
SK－87出土遺物　須恵器（264椀）



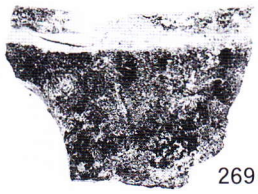
SD－78出土遺物　土師器（265・266皿）



SD－78出土遺物　土師器（267釜）

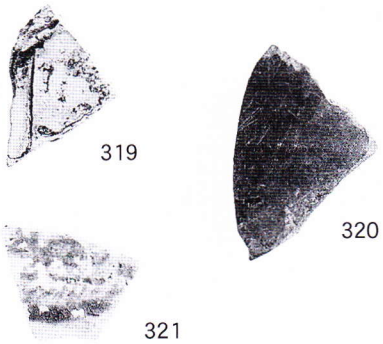


SK－89出土遺物　須恵器（268甕）



SK－89出土遺物　土師器（269堝）

SD－67出土遺物　318馬歯

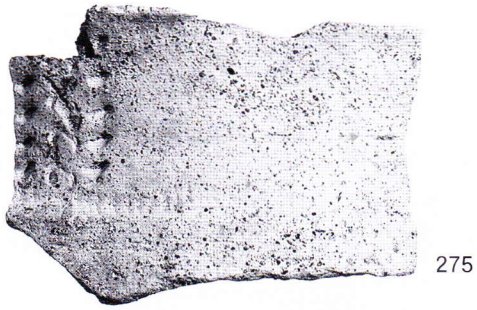


SK－90出土遺物　緑釉陶器（319椀）、SK－81出土遺物　緑釉陶器（320壺）、第31区第5層出土遺物　灰釉陶器（321椀）

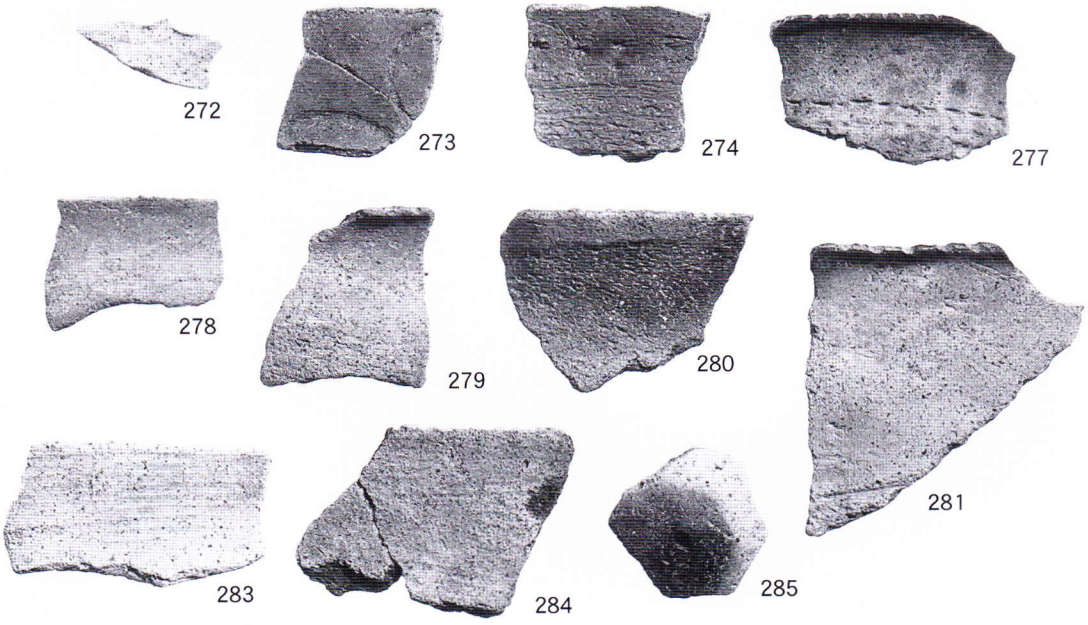
SD－62出土遺物　石器（322石鏃）、SK－59出土遺物　石器（323石鏃）

SK－152出土遺物　縄文土器（270深鉢）

SK－168出土遺物　縄文土器（271浅鉢）



SK－165出土遺物　縄文土器（275深鉢）



SK－165出土遺物　縄文土器（272～274・277～281・283・284深鉢、285底部）

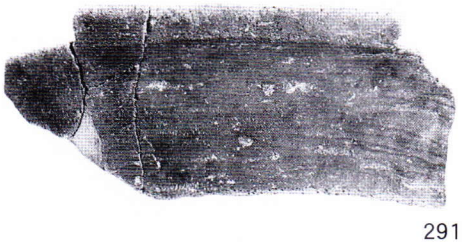
SK－165出土遺物　縄文土器（276深鉢）

SK－165出土遺物　縄文土器（282深鉢）

SK－165出土遺物　縄文土器（286深鉢）

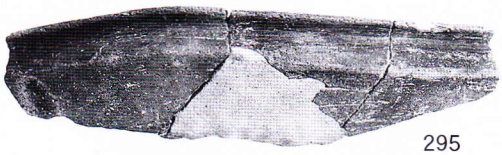
SK－165出土遺物　縄文土器（288浅鉢）

SK－165出土遺物　縄文土器（290浅鉢）



SK－165出土遺物　縄文土器（291浅鉢）

SK－165出土遺物　縄文土器（292浅鉢内面）



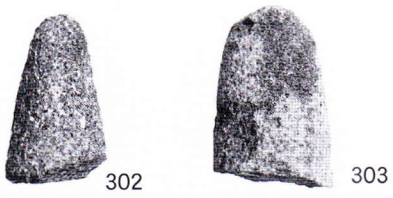
SK－165出土遺物　縄文土器（295浅鉢）

SK－165出土遺物　縄文土器（287鉢、289・293・294、324～326浅鉢）

SK－165出土遺物　石器（296石鏃、297石錐）

SK－165出土遺物　石器（298・299石鍬）

SK－165出土遺物　石器（300・301石斧）

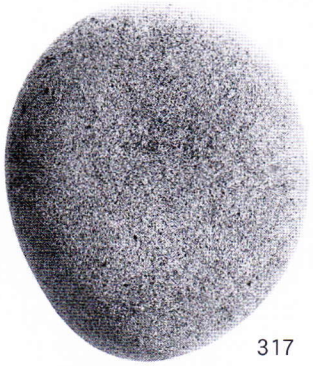


SK－165出土遺物　石器（302・303石斧）

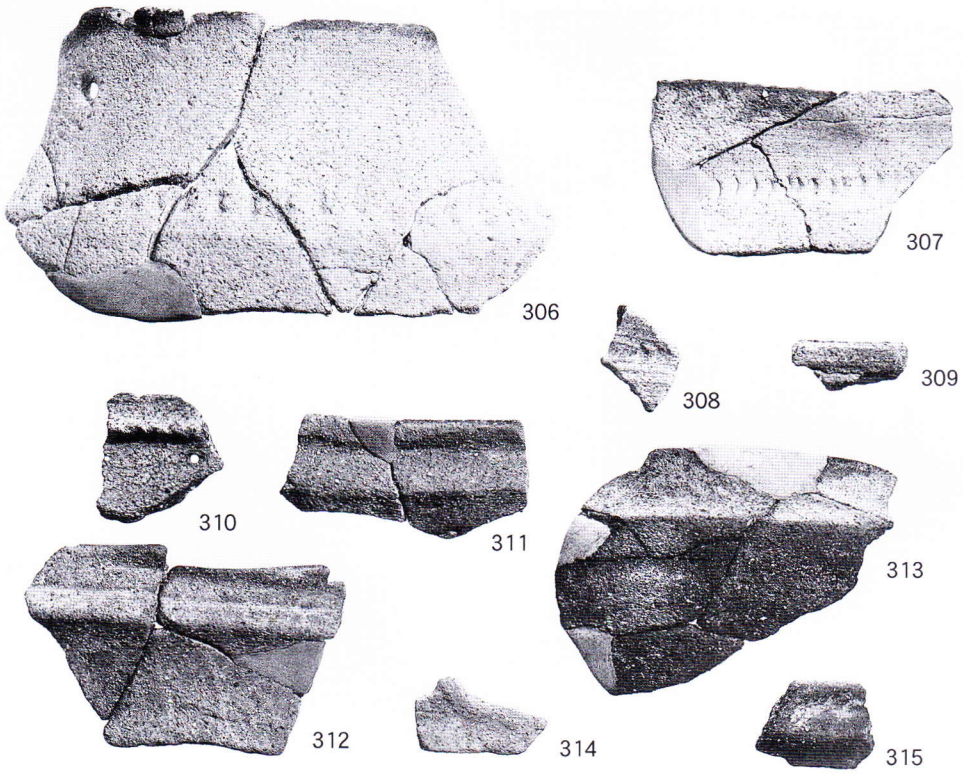
SK－165出土遺物　石器（304石斧）

SK－165出土遺物　石器（305磨石・叩石）

P－507出土遺物　石器（316石斧）



P－636出土遺物　石器（317磨石・叩石）



P－636出土遺物　縄文土器（306深鉢）、SK－123出土遺物　縄文土器（307深鉢）、SK－153出土遺物　縄文土器（308・309深鉢）、SK－175出土遺物　縄文土器（310深鉢、311浅鉢）、SK－178出土遺物　縄文土器（312・313浅鉢）、P－606出土遺物　縄文土器（314浅鉢）、SK－149出土遺物　縄文土器（315浅鉢）

平成20年３月31日発行

川辺遺跡　第4・5・6次発掘調査報告書

編集・発行　　財団法人 和歌山市都市整備公社

印　　刷　　株式会社ウイング

©財団法人 和歌山市都市整備公社2008